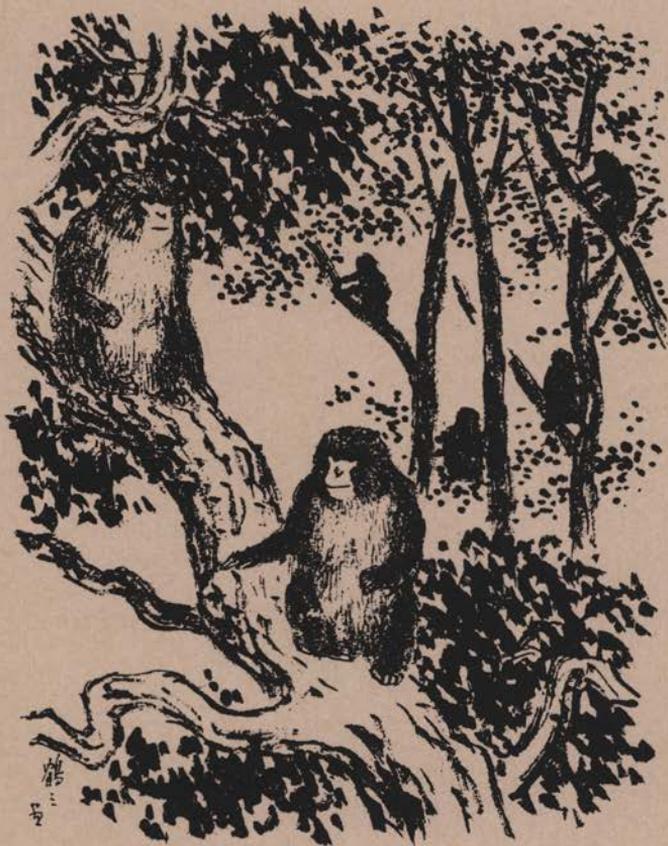


岳 山

號 一 第 年 五 十 二 第



群 猿

石井鶴三氏畫

昭和三年八月二十二日石井鶴三、田中黨の兩氏と共に、黒部川の東信歩道を樺小屋の小屋場へ下る途中、劍澤の大瀑布の見ゆる尾根先を廻り、瀑の見える處から二町程で群猿の嬉戯するのを見た。表紙の畫はその時の石井畫伯スケッチである。

「瀑見場から進むこと僅かに二町、尾根先を廻つて窪の方へ入つて行くと、行く手の森林の中からキャンキャンといふ叫び聲が聞える。犬の鳴き聲だと云ふものもあるし、カモシカのだと云ふもの、猿のだと云ふものもあつた。

犬の鳴き聲に最も近いと思つたが、こんな所まで犬が入り込む筈がないので、その方を見ながら考へてゐると、正體は續々と現はれて來た。五十米突程上のネズの大木の又マダに、大きな親猿が一匹飛び上つて休んでゐると、又一匹同じくらゐのがそくと匍ひ上つて、大きな枝の上に腰を下ろした。それを合圖として林の下、藪の中が一時にざはつてくると、出てくる出てくる仔猿が幾匹も飛び廻りながらその大木を中心にして、檜、榊の林の中を呼びながら右往左往してゐる。見えたのは十四ばかりであつたが、藪の中に隠れてゐるのを合せると二十四以上もゐたであらう。(冠)

目次

本欄

清津川迦行白砂山より白砂川へ	小林太刀夫	一頁
早春の烏帽子岳行	會員佐々保雄	二〇
尾上郷川と中ノ川	桑原武夫	五四
ドロミテの山旅	會員浦松佐美太郎	七一

雜錄

高架索登山重要年譜並に參考文献	大島亮吉	八九
池ノ谷の印象	中野正英	一〇〇
實川と楡ヶ峯	佐山英駿	一〇三
三面川迦行記	大島正隆	一〇七
藤七温泉と八幡平	會員佐々保雄	一二五
富士山の標高に就て	陸地測量部	一三三

實川村雜記……………會員佐々保雄：一三六

雜報

自一四三
至一七九

○山の慘事○各學校山岳部消息○山岳圖書紹介○會員通信

會報

自一八〇
至一八七

○第二十四回大會記事○第四十五回小集會記事○會員の計報○新入會員紹介○會員章再交附
○退會者○本會圖書室への寄附金○會務報告○交換及寄贈圖書○既刊書の寄贈○本會圖書室
維持會員○投稿規定

圖版

對頁

○八十三山より白砂山を望む○同上の南に續く一峯より白砂山を望む……………一二

○木落し(木下シ)より櫛ヶ峯と小大日岳とを望む……………三六

○タアバナより見たる烏帽子岳(コロタイプ)……………四〇

○尾上郷川カラスノ谷第一番の瀑上部○同上の下部……………五六

○別山大平壁……………六〇

○中ノ川へ下る鞍部より大伐峯を望む……………六四

○中ノ川大ガレの一部	六八
○中ノ川大ガレ瀧前のヘツリ(コロタイプ)	七二
○Pala Group ○Rosengarten Group (コロタイプ)	七六
○Marmolata ○Letenar Group (コロタイプ)	八四
○池ノ谷本谷左岸岩壁の一部○小窓西尾根乗越より池ノ谷本谷の雪溪	一〇〇
○三面川竹ノ澤の落口○長者ヶ原より地紙連峯を望む	一二〇
○三面川大カゲ澤落口○石コロミ澤の雪溪	一二四

地 圖

○三面川上流概念圖	一一六
-----------	-----

附 録

○山岳第二十四年總目錄

清津川遡行白砂山より白砂川へ

小林 太 刀 夫

(参考地圖)五萬分ノ一、四萬、湯澤、苗場山、岩菅山、草津。

ま へ が き

秋の旅、澤の旅、そして上州の旅。北アルプスの山々が、幾度か新雪に見舞はれ、雪溪には大きなクレヴァスが口を開けてゐる頃、奥上州の山では、その優しい曲線が、赤く黄色く照り映えてゐる。上州の山には氣持の良い名を持つものが多い。谷川岳、至佛山、仙ノ倉山、それから白砂山。白砂山といふ名は奥上州號で讀んで以來、妙に頭に残つてゐた。上信越國境にある事、地圖を見ると、清津川、白砂川、中津川が白砂を中心として放射狀に流れてゐる事、等が特に深い印象を與へた。

その後、白砂山の記録を色々と漁つて見て、十四年第一號の白砂登山記、これは花敷ハナシキより、幕營二回で野反池ノゾリを経て往復されたもの。奥上州號のは四月に花敷より一日で往復。其の他、一高の記録(一九二五—六)苗場より白砂へ、赤湯より途中幕營五回の尾根の藪歩き。「山想」第三號、野反池よりスキーで往復された記録。等を見付け出した。此等によつて、此の一帯の山々は根曲り竹のひどい事、白砂川が通れる事等を知る事が出来た。

それで先づ私は、白砂川から白砂へ上らうと思つた。さて歸路はといふと、八十三山の尾根が一番樂だらうが藪がいやだつたし、又藪山の逃避と云はれるのも好まなかつたので、結局清津川を撰んだのであつたが、實際は逆になつた。今年(昭和四年)の秋十月一寸した暇を見出して、長谷部君をさそつた。彼とはこの夏かなり苦しい旅をし

○清津川遡行白砂山より白砂川へ 小林

○ 清津川廻行白砂山より白砂川へ 小林

たので、今度は保養といふことにして暢氣に澤を味ひながら行く事となつた。實際又享樂的な澤の旅となつてしまつて記録が大分曖昧になつたが勧められるがまゝに紀行を纏めてみた。

一、赤湯まで

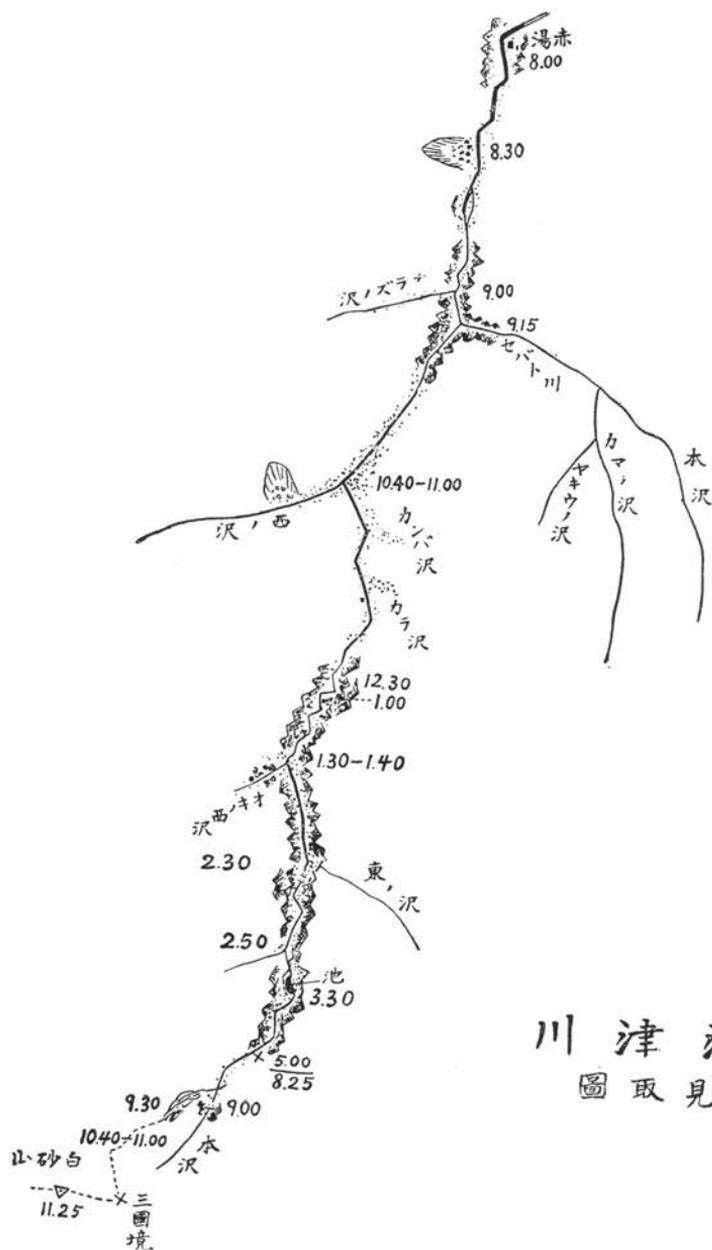
時雨が二三日續いたあと、雲が少し切れ始めた十月九日の夜だつた。妙義ゆきらしい瀟洒たる背廣の團體に交つて、汚れたスキー服や學生服の五人、苗場へ行く三人と私達二人は、何時もの通り馬鹿話をしながら上野を後にする。闇が鬨東の平野を蔽つて私達も駄辯に疲れた頃、高崎の聲を聞いて忽々して下車した。

翌十朝いつもながら氣持の良い上越南線で高崎を立つ。赤城山と榛名山とが紅葉に彩られて右と左とから迎へてくれる。利根川は滔々と流れて、生の力を表象してゐる様だ。唯氣に懸るのは可なり増水してゐることだつた。澤に行く時は何時も氣にする様に。併し秋なのだ、一年中で一番水が少ない時なのだ。

後閑ゴソソで下車したのは七時半頃であつた。驛前から直ぐ乗合自動車サルキヤウで猿ヶ京サルケキウへと向つた。赤谷川の流れに近く沿つて行く三國街道の平々坦々な道も、刻一刻深まり行く山の秋に、面白さが感じられるのだつた。やがて湯宿ユヅユクを過ぎ赤谷川の橋を渡つて猿ヶ京の宿屋の前に着く。乗換へて法師へ。これからはよくもこんなところに自動車を通すものだと思心する様な道で、運轉手がこれでは自動車が堪りませんといふのも無理もないと思はれる。併し法師温泉の玄關へ横付けになるのだから、便利になつたには相違ない。

十一時、法師を出發して三國峠へ向つた。雨がポツ／＼降つてきて、峠の上に出た時は(午後一時)大分濡れてしまつてゐた。冷えるのであの幅の廣い峠の道を驅ける様に下る。幾度となく立止まつては越後側の燃えるやうな紅葉と、天鷲絨を敷いたやうな芝原とに感謝の聲を揚げずにはゐられなかつた。キタノリ澤の橋を越して十町足らず

○清津川廻行白砂山より白砂川へ 小林



清津川
見取圖

○清津川廻行白砂山より白砂川へ 小林

も行けば淺貝^{アサガヒ}へ出る。一時五十分綿貫氏方へ御厄介になる。綿貫氏の家は郵便局兼宿屋で、燻つてはゐるが流石骨の本陣だけあつてどことなく落付いた構である。草鞋の紐をとりて服を襦袢に着かへるや否や、私達は圍爐裏のまはりに座を占めて屈托のない會話をはじめたのだつた。晩には宿の主人も加り遂に寝たのは十二時頃になつた。

翌十一日も今にも降出しさうな空模様であつた。九時に淺貝を立つて元橋から赤湯林道を辿つた。火打峠の下の河原を行く近道がある筈だが見逃した。路は筍山の北側、清津川から百米ばかりの處をからんで行く。林道とはいへ北アルプスあたりとは大違ひで、上下のはげしいほんとうの山路だ。今日は少々リニツクサツクが肩にこたへる。雨續きの後だから赤湯に米味噌の餘裕があるかどうかかわらないといふので淺貝から用意してきたが、訪ふ人の稀れな赤湯の湯宿にもそのくらの貯へはあつた。岩菅山の圍幅に入ると路はまもなく左岸に移り、丸木が三本でその中一本は欄になつてゐる丸木橋。それから棒澤を渡るといよ／＼鷹ノ巢峠の登りになる。登りきれば赤湯はもう近い。いくらも下らないで赤湯へ着く。二時少し前だつた。他の連中は更に苗場の上の小屋へ向つた。

赤湯は清津川の狭い廊下の中に二棟家が建てられてゐる。粗末な事は南アルプスの小澗と似たものだが、それだけに山の湯らしい氣分に満ちてゐる。今年はお夫婦が冬のあいだもこの雪深い温泉に籠つてゐるさうだ。湯槽は流れに近い河原を掘りさげたすゐぶん原始的なものだ。黄金の湯、天狗の湯などと呼ばれてゐる。名の示す通り眞赤な湯垢がついてゐるが、透明で氣持のよい湯だ。胃腸病に效くといふ話をきいた。

此の邊で一寸清津川方面の地名について書いて置かう。先づ山の方から始めれば、赤倉山の南の二〇五一米はナラズ山、白砂山の北の二〇三五米は沖ノ西澤ノ頭、二〇八二米が赤土居山^{アカドイ}。以上何れも越後側の呼稱である。それから問題は上ノ間山^{カミノノヘ}であるが、上州では二二二〇米の峯をいふが、越後では地圖通り二〇三三米を指してゐた。序だが八十三山は二〇三四米即ち堂岩山とその北の二二二〇米等の總稱だと聞いた。次に澤の方を書く。先づ赤湯か

ら上つて行くと、ナラズ山から北東するナラズノ澤。次にセバト川が、これは左から合流する。セバト川について上ると二分する、左が本澤で、右がカマノ澤である。一八七〇米から東北に流れてカマノ澤に入るのはヤキウノ澤といふ。尙綿貫氏から清津本流をカマノ澤といふ山を聞いたが誤らしい。次に本流へ戻ると、佐武流から合するものが西ノ澤、大黒山側から順にカンバ澤、カラ澤、赤土居のガレから来るのが沖ノ西澤。更の上つて標高數字の入つてゐる尾根の處で左から来るのが東ノ澤、白砂山から来るのが本澤である。以上は重に二居の富澤元吉氏に聞いたものである。

二、苗場山へ（十月十二日）

所謂「厳格な教義と實行とを持つ人達」と「山へ逃避する人達」との間に立つ惱を持つた私達、その時の氣分によつて、そのいづれともなるといふ矛盾を抱いてゐる私達、少くも私は未だ充分に澤の子にはなりきれないのであらう、時には山の高み、山のいたゞきに立つて宏やかな山上の展望にふけりたいと思ふのだ。今日はやうやく青空が見え出したが、二三日來の悪天候で大地は濕つてゐるし川の増水も氣遣はれるし、それに今日こそは元橋さん事富澤元吉さんが約束どほり赤湯へ上つて来る筈だからといふ譯で清津川入りを一日延ばす。終日山ふところの温泉に川の瀬音をきゝながら暮すのもまた悪くはないと思つたが、晴れてゆく空をみてはちつとしてはゐられず、近い苗場山へ遊びに行くことにする。

苗場山に就いては「山岳」第一年に出て以來杳として消息がなかつたが、十八年第三號に苗場山、雜魚川ザッコの紀行が出てから相當流行のコースとなつて、記録も可なりあるやうだから此處では單に案内代りに簡單に書いて置く。

赤湯から一町餘りも河原傳ひに山の端を二つ廻つて行くと對岸に棒杓が立つてゐる。少し上手で徒渉してからは

○清津川廻行白砂山より白砂川へ 小林

六

路に就て大抵尾根通り赤倉山へ行く。登り二時間といふが私達のやうに三時間かければ楽であらう。落葉を踏みしめながら、苗場のあの特徴のある平頂と、その下に展開されるサゴイ澤熊ノ澤の紅葉境とから眼を離さずに、ゆつくりした足どりで登つて行く時、風もないのに黄ばんだ木の葉が一葉又一葉、帽子の上に落ちかゝる。後を振り向けば大源^{ダイゲン}太山が高い。(三國村では平標^{タラヒビヤク}を大源太と云ひ、地圖の大源太は河内山或は河内澤ノ頭といふ)全く山の秋は深いといふ感じがする。

一汗かいた頃赤倉山の頂へ出る。左が白砂へ行く杜絶へがちな路、右が苗場路と別れる。私が一寸腰を下すと、長谷部はスケッチブックを取出す。夏千丈澤で小槍百面相を書いてゐた彼だ。安閑たるものでいつかな御輿を擧げない。せき立てゝ赤倉山西北の尾根を下る。薄氣味の悪い程下つた後僅か上れば最早苗場の平頂の一端に立つてゐる。丈の短い針葉樹と熊笹とが交つてゐる森の中を何處迄も歩いて行くと、時々兎が道を横切つたりかもしかの臭ひがしたりする。苗場山圖幅に入る頃藪が急に開いて一面の芝原になつて此處彼處に小さい沼を作つてゐる。伊米神祠迄赤倉山から二時間半要した。祠の直ぐ北にお籠堂^{コモリ}と稱する三角小屋があり、更に一町程先に小屋の骨組だけになつたのが残つてゐる。来た道について眞直に行けば神樂ヶ峰へ、左へ外れると小赤澤へ。地圖の路即ち舊道は今ほど荒れてゐるとの事である。晝食をとつて、岩管から白砂一帯の眺望を恣にする。此處から見ると佐武流^{サブリユウ}山は仲々立派である。清津川がも少し歩き良いと西澤からスキーで登つて見たい氣もするが、スキーと云へばサゴイ澤の源流は小仙丈澤のカールの様で面白さうに思はれた。又冬は大赤澤の獵師が輪標で苗場を越えて赤湯へ來るとか聞いた。赤湯は冬熊狩の根據地になる。

さて歸路は來路を赤湯へ三時間かゝつた。直ぐ温泉に浸つて一日の快い疲勞を休める。

三、清津川を遡る (十月十三日)

昨日も遂に元橋さんは上つて來なかつた。併し今日は素晴らしく空は澄んでゐるし、——待てば海路の日和とは之だ——遡るべき清津川はさう悪い澤とも思はれないので意を決して出かける事にした。従つて此の行はサンギイドに終つてしまつて、より嚴格なる教義を有する人達からは叱られるかも知れない。

「御大事に」の聲に送られて赤湯を出たのは八時だつた。狭い廊下の中には未だ日もささない。苗場へ行く時徒歩した場所で足袋を脱いで川を越した。水が非常に冷いので足を冷すのを恐れたからだ。此處で草鞋をつけた。赤湯で爺さんが一生懸命造つて呉れたものだ。此の邊は兩岸の壁は少し遠退いて、中に片側づゝ河原や、藪がある。第一徒歩點から暫くは左岸の水際に行く。かもしかの足跡に交つてふと足袋の痕を見つけた。つい先頃まで調査に入つて居た營林署の人達のだらうと思つたが、赤湯の爺さんのだつた。これが毎日の茸づくめの御馳走の素だつたのだ。序に岩魚の事をすこしばかり書く。清津川には棒澤に岩魚がゐるが、本澤には居ないさうだ。温泉がある故かも知れない。岩魚の種を入れて見たも矢張駄目だつたらしい。今年はどうしたものか妙に私は岩魚に縁が無い。北アルプスへ行つても南アルプスへ行つても暇のあるときには岩魚が棲まず、急がしい時に銀鱗の光るのを見たりする。

聽て澤は右へ少し迂回する。此處で幽かな踏跡らしいものを見付けて藪の中へ入つて行くと忽ち杜絶えてしまつたので、そのまゝ灌木を分けてまた汀に出た。しばらくの間左岸に壁が迫つてゐるので、一度右岸へ徒歩し間もなく又戻る。流れは飽く迄穩かで瀧等は毫もない。徒歩も膝位で日が出た爲か案外暖かに感じられる。八時半頃地圖のガレの記號の處へ出る。毎年崩れるものかおちつかない石が累々としてゐて、越えて行くと時々がらくと足も

とが崩れる。清津川でも白砂川でも二つ宛かういつた所に出會つたが、何れも春期グルンドラヴェイネの押し出した跡らしい。清津川のは澤の西側、白砂川のは二つ共東側にあつた。

ガレを過ぎて暫くすると流は更に一層ゆるやかになる。礫の河原が廣く展開して水は幾度となく分れ又合して流れる。私達は寧ろ徒渉を享樂する様な氣持できはめて無造作に水の中を歩いていつた。併しかうした氣持も長くは續かない。兩岸の壁は低いながらも次第に狭くなつて來た。安山岩の節理がへつる足場になるが順厩だから少しも不安は感じない。ずつと右岸を辿つた。やがて私達は始めて淵に迎へられた。大したものでもないが眞直には行かないので二十間程戻つて徒渉して左岸の一寸したテラスをからむ。汀に下りてから徒渉を二回して行けば、澤は俄然二分する。左が本澤で右がナラズノ澤である。全く二分と云ひたい程ナラズノ澤は豊富な水量を持つてゐるが廊下狀になつてゐる様子はなくひらけた澤である。本澤は若い地形特有な狭い廊下が続いてゐる。壁の高さは僅か十米程度のものであるが案外立派に見える。此處で五分休憩して九時、ナラズノ澤を渡り又日のさゝない陰氣な廊下の中へと、左岸をへつて行くのであつた。上州の澤、私達は上信越國境附近のつまり白砂山に源を發する數多い澤を一括してかう呼んでゐるが、それ等は皆若い地形の特色を現はしてゐる。岩は總べて火成岩ではあるが北アルプスの澤みたくかさかさはゐない。山岳第二十年二號に大平氏の紅葉の清津峽として推奨された紀行がある通り、あの素晴らしい針閣混浴林で、その闊葉樹が一齊に紅葉或は黄葉するのであるが、この美しい森林と山嶺の美しい曲線とが、潤ひのない火成岩の谷の氣分を和らげるのである。清津川の廊下はおほよそ秩父の東澤西澤と似たやうなものだが、あの箱庭的な景色は少しも見られない。又秩父の澤のやうに次ぎから次へと絡む淵に出會ふやうなことはなく、樂にへつて行かれるのは有難い。大井川も東俣、奥西河内、赤石澤、聖澤と赤禿になつて行く今日、野呂川は人氣臭過ぎるし、安倍川は電燈線が氣に爲るといふ時、こんな近い處に此程人の跡の少い處があ

らうとは實に意外であつた。白砂川に到つて一層此の感を強くするのであつた。

さて九時十五分、赤湯から僅かに一時間餘でセバト川出合へ出る。陰氣な管な此處も丁度日が真正面から照りつけるので非常に明るい。セバト川は本澤より稍少ない水量を以つて美しい一枚岩の上を流れて本澤に躍込む。廊下も本澤よりは狭いやうだ。本澤を彼方此方と徒渉しながら暗い中を辿つて行くと、再び澤が廣くなり、水面から一米ばかり上に段丘といふのも變だが、まあさう言つたふうになつてゐるところがある。此邊では汀を離れてその上をすた／＼と歩いて行つた。その上は草の生えてゐた處もあつたし又砂地の處もあつた。こんな様子が可成り長く續いたやうに記憶してゐる。此の邊は未だ地圖は非常に精確であつた。

十時四十分、セバト川合流點から一時間半で西ノ澤の出合へ出る。河原がずつと廣くひらけて石が皆赤い赤河原とでも假稱したい處である。本澤が大きく左へ曲つて西ノ澤が正面から入つてゐる様子は、小澁川とツッ川との合流點によく似てゐる。たゞ西ノ澤は見通しがきかないだけに奥深く狭く、水も多いだけの相違だ。河原にリュックサックを下して二十分程休む。後の林の中から名も知らぬ小鳥の囀る聲と、前を流れるせゝらぎの響と、それに木の葉に渡る風の音とが渾然として美しい音楽を奏してゐる。河原も赤い、木の葉も赤い。秩父の新緑も懐かしいものゝ一つであるが、上州の秋も(實は越後だが)恐らく永久に忘れる事が出来ないものとなるであらう。始め餘裕があつたら此處に幕營して、佐武流山へも行つて見たいといふ氣もあつたが何といふ譯もなく臆劫になつて止めた。五日分の食糧を用意してゐたが、今天氣が良いから出来る事なら天候のくづれない内に花敷へ出たいと思つたからでもあつた。

西澤からカンバ澤あたり迄は廣い河原續きだ。幕營の夜を焚き明かすにいゝやうな流木が其邊に豊富にあつた。營林署の人達が幕營した跡も此の邊に見られた。日が當つてゐるのに風は仲々寒い。カンバ澤は落懸谷で水はな

つたと記憶してゐる。餘程注意して居ないと見逃がすやうな澤だ。此邊から河原も狭くなり、足下には安山岩の節理が見られるやうになる。西ノ澤から大抵右岸を通つてきた。

カラ澤も落懸谷になつて、之も水はなかつたと思ふ。こゝを過ぎると澤の様子は急に變つて、俄然狭い廊下になる。その中には淵さへつぎつぎと湛へられてゐる。腰まで濡れるやうな徒渉を繰返しながら右へ左へとへつて行く。今は水が少ないから樂だが、晩春から初夏への増水期だの或は長雨のあとなどでは此處を通過するのは難かしくかも知れない。高さ二十米位の壁は殆ど直角で簡單にからむ事を許さない。

十二時半、淵の直ぐ上に一寸した日の當る河原を見付けて晝食にする。上着を脱いで顔を洗つて脊中を乾すと素敵に良い氣持になる。長谷部は例によつて淵を寫生し始めた。

午後一時、暫く明るい處を行つたが又暗くなる。地圖でもわかる様に、兩岸は可成急で立派な廊下を形成してゐる。水は次第に減するが、上へ登る程凄味を増して来る。實に妙な澤だ、源流の穩かさなんかは斷然ない。高さも段々増して行くのが感じられる。尾根も割に低くなつた。かうした處を三十分も行けば、右から沖ノ西澤が落ち込む。赤土居の鎌尾根のガレから出るもので、岩のあいだを潜り流れてゐる水の分量は少い。此處ばかりは西日がさし込んでゐる。五分程休んで又陰鬱な廊下の中へ。

二時半、東ノ澤出合。此の上は淵と瀧との連続で水際はへつれないから、東ノ澤を渡つて、十米程上の方を笹につかまりながらへつる。左岸は不可能だ。直ぐ淵は無くなつて流れは穩かになる。水は廊下の中一ぱいに流れてゐるので、川中に下りてそのまゝさぶさぶと遡つて行く。水は膝までである。澤が左へ曲る處で大きな岩が突出て隧道の様になつてゐた。此處は水につかつたまゝ中腰になつて潜り抜けた。絡むのは困難だから水の多い時には困る處だ。

二時五十分、右から小さい澤が入る。白砂三角點の北の二〇六〇米より来るものだ。左へ。廊下はいつまでも續いてゐる。幾度か倒木(針葉樹、ツガが多い)を越えて行く。やがて左岸が少し崩れた爲、流れが堰かれて大きな池を造つてゐる處へ出た。去年か今年出たのか未だ生々しい。それを踏み越えて澤山引掛つてゐる流木の一つを渡つて左岸にうつり、草の生えた急な傾斜をへつる。幾度かすり落ちさうになりながら笹につかまつて行く。澄んだ水を湛へて蒼黒く静まりかへつてゐる池は如何にも氣味が悪い。へつり終つてほつと一息ついた。三時半とは云へ秋の日は短い。早や夕闇が迫つてきた。そろそろ幕營地を捜さねばならない。地圖で白砂山と二〇三三米とから来る澤の出合あたりつまり一五五〇米邊に少しばかり平な處があるがどうも格好の場所がないので、白砂の方へと上つて行く。水は未だ當分無くなりさうにも思はれないので、その點は安心なものだ。高度が急に増してくる。

五時、一六〇〇米の地點に僅かな草地を見付けたので幕營の仕度を急ぐ。一坪許りの處を平らにして草を敷く、天幕を張る、米をとぐ、焚火をつくる、總べて私達二人の仕事である。

赤々と火が燃え上つた頃はあたりは闇につままれ、上ノ間山(二二二〇米)のみが闇の中に浮出してゐた。私達がよく歌ふ狩の歌の合唱に秋の夜は更けて行つた。

私達の防寒具としては、防水と毛布のシユラフザツク・毛のシャツ二枚・ズボン一枚・冬服上下・毛靴下・手袋等です。これだけで二晩とも充分暖かに寝られました。

尙此日河原で二つ三つ石積を發見しました。赤湯で今年の九月に此の澤を上つて草津へ行くと云つて、東京の人達が矢張り人夫なして出たが、未だ便も呉れないといつておましたから、その人達のでせう。白砂川では近頃人の入つた形跡はないやうでしたから野反池へ出られたのかも知れません。お便りを得られれば幸ひです。

四、白砂山越え (十月十四日)

眼が覚めたのは六時だつた。實によく寝たものだ。天幕から這ひ出して見ると、天氣は良いが風がひどい。信州側には霧が可成湧いてゐる。藪の中で霧にまかれるといけないと思つて、急いで飯をたく。

それでも出掛けたのは既に八時を廻ること二十五分。今日は私は銀靴にかへたが長谷部は此の間苗場で足に豆を出したのでやはり草鞋で行く。飛石傳ひに水の中を行つたり、澤の縁を攀ちたり、時には水の飛沫を浴びながら登つた事もあつた。源流には普通な急さである。見る見る内に高度を増して行く。大黒山、上ノ間山が次第に低くなつて行く。頂へ、頂へと心は高鳴り躍る。

九時、木澤は又淵を作り、その上は狭い樋の様な瀧になる。一七〇〇米の地點に當る。木澤は敬遠して右手の急なガレを攀ち上る。落石を避けるため暫くの間は代る代る行動した。澤では不利な靴も、かうした處へ來ると斷然威力を發揮する。足下が絶えず崩れながらも一步は一步より高く、暮營した邊は遙か下になる。間もなくガレは二分する。左をとつて行く。岩にへばりついて、一つ一つ手懸足懸を求めながら樋の様な處を交代に上つた(チムニIではない)。途中三回程休憩して九時半遂にガレの上に到る。不安定で休む事も出来ないの直に藪の中へ突進する。長谷部はとつくに藪をこいでゐた。いよいよ恐れてゐた根曲竹だ。一間進むのも容易なものではない。手で押分けて一步一步からまる竹をほどこきながら行くのは可なりのアルバイトだ。此處でも靴の方が樂だ。殊に傾斜になると草鞋は滑つて具合が悪い。呼び交しながら遅れ勝ちな長谷部を幾度か待つた。藪の高さは丁度丈を凌する程度のものであつた。根曲竹は又チシマ笹と聞いた。

惡戦苦闘の一時間半の後、十時四十分白砂とその北の二〇六〇米との小鞍部に出る。切明があつた、芝生があつ



(上) 八十三山(地圖の)より白砂山を望む

(下) 同上の南に續く一峯より白砂山を望む

た。本當に嬉しかつた。リュックサックを投げ出して、仰向に寝ころがる。乾葡萄やチョコレートが無暗に食べた。レモンをしゃぶつたりした。併し信州側の澁澤から吹上げる濛々たる霧の爲眺望を奪はれたのは残念だつた。

十一時かなり明瞭な切明を南へと辿る。隆起を一つ越すと三國境の標木の處へ出た。此處から見た白砂川の黄葉の大觀は仲々立派なものだつた。殊に霧が少しかゝつてゐた爲か、夢の様に浮び上つてゐた。私はこの絢爛たる色彩を前にしてたゞ無言に佇んでゐるのだつた。秩父の雁坂峠に似てゐると思つた。あの甲武さかひの高い峠を越した頃の私はすいぶん亂暴な山の旅をやつたものだ。今は亡きその時の友を思ふ。

三國境の南側にはカールの様な地形があつた。小島氏の所謂雪蝕のカールといふのかも知れない。妙に此處から下りたくなつたが。上部がカール状をなしてゐる澤は兎角下が悪いものだからと思つて止めた。後から考へて見ると、下らなくつてよかつたと思つた。白砂山の南面は恐るべき一枚岩をなしてゐたからだ。

十一時二十五分、三國境から西へ隆起を二つ程越えた處、我が白砂山の三角點に立つ。最も山に理解ある方法でこの山に登り得た事に少なからず誇を感じた。この子供らしい喜ばしさに、天に向つて叫んでみたい衝動に驅られる。

一休みして西尾根の切明をたどる、此の邊には丈の小さい偃松(?)もあつて(岩菅にもあると聞く)秩父の尾根歩きの様な處もある。切明を外れると脊の低い笹が密生してゐる。かうした尾根を行く事暫くにして白砂と八十三との鞍部一九〇〇米に出る。此處から又澤へと藪の中を滑るやうにして下つて行く。幾度か一寸した崖を避けながら下りて行くと、遂に白砂山南面の絶壁の一端にぶつかる。片側岩で片側草といふ間を根曲竹につかまつてすり下りる。かうして百米ほど下つた處で、雨が降れば瀧になるらしい崖を右側から下つた。此の邊から見上げた白砂の姿は上信越三國の境に聳立する山にふさはしいものだつた。黒い一枚岩の壁に所々灌木がやつとしがみつい

てゐるあの雄々しい姿、此處だけは此の邊で一寸異彩を放つてゐる。谷川や岩菅の裏みたいにごつごつしたものはなくて滑らかな感じがするのも面白い。

先刻の崖から暫くは石の上をゆくが、やがて不愉快な雑草の繁茂してゐる中に潜り込まねばならない。直ぐ先が見えなくなつたと思つてゐると又崖がある。之も灌木の枝につかまりながら下り下りた。此の先からは枯木や、未だ葉のついた針葉樹の倒木がむやみに多くて、乗り越えて行かねばならない、跨いだり、飛越えたり、今日は随分苦勞の多い日だ。昨日は上り僅か五百米であつたが、今日は短い距離の間に五百餘米も上つて、八百五十米下るのだ。

地圖の八十三山の八の字から来る澤の處にも崖があり、矢張り右側をからんで下つた。この下でやつと水に有りつけた。丁度一時だつた。此處で晝食を食べる。下りつゝある獵師ノ澤も遺憾ながら此處迄の印象は甚だ悪い。水がなかつたのと、明る過ぎたのと、倒木が多過ぎたのとに因るらしい。併し之からは又あの暗い廊下を心ゆくまで樂しめると思へば胸の躍るのを禁じ得ない。子供の時山へ行く前に感ずる不安な中の嬉しさが之であらう。

一時四十分、草鞋にかへて水と共に下つて行く。二〇三四米から来る澤あたり迄は矢張り倒木が多い。生々しいのも可なり混つてゐるのを見ると、春の雪崩を思ふ。傾斜は飽く迄急で小瀧の連続と云へば云へよう。下りゆく先が見えない程度である。地圖の記號より僅か下で廊下らしいものがそろそろ現れる。水は急速に増して行き、標高數字の入つた尾根の東の澤の處では既に膝に達してゐた。この澤の出合で二時五十分、壁の高さは十米位になる。

壁の色は清津川のが黒かつたのに比して、此處では赤味を帯びてゐる。併し赤味を帯びてゐるのは獵師ノ澤だけで白砂木流は黒かつた。

今迄は大抵、苔のついた岩の上を滑べるのに注意しながら、水の中をさぶさぶと下つてきたが、此處（先刻の澤

の出合)迄來ると、最早水がそれを許さない。此の枝澤を渡つて、暫くはそのまゝ左岸を下る。廊下が少し幅が廣くなつた處では、水を離れて左岸の大きな岩間を重に手を使ひながら下りて行く。

三時十五分、八十三山と八間山との鞍部より來る澤が入る。廊下は此處に到つて急に立派になつて、齒の様な削壁が川中に突出してゐる。二つの廊下は此の削壁に脊中合せになつてゐるのだ。こんな小さい澤、黒部や高瀬に比べたら問題にもならない處が意外にも模型といふ感じを與へずに、寧ろ豪壯と云ふ感があるのだ。

未だ傾斜は可なり急で小瀧が階段をつくつてゐる。相當苦しいへつりを續けた。幾度も膝を越す徒渉をやつた事を覚えてゐる。四時、白砂川出合へ。本流は此處に瀧をなしてその上下は淵を作つてゐる。獵師ノ澤も此處に一寸した浅い淵をつくつてゐた。右岸をへつつて來て、本流へ出る處で、リュックサックの外に出してゐたコツヘルが岩に觸れたか私は淵の中へ飛込んでしまつた。斜めに落ちた爲めか肩まで濡れてしまつた。長谷部は駄目と見たかざぶりと水に下りる。長身の彼も腹までつかつた。

此處が白砂川で一番爽い處だ。殊に夕方のためか陰鬱に感ずる。獵師ノ澤は美しい澤だ。廊下の中程から下は繪の様だ。一言で云へば清冽の一語に盡きる。本流は水量も多く廊下も堂々たるものだつた。先づ此の出合で腰までつかつて左岸にうつり、後二回徒渉して白砂川の砂の字の下で幕營ときめた。出合から此處迄は廊下の中に片側宛砂地がありへつるのも困難であつたから、深い徒渉を敢行して直線的にきた。白砂川の砂の字邊は左岸に廊下なく櫟の林の下にチシマ笹が茂つてゐて、砂地もあり屈強な幕營地だ。出合から十五分の處である。

服裝を全部取易へて、大きな焚火をつくり、濡れたものを片端から乾かす。天氣も何時の間にかよくなつてゐたので、此ならば明日も大丈夫と安心する。此處で雨に降られたら、待つか、相ノ倉山の四萬歩道へ逃げるか、八間山へ逃げるかするより道はないのだ。

闇は川浦を包んだ。私達は燃えさかる火を圍んで、何時までも今日の盡きない思出を語り合つた。水の音のみ高し。

此日清津川のカレを上るとき、タケシマラン、シヤクナギの群落を見た。又獵師ノ澤の源には、あの悪臭を放つ紫色の花の咲く草が澤山あつた。名は知らぬ。

此の邊で白砂川の澤の名を一寸書いて置かう。岩菅山圖幅で、白砂川左岸相ノ倉山から西南に流れるのが相ノ倉澤、その北が米々澤、一つ飛んで木戸澤、北西のは三俣澤、その北のが四萬澤、四萬へ越す通路であつたとか聞いた。右岸の方では、八間山から南へ行くのがヨ一川(魚川)、八間山の尾根から出る小さいのがヨゴベエ澤、その北の廊下の記號のあるのが、黒シブ澤、私達の下つたのが獵師ノ澤(獵師川とも云ふ)、二〇三三米から南へ出るのが大唐堀、その西が正九郎、一九八〇米から南東へ出るのが赤澤、その北が忠次郎、二〇八〇米から南東へ出るのが上ノ間澤と聞いた。白砂川も獵師ノ澤と落合ふまでをスルス川(シラスの訛)、その下流が平エム川といひ、一帯の流域地方を川浦と稱する。昔は川浦へは獵師がよく出入して良い路もあつたといふが、今はからむ處に一ニヶ所名残を止めるに過ぎず、引沼の山本照吉も此處四五年は川浦へ行かないといふ。獵師も獵師ノ澤迄行けば随分奥へ行つたと話すと聞いた。獵師ノ澤出合の處の白砂川の瀧の上の淵は通れないから、獵師ノ澤を一二町上つてから右岸をからむといふ。尙白砂川の澤の名は可なり異説もあるから、照吉と何れ一度一緒に廻つて確めて見たいと思つてゐる。今は以上擧げた名に従つて置く事にする。

五、白砂川を下る (十月十五日)

静かな朝。目を覺まして夜光時計を見ると六時半だ。オーイと長谷部を起す。遠くの方で返事があつた。はてな

と思つてシユラフザックから顔を出すと側に寝てゐた彼が見えぬ。變だなと思つて天幕の外を見ると一間程離れた處にころがつてゐる。袋の中で外が見えないものだから、天幕の中に居る積らしい。顔を出しても暫くじつとしてゐた。後でどうしたのだと聞いて見ると、景色が餘り美しいので見とれてゐたのだといふ。

午前九時、懐かしい幕營地を後にする。明るい日光、澄んだ青空、鳥の聲、總べてが私達の今日の旅を祝福して呉れる様だ。たゞ鳥の羽の様な卷雲が氣になる。期せずして今日は花敷へ出やうと決する。

幕營地の前で流は左から右へと曲り左岸は壁になる。膝位の浅い徒渉をして右岸へ移り暫くは河原を歩いた。白砂川は礫の河原は上流だけで、下の方へ行くと丸石傳ひが多い。

幕營地附近の溫和な様子は漸く一變して、兩岸には又廊下が始まる。従てまたへつりが始まる。岩が多く滑かです懸がなく、處によつては苔がついてゐるので笹につかまりながら注意して歩く。浅い處は大抵水につかつて行つた。徒渉も慣れてきた。川はくの字形の連続で片側宛壁をなしてゐる。數回壁を避けて徒渉し、十時少し過ぎに木戸澤へ出る。此邊では左岸を歩いてゐた。澤の様子はしばらくの間は非常に穩かである。木戸澤には廊下はない。

此處から澤は又次第に悪くなる。對岸に黒シブ澤の瀧を見、木戸澤同様分流の様な感じのする無名の澤を渡つてからは澤は可なり險惡な相を現はす。やがて俄然行づまる。此處で流れは先づ左へ迂回し壁に突當つて右へ曲つてゐる。右岸からかなり深い徒渉をして左岸へ移り苦心して壁をへつたが、矢張駄目なので引返し右岸をからむ。左岸は壁でからめない。淵は青く淀んでゐる。右岸の急崖を上るのは相當苦心した。すり落ちさうなのを抑へるやうにして攀ち上る。下りはチシマ笹の中を滑り下りた。水際に出たのは十一時だつた。

其の後も一度右岸を高廻りした。三十米程の高さに三十分位からむ。之は少しからみ過ぎたらしい。其後は瀬を見つけて三四回徒渉して米々澤へ出た。十二時であつた。白砂川も此の邊からは最早徒渉は容易な業では無くなつ

た。二三膝位のもあつたが、其他は腰、時には腹まで水につかつた。米々澤が膝まであつたには少々呆れる。この出合迄來ると急に何だか人里近くなつたと云ふ氣がした。獵師にでも遇ひさうだと思ひながら遂に誰にも遇はなかつたが。この出合の右岸は屈強の幕營地である。且つ非常に明るい處であつた。

米々澤から又暫く廊下の中を歩いて、十二時半魚川出合。ひろい河原を飛石傳ひに右岸を行つた。このあたりまでは、兩岸の山勢が急だつた爲、青天井だけを見ながら歩いてゐる氣持であつたが、此處で始めて遠い山を見た。恐らくは八間山の西南の尾根の一部であつたらう。

此處で少し休んで後、直ぐ對岸に移り、更に深い徒涉を三回やつて、ガレ澤邊の右岸の日の當る河原を見付けて晝食にした。(午後一時)

白砂川は可なり水が多い。従つて徒涉はつらいが、水の千變萬化の面白さが見られる。淀んで青い淵を作り、一枚岩に深い樋を拵へる、泡立つてゐる瀬も面白い。尙白砂本流の廊下は地圖程續いてはゐない。

一時二十五分再びリュックサックを背負つて出掛ける。そのまゝ右岸の苔のついた岩をへつる。一寸無氣味だつた。一度徒涉して左岸を稍行けば、大きな淵に出る。左を長谷部に助けられてからむ。彼は長身を利用して軽く通過した。この淵を過ぎれば澤は頓に開け、赤味のある丸石の河原が廣がつてゐる。早や人里も近い。そろ／＼路に注意する様に戒め合ひながら行つた。

間も無く左から小さい澤が入る。落合は一枚岩の上に美しい瀧をかけてゐる。此處から二十間程下に先頭の私が先づ石垣を發見する。路だ。二時。助かつたといふ安堵と共に荷物を投げ出して河原に身を横へた。

白砂の流れよ。そして澤の旅よ。さらば。澤の旅にも暫くはお別れだ。やがて秋にも、紅葉にも別れねばなるまい。さうすれば冬だ。山は又新しい装ひを凝らして私達を迎へて呉れるであらう。私達は握手して暫くは、此の澤

の旅に今年の澤の旅に名残りを惜んだのであつた。又來る年の再遊を思ひつゝ。

澤を歩いて來た足には馬鹿に樂に感ぜられる四萬歩道を大原へと一步一步上つて行く。高原の路は不知不識私達を導いて呉れる。私達の眼はいつか來し方の方へと向けられてゐた。相ノ倉山、白砂山、八間山。美しい山。優しい山。此處にも私達と暫くの間別れなければならぬものがあつたのだ。私達を待つものは峻巖な冬山だ。そして、アイゼンとピッケルとだ。さらば上州の山々よ。

白砂川徒涉點より大原、和光原ワクワツバタを経て、白砂川の橋を渡つて花敷迄二時間半かゝつた。尙大原から四萬歩道と別れて川浦へ行く路があるが、獵師でも川でこの路を捜すのは骨だといつてゐた。又和光原から花敷へ出るには引沼を廻らなくとも一〇三三米の北東の曲角邊から眞直に下る近道がある。

六、草 津 へ

昨日に引かへ今日は朝からしとくと雨が降つてゐる。關晴館の二階の端の部屋で床の中から低く懸つてゐる雲を眺めてゐるのも面白い。三度もお湯に入る。夜は近在の人が入りに来て汚れるが、朝の内はとて綺麗だ。晝頃引沼の山本照吉を訪ねる。

翌日朝花敷を立つて草津へ。高原の秋を賞しつゝ。雨後の白根が美しかつた。不愉快な草津の町を素通りして驛へと急いだ。

尙後遊の方の御參考にもと思つて一寸思付いたことを書く。上州殊に此の方面の旅は秋が良い。夏は暑いし、春から初夏は水が多くて徒涉に困るだらう。冬は雪崩は出ないらしい。近年白砂川へは入らぬが、清津川へは熊狩の獵師が入る。それから晩春は雪崩が可なりあるらしい。何と云つても秋に越した事はない。紅葉の美觀を賞するに

○清津川廻行白砂山より白砂川へ 小林

もいゝ。只岩魚が少ないのは残念である。岩魚も野反池には澤山居る。岩魚釣の小舎もある筈。

次に草鞋だが、之れは一日一足用意すべきだ。この邊の澤はへつりが多くて非常に草鞋が傷み易い。私達は五足づゝ持つて行つたが丁度いっぱいであつた。可なりうまく履いた積だが。又足袋も新しい川狩用の足袋が摩り切れた。外の山ならば三回位樂に持つ筈である。靴は新雪の用意の爲持つて行つたが今年は雪には遇はなかつた。苗場に登つたときとガレや藪を歩くときに使つただけで荷になつて困つた。

早春の烏帽子岳行

佐々保雄

昭和四年、春先きの數日を越後國實川村奥に過し、烏帽子岳に遊びたる時の紀行である。

一、春先きの實川入り

「郡山、郡山」と呼ぶ聲に假睡の夢を破られ、慌てゝ荷を抱へて下り立つ。胸がヒヤリとする程の冷氣に漸く我に返つた。朝陽が人影をクッキリと長くプラットフォームに寫し出してゐる。晴れだ、晴れだ。

前の日までの生活は全く煩はしいものだつた。書籍とペンとフルスカップがその數日の四六時中、私を取巻いてゐたのだ。そして陰鬱な雨と混濁の空とが夫を蔽ふものだつた。その「あした」の今日だ。もう夫等からは全く自由だ。考へ出すことも創り出すことも要らない、只、享けさへすればいゝ陽氣な山旅への門出なのだ。それが輝や

かしい陽に迎へられたことは全く喜ばしい嬉しいことであつた。

そこで乗りこんだ新潟行の列車は思ひの外泥み合つて、寝不足の身を横へる餘地は無い。車窓に凭つて、うつら／＼雪のまばらに残るあたりを眺めてゆく。しかし警梯が仰がれるやうになるともうねむくはなかつた。尾根筋のみ漸く黒く出た許りであとは一面の雪だ。そのキラ／＼とまばゆい輝きが眼をすつかり覺まして了つた。そのおほらかな裾を西に廻つて會津の野に下り出すと、今度は飯豊が未だ冬のまゝの姿ではないかと思はれる程眞白に厳しく屹立してゐる。あの尾根かげの村に先着の久野君が今日の天氣を惜しがつてるだらうと思ふと、想像はおのづと雪の山稜をあてどもなくさまよひ、言ひ知れぬ望みに胸もときめくのだつた。今度の旅は、久野君が僕と同じ教室には入つて來た紀念の行である。「どこかへ一緒にゆきたいね」、そこで選ばれたのはなじみ深い飯豊であつたのだ。

阿賀川に沿ふ頃になると、線路の兩側に土崩れの多いのに氣がつく。この線は陸羽線と共に仙鐵管理區内では雪崩の多いので有名な線だ。所々の山あひにはまだ割目のは入つて落ちきらぬ残雪がある。「これでは山はひどいことだらう」と思ふ。阿賀川の水量の多いことよ、雪解の濁流では太い折れ摧けた木の幹が淀みで渦巻いてゐる。日出谷に著いたのは八時過ぎだつた。驛前の朝陽館で朝食を認めながら山の様子を聞く、雪に閉された實川サネとは漸く半月程前から往來が出来るやうになつたといふ。雪が深く、今が一番なだれる危い時であるさうだ。先日貴方のやうな姿の者が一人奥へ行たが、あんなのは危い。何しろとても一人でゆく所ではないとおどかさされる。

幸、今日は實川村の人が一人、荷をとり來てゐるから、一緒に行つたらといふので、それを待つ晝迄の時間は方々への便りを書いたり、あたりをぶらついたりして過す。雪は未だ二尺から残つてゐて、南側の軒下あたりに辛

くも土が見え始めてゐる。然し、膨らみ初めたやうな木の芽、藁の屋根際から立つ陽炎など争はれぬ春の訪れだ。晝少し廻つてから、村へ行く人の仕度が出来たので、一緒に出かける。歩く處だけ汚れて中高になつた村の道を出はづれると、あとは汽車の路傍を實川の手前まで傳ふ。日當りのいゝ其處此處に雪の融けたあとの土の潤ひ、何だかふく／＼してゐるやうな其黒いものは、手に取つたら春の暖かさが感ぜられるやうな氣がしてならない。そしてたまらなく懐しいにほひだ。東京の町中で見るあれは土じやないとつく／＼思つた。實川に架る鐵橋の手前から左手の丘に登る。對岸實川島より廻る道は、小荒橋附近が悪いし道程は遠いので、冬は不便利らしい。丘の上はもう三尺からの雪で、その實川端の部落は、春を待つ氣分の深い處だ。木の幹のほとりだけまるく解けて、その窪みの底に感觸のいゝ温まりが籠つてゐるやうだ。小荒まででは通ふ人も多いのか、雪はよく踏めてゐるが、荷の重い二人の足は何度となく潜り込んでさらはれる。ゴゼガ澤を越え、根元澤を過ぎると小さな平から、兩側が迫つてそこに小荒橋が架つてゐる。橋を渡つてから荷を下して一休する。同行の猪股清三郎さんからいろ／＼な話を聞く。豫て耳にしてゐた村の質朴な生活——それも水電工事が始まつてからは前ほどではなくなつたらしい、一昨年この村を通つた友人等の噂——その人達の残した逸話は今も村の爐邊の語り草であるといふ、又淋しい村の冬籠り——十二月半には寝雪となり、一月には里との交通も絶え勝ちになるとのこと、用事を溜めて一週間毎に里へ下るので、途中難儀が多いから時には半月以上も交通が絶える。三月から四月に入ると堅雪で歩き易くなるが、さてナデが危くて、迂闊に歩けないといふことなど、初て聞く身には珍しく、又其間に於ける村人の有様など興味深く聞き惚れて、日向ぼつこをしながらつひ時を過す。

小荒の淋しげに雪に埋れた部落はそこからすぐだつた、八ツ目澤を渡ると間もなく發電所がある。村を通り抜けたはづれの緩かに廣い斜面ではつひ誘惑に負けて荷を下してスキーを試みた。川に臨む處は急崖だが、そこ迄は未

だ可なり距離のある氣持のよいスロープだ。此朝清三郎さんは久野君と一緒に來たと云ふので、時々聲を上げて呼ぶ。通りがりの村童に尋ねると先刻、上へ行つたと言ふ。歸つたらしい。ワタキ澤をからむと道は杉の林の中に入る、雪は愈々深い、ザラメとまでゆかぬ細かい粒雪である。幾人通つたのか深い足型が私等を導き導く。その凹みに蒼いかげが漂ふ。下の峽流までは未だ餘程あるが、次第に兩側が迫つて急になつて來ると聞もなく、その林中で幅一丁程のいたゞしい雪崩場にあつかる。押倒されて根こぎにされた樅の木が數百本。道沿ひの電柱も折れ摧け電線はクチャクチャに卷き込まれ埋められてゐる。「觸つたら危いで」「何故だい?」「高壓線だで」「危いことだ、山登りに來て止むを得ぬ所で雪崩にやられるのはまあ仕方がないとしても、感電で即死などは話しにならない、厭なことだ。おぞ毛を振つて足を高く擧げて跨ぎ越える。此雪崩場は毎年に出ぬ處なさうで、今年は春になつて特に雪が多いため落ちたのだらうと言ふ。後で聞くと久野君は往復とも此所を知らずに通つたさうで、この林の下を辿ればこの危険は見ずに済むらしい。(この雪崩は所謂、グランドラフ雪全層雪崩で、その経過は、アライに従へば、濕潤舊雪——短滑動——緩溢流——單一扇狀——樹泥混入堆積——雪崩であらうと推定した。)

この林を通り抜けると澤は右折して、樹木も生へぬ雪一面の急斜面で、五十米の下には奔湍が渦巻く。この三十五度のコンヴェックスでは一足誤ればもう命はないと見てよかつた。落ちて死んだといふ人の話を聞きながらクランポンをしつかり足につける。手にはビッケル。清三郎さんは雪べら一挺だ。そこの横斷は山の上と違つて妙に氣味の悪いものだつた。脚下の流れの濁聲が變に氣を落付かせないからである。長いスキーが肩にゆらいで兎もすれば身體のバランスを失ひ易い。「久野君はよく一人で」と云ふと連三さんが迎へに來て、一緒に行つたとのことであつた。この悪場の三丁を越すと暫らくは大分よくなる。對岸への橋が雪を載せて懸つてゐるのも其邊だつた。「これを渡つて行けば危険は少いが、もう遅いからこちら側の近道を行くがいゝか」と言ふので「大抵大丈夫だ」と笑つ

て、その橋は足下に見て、下りずに續けて左岸を行く。其所からの足跡はなほよく踏めてゐず、暖氣に緩んでブカ／＼だつた。久野君が此日より三日前、運三さんに導かれて上つた時は、此橋を渡つて對岸を行つたさうだ。それは午後四時頃で南岸は危険だつたが、北岸は既に雪崩も落ち切つて、氣味の悪い草つき一ヶ所の外は、大體廣い段丘の上を歩むので、直接つぶされる危険はないらしい。この日の朝は清三郎さんと共に南岸を來たが、充分凍つてゐて安全であつた。午後一時頃歸る時もそこは未だ日蔭で凍結してゐて、安全と思はれた由。又、このあたりの危険をさけたければ、橋の二三下手より右の斜面を登つて高井峠に出で、實川に出ることも出来るとのことで、三日前に久野君の通られた時は、そこへ登る足跡の方が、澤ぞひのものより判然としてゐるのを見られたといふ。

その先の「孫三郎ヘツリを中心とする前後四丁程は、一層ひどい所であつた。既に、幾回も雪崩の滑つたらしい固い氷の斜面や又上からのしか／＼つてくるやうなブク／＼した雪のトラヴァース、澤までは殆んど一続きの激しい斜面だ。河は處々堆雪^{デブリ}で埋つた所もある。こゝで滑り落ちて、丁度その雪橋のつたゝめに助かつた者がゐたと云ふ。激流は壘ほどの雪塊を岸に打ちつけ／＼落走する。孫三郎と言ふのもこゝで死んだ人の名だと聞いた。迫つた對岸は既に雪も消えて、黄色い一面の草つきだ。そこは渡五郎ヘツリと呼ばれる所らしく、常習的な雪崩場所らしい。先刻の橋を渡ると一番の難場はその一丁半のへつりであらう。殊にそのへつりのとりつき始めはいやな所に見へた。

あと一丁半程、そしてそこが一番悪いと言ふ所で、清三郎さんが「一寸待たう」と言ふので、立ち止つて、暫らく息を入れる。「ドドドドーン」と足もとを揺がす底力のある響音。「落ちた」と見ると小家程の雪塊がソブキの様に雪畑をあげながら凄い勢で轉がり滑つてゆく。瞬く間に木を倒し、地をこすりながら落ちる。そして對岸の崖に激しく突き當つて一瞬にくだけ散り、大きな水しぶきをあげるまでは息をもつけなかつた。休まずに歩いてゆけば

今頃はあのあたりにと思ふと身の毛もよだつて暫らくは二人で顔を見合せたきり物もいはない。そこでは數日前にも路つけに來た村の者がやられた所だそう。その斜面の上はコンヴェックスのえぐつた椀のやうな所で、雪の非常に吹き溜る所らしい、見るからに雪崩の出さうな所である。(一部の積雪層が斷裂して、雪塊となり、起突點附近では全層的だが、崩落し始めると、表層を滑動し、轉回し、壊散する、かゝる型式の雪崩は何と呼ぶべきものであらうか？ 大體アライの雪球滑落——湧泉的瀑狀のプロセスをとるものに該當するのであらうが。)もう大丈夫と言ふので聽て、二人は胸を轟かせながらそこを急ぐ。間を大分離して——長かつたその一丁半。

實に積雪季の實川入りは意外の所に難關を控へてゐるのであつた。夏季ならば、そこは何等危険も感せず通る所なのであるが、冬には、實川から奥山に登る前に、如何にして實川に入るか、大きな問題となつてくる。實川沿ひに來るならば先刻の大古澤の橋を渡れば、其危険は少しく減ずることであらうが、決して安全な徑路ではない。日出谷からならつらいけれども、高井峠を越える外はない。一番安全なのは萬治峠の道を取ることであらう。

孫三郎へツリを終へるともう斜面もゆるく、踏路も自由に廣かつた。助淵すけの堰堤の上には伐採の材木が散亂してゐた。働いてる人達が「危くなかつたケエ」と聞く。裏川の狭い峽流をなして落合つてゐるのを横目でみて過ぎると、そこからすぐ、道は對岸へと橋を越えてゐる。もうその頃は蒼茫たる宵暗があたりを罩めて、發電所の窓といふ窓は山中と思へぬやうに、煌々と灯が輝き始めてゐた。

桐の木植へられた原を通り抜けると黒い家が眼前に浮び出だす、愈々村に着いたのだ。小學校の入口に荷を下ツカと下すと、話に聞いた若い先生が、喜び迎へて下さる。その肩ごしに久野君の笑顔が覗く。

其夜は發電所の方に御馳走になり、運三さんの宅で風呂に招ばれ、後は學校の圍爐裡で話しがはづむ。明日は村の人達も四五人、羚羊狩りに裏川の小屋に行くと言ふので、私達もついて行くことにする。實は今度の行は、他日

○早春の烏帽子岳行 佐々

三六

の冬季登山のために、このあたりの積雪季の様子を大體探つてくれば充分なので、その上どこかの山頂が踏めれば儲けものといふ至つて暢氣な旅なので、準備はいつにない簡單なものだつた。小屋泊りの用意などは勿論してこないが、燒會根山の下的小屋が暖く使へるといふことは願つてもない幸ひなことと思はれた。それは烏帽子に登れるのは確實だし、事によつたら笠掛、牛首の方まで足がのばせぬ事もないと思つたからであつた。明日を約して床についたのは十一時。

三月三十日、日出谷驛前朝陽館發(午後一、二五)―小荒橋(二、二五)―小荒通過(三、〇〇)―孫三郎(ヘツリ) (四、三〇)―堰堤傍(四、五〇)―實川村分牧場着(五、四〇)。

二、要所口の小屋へ

起きたのは早かつたが、先を急ぐわけではないのでゆつくり構へて、スキーを肩に立ち出でた頃は陽は餘程高かつた。雪の表がギラ／＼して眩い。その堅雪は未だ融けてゐないので、ぬからずにとこでも自由に歩むことが出来る。同行は猪股運三、同じく息子八十治と猪俣勘次、正二郎兄弟の四人である。肩に鐵砲を負ひ、雪べらを手にしたッ、狩のいでたちも勇しい。皆でザツク／＼と凍つた雪を踏んで村の社の背後の急な斜面にとりかゝると間もなく汗ばむほどそこは急であつた。しかし尾根筋さへ進れば雪崩の心配はないやうである。雪の堅いためにスキー靴の平たい底がともすればすべる。足許に小さくなつてゆく村を振り返り／＼登つて、やがて前が明るくなつたと見ると、青空に抜け出たやうな大日や烏帽子が突つ立つ、白い、眞白だ。そこが峠だつた。堀切窪^{ホツチリクボ}の休み場といふ。

汗を拭き／＼飽かず北の方を眺める。やがて寫眞器が取り出され、ブリズムが手から手にわたされる。遙か彼方肩幅も廣くガッチリとした大日岳の大きく高い姿。その白銀の輝き、それは如何なる嵐にも、吹雪にもたゆるまな

く放射し閃光する地上の燈臺なのだ。それをこそ求めてかくは寄り來つた二人だつた。高い尾根かけに磁器のほのかな青味、それが大きな姿を刻みつけ、深さをかたどつてゐる。それから左右への白き劃空線。その山上のなだらかさに比べて、山腹から下にかけての切れ込みの深さはどうだ。そしてその色と形の對照は、上部は未だ冬の嚴しい姿であるのに谷間にはもう春がしのび寄つて來てゐる。尾根筋のいたゞしくもむき出された黒い地肌。それから薙ぎ落ちた黒褐色の幅廣い雪崩跡。春の呼聲に應じるかのやうにその一つ／＼が響音を谷間に轟かしたことであつたらう。

峠の北、眼の下に廣げられた白い平は小野ヶ原と云はれる。所々に散點せる杉の木立の青い影までが、クツキリと見られた。その北のはづれに大きな底雪崩の物凄いのが押し出してゐる。扇狀に堆積して巨塔亂立の有様だ。そこは聞けば例年は出たためしのない所だそうだ。「今年は雪が多いからナヂは特別ひどい」と言ふ。

峠から原への山腹のへつりも随分怪しげな所だ。これは途中までしかスキーは使へぬなと思ふ。原から先は澤が俄に迫つて、至る所、地肌の露出と雪割れでもめてゐる。そこから雪崩の恐れある時は、原から黒松澤を渡つた直ぐの尾根に取付いて山越しに獵小屋に入り込むのだそうだ。

一わたり澤筋を辿つてその奥を見やると、白い輝きが眼をピタリと止めて了ふ。それは烏帽子岳だつた。低いながらキリツと緊つたいかつい山だ。胸がすくやうに尖つたその頂きもいゝ。その右手、大日との間、燒曾根の左に續くやゝ高い鈍頂の峰は馬糞穴と聞いた。地圖上で烏帽子北東の一五〇〇米の峰がそれであらう。小大日岳の南西の肩に雪が何かの形らしい融けやうをしてゐる、「馬形」と言はれて、見れば成程それに見へるのも面白かつた。

私達はそこでスキーをはき、村の人達は標を置いて北東に下り始める。一すべりでネグサ平の裾に著く、そこからは餘り下らずに北へと尾根をからむ。このあたりは樺などの喬木林だ。嵐に吹き落された小枝が一面に亂れてゐる。

る。兎が多いのか黒豆のやうな糞がバラ／＼撒かれたやうに散つてゐる。急な斜面に堅い凍雪、間もなくスキーで
のへつりが危険になつて来て、克蘭ボンに代へる。トチブクロ澤手前の小尾根にとりついて、之を下り、雪に埋
れた其澤を越えたと眼前に開けたのは小野ヶ原の雪原である。實川村より先に拓けたといはれる此地も今は住む
なく、夏の畑仕事のための納屋が三棟散在してゐるに過ぎない淋しい所になつてゐる。こゝに荷を下して南端の白
い尾根で暫らくスキーを樂しむ。一滑り毎に村の人達がやんやと囃す。

一時間ほど遊んで了つて、腹は空いたが小屋も速くないといふので、又スキーをかつぐ。この原のはづれ、扇形
の山嘴を滑つた大きな雪崩は、その堆雪の裾を廻つて四五十間もあつたらうか。それは典型的な濕潤舊雪全層雪崩
(ブライの heavy wet snow-long-snow slip-slow flood-simple fan-earthly bumps の型式をとるもの)だ。村の
人のいふ「地こすりのナデ」とはこれだ。平をはづれて、イガミ澤の入りこみをまはると、もう河段丘の平は狭く
なつて、上から雪崩れ、ば避ける場所もない程になる。夏は何でもない所だそうだけれど、黒松澤を越える所は可
なり悪かつた。危い雪橋をたよつて辛うじて越える。

そこからは愈々ナデの恐れある所の黒松へツリにかゝる。もう落ちるべき所は大抵落ちたやうであるが、要心し
て餘程へツリの上をからんで行く。足には勿論克蘭ボンをつける。つかまへる所のない草つきへのつりで、ナデ
に押し倒された木の枝につかまり／＼横断する。地こすりの跡の滑りやすい泥土で、足許のたよりにならぬこと甚
しい。下を見下すとそこには、泡立つた奔湍の連続がナデに埋め残された所からのぞいて見へる。そこまでは半丁
もあらうか。二丁半程のこの悪場を終ると、小さな平が開ける。そこは河の北折する内部にあたる河段丘だ。ビー
ロー平といはれる。ほつとしてこゝで一息入れる。この平の山際にも二百坪ほどのデブライが散亂してゐる。それ
は滑り始めのあたり七八十坪は地肌や笹藪をむき出してゐるが、中途からは、押し出した雪塊が下の雪層を掬ひき

れずして、のし上つて了ひ、その表層をさらひつゝ滑動したものらしい。扇狀堆積の前面の雪層は、押しつけられたのか撓んでもれ上つてゐる。その隆起の頂部に割目が或規律を以ては入つてゐるのも面白く思つた。(この附近では、この種のナデ、則ち始め全層で中下部では表層的に滑動するものが通常のナデで、全層で終始するものに比して相當多いやうに思はれた。つまりエックスリンの舊雪表層雪崩に當るもので、アリーの分類には残念ながら之に當るものがないやうに思はれる。)

そこからは岸も低まり、流れも緩くなるらしい。樺や楡の林の中を自由に歩いてゆくことが出来る。懸谷をなした小倉澤からの澤一番を埋めた雪崩の押し出しを眺めてゐる時であつた、白い兎が目の前に馳け出して來た、八十治さんが得たりと追ひ初めたが、歩き難いデブリーの上では小さい兎の早い逃走に叶はず、終に見失つて了つた。運三さんは「鐵砲を縛つておかねばよかつた」と口惜しがる、皆は今夜の汁の實に逃げられたと笑ふ。

こゝで先手の連中が釣をしたといはれた所は、花ノ木淵と稱する一寸したトロだつた。そこからは「あの木の下に小屋がある」といふ杉の木も黒く、木立を透して見られた。赤瀧の上にかゝつた地圖の丸木橋は渡らずに、大倉澤の向ひ迄すつと東岸を辿る。澤がやゝ東に廻り始めたと思ふと、澤奥は二つに割れて、北から入りこんでゐるのは白葎澤^{モグツ}。その合流點より半丁程下手、對岸の割れ谷から堆高く河をせきとめてもり上つたデブリーを渡つて始めて西岸に出た。合流點のすぐ西側に立つ高い三本の杉の木は小屋のよい目標だ。その木立の下の雪の盛り上りを廻るとそれが宿りの小屋で、煙り臭い藁のほひが鼻をつく。

白葎澤は小屋の僅か上手では全く雪に埋れ、上流から幾條もデブリーが押し來てゐた。然し小屋は雪崩からは全く安全な場所にあるやうに思はれる。腹を拵へてから薪採りや薪切りに取り懸る、附近のデブリーはよく枯れた薪を澤山供給してくれる。

○早春の鳥帽子岳行 佐々

三

それからスキーでのブラ／＼歩き、雪は朝からの照りでピシ／＼だ、西岸の附近にはよい斜面もないので大して面白く滑れない。一日よい快晴だったのが、その頃から、雲がしきりに飛び始めてゐた。西風らしい、気温は谷間とは言へ、生ぬるい位温かである。明日は駄目だなと思ひ乍らも、やはり氣になつて、幾度も小屋を出て、空を仰がずには居られなかつた。小屋の中が整理されて、夕飯の仕度にかゝらうと言ふ頃は、小雨が降り出し、空は暗灰色でいつ霽れやうとも見えなかつた。

三月三十一日、起床(午前六、三〇)―小學校發(八、五〇)―堀切窪の休場(九、三五)―小野ヶ原(一〇、四〇)―一、三〇)黒松澤を渡る(午後一、二、〇〇)―二五)―ピーロー平(一二、五五)―一、〇五)小倉澤向ひ(一、一五)―要所口の小屋(一、四五)

三、小屋の一日

昨夕からの雨が未だ歇まない。河の水は茶色に濁つて、汚れた雪塊や氷片を流してゆく。あたりの雪は雨に融けて、ドン／＼減つてゆくのが眼に見えるやうだ。山の白い姿も汚れて了ふかなと悲觀したが、「上は雪だで」と運三さんはいふ。その一日は小屋の中で寝ころんだきり、晝寝をしたり、駄辯を弄したり、歌つたりして過す。こうした小屋の一日は、強ひてその無聊を消さうとする努力なしに、あるが儘の退屈を退屈として受取つてゆくことに愉しみがあるやうに思はれる。都にある間の毎日の、何か實のあることをしやうと精進努力する反面に、たまにはこうした目的の無い、恣なる一日が許されてもよいのではなからうか。

小屋は三間半に二間程の堀立の藁屋である。用ひてある木は太いから餘程の雪にも堪えるだらう。二つに仕切つて、入口に近い方は薪や、伐採の道具が置かれた土間。奥の方は中央に幅三尺の爐を設けて、その兩側に荒むしろを敷き延べた簡素なもので、それでも十人は樂に泊れる。一月末の羚羊狩り、四月末の熊狩りの時には、十五六人

から二十人ほどの荒くれ男が此所に屯するといふ。

どこの村人にも聞かされる狩の話しは、こゝでも半日がかりで詳しく聞かされた。

狩には一つの谷川をはさんだ特に都合のいゝ地形が選ばれる。

狩場となるのは、一つの主山稜とそれより同じ側に派出する三つの小尾根で、その中央の大鼻ダイビシと呼ばれる小尾根には鐵砲打が一人、その左右の小尾根で勢子の馳せまはるものは、上端切ハンキリ(上流)及下端切と呼ばれる。笠といはれるこの後の二つの小尾根の頭には鐵砲打ちが各一人、一番高い大鼻の尾根の頭には、高控えと稱する役目の、最も腕利きの鐵砲打ちが構える。

この狩場に相對して川をはさんだ向ひの山稜には、之を一望し得る處に目當メアテと稱する見張り役が二人、之れは狩場下にひそむ獸を見付けだし、勢子に知らせて之を追ひ出させ、且又、その行衛や、更に追ふべき方向を狩場の者に知らせる役を受持つ。

こうした特殊の地形が必要であるから、狩場、狩場はその場所が大抵決つてゐて、どの山では何の狩場といふのがあるといふことである。例へばこの烏帽子附近では「タアバナ」や「スギハナ」等がそれである。

時と場合でこの組織を自在に變更することもあるが、凡その備はこのやうなものであるらしい。

狩の話をする時の彼等の興奮。懐かしい思ひ出であらうその時々エピソードがそれからそれと盡きる時を知らない程だつた。「あの時はそうだつたなあ」そして高らかに笑ふ彼等の顔は焚火の炎に赤く染つてゐる。

それが一わたり終ると今度は村の春夏秋冬その日その日の物語りだ。そして又、村に入つて來た都の人々の噂、とりわけ村から山へとわけ入つた若い學生達の印象は深いらしい。幾度も聞かされたものだ。

初めてこの村を訪れた登山隊は、大正八年七月、當時一高の生徒だつた山口珪次氏と黒田正夫氏、運三さんの親

父さんの有名な留次郎爺さんの案内でこの裏川を廻らんと試みられたが、澤が悪いため断念されたと聞いた。引返された處はこの小屋の十丁程上流、ナゴ澤のすぐ上のハネワタ下の草つきらしい。裏川の險難はそこが漸やく序の口ださうだ。その後も村の附近を歩いた登山姿の者は時々見られたが、村を登山點として飯豊の頂へとよりついたのは、昭和二年五月私達の仲間である佐山君等の、前川(實川本流)からオンベ松の尾根を通つて牛首へ出たのが初めて、同年の夏には、やはり仲間の辻川君等がこの小屋を通つて、烏帽子にとりついて大日岳にぬけてゐる。

飯豊山は、その複雑性と重厚性に於いて、東北では確かに隨一の山だ。近年の登山者が「あらゆる可能なる登路より、又いろ／＼の季節」に於て山を知らうとする努力は、この山にも行はれ初めて來た。私達の親しい仙臺の山の仲間も「それは何だか自分等の山」といふやうな感じで、各自にいろ／＼な方面から足を入れて來てゐる。しかし探られざる秘境はまだ／＼残つてゐるのである。その中でも前川奥や裏川奥の廻行は、加治川の瀧上の秘境と共に、愈々、私達の興味を惹きつけて止まない所のものだ。冬に、春に、夏に、秋に、今後益々多くの人々に探られてゆくことであらう。實川を通つて飯豊へと志す登山家も漸く殖えて來たやうである。(其後昭和四年六月、山形高校の三浦、保井の二君、同年八月、新潟高校の吉井、中村二君が村を通られて、前川から牛首方面へ出られた山、村より便りがあつた。)

それと共に關心されねばならぬのは、其所を通る人々と村人との關係だ。都の人が「山村」と聞いて感ずるやうな浪漫的な感傷は、そのやうな村々では實際には何處にも見られやしない。そこには蔽ひ得ざる疲弊と悽愴な生活苦の風が吹き荒んでゐるのだ。且謂ふ處の村人の純朴とは、彼等の感情の單純さと無技巧との一面であつて、他方に又案外、唯物的で利己的で頑固な點があることも知らねばならぬことだつた。その所謂單純な村人に、裏をつけ、蔭をつけ、傷つけたりするものは、無反省な、無自覺な都の者の根強い功利心だ。利己主義だ。物質觀だ。そして

階級觀念だ。私達都の者が入り込む毎に必ず多少なりとも村の空氣を動搖させることは是非ないが、その跡をどうしても、濁らしたり汚いオリを残したりしたくないものだとかつく／＼思つた。幸に今迄の私達の仲間と村の人々は、極く親しいものになつて、よく便りのやりとりの間に山への來遊を問はれたりするのも有難いことだと思ふ。

雨は夜までも止まずにボン／＼と降りつゞく。寝る時には大きな太い木を二三本くべて、圍爐裡の周りに皆ゴロ寝だ。藁でかこまれ、雪に掩はれたこの小屋は、焚火の夜通し燃えてゐるお蔭で少しも寒くない。小屋泊りなど思ひがけなかつた私は、寢袋さへ持つて來なかつたが、晝間のまゝで寢込んで朝までぐつすり眠れた程それは暖かなものであつた。

三、燒 曾 根 山

暢氣な山旅でも、一番氣に懸るるのは天氣だ。早くから度々蓆の戸を搔きわけて空を仰ぐが、谷壁に限られた細い空は、所々青みが／＼つてこそ居れ、一體に灰白色で壓しかぶさるやうな鬱陶しい氣配だ。雨は幸に上つた。引きちぎられた雪雲は低く慌しげに東へ東へと飛ぶ。谷間では梢一つ揺がぬけれど、山は荒れてゐることであらう。

兎も角も行ける處までとスキーを穿いたのは午前八時。一緒にといふ村の人は、杉の木の下に雪に埋れた山の神を拜んで歩き出した。白萩澤は小屋の少し上手で對岸へ渡る、するとすぐもう燒曾根への尾根だ。雨の後で未だ氣温もさして下らなかつたせいか、雪は粒の小さいベタ雪であつた。尾根は比較的狭く且急なので、之を搦むことは出來ない。大體夏路の通り開脚や横登りで登る外はなかつた。此ザク／＼雪では兎もすれば横にすり落ち勝ちで、海豹皮も大して利いてゐない。尾根筋には所々小枝の多い灌木が雪から起き上つて行く手を邪魔する。五葉松の間を縫ひながら、少しづつ開けてくる視界を楽しみつゝ上へ上へと登る。西の筆塚山にも東の水晶峯にも灰色の塊雲

が吹き當つては奔騰してゐる。聽て狭い上に急になつてきたこの尾根は、愈々スキーに不便になつてくる。頂まではあと僅かと思はれるあたりで狭い所をからんだ時だつた、上から滑り落ちて來た久野君を支へやうとして叶はず折り重なつて倒れた拍子に私のスキーがベントの所から折れて了つた。五六間滑つただけで木立の窪みに落ち込んで止つた爲に別状もなかつたのは仕合せであつた。こんな尾根では強ひてスキーを穿いて行くよりはといふので、思ひ切りよく、其處へ脱ぎ捨て、金標にかへた。スキーは雪に刺されて取り残される。徒歩ではそのあたりは踝の所までぬかつたが、スキーよりは樂である。

燒會根の上に立つたのはそれから間もなかつた。先に馳せ登つて行つた村の人々は、こゝを中心としてシシ狩をしてゐる最中である。高控えの運三さんが、頂近くに居て、「靜かに、靜かに」といふので、二人は頂での展望に安易を樂しんだり、それにあきては少し下つた尾根の東側で、其處に懸つてゐる五六米の雪庇をロープで上下して遊んだりしてひと時を過した。

頂で最も私等の注意と興味とを惹いたのは、裏川源頭の一つである八澤の立派な切れ込みであつた。雪に埋れて眞白なこの澤は、大日と牛首との間の聳壁をわつて一直線に這ひ上つてゐる。上部は生憎に霧で見へないが、恐らく「牛ヶ首」をなす鞍部へ達するものであらうと思はれた。プリズムでのぞくと、眞白い谷の中段に、汚れた灰色の流れが帯状に見えるのは雪崩の跡であらう。それは多分表層雪崩らしく途中で舌状推積を造つて停止して居る。あの急斜と兩側の聳立ではどんなに雪崩が暴れ狂ふことであらうか。しかし、その雪崩の落ち切つた頃、その澤を足場を刻んで攀ち上り、牛ヶ首のコルに取り付くことは、どんなに愉快なことであらうと語り合つた。

牛首から笠掛にかけて、村人の所謂櫛ヶ峰は、頂の部分は吹きつける霧雲で容易に姿を現さない。大日に至つては全く濃密な雲霧の蔽ふ所で、到底その全姿は望めなかつた。馬形のあたり、雪煙の空に舞ひ上るのが凄しい。ま

ことそれらの峰々は、四月と言ふに未だ融けることを知らない冬の雪の姿であつた。

目前のデツキラ松の尾根は、この頂がナデの出盛りであるのか、至るところ雪面はもめてゐて、ズリ下り、崩落した跡にむき出された柴など悽慘を極めてゐる。

烏帽子へと辿るべきこの頂から西への尾根は、圖上では判断出来ぬ瘦尾根で、而も左右に迂廻し低下してゐて、そこを通ることは案外時間を要することが豫想される、その兩側は全體に崩れ場か、やはり随分雪がまくれ上り、龜裂が入つてもめてゐる。目指す烏帽子の頂は此所からは前尾根に隠れて見えない。ヒキアゲ附近の高い雪庇が蒼い蔭を抱いてゐるのが見ゆる限りの最高點だ。木下シから上にかけての木々には、白く雪が吹き著いて花が咲いたやうに美しい。昨日の雨はあの邊では雪であつたのだらう。

村の人々の「ヤーホー」「オーヨー」とシ、追ふ聲を遙かに聞きながら、二人は空想を逞しうして、四邊を取巻く山々の頂や瘦尾根を想つたり、曾ての訪れの時のことどもを憶つたりした。ふと餘程遠くで幽に「エーホー」と呼び聲がする。一緒に來た村の人にしては遠いなあと合點がゆかない。聽て今日は駄目だといつて村の人々が集つて來た。皆で柔くなつた雪に埋り／＼クヂノクラ澤や木流の方を覗かうと思つて東の出張りのヒヤクラ迄足を伸ばすと又「ホー／＼」とかすかな叫び聲が聞える。「あゝ居た／＼」といひながら指す方を見ると、笠掛の南の肩に、蟻のやうな黒點が一つ二つ。村の人の眼の早いには驚く、聞けば彌平四郎村の者だらうといふ。二山も越えてこの天候に獲物を追ふ彼等の精悍さには嘆ぜざるを得ない。其人達の根據地は毎年湯ヶ島の平で、毛布一枚と僅かな食料で、數日も寒い雪の中に寝ながら狩を續けるらしい、今夜はあれではブナ入りの平で泊りだらうといつて、村の人々も感心して見てゐた。狭い尾根を上下する點又點。いつかあの壯快な連中とも一緒に生活して見たいなと久野君と語り合ふ。

○早春の烏帽子岳行 佐々

雲

三時過ぎになつて風向が變つたのか、時々牛首や大日の頂が仰がれる。「明日は大丈夫」と喜びに胸を膨らませて下り始めた。正二郎さんは私達二人と今朝来た道を、あとの三人はヒヤクラから南へ下る尾根を傳つて晩の馳走を探し乍ら歸る。急なのと、夕の冷気で稍しみ始めたので、どん／＼グリップセイドしてゆく。折れたスキーを擔いでからも随分面白く滑れた。久野君は狭い處を無理にスキーをはいて瞬く間に歩く二人を追ひ越して降つて行つた。

向ひの尾根で轟然一發の銃聲が響く、うまく汗の實をしとめたかどうか。小屋へは一時間足らずで着いた。明日は晴れだといふので皆氣嫌よく働いて、楽しい夕食が間もなく開かれる。先刻の銃聲は美味い肉を齎した。山の食事は粗末で簡單だけれども、楽しく嬉しいものだ。腹一杯に詰めて脊伸びがてら外に出ると、村の人々の満足した乾いたやうな高らかな笑ひ聲がそこまでも響いてくる。

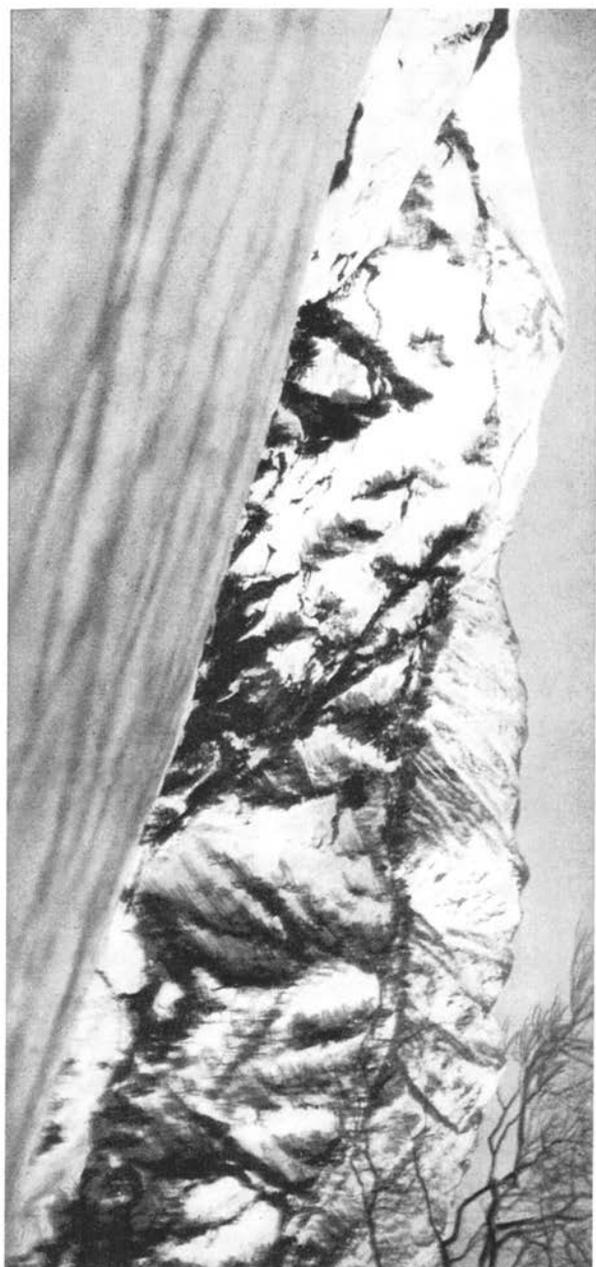
夜は見ゆる限りの空一面にキラ／＼と星が瞬いてゐた。明日は晴れだ。

四月二日、小屋發(午前八、〇〇)―スキーをぬぐ(八、五〇)―燒曾根山(九、三五)―午後三、一五―小屋歸着(四、一〇)

五、烏帽子岳に登る

燒曾根の頂に再び辿りついた時には、誰の顔にも白く鹽がふいてまだらに汚れてゐた。それほど春の陽は暑かつた。そこまでも、又それから大部分は利用どころか寧ろ邪魔になるだらうと思つたスキーは小屋に残して、すぐ克蘭ボンをつけて來たのだつたが、坂の途中でもう踝も埋り勝ちだつた程、陽は強かつた。

其處、眉につかへる程近く、あくまで透徹した青空に兀立する白銀色は大日岳だつた、それは力そのものとさへその時は感じた。微塵の感傷も無い、人の子の安易な空想だに許さぬ迫り切つた虚空を截る存在であつた。八澤の源頭から牛首へかけての白と黒との強い引き付ける力。私達は寫眞機や望遠鏡を取り出して、其の頂での小半時を



木落しより彌ヶ峯と小大日岳とを望む

過すともなく過した。時折轟き互る雪崩の音に首を振りむかせられる。その間近いものは是から行かうとする木下シの直下に起り、大鼓を打ち鳴らすやうな轟きが、暫くはその狭い谷間を震撼させた、夫を聞いてゐると何だか足を掬はれるやうな感じがする。「もう始まつたな」今日は随分出ることだらうななどと語り合ふ。

其處から西へ、そして北への山稜は、昨日見た通り狭くて歩き難いものであつた。初め七十米ほど西北に下つてから尾根は北に折れ、先刻休んだ所の焼曾根の雪庇が右の額に感ずる程廻る。幅の無いせいか雪は落ちきつて積つた松の落葉がボク／＼した下地だ。そこは一人辛うじて通れる位で、兩側は雪崩場になつてゐる。そけた急斜面だが尾根筋に生えた五葉松や石楠が稍目を遮るので恐ろしいと思はれる程ではない。漸くそれと分る踏跡があるが、反つてそこの矮木が足をすくふのを啣つたほどであつた。私達はスキーを持つて來なかつたことをつく／＼喜んだ。この鞍部の小さい上り下りの後は、三百米程のひた登りだ。稍々尾根の廣がつた所は、東側に雪堤が出てゐるので助かるが、それも雪のとけてる盛りでは、ぬかるので足が疲れた。八百米あたりの稍ゆるい所に出ると、北側直下になる凹地が見える。昨年辻川君一行の宿つたユビアタ澤の源頭である。それからの雪稜傳ひの百米は時々頭を出した樺の枝位の外は、つかまるものもない瘦せた所で、南下には先刻落ちた雪崩のエグレが大きな良のやうに開いてゐる。赤茶化した生々しい土の色は見るも嫌だ。北側は雪がついてゐて稍餘裕があるが、そこも所々に裂罅が入つて落ちる時を待つてゐるのである。日蔭の登りにはビツケルで足場を切つた程堅い凍つた所もあつた。

焼曾根より一時間半程かゝつて漸く木下シに近づく。もう尾根は廣い。そして間もなくその廣い額に立つ、枝張りの凝つたガンビが逍遙地のやうに立ち並んでゐて、その雪に投ずる影も面白かつた。私達はホットして顔を雪でぬぐひながら再び現れた大日や牛首を振り返つて見たりして休んだ。そこまではデツキラ松の尾根で遮られてゐたのか、その山々は見へなかつたのである。

夫から暫くは只尾根筋について北へと行きさへすればよかつた。廣くゆるい登りで、陽當のよすぎる處は笹藪を掻き分けながら、目の前に聳えたヒキ上ゲの急な斜面に足が急ぐ。その短い尾根が西にまはる頃、左手にゆるく小澤が入り込んで来て、ヒキ上ゲの東面に這ひ上つてゐる。之は新谷川上流の枝澤で、ヒキアゲの下で椀の様な窪をなして、そこを急に聳えさせてゐるのであつた。この雪に埋れた窪みに私達は下りて、ヒキ上ゲ東肩へと尾根を越える勞を避ける。澤の廣い窪みは稍雪が深かつたが大して苦しくはない。暫し之に沿うて後右手の林の中へと歩み入る。この林を上に出ると北の空が開けて、ヒキ上ゲとその東肩とのコルに出ることが出来た。パンを嚼りながらの休息する。

上越の山々を背景にした目の前の白い急角度の尾根、それから西北に續く高く青い雪庇。しかし烏帽子は未だ頂を見せぬ。このあたりから雪は粉雪の稍とけて凝結したほどの小さな粒雪で、吹きつけられてか凍つてか、克蘭ボンの爪が漸くうまる程度であつた。「人ツ氣のない内に」と先を急いだ村の人の足跡を辿つて間もなくヒキアゲの頭に出る。急なだけに、所々ステップは切らねばならない。そこへ出たならと期待してゐた烏帽子は未だ頂を見せない。左手の樹氷の著いた木の間からなららかな山肌の藜場が遙に望まれた。先を急いだ村の人の幅廣いワカンジキの跡がはるかに雪稜の上を辿りながらそのかけに消えてゐる、それを追ふてゆくとシゲハナが間近い。運三さんが側尾根から登つて来て「今巻いてゐるから靜かに」とこと／＼しく云ふ。

そこから尾根について北に折れ、急な斜面を登ると、サツと眼を射て現れたのは烏帽子岳の姿だ、整つた鋭い象牙のやうな峰、輝く輪郭。この眺めに惹かれて二人は廣いそのあたりをうろつきながら飽かずその姿に見入つた。こゝの西側の少々緩斜面の木立には一面に雪が吹きつけられて目覚める程美しい。高くなつただけに陽が照つても大分寒さがしみてくる。

デッキラ松の尾根が分岐するクアバナ迄は、百米足らずの登りであつた。東側は四五米程の雪庇をかけて長窪澤に落ちこんでゐる。それは雪庇といふより窄る雪堤で、鳥の嘴のやうな乗り出しの餘り出てゐないのは、この邊にしては反つて奇異に感ぜられた。クアバナから烏帽子の下までは、北側は切れてゐるが樂な登りである。尤も所々足場を刻まなければならぬ所はあつた。

肩幅の廣いがつしりした烏帽子北峰の黴い岩壁が先刻から強く網膜を刺激して止まない。烏帽子東面が一氣に逆落しとなつて、烏帽子澤の深い切れ込みにのし懸つてゐるのも壯觀であつた。やがて尾根は幅を増して、愈々烏帽子の取付きといふ直下では平といへるほど緩い雪原となつてゐる。だら／＼と新谷川から上つてくる尾根と合するあたりは、雪花の咲いた梢が陽に輝いて麗しい。平は偃松の領域か、風當りのはげしい其處此處に雪から頭を擡げてゐるのが見える。そこから烏帽子へは七十米の努力である。急な東側を避けて、西の風に吹き起されてか雪が融けて現れ出た偃松帯の縁に沿うて登る。三十度に近い南向きのこの斜面は陽にゆるみ出したと見えて、靴は半まで埋つた。斜面が稍緩くなつて雪に僅か埋れた浅い笹を抜けると、そこは前烏帽子と呼ばれる肩である。最後の十五米、そして頂は私達のものであつた。そこに散りしく花崗岩砂の白いキラメキも嬉しい。

汗ばんだ體に一枚重ね着して腰を下し、あくなき頂の愉悅にひたる。しかしそれは決して聲をあげたい程昂つた感情でもなかつた。又胸の迫るやうな激しい歡びでもなかつた。只暖い春一日の暢氣な山歩きの、全く穩やかな、それはまるでその頂を吹き互つてゐた爽やかな軟風のやうな靜かな喜びであつた。煙草の味を知らぬ二人には、そこで開かれた甘いものが娛しい口の伴侶であつた。

頂上は期待したに似ず相當に廣い。四五坪もあらうか。風が強いと見えて其所だけは岩屑や土が現れ、岩高蘭かと思はれる密葉が腰を下ろすに快いクツションである。後間によれば、其頂は元は鋭く尖つて、幅二三尺の一跨ぎ

にも足らぬ程狭いものであつたのを、測量當時に切り擴げたのであるといふことであつた。

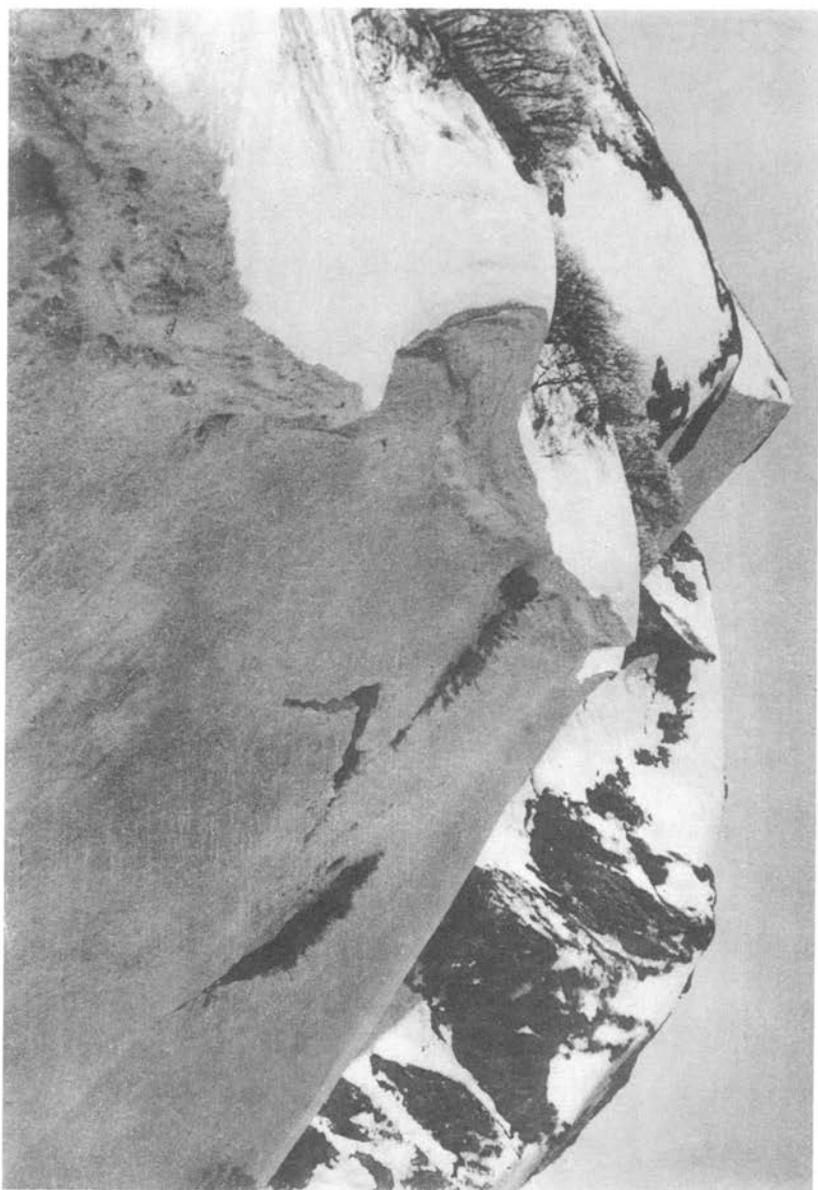
展望は比類なく廣闊で印象的である。西の方蒜場山はもう餘程低くなつて見えるが、その盛り上つたやうな柔かな姿が妙に氣を惹く。そこから脚の下まで連る長い尾根のぶらつきも又面白いものに違ひないと思はれた。そのかたに青くぼかされた渚は日本海である。そして見上げる程高くかゝつた水平線上には、化粧したやうに白い佐渡の島が、浮いて漂ふ一筋の雲のやうにほのかであつた。

南の方、白く重なり重なる數連の高まりは確に上越の山々なのであるが、遠くかすんでどれがどれとも定かには見極られなかつた。

そこから覗けるかと思つた飯豊川側は、すぐ前に控えた北峯に隠れて少しも目に入らない。半丁近くも平な其頂上にさへ行けば覗きこめることであらう。それにしてもその北峯の南面は素晴らしく誘惑的だ。中央はすくひ取つたやうに抉れてゐるクワールだ。その兩側は雪をも止めぬ黴い岩壁が聳立してゐる。それは風化し霏爛したザラ／＼な花崗岩壁であつて、取り付いても確りした手懸り足懸りを得られそうにもない。

動きたくないといふ久野君を促して北峯まで足を伸す。頂を下りて北の一隆起である後烏帽子の南をからむで西側に出ると、右手がグワンと割れた「窓」のやうな所に出る。その兩側の岩壁を通して望んだ大岳日は忘れ難い景観であつた。小さい岩の塔のやうにそゝり立つた岩壁を前景としたその山は、奥行と距離感が増して、一層すぐれて見えたのである。それは、版畫の線の意圖を脱し、繪畫の色彩の感覺から遠ざかつた素晴らしい實在であつた。

尙北に偃松を分け雪を辿つて下ると雪庇の懸つた北峯との鞍部に出る。北峯の登りに懸ると西側から氣持よく開けた澤が這ひ上つて來てゐる。その澤は蒜場よりの尾根と烏帽子とを分ける所のものである。それを辿り上ると容易に北峯の頂に立つことが出來た。果して飯豊川方面が覗ける。二王子岳から石コロミ澤の頭にかけて、更に北の



タマバナより見たる鳥帽子岳

佐々保雄

方杓差に續く長大な連嶺が一つゞきに展開された。大日へと迫るべき山稜も仔細に觀察することが出来る。夏は随分藪と苦闘するらしいその尾根筋も、今は全く雪に蔽れて、スキーなどでの歩きまはりには誂向きの状態であるらしい。

顧ると烏帽子の岩峯の素晴らしさ。それは東側からでは到底窺へぬ所のものであつた。(地形圖にはこの側に崖記號があまり記載されて居らず、反つて大したものに見えぬ反對の兩側にそれが圖示されてゐるのは妙である)。烏帽子の本峯は二つに割れて、三角點のあるものは東の高い方であるその陰に蹲まる前烏帽子の下に蠢く一つの黒點は村の人がシ、を追つてそこまで登つて來たのもあらうか。

例によつてゆつくり遊んでから再び三角點に戻る。頂を辭したのは午後三時近かつたから二時間程遊んでゐたことになる。

下りは只、登つて來た足跡の通りに戻ればよかつた。ヂグザグに登つた所も、眞直に滑り續けて驟く間に下る。既に薄く張りつめたフィルムクラストが足許から碎けてはキラ／＼輝いて飛び散る。前烏帽子の下の平から山をふり仰いだ時は、陽も西にまはつてクッキリとした蔭が東の急斜面を蔽ひ始めて、明と暗、白と黒との對照は蒼空とそれを割す輪郭を一層深みある效果的のものにしてゐた。續いてタアバナまでも一散に滑り下る。そこには村人の輪標の跡が右往左往してゐて、北の谷間で「オーオー」と呼ぶ聲がこだましてゐた。シ、を追つてゐるのだらう。皆で一緒に歸らうとそのあたりで遊びながら待つことにする。

こゝはヂッキラ松の尾根が分れてゐる地點で、幅のあるのんびりした處だ。こゝからヂッキラ松までは一旦かなり低下して更に盛り上つてゐるので、その高みには背の倭い松の群が散生してゐる。その矮い村人のいふヂックリした松の生へてゐる爲にヂッキラ松の尾根といふ名が生れたのである。私達の辿つた尾根は、地圖では只烏帽子の

下から略一直線に南に走つてゐて、デッキラ松の尾根は之から直角に派出してゐるやうに描れてゐるが、實はこの
 タアバナで三の山稜は互に百二十度程の開きで交はつてゐるのである。

北の狭く切れ込んだ谷間に反響する「ワオー」とシ、追ふ聲、「ヤソーデー、ウエダーヨー、ウエダーヨー」「ヤ
 ット追へ、ヤット、ヤット」「下ハシキリさ逃ゲダドナー」等といふ興奮し切つた呼び聲が絶えなく聞えてくる
 何處かと探せど仲々見つからぬ。漸く小さくうごめく人影を三丁程下、澤向ひの小尾根に見出す。勘次さんらしい
 聲の出處も其處からで、あれが目當なのであらう。さしづめデッキラ松の尾根はハシキリであらうか。勢子の聲の
 みして姿の見えぬのは、この尾根から小さい傍尾根に下りてゐる爲らしい。其等は何れも急な狭い雪稜だ。私達な
 らば餘程大事を取つて上り下りするやうな處を、簡単な輪樫一つで食料も持たずに深い氷中まで馳け廻る彼等程の
 熟練と確信を得たいものだつくづく思はされる。それは彼等の度胸からでも無謀からでもない、偏に幾多の経験
 による賜物に違ひない。彼等は山での危険には確かに私達より敏感であり、それを知つては決して之を敢て冒さう
 とはしない。而も一瞥したところでは危険に思はれる處でも、彼等の「山に對するカン」が之を許せば、敢然決行
 して躊躇することがないのである。「山に對するカン」それこそは何よりも登山者の至寶とす可きものであつて、そ
 れは止まざる努力による経験と周到な考察とによつて本能的敏感に漸くつけ加へられて完成されるであらう貴いも
 のに相違ない、と「ワオー」を聞きつゝ考へたことであつた。

村の人がなか／＼引き上げて來ないので、待ちあぐんで南側の日當りのいゝ藪かげに腰を下す。正面に赤場が
 銀色に輝いてゐる。フィルムクラストの反射であらうか眩いばかりのその閃き、凸凹の多い複雑な反射面を持つた
 その山の最後の輝耀は、他日この山旅を思ひ出す時に屹度、そのフラッシュバックの一つとして忘れ得ない印象に
 残るであらうと思つた。南方遙に上越から信州にかけて巍然と踏坐する一脈の連峯に心惹かれて、二十萬分の一の

「日光」圖幅を二人の間に取り擴げる。コンパスと照し合せつゝ「あれが淺草」あれが守門」と語り合ふ途端に轟然一發、丸は首筋のあたりをビューと掠めて行つたやうだ。驚いて立上ると息せき切つて駆け付けた運三さんが「やあ、惜しいことをしただ」と玉の汗をふき／＼失望の顔色である。私達の僅か背後を羚羊が逃げたのださうだ。急な澤の頭の雪壁を馳せ登つて、上の雪庇を乗り越した足跡が残つてゐる。「そのピッケで奴を叩いてくれたばな」と如何にも残念らしい口吻である。私達は僅かの差でとう／＼羚羊を見る機會を失つたわけであつた。

日が餘程傾く。腹を空かして登つて來た皆にルックザックからパンを出して食べさせ、揃つて下り始めたのは五時に近かつた。雪を蹴散らし乍らドン／＼下る。日蔭になつた所はクラストが張りつめて、數多くの足で破られる音が一しきり喧しい。ヒキアゲの下りは稍センセイショナルであつた。ピッケルで支へての猛烈なグリッセイド。もう相當硬く張つた雪殻はバリ／＼音をたて、破れて、足許に雪崩れる。そこを下り終つて往きに休んだコルからは、すぐ南の溝のやうなくぼ澤には入り込む。これは登りに下りた小澤の上である。山毛櫸林の下をすぎ、往路に來た尾根へは上らずに南に折れ、この澤を尙ほ三四丁下つて、木下シの眞西と思はれる所から急な雪壁を登る。尾根通しを藪に妨げられるよりは餘程樂で面白かつた。木下シからも往路の燒曾根尾根の昇降と藪を嫌つて、白藜澤を下ることにする。そこは確に雪崩起發に可能性ある區域であるけれど、こんな日は陽さへ蔭ればもう大丈夫だとのことであつた。始め暫くは筆塚への山稜を辿るかと思へたが、降つてゐるのはこのあたりの「下ハシキリ」である木下シから眞南に出てゐる小尾根だつた。始め僅は急な藪尾根で随分瘦せてゐる。ひどい柴の間をわたつてゆくとやがて雪が尾根を埋めて次第に幅廣くなつた。燒曾根山を少し仰ぐほど下つた頃、東に廣い雪の斜面が足下から澤までひた續きに擴がつた地點に來た、足下のセイドウ澤は一面雪に埋つてゐる。大部分はデブライに依るものらしい。谷間は既に蒼然とした暮色に罩められたので、私達は急いでその雪の斜面を下らねばならなかつた。燒曾

根の頭が赫く染まり始めたのをゆつくり眺めてゐる暇もない。夏は此斜面は笹藪であらうか。表層雪崩の滑つた塵然たる跡がある。割目が幾條もは入つてゐるのは、もうあと数日の暖みで恐ろしい底雪崩を出しさうに想はれた。それも陽がかけつてこんなに緊つて來てゐる今は大丈夫なもんだと運三さんは話した。傾斜三十五度、三丁程の危かしい其場を下り終へると谷の眞底に立つ。所々左右から出たデブライイを越しながら谷底を下る。夕の冷氣がヒヤ／＼と日に焼けてほてつた頬を打つ。筆塚山の北東から落ちてくる澤との合流點近くに來ると凄じく大きいデブライイが谷を塞いでゐた。それはまだ眞新しいもので、こんなでは日中この澤は到底下れないかと考へさせられた。兩澤の落口は瀧をなしてゐる。西からは入つてくるのが白葎澤の眞澤（プロパーの意）である。落口の瀧はツブラ淵の瀧といふ名がある。高十米。うづ高いデブライイを割つたやうな瀧壺の釜のほりには、氣味の悪い陰慘な冷氣が漂ふてゐるやうだ。ドードーと響く水音も威嚇的にあたりを揺がしてゐる。こゝは東岸のデブライイをへつて瀧壺の下に出る事が出来る、それから間もなく澤は兩壁迫つて足下に激しい水音の間ゆる所もあつた。やがて穴があき始め、先づ岩へつりの危険な所が一区所あつた。澤の中は行けぬので、ピッケルで支へながら急な岸上の雪壁を搦む。地圖の通りこの合流點から「ハコ」が始まつたのであつた。

愈々朴の木島に近づいたといふ處は一層悪くて、東岸の三十間も上手を一丁程へつらねばならなかつた。澤は奔湍や小瀧がデブライイの間から至る所に現れてゐるので、その邊りはとても通れるものではない。其所からヒタ登りに東に登つて朴ノ木島の平に出る。この狭い谷間に僅に開けた朴ノ木林の平で（島とは平の意）、河面からは二三十間も高い處にある。東の端では先年辻川君や八木澤君の泊つたといふあたりを木の切株から察することが出来た。澤はこの下から小屋迄もずつと悪いので、そこから南東へと尾根をからむ。間もなく燒曾根へと登つた足跡に出て小屋に戻つた時には、あたりはもう全く暮れて、對岸の木立も黒い塊になつて見えるばかりであつた。

豫期に反して、今日は御馳走になるものは何も獲れなかつた。私達の持つて来た二人分の副食物は皆で食べたので既に盡きて了つた。仕方がないので、この夜は小屋の隅に懸けてあつた干からびて汚れた茶の束が唯一の茶となる。それは昨冬熊狩りに来た時の残りものださうである。揉むとバリ／＼碎て粉になるので水に浸して柔くしてから汁の質に入れる。そんなものでも空いた腹には待ち遠しい。味噌や鹽もこんな時にはおいしいお茶だつた。貧しい小屋の食事、それが山と暖い焚火と親しい友との環境では、いつも楽しく口にすることを得るのは一體何に感謝してよいのであらうか。

四月三日、起床(午前六、〇〇)―發足(七、三五)―燒曾根山(八、四五―九、一〇)―ヒキアゲ(一〇、四五―一一、〇〇)―鳥帽子岳頂上(一二、〇〇―一三、四五)―タアバナ附近(一三、一五―一四、四〇)―セイドウ澤に下り立つ(一五、三〇)―小屋歸着(一六、一五)

六、再び村へ

曇つてこそゐるが荒模様ではないので、食糧さへ豊富なれば、水晶から笠掛の方を探つて見たいところだつた。残念なことに晝食二人分が漸く残つて居るだけだ。勘次さん兄弟と八十治さんは晝迄に村に著くやうに急いで、陽の高くならない中にと、朝早く下つて行つた。途中のナデ場が未だ危いからである。私達二人は東の笠掛から南へのびた尾根に上つて、前川や裏川を覗いて歸らうといふことになる。運三さんは何か居たらと鐵砲を持つて一緒に行く。歸る仕度をしてゐる内に双眼鏡が無いのに氣がつく、考へ出すと昨日タアバナでそれを用ゐて四方を眺めたのが最後だといふ記憶がある。多分そこで何氣なしに藪に引懸けたまゝ忘れて来たものらしい。取りに戻つてもいゝが食料が許さぬので、後日村の人が又狩に登つた時に探し出して貰ふやうに頼むことにきめる。

小屋の下手から来た時の通りデブリの雪橋を渡ると、それからは川を離れて、モチダメの木立入り組んだ平を

通り、その東の急な山嘴を登り始める。雪は昨日から気温が下らぬため軟くなつて足場が崩れ、且つ斜面は急なのでクランボンをつける。あたりは樺、檜の喬木林で、斜面の急な割には雪は滑らぬ處らしい。只一ヶ處幅二十間程の空地が上から平まで抜けてゐたのは、もつと遅くなれば雪崩れる所ではなからうか。この斜面を南へ大分へつて尾根へとりついた頃には、そう暖くない日なのに一汗かいてゐた。

そこは黒松澤の西に張り出た尾根の上端で、今日辿るべき傘松から堀切窪へかけての長い尾根が一目に見渡される。その取り付きから北へ僅か攀ち登ると今度は裏川が脚下に瞰下ろせる所に出た。尾根はこゝで急に東折して、大尾根までのび上つてゐる。この尾根は急でこそあれ幅は充分あるからスキーは樂に使へるやうである。私達のスキーは今朝下つた連中に頼んで村へ持つて行つて貰つたので、之を試みることに出来ぬのは残念であつた。

登るに連れて次第に裏川が奥まで見へてくるのがこの尾根の樂みであつた。東岸バラト澤とオコナイ澤との間に廣い平が開けてゐるのは全く意外であつた。それは樺入ノ平といふ地形圖には少しも現はされて居ぬもので、私達は今度の旅で初めて村人から聞き知つたのであつた。

斯うして新しき展望を樂しみつゝ登りもさして苦しまぬ中に、傘を擴げたやうな五葉松の木が一本、尾根の上に立つてゐる處に出た。その先、僅か尾根の瘦せた所を通るとこのあたりの高メアテに出る。そこに立つて始めて前川の深い切れ込みが脚下に展開された。

私達は豫定通りそこへ腰を落付けて、眺望や偵察の一時を過すのであつた、それにつけても雙眼鏡を忘れて來たのは大きな失策だつた。

今度の私達の行は、他日冬季にこの方面には入る時の下見分といふのが主たる目的であつたから、そのベイスキヤムブの第一候補地であるブナ入ノ平は、當然に皆の眼を惹いた。その平はあたりの尾根の配置や廣さからいふと

大體小野ヶ原に似た地形の處だ。目測では幅一丁半長さ五丁もあらうか。稍東北あがりのまばらに闊葉樹の生えた河段丘で平の東には笠掛、水晶からの山嘴が蝟集して來て急に切れて平に臨んでゐる。平の西側即ち川に臨む所は相當の崖らしい。對岸は雪もすっかり剝け落ちた急峻な河壁だ。平の終つた北の縁の所にオコナイ澤が落ちこんでゐるが、それから上の本流こそ、裏川の心核を成す幽谷を形造るものらしい。

平から梯ヶ峯に取り付くには、イリコ澤（オコナイ澤の最初の支流と本流）との間の尾根に取り付けば、比較的危険なく登れるさうだ。之は後で寫眞で見ると寧ろオコナイ澤を少し溯つて、西から三番目即ち前述の小尾根の一つ右のものゝ東側を登ると更に容易の様に思はれた。運三さんの話では、その尾根から一旦八澤に下りて、八澤と三杯汁ノ澤との間の尾根に取り付いても大目にゆけるといふことだ。之は私達が會て牛首山の方から瞰下した時には到底駄目だと思つたほど深い切れ込みの所だつたが、積雪季には案外可能なのかも知れない。又、雪がすっかり緊つて、未だ底雪崩も落ち始めない三月の下旬ならば、時間を選んで、澤の中を八澤の方まで溯れないものでもないと聞いた。夏のそのあたりは非常に悪い所で、滅多に人は這入れないが、兩岸とも岩壁の高い壯絶な所だと運三さんの父留次郎爺さんは言つてゐるさうであつた。

確に其處は素晴らしい根據地だ。風もあたらぬし、水も薪も不自由しない廣闊な平だ。緊張して登高の出来る山々を周圍にぐるりとめぐらした放射狀登山に復とない泊り場である。

只、その平に如何して入り込むかが第一の問題である。それは全く「もぐり込む」と言ふのがそこへ達するにふさはしい形容だ。ほんの僅の山の隙を見つけてその奥深い谷間にまで入り込もうといふのだから。先づ寅川に入るのが一仕事で、それから要所口の小屋までが一苦勞である。その次の日には燒曾根に登り、ヒヤクラからクジノクラ澤に下つて、對岸のタツベエノタにとりついて登り、この平が眞下に見へる處から東に降路を選んで下つて、始め

てそこに忍び込むことが出来るのである。大體實川から二日は懸るが、雪崩と天候の様子では何時でも行けるといふ譯にはいかない。それはそこから大日あたりに攀ちることより遙に六ヶ敷いことと思はれる。

この高目タカメ當アタから櫛ヶ峯はと見ると、それはこれより一旦甚しく低下した、比較的幅のある尾根で、水晶峯の手前から急に黴い岩が岨々と崛起した急な登りとなつてゐる。この尾根で最も嫌な悪場は、その急に巉岩屹立して尾根を阻む所で、大根下シと呼ばれる岩壁である。村の人達が山渡りする時も、そこは必ず綱を使ふ所ださうだ。地圖上では水晶峯南方一〇五〇米附近であるが、それらしい崖記號は一向記されてゐない。その白皚々たる尾根を抜いて黒い嵯嶮の背後には、險しく高い笠掛から牛首への細い雪稜が折り重なつて聳えてゐる。

高メアテからの降りは樂な氣持よい所だつた。いつも前川の深い切込みを覗き込みながら、或時は長い雪の斜面を一氣に滑つたり、或時は喬木の林の中にぼく／＼足跡をつけたりした。水晶の笠(七二二米)には一時間で著いて了ふ。このあたりはスキーなら一層面白い處であらう。前川に面した兩岸は至る所これナデ場といつてもよい程である。天神尾根下の歩道が河壁をへつてゐるのが如何にもカボソイ。上流にある堰堤へどうしても用事のある時には、村からこの尾根へ登つて、すうつと山を搦んでそこへ下るさうだ。澤沿ひには危くて未だ未だ行ける時ではないのだ。

水晶の笠の西下は尾根が稍々狭くなるが、それもわづかで又廣い雪尾根となる。西に廻るにつれて次第に北が開けて来て、くつきりと高い烏帽子の方が見渡せるやうになる。そちらこちらにレンズを向けながら／＼下る。

根草平の邊はスキーで遊ぶのにもつてこいの氣持よい窪地だ。そこを滑り下りて、堀切窪に下ると先づ村を覗きこんだ。足下に擴がる廣い平、それに散在する十數戸の家、その間を埋める黒い杉、その影と影との交錯が美しくも麗かだ。分教場には日の丸の旗がひらめいて、子供等の疍高い聲が此處迄聞えて来る、思はず「ヤーホー」と呼ぶ

と之に應ずる子供等の聲が一しきり響く。村の人達もぼつ／＼戸外に立ち出て、寄り合つて此方を見上げてゐる。先づ一休みと荷を下す時に氣がついて、餘りに激しい雪の融け方に驚いた。來る時は見へなかつた草が其處此處に、株を見せてゐる。尺餘もとけたらしい。春が山を還元させやうとしてゐるのだ。

飽きる迄奥山を眺めてみたいと思つたが果しがないので聽て下る、社の背後の急斜面をかけ下りて杉の林を通り抜けると、村の人達が待つてゐて、黒くなつた私達を迎へてくれる。

陽は未だ高かつた。私達は薄暗くなるまで、村のあちこちをスキーで滑つたり又眺めたりしてのんびり過した。夜は村の人々が訪ねて來て賑やかな食事が始まる。有名な留次郎爺さんは、都から來た若い私達二人が、山の頂を踏んで無事に歸つて來た元氣が嬉しいと言ふ意味の頌詞ホトコトバを謹嚴な顔をして歌つてくれた。それはまるで祝詞をあげてゐるやうで、私達にはよくその言葉はわからなかつたが、その志の有難さは其夜の忘れ得ぬ思ひ出となつた。

四月四日、小屋發（午前九、二五）―傘松及高目當附近（十二、〇〇―午後一、一五）―水晶の笠（二、二〇―二、三〇）―堀切窪（三、二五―五〇）―學校齋（四、〇五）

七、萬治峠を越えて

疲れてぐつすり寝込んだのが疍高い子供の聲に醒された。教室の方で騒いでゐる兒童達のだ。今日が始業式だといふので、平素と違つてさっぱりしてゐる着物を着た兒が多い。

式は九時から始まる。村の有力者が右手の椅子に二三人、新入生の父母が三四人、兒童は五十人も居たらうか。一番前に並ばせられた新入の小さい生徒は、オド／＼した目で親達の方ばかり見返つてゐるのも可愛らしかつた。先生の訓示、君ヶ代と一通りのことが此處でも行はれる。都から來た學生と言ふので私達二人も引張り出されて「何

か話」をと強請されたには參つて了つた。正に冷汗ものである。

今日中に停車場迄出ればよいといふので、半日は村で過すことにする。ぽか／＼照る春の山村は全く長閑であつた。屋根の雪がとけて落ちる雪の音、何處からともなくしゃわ／＼聞えてくる雪どけの音、それはもつと耳を澄ませば何か春の祕めごとでも聞えるのではないかと思はれるものであつた。

晝からは留次郎爺さんの所に遊びに行つて昔話を聞いた。近處の山に就ては全く活字引である。口をもぐ／＼させながらも記憶は未だ確りして居る。この人が居なくなつたらもうこのあたりの奥山を詳しく知つてゐる人はなくなるであらうと思ふと話は盡きる所を知らない程であつた。

すつかり腰を据えて了つたので、荷物を擔いで村の人に送られたのは午後三時を過ぎてゐた。實川沿ひの雪崩の危険を避けたいのと、積雪季のより安全な通路である萬治峠の方を知つて置きたかつたのとで、歸り道は豊實驛へと取る。村の東はづれから前川へとせまく踏まれた道を下る。暖いのでゆるんだ雪はぬかつて仕様のない程であつた。濁つた川水は迫る岩の間を一杯に押し流れてゐる。橋を渡つて稗の平に出ると、村が對岸に次第に遠のいてゆく。よくもこのけはしい澤奥にこの平を見付けて住み始めたものだと思ふ。それは國內の廣い平野が未だいくらかも拓かれずに残つてゐた頃の昔からの村だ。里を捨て野を見放して何故この山奥に入り込んだのか、それが知りたくてならなかつた。それで道を登りながらも幾度か振りかへつて村を眺めた。

平を出はづれた所で運三さんと別れを告る。そこから二三日前に通つた人の踏跡で行くべき路は明かだつた。

もう峠までは登るばかり。萬治澤の支流を東に入つて僅か行くと小さなものだけれど雪崩の跡がある。この道の方でも落ちるんだと思ふ。すぐこの山澤を離れて西の小尾根に登ると又村が見え出す。實川村、それは何となく懐しい村だ。阿部能成さんの「山村雜記」で始めてその様子を知つて、是非一度は尋ねたいと考へてゐた村。實際足

を入て見れば、いろ／＼の點で幻滅を感じさせられたけれども、又そこを去つて木立の間から次第に小さく遠ざかつてゆく村を見ると、何とも言へぬ別れ難さが胸に込み上げてくるのであつた。私達は汗を拭きながら「オーイ」と呼びかける。暫くして幽に應へる聲が聞えて來た時には何だか堪らなく嬉しかつた。喬木の林の中をぬかり／＼登つて行く。足跡は大體夏道の通りに私達を導いた。峠までは二人は無言に近かつた。山から、そして親しげな村から去りゆくことが私達をそうさせたのであつた。峠については夕暮近い五時。

そこからも一部の瞰下される山間の村は、既に日蔭の薄暗がりに静まりかへつてゐた。日蔭は村の背後の堀切窪の尾根を、西から次第に這ひ上り始めてゐる。

山への別れ、私達は心ゆくまでそこで落ちついた時を持ちたかつた。なぜなら暖い紅茶に旨いビスケットを添えて、暮れゆく山々を仰ぎながらその日を惜しむには、そこは確にいゝ展望臺に違ひなかつたから。

西には蒜場山の蒼茫と薄紫に暮れ行く姿、北は既に夕暗の罩めた裏川の奥に、寶石のやうにきらりと輝く烏帽子の尖峰、大きな大日、紅色に燃えた牛首の西面、その右には遙に本山から種蒔へかけての連山が続くが、草履塚あたりから東は高森山に隠れて見えない。

正面に、と感ずる程最も大きく聳えた大日岳は、その巒尾根一つ／＼が數へられる程にはつきりと陰影をつけて夕映に輝く。横からさす夕陽に半面は赭色で蔭は紫が濃い。山腹を這ふ日影は次第に上へ／＼とのびて、燃えるやうな金紅色はやがて薄紅にかはつてゆく、その頂、その尾根、どうしてもあそこへと惹き付けられずにはゐられないものだつた。

既に夕暗のとざした實川の溪間からは、何か靜かな騒音とでもいつたやうなものが聞えるやうな氣がしてならない。襟のやうに折り重ねられた澤尾根の彼方に、四王子岳あたりがチラと最後の陽に閃いた。

私達はもう立たねばならない。「飯豊山 嘉永土章閏戊丑日」と刻んだ石が雪から頭をだしてゐる、夏道の頂上であらう。そのすぐ南は低いながら雪庇が連なつてゐて、踏路はそこを西に上つた高みから下り始めてゐた。そこからのなだらかな尾根かけ、林の中へと下りゆく足跡。それがこれからの便りなのだ。

荷を擔いでもう一度山を振り返つた。烏帽子の頂がゆらくとゆれて輝いたやうに感じた。何故かもう胸が一杯で堪らない。思ひ切つて身體を振りむけると、山のことなぞ忘れやうとするやうに身體を振りくその斜面を滑つて行つた。南に長く延びたその尾根の愈々の下りは、雪崩の出そうな急な所だ。雪に埋れた荒澤はすぐその下で西に流れてゐる。荒澤の縁に下るとあとはもう緩やかな所ばかりらしい。久野君はスキーをつける。私も先の折れたスキーをそれでもぬかつて歩むよりはとつけて見た。多くは折れた方の片足をあげて滑る。足がすぐだるくなつて兩足で立たうとすると折れた先がすぐ刺つて身體は危く平衡を失ふ。ともかく急いで滑る。知らない雪路なのに峠を六時近くに出て、八時半の汽車に間に合はさうといふのだから少し蟲のいゝ話した。

下の屋敷は心地よく開けた所であつた。河向ふのカクマ澤には木出しでも入つてゐるのか、對岸に橋をわたるとよく踏めた橋路がついてゐた。これがなければその先は急な河岸のへつりが暫らくつゞく嫌な所だ。途中からそこはスキーをぬぐ。大平への橋を渡つた頃はもう暗かつた。荒澤の小さく塊つた部落では全く闇の世界であつた。戸口からもれる灯を見ると、早く町へ出たい心で一杯になる。提灯に火をつけた。村はづれでは踏あとが多いのに幾度か迷はされた。大臺のあたりでは幾度か行きつ戻りつする。漸く橋に辿りついて南岸に出ることが出来た。

その先は平が大分續く、提灯を持った男に逢つて、少し先きに雪崩の危い處があるからすぐこの橋を向ふ側に渡れと教へられる。しかしその橋への道は遂に分らなかつた。確かに踏跡のある道を行くと、果して悪い處にぶつかつた。雪崩れてかち／＼に凍つた所で、どう擔いでもスキーがひつかゝるやうな急な斜面だ。足下をえぐ

つて流れる水音も激しい。出来ることなら先の知れぬこんな所よりはと橋へ下る道を探しに戻つたが、とう／＼分らない。時計は最早八時に近く、汽車には間に合はぬと決つたので、腰を据えて残つた食物を平げ、充分に腹をこしらへた。スキーは紐でかつぐことにし、クランポンをはいて、ゆつくり時間をかけて足場を切つてゆけばいゝといふことになる。里近い處でこのやうな苦勞するとは全く考へないことであつた。晝間なら密林かも知れぬと苦勞しつゝへつる。悪場は距離にしては半丁程だが、足下の川音が餘りに激しいので一寸緊張した。

それからもう全く樂だつた。街道の土も出て、頼りない雪の上ばかり歩いて來た足には、摩擦の多い大地がたまらなく心強い。靴に打つた鋏が石に當つて火花を散らす。

道は近年開いたらしく、二間程のよい路だ。十時少し過ぎに馬取を過ぎる。時ならぬ時に起る高い登音に驚いて出て見る村人もあつた。村をはづれてからは新道は一層河に沿うて下つてゆく。暗い闇に慣れてきた眼には、目の前を蔽ふ山嘴の一つ／＼減つてゆくのが楽しみであつた。それがなくなればもう阿賀川の本流に出るのだ。スキーを小わきにかいこんで並んだ二人は「山から下つて來た者」の持つあの何とも言へぬ氣分に浸つて、胸ふくらませながら暗い闇の中を歌ひながら歩いた。

夜の空氣を振はせて力強い河音が聞え出したのは、それから何程も経たなかつたであらう。ごうつと汽車が眼前を走り去る。窓の光がひゆうと云ふやうに連つて飛んで行つた。下り列車だ。もう本街道に出たのである。停車場に着くと驛の人達は一日の務めが済んで、寝る仕度に忙がしい所であつた。汽車はなし宿屋は満員なので仕方なしに近くの營林区官舎に泊めて貰ひに行く。

それはもう夜も更けてゐたのに、「山に行つて來た」と聞いて歓迎して下すつた湧井さんの親切は有難いものであつた。風呂に入つた後は睡氣も醒めて、山好きな湧井さんの話しに聞き惚れる。數日前まで飯豊に登るつもりで高

○尾上郷川と中ノ川 桑原

語

陽山から疣岩山の方まで行つて來られたといふ。夏のこのあたりの様子など聞き質してゐるうちに夜明け近くなつてしまつた。

次の朝、若松の平野をひた走りに走る車窓から、首を出して仰いだ飯豊の、陽の昇るに連れて山壁のかけりが刻々に變つてゆくのを、ぼうつと放心したやうに眺めてゐたのが、其旅の最後の二人の姿であつた。

四月五日、村を去る(午後三、二〇)―峠登り口(三、四五)―萬治峠(五、〇〇―五、四五)―荒澤に下りる(六、〇〇)―荒澤村先きの橋(七、五〇)―馬取橋(一〇、〇〇)―豊實驛着(一〇、四〇)―營林區官舎泊。翌日仙臺着。(昭和四年十一月稿)

尾上郷川と中ノ川

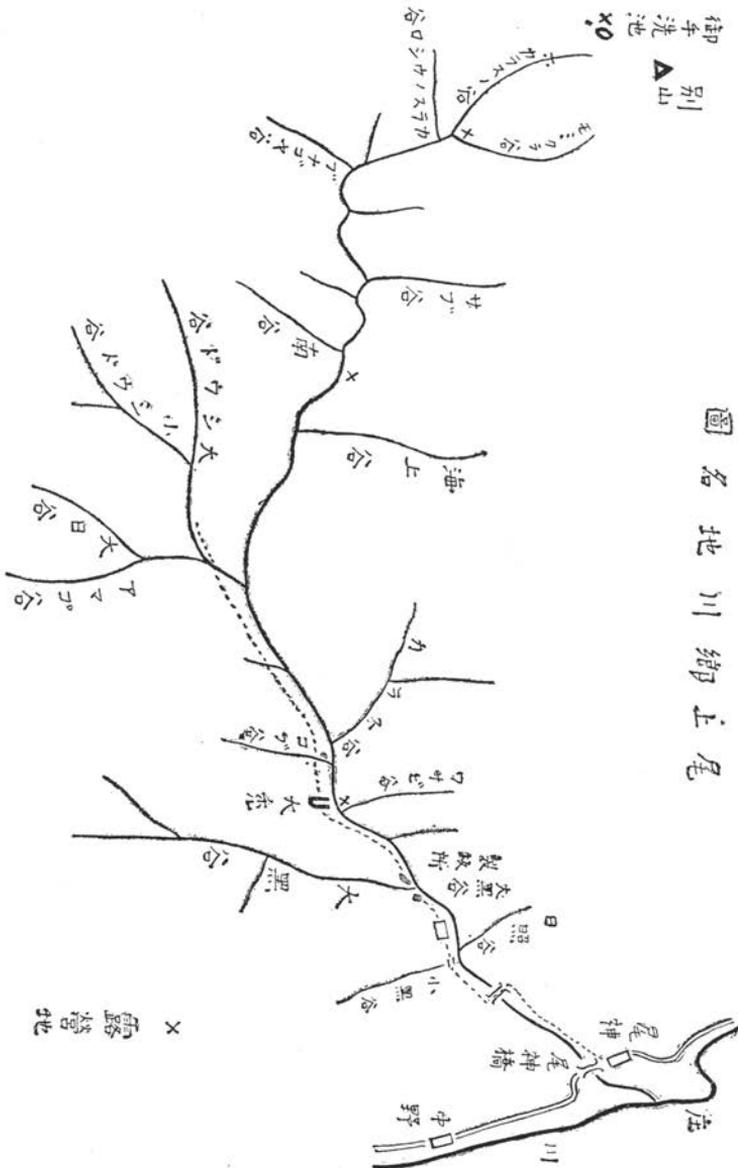
桑 原 武 夫

は し が き

五萬分ノ一の「白山」を披いて見ると、尾上郷川は別山から庄川まで、東西に殆んど地圖一枚を貫いて流れて居る。このあたりにしては大きな谷である、その上一寸した悪場もありさうに見える。上流はのび／＼とした河原らしい、そこには美しい闊葉樹が鬱蒼として茂つて居るだらう、岩魚はきつと多いに違ひない……それに第一今迄人が顧なかつた所へ行くと云ふだけでも既に興味がある。

こういふふうに一年も前から始終話し合つて、もう自分達のものに成つたやうな氣持さへする尾上郷の谷へ、い

尾上郷川地名圖



桑原と中ノ川と郷上尾

圖

○尾上郷川と中ノ川 桑原

英

よ／＼入ることに決ると、下りも普通の道ではつまらない、中ノ川（白山大汝峰より北流する谷）を下つて見やうと云ふことになつた。そして田中氏をリーダーとする我々五人は、折柄の好天氣と長次郎等のすぐれた支持によつて、この谷々に十日間の楽しい山旅を有つことが出来た。（参考地圖、陸測五萬分ノ一、白鳥・白山・白川村・白峰）

昭和四年八月二日（晴） 京都―岐阜―美濃町―深戸―八幡―白鳥―正ヶ洞。

三 日（晴） 正ヶ洞―蛭ヶ野―中野。

四 日（晴） 滞在。

五 日（晴） 中野―尾神橋―尾上郷村―大黒谷製板所―大禿對岸。

六 日（晴） 溯行、海上谷と南谷の間の泊場まで。

七 日（晴） 溯行、カラスノ谷とモミクラ谷の出合まで。

八 日（晴） カラスノ谷を溯り、御手洗池畔泊。

九 日（晴） 御手洗池―別山―白山室堂。

十 日（晴） 白山室堂―大汝峰―中ノ川本流に下る。

十一日（晴・夕立） 谷を下る、湯ノ谷出合より尙下流に至りしも引返し出合泊。

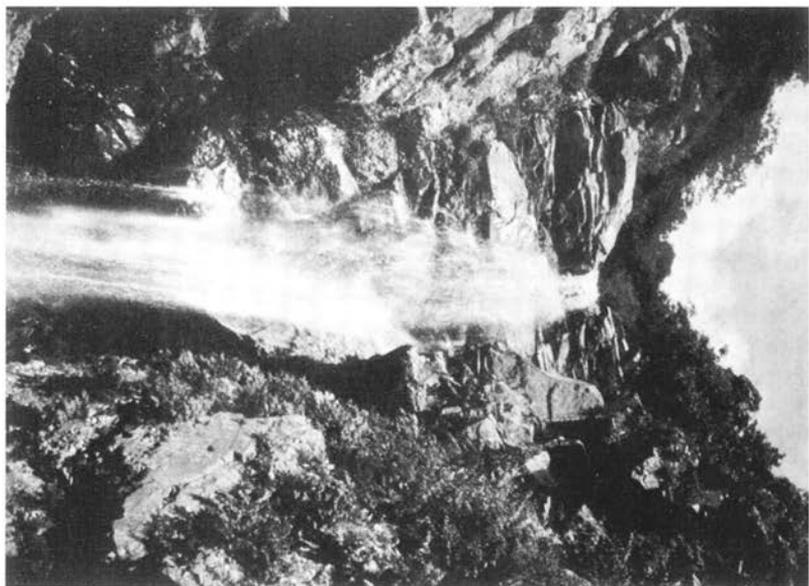
十二日（晴・夕立） 出合より白山尾添登山道に出づ―尾添―白山下―金澤。

一行 田中喜左衛門、山本慶次郎、葉谷忠三郎、多田政忠、桑原武夫。

人夫 宇治長次郎、先祖榮治、山本重松。

中 野 ま まで（八月二・三・四日）

京都を早朝に發ち、越美南線深戸著午後三時、すぐ驛前に待つて居る乗合自動車に乗る。それから高鷲へ五時半



尾上郷川カラスノ谷第一番の瀑上部 田中喜左衛門



尾上郷川カラスノ谷第一番の瀑下部 田中喜左衛門

に着くまで自動車に乗りづめだから随分つらかった。殊に白鳥で乗換へてからは、三人乗の古フォードに荷物澤山の我々ともう一人、六人詰込まれたのだから、汽車中のやうに靴・草鞋優劣論を闘はず餘裕などはない、十里の悪路を歩む以上に疲れて仕舞つた。終點の高鷲村大鷲正ヶ洞^{ワシジヨホラ}、高正館と云ふのに泊る。

深戸高鷲間の乗合は一日三回、料金三圓三十錢。

明る朝、外で手水を使つて居たら蛇に刺された、一寸山らしい氣持になる、天幕その他の荷物は早朝手車で運ばしたから、我々是一日が、りりでゆつくりと中野まで行けばよい、七時半すぎ正ヶ洞を發つ。

蛙ヶ野は地圖通りのじめ／＼した荒野である。夫を貫いて改修したばかりの、いやに幅の廣い赤土の道がある。曠野を行くなど、云ふ氣は更にしない。この北端に、地形圖にも載つて居る雪中避難小屋がある。三間に二間位の頑丈な造りで、米、薪、食器などの用意がある。その前の踏石に腰を下して一服やつて居ると、新開地の部落へ通ふ路のかけから二人の子供が現れた。全くの襦袢を着て、蛙でも釣るのであらう糸の端に綿をつけた釣竿を持つて居る。好奇の眼を輝かせて我々を見まもつて居るが一寸も近寄らない。お菓子をやらうと云つても、何を話しかけてもはにかんで答へないのである。やがて立上つた我々が六七間も歩いて振りかへると、我々が残したバツトの箱とチョコレートの包紙をそつと拾つて居る。あの緑の小箱と赤と紫の色紙が、蛙釣りに代つて暫くこの小供たちの心を占めるのだらう——そしてそれらのものは私自身にも何か美しいもの、やうに感ぜられた。いつも世話になる炭焼の子供のために人形をリュックサックの中へ入れて鈴鹿の山へ行つた私の友人のことが、ふと思ひ出されて何かひどく感傷的な氣持に襲はれながら國境を越えて行つた。野々俣へ下る谷には椽の木が澤山あつた。微風をうけてその裏葉が自く光るのが却つて汗を覺えしめた。

牧戸で晝食と午睡に二時間半を費して、五時半中野林屋旅館に入る。洗足と一緒に冷いカルピスが出されたのは

嬉しかつた。

既に先着して居る菅の長次郎等の姿が見えない。この行は地元で良い人夫が得られないことを豫想したし、又初めてのコースであるから谷に慣れた大山村の宇治長次郎等を伴ふことにし、彼等は城端から入つて此處で落合ふことに成つて居たのである。夜になつても來ない。詳しい手紙に爲替と地圖まで添へておいたのに。

明る日はよく晴れた空を眺めながら一日滞在しなければならなかつた。晝も過ぎたので宿のものに人夫を交渉して見た。村の肴屋が岩魚を釣りに尾上郷村の上まで行く以外には、誰も谷を遡つたものはない。一度青年團で企てたことはあるが、進んで先達に成るものがなくて取止めになつた、然し荷を擔ふだけの人夫なら有るだらうと云ふ返答なので、それを頼まうとして居る所へ、息を切らして先祖榮治が馳けて來た。手紙は貰つたが、地圖と爲替だけ持つて飛出して城端まで來た。飛驒から白山なら平瀬だらうと人が云ふから、平瀬で待つて居たが來ないからもしやと思つて一人だけ此處まで見に來たと云ふのである。その暢氣さ加減に小言をいふ所か腹を抱へて仕舞つた。打合せを済ますと、彼はすぐまた平瀬へトットと馳けて行つた。

尾上郷川溯行 (八月五・六・七・八日)

翌五日早朝、長次郎、榮治、重松が來るのを待つて、米一斗二升、味噌一貫、草鞋十足を買ひ調べた上、九時半すぎ林屋を後にした。海上村カシヤから尾根越しに尾上郷村に至る路はあるが(地形圖に記載あるもの)、我々は出来るだけ谷筋を行く考へだつたから街道を進み尾神村の前の尾神橋の袂から、尾上郷川の河原に下りた。流れは極めて緩やかで、河原の石は皆白く圓味を帯び、水に浸つて居る部分にはぬるついて居る。靴の者は草鞋に穿きかへた。はるくと求めて來た目的の谷は、今眼前にある。それは長さ約六里、水量も従つて少い、いはゞ小さな谷に過ぎない。然

しあの岩角を曲ると、そのさきは如何なつて居るか、一枚の地圖のほか我々の自由な想像を規定するものは何一つない。さういふ新鮮な好奇の心は、新しい草鞋をはじめて尾上郷の流れに浸したとき強く感ぜられた。

兩岸の山がまだ低いので、あたりは穏かな風景である。靜流を四度徒渉して一時間許り行くと、兩岸に崖多く相迫つて、やゝ谷らしい相貌を呈して來た——さう思ひながらふと空を仰ぐと頭上に大きな吊橋があるではないか。再び見上ると自轉車が走つて居る。我々は正に啞然として仕舞つた。尾神の村から尾上郷村又はその上流へ通ふ道に違ひないが、何時出來たものであらう。尾上郷村へ立寄るために、又この意外な道を調べるために、晝食後我々は右岸の藪を潜つて橋の袂へ攀ち登つた。橋も道も立派なもので荷馬車の轍が深くついて居る。これに沿つて小黒谷の橋を渡つて暫く行くと、山の裾が可成り廣い平に成つて、稗畑の美しい緑の彼方に尾上郷の屋根が見える。家は二軒、和かな村である。

山本七郎右衛門方でゆつくり休憩して谷の名稱を教はつたりする。家は石をのせた板葺であるが頑丈な造りで、切妻平入二階建、十二間に七間といふ山間にしては大きな家屋である。四隅には雲形の軒飾りがついて居る。母屋の一部が既に成つて、仔馬が母に戯れて居た。ここでは食料の關係上、分家する時は麓の村へ下らしめて戸數の増加を許さない掟がある。今この家には四代の家族が住んで居る。「ためらつておいでなされ」と送り出されたのはもう三時前であつた。

三十分で大黒谷^{オホクワ}出合に來る。ここに大きな製板工場がある。我々はその鋸の音を避けるやうに急いで通り去つたが、尾上郷で聞いた所によると、この工場は昭和二年着業、大黒谷を伐採し（谷にはトロッコが見えた）、下駄や機^{ウチ}の材料品を可成り大仕掛に拵へて居る由。さきの橋や道は、その製品を荷馬車で尾神へ出すために出來たものである。

道はここから急に細く成るが、高いところをからんで大シウド谷の邊まで行つて居るらしい。我々は間もなく、これを離れて鯉釣りの路らしいものを取つて谷へ入つた。この小徑は右岸の藪の中を行き、やがて細い丸木橋によつて左岸に渡り、あとは判然としない。徒渉を二回するとワサビ谷のやゝ上流、大禿オホハゲ（地形圖に記載あり）の對岸に可成り廣い砂濱がある。四時すぎであつたが此處へ第一夜の天幕を張る。汗ばんだ襯衣を脱ぎすて、藍青に濃んだ流れへ岩頭から身を投じた時の爽快味は忘れられない。大禿の中腹の道を數人の男が通りかかり、我々の焚火を見てしきりに呼ばはつて居た。砂の床の眠りは快かつた。

翌朝は九時出發、すぐにコブ谷出合、十人餘りを容れる小屋がある。城端から來たと云ふ樵夫が二人泊つて、大禿附近の木を伐つて居た。

このあたり流を挟んで緑の茂み、その静けさは一寸鈴鹿などの谷を思はしめた。漸く谷は狭まり、徒渉が繁くなつた（大禿より大シウド出合まで十四回）けれども、流が緩いので太腿を没する位のも殆んど困難は覺えない。コブ谷と大シウド谷との間に右岸から入る谷（地形圖に水線あるもの）は水の無い小谷で、尾上郷のものはその存在すら否定して居る。八年前に廢鑛に成つたと云ふ尾神鑛山への路は見付らなかつた、勿論地圖に載つて居る橋の如きものはあとかたもない。大シウドの少し上で晝食、海上谷出合は二時すぎであつた。

地圖面では、大シウド谷からサブ谷まで谷は廣い河原のやうに思はれる。そして我々も實は、その緑にふちどられた白い河原——私は勝手にさう想像して居たのだが——のビツケルを引づつてのブロムナード、そしてその木蔭でのどかな午睡に可成り期待して居たのであつたが、實地はその反對に、大シウドの邊から谷は益々狭く、海上谷から上はいはば斷崖の連続であつた。たとへば海上谷から廿分ほどの所に兩岸の壁が二三間に迫つて、小規模の

別山 大平壁



山木 愛次郎

廊下をなして居る所がある。まづ左岸をへつって淺瀬に立つたが、前面は急湍をなして居る。登り得さうなのは左岸の大きな岩のみだが、その下は水が深い。長次郎等は暫く考へて居たが、何處からか一本の細い流木を見付けて來て、その兩端にロープを括りつけた。そして一人が他に後推しされて無理やりに岩の上へ攀ると、ロープを岩角にかける、すると岩に沿うて流れの上に細い一本の浮橋が出来る。我々は一人づつこれを踏んで岩をへつり、岩の低く成つた所から攀ち上ることが出来た。この通過は約五十分を要した。すぐに左岸の高廻り、間もなく右岸にも一回あつた。谷と融和するプロムナードの期待は裏切られたが、こうした岩から岩への飛躍、壁へつり、高廻りそして頻繁な徒渉など、いはゞ谷との快活な戯れは、それを補つて餘りがあつた、愉しさは皆の顔に輝いて居た。

今日はカラスノ谷とモミクラ谷の出合附近まで行く豫定であつたが、溯行に以外の時間を要したので南谷にさへ至らぬうちに、五時前左岸にやゝ廣い石原を見付け、其處へ荷を下した。二十分許り上流へ偵察に行つて見たが、このあたりでは他に一寸泊場がないやうである。

鰯が十尾釣れた。鰯釣りの巧みなものと云ふ注文で連れて來た重松は昨夕の不漁でふさいで居たが、今夜はやつと責任の一半を果したと云ふ顔をして居る。それにヨシナの味噌あへ、山獨活の芽、中々の御馳走であつた。

天幕を出ると朗かな朝、チラチ……と鋭い聲が静かな谷一面に響き渡つて居る。此谷へ入つてからはじめて小鳥を聞いたので皆喜んでその姿を求めると、向ひの斷崖の灌木の間を白い鳥が飛んで居た。

出發八時、南谷九時、サブ谷十一時。谷は依然として悪い。海上谷と南谷との間が、この豁谷中一番厄介な、つまり面白い所である。我々の通つたのは減水期であり、天気も好かつたが、岩に残つて居る水線から見ると増水期には可成りの困難があるだらう。サブ谷の少し下流左岸に小さな岩小屋があつて、焼いた鰯が澤山置いてあつた。

下の村のものは此處まで来る筈はない、加賀の方面からはカラスノウシロ谷を通つてサブ谷のあたりまで釣りに来るものがあると聞いて居るが、その連中だらうか。

谷はサブ谷を過ぎるとやゝ廣く成つて、樂に歩ける。晝過に谷が心持よく闊いて、タカヤマ、カンバ、ドロヤナギなどのよく茂つた河原（ブナゴヤ谷から十分ほどの下流）へ來た、火を焚いて晝食をとる。此處にも、水涯に鯿を一杯つめた魚籠が置いてある。澤山居るらしい。榮治と重松は股引を脱いで流れに入つて岩の根元をさぐると見る間に四五尾手掴みにした。寝轉んで煙草を吹かして居た我々も乗出して、とうとう川干を始めた。大した豊漁でもなかつたが、取りたてのを焼いて、もう一度飯を食べて居ると、上流から正に飄然と一人の男が現れた。さきの岩小屋の主である。島々から山越しにやつて來て二日で四貫ばかり釣つた、持つて歸へつて上高地のお客に食はすのだと云ふ。尾上郷の名は、去年この谷へ四十日入つて居た常さんに教はつたと聞かされて驚いて居ると、彼は長次郎に此夏烏帽子へ行くことはないか、若し行つたら其處の小屋番に自分が此處で達者で居たと傳へて呉れと頼んで、名も云はずに谷を下つて行つた。魚を追うてたゞ一人名も知らぬ谷々をさまよふ鱈釣り——登山家などのまだ知らない思ひがけぬ幽谷にまで彼等の足跡は印せられて居る。その浮世離れた姿には、いつも我々の放浪性を強く動かすものがある。兎も角彼等の存在は、日本の山を考へる上に、忘れてはならないものゝ一つであらう。遊び過ぎて再び荷を脊負つたのは三時を可成り廻つて居た。

がら／＼と石の多いカラスノウシロ谷の出合で少憩、腰をあげたと思ふと早やカラスノ谷とモミクラ谷との出合へ着いた。四時四十分。五分しかかゝらない、地圖面ほどの距りは無いやうである。

谷はモミクラの方が急で荒れて居るが、カラスの方が大きい。後者を尾上郷川の本流とすべきであらう。二つの谷に挟まつて、流から二三間高く、一つのテラスがある。天幕を二つ張ると殆んど空地がないのが却つてこぢんま

りとした感じを興へる。段々になつた岩を踏んで流へ下りて眺めると、それは露營地とは云へない、さゝやかながらヴェランダも附いた我々の棲家である。こないゝ泊り場はめつたにない。

重松は早速糸を下す。我々もモミクラの水溜りに遊ぶ岩魚の姿に誘惑されて、裸體になつて手掴みにしやうとしたが、徒に水鏡に映る自分の瘦軀に厭氣がさすばかりであつた。然し重松が釣上げた二十尾ばかりの鰯が、下流のものに比べて皆ひどく瘦せて居るのを見ていさゝか慰められた。

枯れたドロヤナギの巨樹の稍が、夕闇のなかに一枝一枝くつきりと見えて居たのが、やがて星をその枝に宿すやうに成ると間もなく闇に消えて仕舞ふ。我々は大きな焚火をおこした。それは尾上郷川との別れをさかんにするためである。昨日も今日も徒渉三十回、乾くひまもなかつたズボンもこの火ですつかり乾くだらう。モミクラの方から押出す雪崩のために倒された枯木が豊富なので火は益々熾になる。炎は明日の日和を豫告して眞直ぐに登る、大空の星に戯れかゝるやうにひやうきに飛び上る火の子を眺めながら、我々は知れる限りの歌を文字通り放歌高吟してやまなかつた。歌詞などは何でもいゝ、兎も角聲帯を無闇に振動さして發散したい何物かゞあるのだ。いつの山行きにでも、こうした一夜がきつとあるものである。

八日の朝は少しゆつくりして九時半出發、カラスノ谷を廻る。傾斜は急に成るが水量減少して廻行は容易である。三ノ峰の南側から出る谷との出合のあたりから、斷絶的な残雪があつた。

十一時半我々は一つの瀧に逢着した。直下四十米餘、水量は少いが中々の壯觀である。瀧は豫想してしたが、こんなに大きなのがあらうとは思はなかつた。向つて右の斜面にある急な小溪を少し攀ぢ、熊笹の中を泳いで落口のすぐ上へ出る。三ノ峰北側から發する枝谷との出合のすぐ下流である。上流はなほ瀧らしいので此處で晝食をとる。

落口の岩の上に、晴れやかな氣持で小さいケルンを一つ積んだ。それは一度増水するか雪が降れば忽ち壊れさうな場所であつたが、それでいゝと思つた。此谷を我々が歩んだと云ふしるしは、自分たちの心のうちにさへ残ればよい、その自然の一部にしつこく足跡を留める必要が何處にあらう。

これから上流は、追分（別山から三ノ峰方面へ行く道と岩屋俣谷へ下る道との分岐點）から出る谷との出合まで殆んど瀧の連続と云つてよい。今通過したのと共に合計八つある。二番目から六番目までいづれも右側を高まはりする。七番目は十五米位であるが、兩岸が迫つて高まはりを許さないで、瀧のすぐ右に沿うた岩の小溝をロープを使つて攀ぢる。八番目は最初の次に次いで大きく約二十五米、これは左をからむ。これら八つの瀧は困難なものはないが、それでもこの僅かの間に正味一時間半餘りを費して居る。白山方面から尾上郷川へ岩魚を釣りに行くものが、わざ／＼一ノ峰まで迂回してカラスノウシロ谷を下るのはこの瀧のためであらう。

すぐに追分から来る谷との出合、なほ向つて左側から入る枝谷を二つ過ぎると間もなく谷が二つに分れて居る。その左俣を登る。この邊から雪は全く姿を消し去り、ガラガラ石のみと成る。更に小さな分岐の右を取つて行くと谷の水は失せて登りは益々急峻である。もう一度飯を食べて元氣をつけ、大平壁（別山直下の壁）の左下へ出る、その左沿ひの急傾斜の草地を攀ぢ登る。草鞋のものはよく滑るのでピッケルに頼らねばならなかつた。

尾根の路に立つたのは五時半であつた。細い路ではあるが、三日ぶりに人が踏みこしらへた道を歩む、その草鞋の觸覚は快くまた懐しいものであつた。あと二里の道を室堂まで行く豫定だつたが、葉谷君は今朝突然下痢して一日葛湯二杯で頑張つて來たので、其夜は御手洗池に泊ることにした。二三丁行くと青草のうちに寂然と光る御手洗池が見える。その色は何か安息の象徴のやうに思はれた。そして我々は野原を馳け廻る少年のやうな心で、道をはなれて草の斜面を一直線に池を目指して馳け下りた。

中ノ川へ下る鞍部より大伐業(右端)を望む



山本愛次郎

池の畔に可成り破損した小さな小屋がある。その後は一面のツガザクラ、その蔭の上に寝轉んで、日没の雲の海に浮んだ越前、美濃の連山のおだやかな山容をぼんやりと眺めて居た。残り少い煙草もこういふ時には、いくら喫んでも惜しくはない。夜は可成り冷えた。

白山室堂（八月九日）

豫定が段々と狂つたので米が缺乏して來た。昨夜と今朝はお粥である。それでも池の水で炊いた、め赤いブランクトンが澤山入つて居るのが美しくてまたい、だしに成るなど、戲言をいつて居る、七時半出發、すぐと思つた室堂が中々に遠い。龍ヶ馬場の登りが苦しくて、正午までと云ふのが二時に成つた。どうせ今日は室堂泊りと云ふずるい考もあつたが、矢張りお粥がこたへたのだ。人夫衆が弱つたのは無理もない。

早速晝食を頼む。飢は満されたが然し、ぞろりとした着流しで我々の住所姓名を糺す神官、出前持ちのやうな恰好で飯を提箱で運ぶ小僧さん、天井へ這ひ上つて白山登山何某と大書する人々など室堂に見出される一切のものは我々に一刻も早くまたあの靜かな谷へ歸へりたいと思はせるばかりであつた。夕食後御前峰まで散歩すると早く寢て仕舞つた。

中ノ川下降（八月十・十一・十二日）

米一斗、味噌、鹽鮭等の食料品は此處で補充することが出來たが、草鞋は丁度品切れで一足も得られなかつた。出來るだけ靴を用ふることにする。葉谷君は腹痛がまだ十分醫えないので白山温泉を経て歸京されることになり、我々七人は八時半、室堂の騒々しさを逃れて大汝峰に向ふ。この間一時間。

よく晴れた空に日本アルプスは今日もくつきりと美しい。楽しい思出を藏するその一々の峰を名指して行くうち
に思はぬ時間を費して居た。

昨日御前峰から眺めたときは剣ヶ峰に障られてよくは見えなかつたが、来て見ると、豫定の地獄谷(中ノ川)は下
り口が悪いのみならず、その毒々しい眞赤な姿がすつかり我々を反撥して仕舞つた。そこで大汝峰と獨立標高二三
六五米との間の鞍部から中ノ川本流へ下ることに決め、大汝峰の東肩から小白水谷の方へ下つて行く。小さい雪溪
の上を暫らく歩み、やがて左へからんで灌木の間を縫うて偃松の尾根へ出る。五萬分の一「白山」圖幅の尾口村と
云ふ文字の「尾」の南の邊である。偃松の間に焚火のあとがあつた。昨春四高の山本保君等が奈良岳まで縦走された
時(ベルグ・ハイル4参照)の露營の跡かと、その燃えさしの枯木を懐しくながめた。

十一時半すぎ、偃松を泳いで谷へ下りかける。偃松はすぐ切れて急なガレを下りると、小さい溝のやうな谷、こ
れをどんくくと下つて行く。

三四米の小さな瀧がある。それを越すと又すぐ瀧、その上でゆつくり晝食をつかひ、瀧の左をからむ。二段に成
つた五六米の小さなものである。この中ノ川本流も地圖面よりずっと肌が荒れて、兩岸殆んどガレの連続と云つて
もよい位であるが、地獄谷のやうに、いはゞ皮膚を剝がれたやうな生々しい感じは與へない。水が少ないので靴で容
易に歩ける。たゞ少々硫黄の臭がする。

あまり侮つて居たら悪場にぶつゝかつた。地圖で云ふと、地獄谷と出合ふやゝ上流、兩岸共にガレ初めるあたり
になる。兩方から押し迫つた谷の前面が瀧である。曲つて居るが可成り落ちて居るらしい。高まはりをするにも一
寸登る所がない、たゞ落口のすぐ右手は壁が三米許りに低くなつてその上は藪である、そこまでは左岸をへつり流
を涉つて行くことが出来るが、其壁が足場がなくて一寸厄介なのである。長次郎がビッケルを借して呉れと云ふ。

見て居ると、その滑かな壁に片足をかけて、ヒョイと飛上りざまに、ピツケルで上から出て居る木の枝を引掛け、それにつかまつて攀ち登つて上からロープを下した。その手際は流石に鮮かであつた。藪を少し右にからんで行くと、殆んど直立した岩壁に出る。ロープを木の根に結び、それに頼りながら足場を求めて下る。三十米のロープをシングルにして丁度だつた。最後の長次郎は巧にダブルを用ひて下りて來たと思ふと、もうロープを卷き終つて居た。

こゝで可成り時間を費したので地獄谷出合へ來たのは四時半前であつた。此谷はこゝから覗いても眞赤である。硫黄を含んだその水はひどく濁つて居る。このあたりから徒渉が屢々あるが、思ひなしか、なまぬるいのは餘り嬉しくない。この中ノ川では、清水のある、そして石の落ちて來ない適當な泊場は容易に見當らない。それを見付けようと足を早めたので二十五分で*ゾロ谷出合まで來て仕舞つた。

*ゾロ谷とは獨立標高一〇九五米の地點に於て左岸南々西より注ぐ谷である。ほど同地點に西々南より注ぐものをシノマタ谷と云ふ。然しこの二つの谷の名稱は或は逆であるかも知れない。我々にこの名を教へて呉れた尾添村林與吉氏の説明が不明瞭であつたから、目下問合中であるが、返事がないので姑く疑問のままにして置く。

なほ暫く行くと、左側の尾根まで續く大きなガレから巨大な雪の押出しがあり、谷をすっかり埋めて、その下がトンネルに成つて居る。墜石に注意しながら走つて潜ると、間もなく左岸に細流ながら清い水のある泊場が見付かつた。對岸はガレて居る。地形圖の中ノ川と云ふ文字の「中」のあたりである。

明日は*湯ノ谷出合まで下り、それを溯つて*岩間温泉に泊る豫定、石を枕にするのも今夜かぎりである。皆中々天幕に入らうとしない。焚火の炎のゆらめきを映すところ、あの濁流にさへまた一種の美しさがあつた。

*地形圖に於て獨立標高八〇〇米の地點にて南より中ノ川に注ぐ、水線ある谷。

○尾上郷川と中ノ川 桑原

六七

***地形圖に礦泉の符號あるもの、今温泉宿一軒あり。白山尾添登山道は此處を經て大汝峰に出る。

翌朝天幕を丁寧に畳み終へたのが八時半、地圖に半圓形の大きなガレの符號のある邊に悪場があるかも知れないが、天氣は良く、行程は樂なので、のび／＼と足を運ぶ。これから下手は雪崩の巢窟らしく、その暴力の證左であるバルブの如きものが谷一面にひろがつて居る。その上を歩む一種特別な觸覺は、この夏の日に雪崩の恐怖を感じしめた。

出發後一時間ばかり、あたりが次第に險相を帯びて來るのを感じながら、流れに従つて左に曲ると、忽ちにして我々は一つのすさまじい風景のうちにあつた。尾根から流まで、三百米を一氣にガレた兩岸の蒼褐色の岩肌は奔流を挟んで相對峙して居る。瀧となつたのち右へ折れる流は、あだかも我々の前面に聳ゆる岩壁の中へ落込むやうに見える。そしてガレを縁どる尾根の綠樹と、その彼方の靑空が、この風景を鮮やかに引緊めて居る。ともかく右岸の滑かな岩を注意深くへつり、徒涉して瀧の上の岩頭にまで出て見たが、瀧が曲つて落ちて居ると、藪のために下の様子が判らない。此處はまだあの大ガレの始つたばかりの地點である。この先にもまだ退却を餘儀なくされるやうな悪場がないとも限らぬので長次郎一人ロープで下りて偵察に行く。一種期待の氣持を以て待つて居たが、二十分ばかりで歸へつて來た長次郎は、此處さへ下ればあとは大丈夫と云ふ。藪を分けてから十五米程の岩壁をロープを用ひて下ると丁度瀧壺の横へ出る。瀧は三十米足らず、三段に屈折して落ちて居る。河原も廣まり、流れも緩く成つたので左右に徒涉しつゝ容易に大ガレを通過して仕舞つた。結局我々はあの一幅の風景畫に欺かれたのであつた。

また暫くして面白い所があつた。右岸の岩壁が硫黄のために眞緑りになつて、その所々に出來た黄色の湯の華の間から熱湯が噴出して居るのである。その湯で飯を食べたが、一寸鹹い味が中々よくて食慾を快く刺戟した。人夫



中ノ川大ガレの一部

山本愛次郎

衆は土産物にすると云つて頻に湯の華を採つて居たが、ふと右岸の水涯に、大岩の下から湯が湧出するのを見付け皆協力して石と草とで要領よく浴槽を造り上げた。湯が熱いので流の水と調合しなければならぬが、こんな所に入浴出来ようとは思ひ掛けなかつたので、皆大喜びにはしやいで居る。いつも長休みの嫌ひな長次郎も湯には眼がないらしく、黒場に際しての活躍は別人かと思はせる肉のたるんだ皺の多い、寧ろお婆さんのやうな感じのする身體をゆつたりとつけて中々上らうとしない。

二時間餘り遊んで、歩き出すと間もなく左から小谷が一つ入つて、その出合に半ば壊れた小屋があつた。これが正しく湯ノ谷だつたのである。然し餘り近過ぎたので、更に又下流に見える相迫つた岩壁が、あそこを通つて見ようと云ふ望みを無意識のうちに皆の心のうちに呼び起したらしく、誰一人湯ノ谷と云ふものもなく引かれるやうに我々はずんずん本流を下つて行つた。直立した兩岸は小規模ながら立派な廊下をなし、水量は今の谷を合せて急に増加して、太腿に達する徒渉の回数は數へ得ない、寧ろ淺瀬を選んで川の中を歩くと云ふ方がふさはしい位である。谷が荒れて來るにつれて、黒場との争ひは益々我々を引込んで、湯ノ谷出合などといふ事は皆の頭から消え去つたかのやうに、我々はたゞ下へ下へと徒渉を重ねた。かくて一時間半は瞬くうちに過ぎて居た。此時突然雨が降り出した。そしてその雨に打たれた一瞬に皆謬ちを覺つたのである。直ちに引返したが、ガレの多い急な谷は見る見る水量を増し、全く混濁して徒渉は大いに困難と成つた。剩へ昨日から穿いて居る最後の草鞋は千切れて、足袋のみで滑り易い岩を踏むのであるから、可成りの悪戦苦闘であつた。

五時湯ノ谷出合の小屋に歸着、今夜は此處に一泊と決めて、骨組だけ残つた屋根に天幕を被せ、慰勞の珈琲を沸して居るうちに雨は全く霽れて仕舞つた。この小屋は今日我々が糞食した所へ湯の華を採りに行くために建てたものであることを後になつて知つた。

湯ノ谷はその名に背かず流まで生ぬるい。重松がいい風呂があると云ふので、一丁許り溯ると、岩が凹んで丁度西洋風呂のやうに成つて、其處に湧く湯と流れの水とが自ら調合されて頃合ひの熱さである。裸に成ると驚いた事には、十匹餘りの蛇がたかつて居る。人づれして居なくて鈍いので五六匹は瞬く間に叩き落すが一二ヶ所は刺される。湯に浸つて居るより外はないから厄介である。垢を落し、焚火で乾かして着物を着たのですつかり爽かに成つた。

小屋の前面にガレがある。その上部をよく見ると確かに道がある。尾添から岩間温泉への道に違ひない。日が暮れてから我々の焚火を認めたのか闇の中から呼ぶ聲が高い所から聞えた。

豫定の日數も過ぎたので、翌十二日は一氣に金澤まで出ることにして、七時半出發、小屋のわきから幽かに残つて居る小徑に従つて湯ノ谷を渡ると、路はガレの左側に沿うて眞直ぐに登つて居る。湯ノ谷の上手に見える霞ノ瀧（地形圖に符號の記入あり）の美しさに眼を休めながら一氣に登り切つて、白山尾添登山道に合したのが八時、岩間温泉へは戻らず尾添へと急ぐ。昨夜の小屋が小さく見える。私は帽子をとつて小屋と中ノ川に左様ならを投げた。山を下るときはそんなに愉しいものである。

中ノ川はこの湯ノ谷出合から蛇谷との出合まで廊下をなして居る。道からは勿論流れは見えないが、昨日引返したのどの邊だらうと云つて居ると、長次郎が對岸のガレなどの模様から推してはつきり彼處までと指したのには感心した。我々は殆んどその半ばを通つたわけであるが、下流にはなほ悪い場所がありさうに思へた。

下るに従つて道が段々太くなる。そして人里へ、都會へ近づきつゝあると云ふ印象が、早や我々を誘つて、今終らうとして居る山旅の回想に耽らしめるのであつた。

全く趣を異にする尾上郷川と中ノ川、そこには人の眼を驚かすやうな壯大な風景は見出せなかつたが、あらゆる變化に富んだ地形は十分に我々をもてなして呉れた。静かな谷間を歩いて居るとき、殆んど人の言葉を聞かなかつたのが、また嬉しかつた。そのために我々は一層新鮮な印象を得ることが出来たのだ。斷崖を飛ぶ白い小鳥、お粥の中のブランドン、我々の血を吸ひに來た愚鈍な山蛇、さうした小さなものの姿さへ今我々の眼前にはつきり感ぜられる。獨乙の詩人の言葉をそのまゝに、我々は空になつたりユックサックに楽しい思ひ出を一ぱい詰めて、都に歸へることが出来る。

谷その他の名稱は、尾上郷川サブ谷より下流は尾上郷村山本七郎右衛門氏、同上流は白山温泉公下桑石氏、中ノ川は尾添村林與吉氏の稱呼に従つた。(一九三〇・一・十六)

ドロミテの山旅 (一九二八年)

浦松 佐美 太郎

低く谷に、垂れ込めた雲が、幾日も幾日も動かさず、ぢつと、そのまゝになつてゐる。山の中腹以上は、雲に隠れて見へもしない。山を見ない日が、もう幾日、續いた事か。アイガーの麓を圍む、森の木の葉が、少しづつ黄ばむでゆくのが、目立つて来る。思ひ出した様に、冷い雨が、音立てて、谷に降り込めて来る。

夏の初が、好過ぎた爲めなのだらう。此の秋はひどく強い。そんな、悪い天氣の、或日、ドラムとトランペットに、歩調を揃へて、ぐつしより濡れた兵隊が、後から後から、谷を登つて來た。アルプスで、演習を、するのだといふ。グリンデルワルトの村へ入つてから、一隊はシャイデックへ、一隊はファウルホルンへ、といふ風に、別れ

てゆく。ドラムとトランベットの音が、谷のあつちこつちへ、勇ましく、こだましてゆく。雨は相變らず、客赦なく降つてゐる。

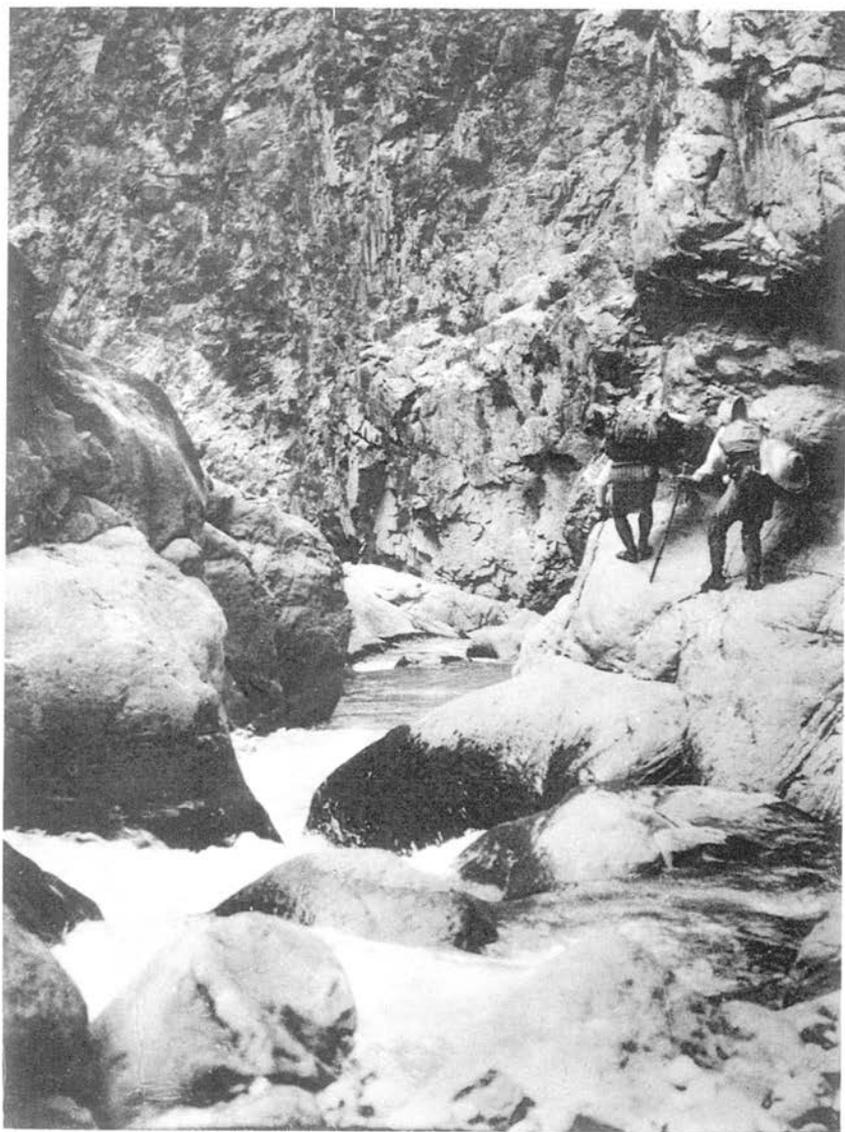
その翌日から、村は、空色の軍服で、身を包んだ兵隊さん達で、賑になつてしまつた。馬で走る傳令、糧食を運んでゆく部隊、そんな兵隊の仲間に、ザミが、洗面器の様な帽子をかぶつて、忙しさうに、駆け廻つてゐるのを見付ける。オーイと呼び掛けると、パット止つて、擧手の禮をする。つひ此の間迄、ルツクサツクを背負つて一緒に山を攀ぢてゐた、ザミとは、大分勝手が違ふ。

そんな日が、二三日續くと、今度は谷のあつちこつちで、機關銃や小銃の、一齊射撃が、しつきりなしに始まり出した。山にこだますその響は、大きな雪崩でも、落ちて來る様であつた。雲の晴れ間には、よくフアウルホルンから、シュワルツホルンへかけての、三千米に近い、尾根の背をゆく、進軍の姿さへ見へた。

永く、谷を閉ぢ込めてゐた、雲が晴れると、山は、其の間に、眞白に、雪に蔽はれて、了つてゐた。新雪が、秋の高い空に、まばゆく白々と、輝いてゐる。

演習の終る迄、ドロミテへゆかう。さう決めて、エミールと二人で、グリンデルワルトを發つた。途中、少しばかり廻り道して、ツーンの湖畔に、滞在してゐる、ウエストン老人を訪れた。夕方、老人と二人で、ブラームスの住んでゐた、家のほとりを過ぎて、湖邊へ散歩に出た。山を彩る夕焼が、湖水の青さに映つて、靜かな美しい眺めだつた。併し山は、岩肌も見へない程に、べつとりと、雪に蔽はれてゐた。夏既に去ると、泌々思はされた。

シムプロンを抜けて、伊太利亞の、ミンノに着いたのは、朝の四時だつた。夜通し、開いてゐるらしい、停車場の食堂で、巡查が、酔ばらひに、もて餘してゐた。白々とした、朝の光の中で、酔ばらひが、幾度持ち上げられても、するすると、すつこけてゐるのも、面白かつた。



中ノ川大ガレ瀧前のヘツリ

山本慶次郎

エミールと二人、パンとコーヒーの、朝食を済して、町へ出る。ゆふべ、雨がひどく、降つたらしく、街がすっかり濡れてゐた。未だ目の覺めない町を、城の方へ歩いてゆく。それから、ぼつぼつ、ミラノの大伽藍の方へ、戻つて来ると、町は、勤めに出る人達で、忙しくなつて来た。

外の、まばゆい程の、朝の光に引き代へて、伽藍の中は、靜かに暗い。ほのかな香の匂が、心を淋しくさへする。七時、伽藍の塔への昇口が、開かれる。ぐるぐる、目の廻る程、回轉しながら、登つてゆく、幾百段かの階段を頂上まで、一氣に駆け登る。

朝の光を、一杯に受けた、町の姿は爽かだ。町の北のはづれの彼方、遠く遠く紫の霞の上に、白くぼんやり見へるのが、アルプスの姿だらう。ミラノの町で、親しい友に、廻り會つた様な、喜びをさへ感じる。

狭い塔の頂上を、ぐるぐる見廻はるのにも、飽きたので、ほんとうの頂上迄、登るのだと、エミールが、欄干の上から、屋根へ這ひ登る。二人が今一度、屋根の上から、下りて来ると、丁度展望臺へ、辿り着いたばかりの、女の人が、景色も眺めずに、下りて行つてしまつた。暫くしてから、自分達が、うさん臭いと睨まれた事に、氣が付いて二人で噴出してしまつた。

満員の汽車に、ゆられながら、夕方、ボルツァノに着く。歐洲戦争で、新しく、伊太利亞領となつた此の町は、未だ獨逸語が、日常の言葉として通じてゐる、お寺の前の廣場、軒を深くした、町の通り。古い町を思はせる面影が、到る處に残つてゐる。

町を歩いて、地圖やら、山の案内書を、買ひ整へる。その次には、ドロミテの山で、何よりも必要な山道具、岩靴(註)を買ひに、運動具やへ入る。店先にゐた、三人の若い人達が、私を見て、若しや、此の夏、ヴェツターホルンの西山稜を、やつた日本人ではないかと、尋ねる。それから、話がはづんで、すっかり暗くなる迄、店の人達ま

でが加はつて、ドロミテの話を、聴かして呉れた。暗くなつた町を、山の話に興奮して、宿へ歸る道すがら、もつと早く來れば、よかつたのにと、惜しい氣がして、仕方がなかつた。

(註) 岩靴(Kletterschuh)は底が、麻布を刺したものの、或は麻紐をよつたもの、又は荒いゴム等で出来てゐる。麻紐のは、よくよりが解けてしまふ。ゴム底のは、乾いた岩によく止まるが、岩が濡れてゐる時は、非常に危い。ドロミテで出来るのは二十枚程の麻布を、重ねて、雑布の様に、糸で刺したものである。之も、すつかり濡れてしまへば、岩面との、摩擦が利かなくなつてしまふ。

ドロミテの山は、石灰岩質で、然も塔の様に、聳え立つてゐるのが多い。岩の角が回く、岩面は滑らかである。普通の山靴では、底の釘が、つるつる這つて、用をなさない。麻布の一枚底の、岩靴は、岩面との摩擦で、よく體を支へる。その上に、深さも淺く、薄い皮か、ズツクで出来てゐるので、非常に軽く、足首を自由に動かす事も出来る。ドロミテの難しい岩を攀ぢる時、泌々此の靴の、有難味を感じさせられる。

夜、お寺の前の廣場に、集つてゐる、乗合自動車に、明日のカーレルゼー行の、席を申込みにくく、廣場の真中で、伊太利亞の軍樂隊が、そゝり立つ様な行進曲を吹奏してゐた。明日から山だ。

朝、窓のカーテンを上げると、遠く東の方に、始めて見る、ドロミテの岩山が、顔を窺かしてゐた。若し、あの山麓を、埋めてゐる白い雪が、なかつたなら、エミールと二人で、空の床が、抜ける程飛び上つて、興奮したらうに。何あに、お天氣が、三日も續けば、山が低いんだから、直ぐ消えてしまふさと、二人で慰め合つたものゝ、何處かで、秋だ！ 秋だ！ と叫んでゐる、心細い聲を、どうする事も出来なかつた。

獨乙人の、女の觀光客が三人、私達の車は都合五人で、ボルツァアの町に、別れを告げて、エガーの谷を、ドロミテへと走り出した。水の美しさ、狭い谷を圍む、岩壁の荒削り、紅葉した木々の色どり、九十九折の路を、自動

車の曲る度に私は感嘆の聲を、發してゐた。

群青の、繪具を溶いた様な、湖水が、直ぐ道の下に見へる。あれが、カーレルゼーだと、聞かされる間もなく、目の前に森の上に、オレンジ色の岩壁が、ぐいぐいとせり上つて來た。ローゼンガルテン・グルッペだ。

森の中の、稍々広い草地に立つてゐる、ホテルの前で、乗合を下りた。千人を泊めるといふ、大きな此のホテルも、九月も末近い今は、森閑としてゐた。夏の盛に使つた。派手なバラソルも、皆すぼめられたまゝ、バルコニーの隅に、見捨てられてゐる。

人の好い、此處の支配人は、心から私達を、歓迎して呉れた。ちつとしてゐられない二人は、午食が終ると直ぐ山の支度をして、ホテルの後に、直ぐ聳へてゐるローテワンドを、目指して出掛けた。

途中、牧場の所々に残つてゐる、靴を埋める程の雪に、稍々心細さを感じつゝ、それでもワンドの下までゆく。北側の、カミンの中に、詰つた雪は、もう青氷にさへ、變つてゐる。もう今頃、消え遅れて、氷に變つた雪は、來年の、夏が來る迄は、消えはしない。極く僅かの、岩の皺をたよりに、攀ち登る、難しい岩登りでは、岩の上に、雪や氷がかゝれば手の付け様もない。仕方がない、私達のプログラムから、北側から登る、幾つかの山が、残念ながら、消されてしまつた。

ローテワンドが、駄目なら、せめて、その鞍部までゆかうと、深い雪の中を登る。デブリの上に、新雪の溜つてゐることゝして、足許が、始終ぐらつく。穴の中へ、落ち込む度に、雪の中へ、顔を突込まされる。エミールが、ぶんぶん怒つてゐるのが、可笑しい。登りは、不愉快なだけで、少しも面白くなかつたが、ヴァアヨロンパスの上から、山々を眺めて、幾分、ドロミテの山と、親しくなつた様な、氣がした。

歸りは路を横にへつて、ケルネルの山小屋を訪れる。もう此の小屋も、あと四日で閉めると、番人に聞かされ

て山の季節も愈々終りになつたなど、思はされる。遙々ドロミテくんだりまで、やつて来たものゝ、思ふ様、山を歩ける日も、數多くなさうだ。

小屋の壁に、ギターの掛けられてゐるのも、スイスの山とは、違ふなと思はせる。大きな、ムツソリニの寫眞が山小屋の靜かな気分の中に、戸迷ひした様に、ぶら下つてゐる。伊太利亞の山岳會員には、山小屋から、こんな品物を、放り出す丈けの、見識のある奴が、ゐないのかしら。

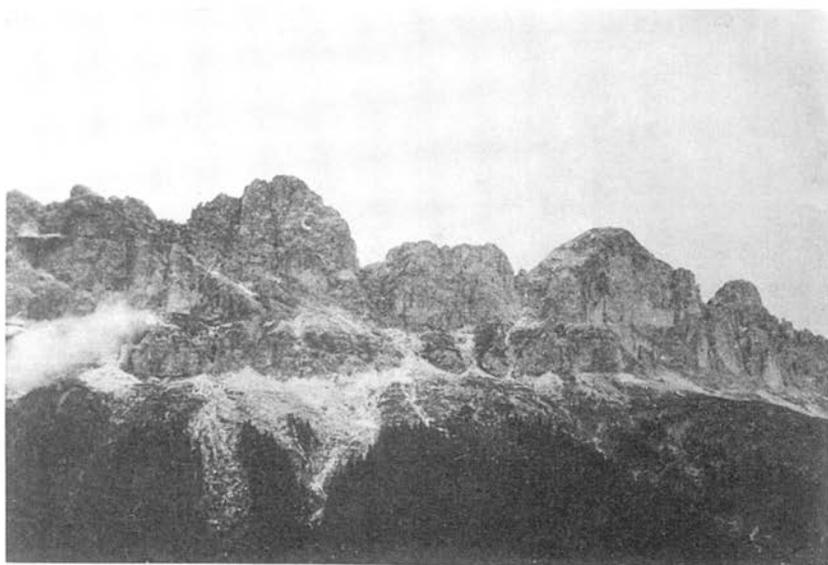
灯し頃、小屋から真直ぐに、ホテルへ下る。夜、エミールと二人で、山の案内書を、前にして、計畫の建て直しを始める。併し、第一の問題は、矢張り天氣だ。雪が消えなくては、仕方がない。表へ飛び出して、バロメータと睨めつこをする。

雨で夜が明けた。山は霧雨に消されて、見へもしない。午から、エミールを誘つて、ラエマールの中腹の、森の中へ、散歩にゆく。落葉で埋つた、森の細道は、雨ですつかり、濕つてゐる。森の中を、何處といふ、あてもなく日暮れ近く迄、歩き廻つてゐるうちに、頭の直ぐ上に、ためらつてゐる雲を、夕陽が赤々と染め出した。沈み切つてゐた、谷が急に、生き生きして、來た様に思はれる。雲が、動き出した。夕暮れの青空が、雲の切れ目に、顔のぞかす。

「占めた。エミール、急がう」

森の切れ目まで、木の間を縫つて、大急ぎで、飛んでゆく。

ローゼンガルテンの、峯々が、肩を並べて、夕陽の中に、雲をかきわけて、現はれて來る。たゞでさへ、オレンジ色の岩壁が、夕陽を受けて、美しく輝いてゐる。山の上に、張りつめてゐる、癩にさはる、氷の事も、すつかり忘れて、目の前に起伏する、山の美しさに、たゞ、見とれてゐた。杉の根元に、腰掛けて、すつかり、暗くなる迄



(上) Pala Group

(下) Rosengarten Group

浦松 佐美太郎

心を奪はれてゐる。

麓の宿に、灯の入るのを見て、谷へと下り出した。上氣した二人は、調子外れの、ヨードルを、歌ふといふよりは、奴鳴りながら、宿へ歸つて來た。セントバーナードが、小屋の前で、久し振りだといふ顔で、のびのびしてゐるのも、可愛かつた。納屋で、屋根板を、削つてゐた親爺が、山へゆくのか、と聞く。天氣はどうだね、と問へば雪が降つちやお終ひさと、肩をすぼめる。岩で育つた、ドロミテの山案内は、雪や氷には、震へ上るらしい。

ローゼンガルテンシュビッツエに、登ることにして、夜のほのぼの明けに宿を發つ。朝靄の、登り切らない、牧場を、斜に横切つて、ケルネルヒュツテにゆく。小屋に、近づくに連れて、遠くの山並が、目の前に、ぐんぐん擴がつて來る。晴れて、明けさうだつた空が、何時の間にか、又雲に、蔽はれてしまふ。

風に交つて、雨が、はらはら、頬を打ち始める。又駄目か。雨に追はれて、小屋に飛び込む。猛烈な勢で、霧が谷から舞ひ上つて來て、小屋を包んでしまふ。窓の外は、眞白な、霧の動く以外、何も見えない。ストーブの中でパチパチと、音立てゝ燃え上る、薪の焰だけが、だまりこくつた、小屋の中で、たゞひとつ、慰め顔に、明る輝いてゐる。風の勢が、募つて來た様だ。ストーブが、時々、ごうごうと、音立てゝ、薪の火が、激しくゆれる。雨も勢を、増して來た。小屋の前に、立つてゐる、旗竿が、風を受けて、しなつてゐる。窓を打つ雨の音さへ、すさまじい。ストーブにあたりながら、辨當を開く。小屋番が、慰め顔に、十日程前迄は、いゝお天氣だつたのにと、云つて呉れるのさへ、餘計なことだと、思はれる。

夕方になつて、横なぐりに、降つてゐた雨が、いくらか、鎮まつたのを、見濟して、麓へ、下ることにする。谷から、吹き上げて來る風が、どつと、ぶつかつて來る。風に曝されて、横にへつるのは、損なので、小屋から谷へ眞直ぐに、駈け下る。岩蔭に、森の中に、未だ、歐洲戰爭の跡が、生々し、残つてゐる。砲壘を築いた跡、塹壕

の跡、鏑て倒れかゝつた鐵條網。あらしに追はれて、山腹を、驅け下つて行つた、その時の、氣持には、かうした戦争の名残が、一層深い、印象となつて、残つてゐる。

露西亞の軍隊が、切り開いたといふ、谷の路へ出た時は、もうあたりは、暗くなつてゐた。雨をよけながら、吸ひ付けた、烟草の青い烟りに、やつと、心のゆとりを見出して、びしやびしや、水を跳ねかへしながら、宿へ歸つて來た。

その翌る朝は、思ひ切つた青空だ。雨に洗はれた岩壁、森、牧場、凡てが、日光を遮られてゐた、此の數日に比べて、冴え冴えと、輝いてゐる。ケルネルの小屋まで、息を、はづませながら、エミールと、競争で、登る。小屋の直ぐ前から、右に折れて、チャアゲルの、岩壁へとつつく。荒い岩のかけらの、ごろごろした、棚の上を、暫くの間、上り下りしながら、傳つてゆく。

ローゼンガルテンの鞍部が、頭の上の方に、青空を、のぞかしてゐるのが、見えて來る。之からは不用なので、ステッキを、岩の割れ目に、差込んで置く。鞍部へと、直ぐに岩壁を、攀ち登る。鞍部は、やつと、一人が立てる位の、幅しかなく、然も、瘦せてゐる。窓と云つた方が、日本語では、當つてゐるかも知れない。

此處で、岩靴と穿き代へる。釘のついた山靴を、背負ふとなると、こいつ中々の、荷厄介だ。併し、ボルツァノで買った、ドロミテの岩靴を、今日始めて、岩にあてがふのだと思ふと、嬉しい。よく乾いた岩に、靴底が、吸ひ付く様に止まる。手掛りが十分にあるので、すつかり、氣をよくしたエミールは、パイプを啜えて、さもさも、岩を楽しんでゐる、といふ様子で、調子をとりながら、登つてゆく。別段に、足場を定めて、お互に確保し合ふ程の、事もないので、一度、調子が決つて來ると、そのままに、小氣味よく、體が、リズムカルに動いてゆく。調子に合せて、何時の間にやら、口笛をさへ、吹き鳴してゐた。暖い日さし、高い秋の青空、あんなに氣持のいい、岩登り

をしたことはない。手がよりも、足場も、十分なので、面白さうな所を、撰んでは、上へ上へと、攀ちて行つた。もう少し、あればいゝのにと、思ふ位早く、南の頂上に出てしまつた。狭い尾根が、北の頂上へと走つてゐる。

雪が、尾根の背に、残つてゐるので、今一度、山靴と穿き代える。尾根を渡つて、北の頂上に着く。ルツクサツクから、あるつたけの、御馳走を出して、岩の間に寐そべる。エミールが、最後に、うやうやしく取り出したのは、チローレルワインだ。早速、二人で乾盃する。山の幸、お互の健康、日本へ歸つてゐる、諸々の山友達の健康。チローレルワインのお蔭で、山に入つてから、すつかり御無沙汰してゐる向き向きさへ、殊勝にも、すつかり友情を發露した。

始めて、心ゆくばかり眺めた、ドロミテの山々の姿は、如何にも怪異だ。どれひとつとして、所謂山らしい形をしてはゐない。幾多の傳説と、お伽噺が、此の谷の中から、生まれ出したのも、無理はないと、思はれる。直ぐ下の、フアヨレットの山小屋さへ、小人の、棲家の様に見えて来る。誰か人がゐないものかと、聲をあげて、呼んで見たが、谷に木魂するだけで、それに應じて、呼び返して来る聲もない。さすがは、秋の山だ。

三十分も、パイプを啜えて、日向ぼっこをしてゐたらう。冷い西風が、谷を越して、吹き出したので、仕方なしに腰を上げる。登つて來たのとは逆の、北側へ下る。

北側は、日當りが弱い爲、岩角に雪が、固く凍りついてゐる。靴先きではちき飛しながら下る。最後の、四十米程のカミンを除いては、別段に、之といふ程の、難しい所もなく、樂々と下る。

小人のラウリンが、寶物を隠して置いたといふ、ラウリンの岩壁と、ローゼンガルテンに挟まれた、稍々平な所に下りて來た。繩を外して、雪をかぶつてゐない岩に腰を下す。ラウリンの岩壁の、向ふの外れは、有名な、ウキンクラートウルムに續いてゐる。山の案内書と首引きで、トウルムの登り道を、研究する。それにも飽きたので、

荷をかついで、サントナーバスを越して、歸ることとする。

切り斷つた岩壁で、挟まれたバスの路は、雪が一杯、詰つてゐて、腰のあたり迄もぐる。脚の長いエミールは、見る見るうちに、先の方へ、行つてしまふ。やつとの事で、朝ステツキを、置いて行つた所へ、歸り着く。

明日は、小屋を閉めて、久し振りで、里へ歸るといふ、小屋番も嬉しさうだ。夕陽が、赤々と、ローゼンガルテンの岩壁を、染め出す頃、三日御厄介になつた、小屋の宿帳の今年の最後の所へ名前を記して別れを告げる。何遍か歩いた、同じ路だけでも、山から歸つて來た氣持は、暢び暢びしてゐた。

九月三十日、今日で、此のあたりの山小屋は皆、戸を閉してしまふ。ウインクラートウルムも、残り惜しいけれども、何時か知れない、此の次迄に残す事にして、一年中小屋の開いてゐるといふ、セラの方へ、引移ることにする。季節も遅いので、乗合自動車がなく、仕方がないので、宿の自動車を頼んで、午過ぎにカーレルゼーを發つ。名にし負ふ、ドロミテの自動車道だ。カーレル峠を越すと、自動車は、飛ぶ様に走り出す。やがて、ファツサの谷に入る。雪の來ない間にと、秋の最後の、秣刈つてゐる人達が、谷の丘の上に見える。如何にも山の村らしい部落が、それからそれへと、走り過ぎてゆく。靜かに落ち付いた、谷の景色は、自動車で走り去るには、惜し過ぎる。

カナツアイの、町の入口で、ファツシストと、例の伊太利亞の憲兵が、型の如く、二人連れで立つてゐるのを見る。此處も、ファツシストのものに、なつてしまつたのかと思ふと、人事ながら、残念な氣がする。たつた一つ、未だ開けてゐる、土地つ子の宿屋、ホテルピアンカに、荷物を預けて、そのまゝ、自動車の頭を北へ、山の方へと走らせる。ジクザクの急勾配の爲、自動車の勢が落ちるあたりで、子供が二三人、山の花をと、花束を手にして、自働車の後を追つて來る。花束の中には、エーデルワイスも、二三輪、交つてゐた。

急な坂を、登りつめると、セラの岩壁が、眞正面に聳え立つて来る。大きな、幅の廣い岩壁が、氣味の悪い程眞直ぐに、聳え立つてゐる。セラの岩壁に沿つて、ぐんぐん登つてゆくうちに、峠の上に来てしまふ。ラングコーフェルの、怪しい形をした群峯が、夕陽を受けて、峠の向ふに現はれる。峠を少し、下つた所に、セラ峠の小屋がある。

西風の強い、小屋の外に立つて、山を眺める。城砦の様な、セラの山塊の上を、雲がすさまじい勢で、走り去つて行く。小屋の眞後に、私達の目差す、フュンフ・フィンガー・シュピッツエが、その名の如く五本の指を、寒い夕空へ、黒々と、突き差してゐる。水鼻をすゝりながら、エミールと、明日のルートの研究をする。小屋の中に、灯が入つたので、あはて、引き返す。晩食だ。

朝早く、小屋の前に出て見る。相變らず、雲が盛に飛んでゐる。

八時に小屋を出る。草地を抜けると、歩き難い、石ころになる。時々、雲が低く下つて來ては、山をすつかり隠してしまふ。九時頃やつと岩壁の下に登りつく。寫眞器械だけを、ポケットに入れて、残りのものは全部、岩陰に置いてゆくことにする。

此の峯は、中指が頂上になつてゐる。昨日豫定した通り、拇指と、人差指との間に入つてゐる、大きなカミンを登り出す。カミンの中に、詰つてゐる雪に、麻の靴底を濡すまいと、苦心させられる。やがてぶつかつた、可成のオーバーハングの棚には、すつかり汗を絞らされる。豫想してゐたよりは、大分難しかつた。此の時、少し勝手が違ふと、氣が付いて、直ぐにカミンの壁を傳つて、右側の背に出てしまへば、そのまま正しいルートに出られたものを、丁度體の調子が、出來上つてゐた二人は、中々味なことをやる位に考えて、そのままカミンを登り續けて行つた。

その内に、カミンの幅は狭く、奥行も深くなつて来て、嫌でも雪の中へ、足を突込まなければならなくなつた。岩に挟つてゐる、氷柱を取除けて、足場を作らなければならぬ所も、多くなつて来た。

拇指と人差指との切れ目が、直ぐ頭の上に見える所で、全く切り立つた岩壁に、ぶつかつてしまつた。高さは、百尺餘りあつたらう。エミールも、暫く考へてゐたが、やつて見やうと云ふ。私達を繋いでゐる繩は、二十米突しかない。エミールが、一つ一つの、手がよりと足場に、氣を配りながら、靜かに靜かに登つてゆく。全く、手が、りと云つても、指先が二本か三本、やつとかゝるだけだし、足場と云つても、靴のこばが、ひっかかつてゐるに過ぎない。それとても、思ふ様な所になく、随分な無理をしなければならぬ。一つの足場から、他の足場へ移る時は、餘程思ひ切らないと、體重を移す事が出来ない。やがて繩が、一杯に出てしまつたけれども、エミールが、未だ安心して止まれる、場所には届いてゐないらしい。直ぐに、續いて来て呉れと云ふ。

私が少し登ると、エミールが又少し登る。どつちが落ちてしまふに決つてゐる。全く遅々とした進みだけれども、やつとの事で、上の割れ目に届く。夢中で、岩にしがみついてゐた爲、氣が付かなかつたが、雲が低く巻いて来て、あたりの峯は、すっかり消え去つてゐた。今登つて来たのとは、反對の側の麓の方に、小さな氷河が、灰色に冷く、光つてゐるのが見えるだけだ。

その割目から、稍々急な岩を、斜に攀ちて、人差指と中指との間に出る、強い西風に交つて、固く凍つた雪が、吹きつけて来た。此の思ひ掛けない厄介者には、すっかり膽を冷される。折角此處まで、来たのだからと、天氣が氣がよりになりながらも、可成激しい吹雪の中を登り續ける。頂上への、最後の急な岩壁の角を、エミールが登つてゆく。霧が深い爲め、三米突も登ると、見えなくなつてしまふ。繩だけが、岩角に沿ひながら、霧の中へ、する／＼登つてゆく。岩角にしがみついて、ちつと立つてゐると、寒さで膝が、がく／＼して来る。霧が益々深く、殆

ど一米突位先しか見えない、繩がびんと張る。エミールが上へ届いたらしいので、聲を掛けて、登り出す。

やつと自分の手の届く所から上は、霧に隠れてしまつてゐるので、肝心の見透しが利かない。何でも岩角を、眞直ぐに攀ち登つてゆけば、頂上へつくだらうと、無理をしながらも、登つてゆく。たつた一人で、霧の中を何處へゆくといふ當もなく、岩を攀ちてゐる様な、心細さをさへ感じる。大分経つたので、聲を掛けると、エミールの聲が直ぐ頭の上の、霧の中から聞えて来る。安心して、更にも上へ登らうと、左の手を伸して、手がゝりを探した途端、無氣味な感じが、指先から肩へかけて、すうつと走つた。その瞬間、去年の夏、メイジの頂上での不愉快な記憶が一度に胸を突いて來た。雷だ！

「エミール、何處にゐる。」

「頂上だと思ひますがね。」

「早く下りた方がいゝぞ。」

「なあに、もう五米突位しか繩が残つてないから、登つておいでなさい。」

「雷だよ。」

「ほんとかね。」

「下りなきや、やられるぞ。」

顔も見えない、霧の中の對話だから、心細い。まして、雷の恐しさを知らないエミールだから、對手が悪い。右手にも胸を抉る様な、氣味の悪い感じが走り出す。無氣味な程の静かさが、ぽかっと落ちて來た。ぐづくしてゐちや危い。

「エミール、降りて來い。」

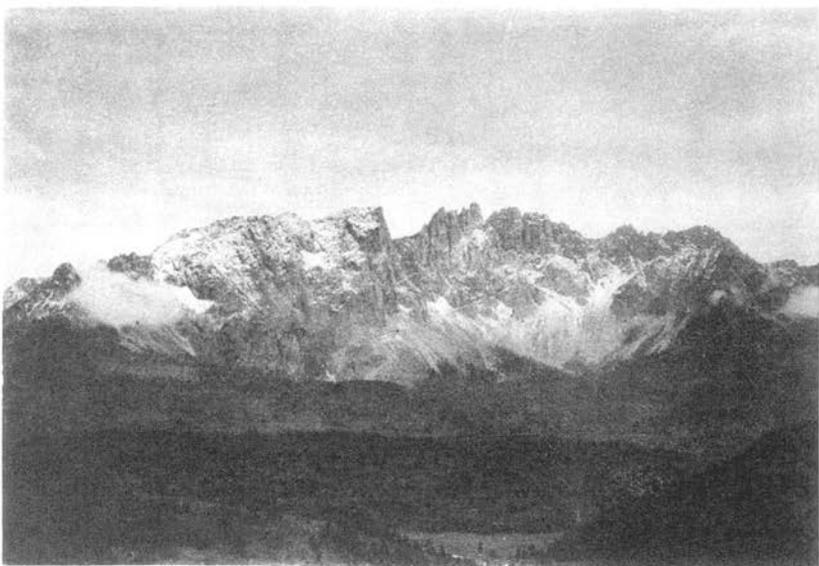
顔が見えないので、繩をぐんぐん引張つて、合圖をしたまゝ、今考へても、どうして、足場や手懸りを見付けたのかと、呆される程夢中で、逃げる様に下り出した。繩がずる／＼弛んで來た。エミールも、下り出したのに違ひない。早く岩角から、離れなければ危いと、氣があせるけれども、都合のいゝ場所もない。やつと、少し外れた所に、岩が窪んで、足場のしつかりした所を見付けたので、その中へ飛び込む。エミールも、續いてやつて來る。

未だ、不服さうな顔をしてゐる。その瞬間だつた。二人の顔の間に、鋭い紫の光が、ぱつと破裂したと思ふと、バリーン！ 浅い岩の窪みから、彈き飛ばされさうになる。エミールと顔を見合せて、にやりと笑ふ。淋しい笑だ。又光る。バリーン！ 此處から下へ降るには、岩角を傳はなければならぬ。此のバリーンが、續く限りは、下へ降りられつこはない。何時になつたら止む氣か。

雪が、容赦もなく、顔へ吹きつけて來る。寒さで、齒の根が合はない。エミールが、ポケットから、ブランドーを出して、防風衣を着ませうや、といふ。兎もすれば、減入りさうな、氣を紛す爲に、パイプを出して、火をつける。吹きつける雪が、少し靜かになつたと思ふと、相變らずバリーン！ バリーン！ が、頭の上で暴れ出す。風が少し強くなつて霧が切れると、思ひも掛けない所に、ラングコーフェルの峯の一部分が、怪異な姿をぬうつと現はして消えてゆく。

今迄、直ぐ頭の上に乗せてゐた、雷の音が、少し遠退く。隣の峯に移つたのだらう。此の暇にと、大急ぎで、今一度岩角にしがみつく。併し、私達が一時間程、雷を避けてゐた間に、山はその姿を、すっかり變へてしまつてゐた。

登る時に、よく乾いてゐた、岩の皺には、白く雪が固つてゐる。然も、始めのうちに、少し降つた雨が、その下ですつかり氷になつてゐる。岩靴は、乾いた岩にこそ、よく止まるけれども、濡れた岩や氷には、全く用をなさな



(上) Marmolata

(下) Latemar Group

浦松 佐美太郎

い。釘一本ない布底の靴で、岩に固つた雪を、蹴つた所で、中々に足場が出来ない。私達の下降は、大變なことになるつてしまつた。

今、隣の峯で暴れてゐる雷は、何時又、頭の上に舞ひ戻つて来るかも知れない。あれ程暢氣なエミールが、すっかり眞劍になつてゐた。あの時の、切羽詰つた事情が、まさしくと記憶に蘇つて来る。先へ下つてゆく私には、殆ど足場を、頼りにすることが出来なかつた。指先で、雪を拂ひ除けては作つて、ゆく手懸りを、唯一のたよりに下り出した。遅々として進まない。そのうちに、靴底の麻布が、すっかり濡れて、岩の上に沁り始めた。悪戦苦闘の後、やつとの事で、拇指と人差指との割れ目に歸つて來た。

もう此處迄來れば、あとは普通の登り路になつてゐる、拇指の背を下ればいゝのだからと安心して、エミールが割れ目に残つて、繩の端を押へ、私が拇指の根元をからむ、岩壁を横に傳つて、先へ進んだ。併し、拇指の背になつてゐる、さう傾斜のきつくない山稜は、薄氷が、すっかり張り詰めてしまつてゐる。何とも仕方がない。少し降つた雨と雪とが、氣温の急激な低下の爲めに、一時間程の間に、すっかり變つてしまつたのだ。エミールは、二十何年間かの山登りの間で、始めての經驗だと云つてゐた。

私達に、唯一つ残された路は、今朝登つて來たカミンド。補助繩があれば樂に下れるのだが、二十米突の繩一本しかない。今の状態では、今朝の登りを考へただけでも、不安が先に立つ。併し、それも駄目とすれば、此處で一晩明すより、仕方がないので、思ひ切つてやつて見る事に決心する。岩壁が急な爲めと、風が吹き曝さない爲めに、カミンの内側の岩には、氷が張つてゐない。併し、あるか無しかの心細い、手懸りや足場はすっかり濡れてゐるので全く手に負えない程厄介だ。私が繩一杯下つてから、エミールが下り出す。ちつと止つてゐると、バランスが破れて、沁り落ちさうになるので、始終體を、動かしてゐなければならぬ。聲を掛けて、互に戒めながら、少しづつ

下つてゆく。最後に十突程、岩壁を斜にへつるのが、一番苦しかった。どの足場に、足を掛けて見ても、水に濡れてゐて、止まらない。ぐづぐづしてゐるうちに、體を支へてゐる唯一の、右手の三本の指が痺れて來た。咄嗟に、顔の前にあつた岩のこばを、齒で食ひしめて、體を支へた事を、今も忘れない。エミールが、此處を下る時は下から肩をかしてやつた。一番の難所を兎も角やり通したので、今晚は、小屋へ歸れるぞと、二人で握手して喜び合つた。

二人共、上衣の胸のあたりを、ぼろ／＼に、磨り切つてしまつた。それから可成下つた所で、岩の割れ目に詰つてゐる、人の大きさ程の岩を、抱へる様にして、向ふ側へ越える所があつた。體の軽い私は、何でもなく通り越した。その下にある、稍々広い足場の上に立つて、エミールの下つて來るのを待つてゐた。

エミールが、私と同じ様に、その岩の背を、抱へると同時に、ぐらり、岩が割れ目から抜け落ちた。エミールは眞逆に放り出された。しまつた！ 大急ぎで、繩を手許へ手繰り込んだ。岩は、カミンの壁にぶつかつて、微塵に碎けて、飛んで行つた。目の前を、エミールが飛び過ぎたと思ふ次の瞬間、一生懸命で繩を引張つてゐる兩手に、ぐうんと重みが引掛つて、そのままエミールは、私のゐる所よりも、二米突程下の所で止つた。凡ては一瞬の裡に、起つて過ぎ去つた出來事だ。

エミールを、うまく止め得たと、思ふ頃に頭に閃いたのは、大丈夫かなとの疑であつた。カミンの縁にある、手頃の岩角に、繩を巻き付けて、下つてゆく。やつと、意識を恢復したらしいので、繩を引張つて、足場の確な所まで引づり上げる。顔も手も、其處ら中から、血が吹き出てゐる。紫色に、服れ上つてゐる所もある。雪で傷口を洗つてやる。やつと記憶を呼び戻したらしく、ポケットを探つて、ブランデー瓶を取り出したが、粉々に割れて、頭の所だけしか、形を残してゐなかつた。

氣丈なエミールは、何これしきの傷が、といふけれど、無理に手拭を裂いて、繻帯をする。雪をかちりながら、今朝から續け様に、やられて来た、苦しい思出を、泌々と思ふ。ちつとしてゐると、寒くなるので、エミールが、もう大丈夫だから、行かふと云ふ。併し、立ち上らうとしても、左の脚から、腰へ掛けての、激しい痛みにも、立ち上る事も、出来さうにもない。さつき、仰向けに落ちてゆく途中、岩に激しくぶつけたものらしい。もう少し休んだ方が、よからうと云つたが、何もういゝ、もういゝの一天張りで、とう／＼立ち上つてしまつた。

私が先へ、幾らか下りて、それから岩に繩を掛けて、釣瓶の様にして、エミールが下りて来ることにした。それも出来ない所は、エミールが先へ下つて、私が後から下りることにした。幸に難しい所は、終つてしまつたので、時間こそかゝつたけれども、日の落ちる迄には、どうにかかうにか、麓へ辿り着いた。やつと、ルックサックを置いた所へ来た、チョコレートをしやぶつた時は、ほつとした思をした。

仰いでも、山の頂は、未だ霧に包まれて、見えもしない。二人共、上衣だけでなく、ズボンまでも、ぼろ／＼にしてしまつた。小屋へ下る、石ころ路を、夕暗にすかしながら、とぼ／＼と歸つてゆく姿は、みぢめだつた。

小屋は、丁度自働車を持つて来て、泊つてゐた人が、快く夜道をカナツアイ迄、送る事を引受けて呉れたので、親切な小屋の人達に、お禮を残して、眞暗な山路を、カナツアイの谷へと飛ばした。

裏山のあたりで、響き渡る銃聲に目を覺した。今朝は、エミールの足が、すっかり脹れ上つて、靴も穿けなくなつてしまつた。チロルの山の宿らしい、粗末な木造りの食堂で、朝の食事をしてゐると、例の羽根飾のついた、帽子をかぶつた獵師が、山鳥を三羽ぶら下げて、切れる様に冷い、朝の空氣と一緒に入つて来る。ひどく寒くなつたと、宿の亭主に挨拶してゐる。窓の外には、澄んだ秋の空氣が、張り切つてゐる。

マルモラータも何も、駄目になつたねと、淋しく笑ひながら、エミールと二人で荷造をする。之で愈々、今年の

山も終りだ。さう思ひながら、カナツアイの村に、別れを告げる、

からりと晴れた秋の空に、自働車の爆音が、心地よく響く。ポルドイ峠の上から、振り返ると、フユンフ・フィンガー・シュビツツエが、高い青空に、オレンジ色の岩壁を、突き立てゝゐる。固く凍つた雪が、岩の所々を、刷いた様に白くしてゐる。秋だ、山も終りだ。思出の多い山に、後を向けて、自働車は、冷い空気を突き切つてゆく。コルテイナへと谷を下つてゆく。

マルモラータの、扇を擴げた様な氷河が、美しく日に輝いて見える。何時迄も、自働車が山の端を廻るまで、私達の横になり、後になりして見送つて呉れた。道々の牧場に、無名の戦死者を祀る、數多くの墓地を見た。激戦地の跡だらう。小さな白木を、組んで作つた十字架が、百も二百も固つて、牧場の丘の上に、淋しく立ち並んでゐる。森の中には、鐵條網が千切れて残つてゐた。戦争で、打ち碎かれた家々を、やつと直しかけてゐる村々も幾つか走り過ぎた。

山で傷いた人を、勞りながらゆく者には、美しい秋の、チロルの谷は、あまりにも感傷的であつた。

雜錄

○高架索登山重要年譜並に參考文獻

大島 亮 吉

〔次に載せるものは一昨年穂高で無常せられた大島君の書き遺して置いたものである。語學の達人で廣く山岳文獻に通じて居た同君は同時に又恐ろしく筆まめな人であつて、その生前書き記して置いたもので未だ發表の機を與へられないであつたものだけでも相當な分量に及んで居る。列傳體にして有名な登山家の傳記を書かうとして居たのであらう、澤山の人々に就いての覺書が随分遺されてあつた。『登山史上の人々、遊技的登山派の闘將マンメリー』（登高行第七號所載）はその内で完成した又最も長い一篇であつた。大島君は又、地方別に登山の歴史の様な物を書かうと思つて居たらしい。アルプスを一通り研究し、その次にコーカサスそれからヒマラヤの登山史にうつらうと云ふ希望を抱いて居ると云ふ事を、その最後の行途に出かける直ぐ前に

語つて居た事を私は記憶して居る。次に掲げるものは確にその大計畫の一部分としてのもされたものであつて、大島君のいつもの徹底したやり方をよく物語るものである。今年の大島君の命日までには同君の遺稿を集めたものが出版せらるゝ筈であると云ふ事である。紀行であるとか隨想であるとか、長い間我々の親しみ來り、多くの登山文獻の中でもとりわけ愛重し來つたそれ等のものが、一つにまとめられる事によつて再びありし日の大島君をしのび得ると云ふ事は非常に大きな喜びではある。併し乍ら何人もその列びなく優れた才能がかくも早く斷たれてしまつたと云ふ事に就いて——如何ともなし難き事ではあり乍ら——今更ら

の如く惜まずには居られないであらう。
次に掲げるものは其内容が専門的に過ぎると云ふ所よりして近く公刊せらるべき者から除かれたと云ふ事を聞き、「山岳」への掲載を乞ふたものである。一には其草稿を徒らに堆積の裡に蠹魚の食ふに委するを惜しみ、一には來る可き三日の三周忌に當り故人を偲ぶよすがにもと思つて。
因にコーカサスの高峰登攀の年譜としては次の二つのものが恐らく最も完全したものである。即ち、

List of Principal Peaks ascended in the Central
Caucasus Prior to 1912. Compiled by H. Woolsey

(The Alpine Journal, Vol. XXVI, p. 96.)

A Further List of Peaks ascended in the Central

Caucasus in 1912, 1913, 1914 and 1915. Compiled by

Harold Heburn.

(The Alpine Journal, Vol. XXX, p. 194.)

終りに此の稿登載を許諾せられたる遺稿整理委員の方々

に謝意を表す。松方]

◇高架索登山重要年譜

一八六八年 高架索の最高頂エルブルーズ東頂 (Eld-

ruz, E. peak, 18,347 ft.) を七月卅一日に、カスベツ

ク (Kasbek, 16,546ft.) を七月一日に英國登山者

Douglas W. Freshfield, A. W. Moore, C. Com-

yns Tucker 案内者シャモニイの François D'evou-

nassoud 及びエルブルーズに於ては加之 Urusbieh

の獵夫 Sotael Achyn, Japojef Jatchi を伴ひて初

登頂す。是れ高架索に於る純登山史の開幕なり。

一八七四年 英國登山者 F. Craufurd Grove, Ho-

race Walker, Frederick Gardiner ヌヘルプットの

案内者 Peter Knubel を伴ひて七月廿六日エルブル

ーズ西頂(一八四七〇呎)を初登頂す。グローヴは

翌一八七五年高架索に關する登山文獻中の古典たる
名著 'Frosty Caucasus' を上梓せり。

一八八四年 匈牙利の登山者 Maurice de D'ooly 瑞

西案内者 Alexander Burgener, P. J. Ruppen を

伴ひて高架索に赴き Marnison Kholkh (4048 m.)

に初登頂す。

一八八五年 ドウ・デシイ第二回の高架索登山を試む。

一八八六年 ドウ・デシイ第三回の高架索登山を試む。

(初登頂の記録無し)

同年 英國登山者 Clinton Thomas Dent 及び W.

F. Donkin 案内者 Alexander Burgener, Basil

Andennatten を伴ひて Gestola (一五、九三二呎)

に初登頂す。

一八八七年 ドウ・デシイ第四回高架索登山をフレツ

シュフィールドと共に試み、フレツシュフィールド

のみ案内者シャモニイの François D'evoussoud,

Michel D'evoussoud, J. D'esail'oud と共に Te-

tnuld (一五、九一八呎) Ukin (一四、二六六呎)

Shoda (一一、一八〇呎)に初登頂す。

同年 伊太利登山者 Zumstein 及び R. Lerco 等

ルブルーズとカスベックに登頂す。

一八八八年 是年高架索登山史上劃期的の登山行はる即ち英國登山者の三登山隊に依りて高架索の主たる巨峰總て登頂せられたり。

A. F. Munney 案内者マイリンゲンの Heinrich Zurfluh と共に高架索第二高峰 Dyeh-Tau (一七〇五二呎)を南面より別登頂す。

J. G. Coekin, H. W. Holder, Hermann Woolley 案内者グリーンデルワルトの Ulrich Almer, Cristian Roth と共に Dyeh-Tau 北稜よりの初登頂。ホルダー、ウーレイと案内者にて Katintau (一六、一九六呎)コッキン、ホルダーと案内者にて Salzman Bashi (一四、七〇〇呎)コッキンと案内者のみにて Shikara (一七、〇三八呎)Janga (一六、五二七呎)コッキンと案内者アルマーのみにて峻峰 Ustla 北頂(一五、四〇〇呎)を初登頂す。

William F. Donkin, Harry Fox 案内者マイリンゲン Kaspian Streich, Johann Fischer と共に Dongusorun 南東頂(一四、五四七呎)を初登頂し、Koshantau (一六、八八〇呎)の登山中全登山隊行

方不明となる。

一八八九年 フレッシュフェイールドとデント前年の悲劇の主人公ドンキン、フォックスの死因を尋ね可く搜索旅行を企てヘルマン・ウーレイ、C. H. Powell 案内者マイリンゲンの Kaspar Maurer, Andreas Fischer グリンデルワルトの Christian Jossi, Johann Kaufmann と共に赴く。Ullnauz pass 南側にドンキン等の最後の露營地を捜し出す。フレンツェフェイールドは其後 Tala 北頂(一三、〇四六呎)をホーエル、案内者カスバール・マウラーと共に初登頂し、秘谷 Khodor 谿谷を探る。

其間ウーレイ、案内者ヨッシイ及びカウフマンと共に Mishingitau 東頂(一六、三〇〇呎)Koshantau (一六、八八〇呎)Altana(一四、八五四呎)の初登頂を爲し、エルブルーズを北側より新登頂す。

同年 伊太利登山者 Vittorio Sella 案内者 G. Giraldi と共に彼れが第二回の高架索登山を企て Ullnauz-Bashi (一五、三五一呎) Gât-Bashi (一三、三七呎) Tala 最高頂(一三、一五七呎)に初登頂す。一八九〇年 ホルダー及びコッキン案内者ウルリッヒ

アルマーと共にアダイ・コーク山群の Ziehvarga (一三、三八〇呎) Burdjula (一四、二九四呎) Adai-Thokh (一五、二七四呎) に初登頂す。

同年 ウィットリオ・セルラ伊太利案内者と共に、Ziehvarga 東頂に初登頂し Burdjula, Shoda に登り、然る後 Svelgar Spur の Bangurvyan 及び Bogkhabashi 山塊の Dashi Khokh (一一、五〇〇呎) に初登頂す。

同年 英國登山者 Georges Yeld, G. P. Baker はカスピアン・シーに臨める Daghestan 山脈の最高頂 Basardisai (四四八〇米) に初登頂す。

一八九一年 獨逸登山者 Gottfried Mezbacher, Ludwig Purtscheller (ティエロール) は Kals の案内者 Hans Kehrer, Johann Unterwegger と共に Don-gusoran 北西頂 (一四、六〇三呎) Gimarai Khokh (一五、六七二呎) に初登頂す。

一八九二年 メルツバッツヒャー案内者 Johann Windisch, Heinrich Moser と共に東高架索に於て最高頂 Tebulos-mta (四、五〇四米) Kemito-tawi (四、二七二米) Donos-mta (四、一三五米) 等に初登頂す。

一八九三年 コツキン・ウーレイに Godfrey A. Solly, Newmarch を加へたるガイドレス・バアテイを以てウシユバ其他の登山を試みしも皆成功せざりき。

一八九四年 Joseph Collier, Solly, Newmarch のバアテイ、ウシユバ南頂、ライラ山塊に登頂せしも、初登頂の記録は得られざりき。

一八九五年 デント、ウーレイ瑞西案内者 Kaspar Maurer, Simon Moor を伴ひて Zitelii (一四、〇一八呎) に初登頂す。

同年 獨逸登山者 Willy Rickner-Rickners, Aemilius Hacker ウシユバ南頂に四回の登頂を試みしも遂に目的を達せざりき。

一八九六年 セルラ、Emilio Gallo と共に Topi 山群に赴き Skatikom-Kohokh (四、五一三米) を北 Digorischen Kette に於て其最高頂 Sugan-Tau (四、四九〇米) に初登頂す。

同年 コツキン、ホルダー、ウーレイ Adler-su-Basch (四、三七〇米) Gunttschi-Tau (三、八〇五米) に初登頂す。

同年 フレッシュフェイルド高架索登山文献中の大

著 The Exploration of Caucasus を上梓す。

一八九七年 デシイ案内者 Maierhofen の Heinrich Moser と共に東高架索の諸隘谷を訪ひ Komto-faw (一四、〇二〇呎)に登る。

一八九八年 デシイ第六回の高加索探險を西方高架索の山脈に試む。

一九〇一年 メルツバツヒャーの著 Aus den Hochregionen des Kaukasus 上梓せらる。

一九〇二年 デシイ東高架索に最後の探險旅行を試む

一九〇三年 英國登山者 Tom George Longstaff 及び Rollstone に依りてスワネチヤ地方の山脈に於ける guideless campaign 行はる。

同年 獨乙登山者 Willy Reikner-Rickmers に加へてシモンヘンの Adolf Schultze 峻峯ウシユバ南

頂の登頂に成功す。其數日後獨瑞の登山者を合せるガイドレス・ハ・アテイ Helbling, Reichert, Oskar

Schuster, Weber 同じくウシユバ南頂に登頂す。此等の登山前の探索中リックマース及び Conzi, von Ficker の三名はウシユバの最も困難なる點に於て

墜落せしも九死に一生を得ぬ。

同年 同じく同年に於る他の獨乙登山隊たる Hans

Plann, Fritz Plann 其後ウシユバ南頂に登頂す。而して同登山隊の Hans Plann, Georg Leuchs,

Ludwig Distel は再び四夜を山上に送りし後同ウシユバ南頂に到達し Bescheduch-Tau (約四三〇〇米)に初登頂す。

一九〇五年 ドウ・グシイの名著 'Kaukasus Reisen und Forschungen' 出づ。

一九〇一—一四年 オスカール・シユスター此の間に、Walter Fischer 其他の同行者と共に四回に亘る大

登山旅行を主として中央山脈に試み、顯著なる峯頂七座の初登頂を爲し "Tinerar der Kasbakgruppe

(1912)", "Reisewinke für Kaukasus-fahrer" の記文あり、尙彼れは高架索登山案内書の上梓に努め居り

しも歐洲大戰の爲め惜しくも戦没せり。

一九一三年 英國登山者 Harold Reeburn, W. N. Ling, Rambert Martinson 中央山塊に登山を試

み、七峯に登頂し、數多の峠を越えしが、就中 Tur choch, Ullar choch, Tschantschachi choch,

Naumkaun (13, 975 ft.), Mannison choch の

諸頂に初登頂し、エルブルーズに登り、ウシユバの登頂を五日間に亘りて試みしが終に登るを得ざりき。

一九一四年 瑞西登山者 Karl Egger, Guido Miescher 約十七日間にエルブルーズ他四千米突を越ゆる未踏の峯頂十座を登頂し、ヘッガー "Im Kaukasus" (1915) の著を上梓す。

同年 レンハンのバアティ再び高架索に赴き峠を越ゆるニ、初登頂四 (Babis choch, Karagom choch, Vologata choch, Loboda) を得たり。

◇高架索登山史参考文献

- (一) Freshfield, D. W.—Travels in Central Caucasus and Bashan; including Visits to Ararat and Tabreez, and Ascents of Kazbek, and Elbruz. Crown 8vo with Three Maps Two Panoramas of Summits, Four full-page Engravings on Wood, and Sixteen Woodcuts in the Text, 1869. Longmans, London, 18 s.

著者は洵に高架索登山開路の父と稱せらるゝ所の者

にして、本著は彼れが劍橋大學中共友 C. Conynns Tucker と共に一八六八年に於て試みたる約十個月に亘るシリア、アルメニア、高架索に跨る大旅行の結果たるものなり。よしや高架索の歴史及び人種學上に關する著數多有りとし雖も、其山岳地方の事情、登山に關しての著書は本著を以て其嚆矢とす。洵に一八六八年の夏に到る迄如何なる國人も嘗て此高架索大山脈に登山の目的を以て訪ふ事無く、該山脈最著名の二高頂エルブルーズ並にカツベックは共に未踏の儘に存せし也。本著に於て叙述せられたる旅行の主たる目的は同山脈内部の探查並に前記二頂の登山に存せしなりき。而して著者並に其友人等は同山脈の内奥に突入して親しく同山脈に於る峯岳の形狀、雪野並に氷河の状態、森林植物の特質等を探查してアルプスと高架索との一般的相異を知らんとせり。乍然著者の此目的を此地に求むるに先立ち、一行中ムーア氏を除ける旅行者等はシリアに旅行を試み其間 Hauran 及び Lejah 地方に於る古代都市の遺跡を訪ねたり。同遺跡は當時彼のイスラエル人に依りて荒廢に歸せしめられしと傳へらるゝ巨大なる Rephaim の古都なりと稱せられ居りしものな

りしが、乍併此著者の觀察は全般該遺跡を以て其れよりも年代新しきものと看做せしを以て専門家間に論争の種子を蒔く事とは爲りしなり。然して其後一行はコンスタンチンノーブルより露西亞の汽船に乗じてチフリスに到り、同地より彼斯街道に沿うて旅行を試み、其歸途アララットの登山を爲し *Eichmiadzin* に於るアルメニヤの族長を訪問し、デヨウジヤ並にアルメニア高原地の餘り知らるゝ事無き地方を横斷して再びチフリスに歸看せしなり。六月下旬チフリスを出發して一行は高架索山地の探險に約二ヶ月を費したり。此間カスベツク並にエルブルーズの初登頂を爲し、加之八千呎より一萬二千呎の間の高距を有する鞍部、峠を越ゆる十一、河川の源頭を究むる八、具さに此全長百二十哩に亘る距離を有する主山鎖の南北兩側の事情を調査せしなり。而して著中述ぶる所の大部分は此の山岳地探險中の冒險、山地の未開と住民の兇暴より因を發せる旅行の困難に對する記述に充てられたり。著者は特に高架索の各人種に就て述べる所有りて「高架索の紳士」と迄稱せらるゝ *Ossage* 人、或は大山鎖の南側に住むミングレリアン種族の懶惰にして兇暴なるに反

して其北側に住せる薩韃人の勤勉にして他國人に好意を有する事等に就き特別な經驗を述べたり。*Mamison Pass* に依りて *Rion* 河源流へと主山脈を越えし一行は *Uruch* 谿谷に探險を行ひ、中央山鎖の是迄人跡未到の雪野を横切りて歸りしが、其行路は洵に其住民の未開兇暴、其植物の豊富、圍繞する大岳峻峯の偉大を以て知られたるスワネチヤの廣大なる山間盆地へ達する迄 *Zanes-Squali* の人跡稀有なる沼澤地、大原生林を通過するものにして、スワネチヤに於ては掠奪の危機に遭遇せるも幸にして其を逃れて *Par* なる露西亞の驛宿に達し、同地より再び主山鎖を横斷してエルブルーズ山麓に到りて同山頂（一八三四七呎）を初登頂して *Ciscaucasig* に於る温泉地の中心たる *Pütigorsk* に達せしなり。而して一行がウラディカフカズ及びダリエル・パスに依りてチフリスに歸着するに先じて一行は最後に *Tcherek* 並に *Uruch* 兩谿谷の上流を探險して其の驚く可き大峽谷を見出し、其の水源の該時迄全く地圖上に表はれざりし同山脈の最も壯大なる二大峯 *コシュタ* 並に *ダイクタウ* の山側より流出する廣大なる氷河に發するを見究めしなり。以上の結末の

頁は著者のクリミア小旅行記並に歸路の露西亞旅行記に費されあり附するにチフリスなる露西亞測地部發行の五ヱルスト地形圖に據り作製し、著者の改訂を加えたる中央高架索地形圖並にハウラン、高架索一帯の著者の旅行程略圖を以てせり他尙又木版挿畫、展望圖も加えられあり、其著上梓の時に於ては高架索山岳に關する最良最新の著たりしと雖乍然現在に於て本著は著者が二十七年後に上梓せる集輯的大著『高架索探險誌』在る今日に於ては稍々歴史的價値を有するに過ぎざるに到りたり。

(1) Grove, F. C.—The Frosty Caucasus.

London, Longmans, 1875.

著者フロウレンス・クロウフアード・グロウは英國山岳會第十代の會頭たりし人にして六十年代並に七十年代に於る英國登山者中の大立物なり。本著は彼れが一八七四年彼の大登山者として當時活躍せるムーア、ホーレス・ウォーカー、フレデリック・ガーディナー等と共にツェルマットの名案内者ベーター・クヌウベルを伴ひて高架索にフレッシュフィールド等以後初めて登山探險の爲めに赴き、エルブルーズ西頂(一八、四七

〇呎)の初登頂他未知の谿谷鞍部を探險せし結果成りしものにして、稀有の天候不良と戦ひての一ヶ月間を通じて得たる其業績は洵に此等の不撓不屈なる登山者の努力にのみ依るものにして、其著の表題 'Frosty Caucasus' は其點に於て極めて意味深きものなるなり

(II) Mummery, A. F.—My Climbs in the Alps and Caucasus. Royal 8vo. London, Fisher and Swin, 1895.

著者は八十年代初頭より九十年代に於てアルプスに其名聲轟きし大登山者にして所謂 'stoical Mountaineers' と呼ばるゝ英國登山者の一群中にて最も卓越せし人物なり。アルプスに於ては幾多の先進登山者の試みて而も獲る能はざりし極めて困難なる新登頂の記録を相次いで作り、高架索に於て該大山脈第二の高峯にして又峻嶮名だたるデイク・タウの初登頂を爲し、其後ヒマラヤに赴きて巨峯ナンガ・パーバットの山影下なるディアマ氷河に其身を埋めしむる迄の赫奕たる登山者の闕歴は定に著者をして後世 'one of the finest mountaineers who ever lived' と讃稱せしむるに充分たるなり。本著は著者が一八七九年に於るマッター

ホルン・ツムット・リツヂの初登攀より初まりて一八九三年に於るシャモニー・エギーニュ中の一峻峯ダン・デュルクアンの初登頂を爲せる迄のアルプス、高架索に亘る著者の光輝ある登山の記録を包有するものにて、高架索に關するは這中僅に 'Dyeh Tau' 及び 'Some caucasian passes' の二章に過ぎやうしと雖、該ダイクタウの初登頂は彼のフレッシュフィールドをして 'one of the most brilliant rock-climbs ever effected' と言はしめしものにして、他の一章の合むる所は著者が一八八八年及び一八九〇年の二夏に亘りての高架索に於る登山旅行中ダイクタウ初登頂以外の紀行中主として鞍部の通過を録せるものにして極めて高架索の特異なる地方色を窺知せしむるものなるなり。著書體裁は麻布張ローヤル・オクタウソ版三百六十頁にて、自序二頁、内容十四章に頒たれ、其を飾るに Penell の挿畫 'Miss. Bristow, Miss. E. Peberick' のスケッチ、Mr. Woolley, Signor Sella, Mr. Holms 撮影の印畫を以てせり。初版並に第二版は共に一八九五年に上梓せられしが、同書第二版新版は一九〇八年に於て裝幀内容は全然初版と同一にて當共に加ふるに著者の肖像

並に彼れが學友なる經濟學者 A. J. Hudson 及び著者夫人の序文を以てせり。本著の價値は當に高架索に關する登山文献としてのみに留まるものに非ずして、其は寧ろアルプスに關してより、重大なる文獻的價値あるものみならず、凡そ登山文献の關する限りに於ての不朽の名著と稱せらるものなり。如何となれば本著は洵に著者が多年に亘る光輝燦然たる登山記録を録載する以外、尙彼れが抱懷せる其登山に對する獨自なる考想見解の悉皆の其著中に開陳包容せられ有ればなり而して本著に依りて披瀝せられたる著者の登山に關する徹底せる新解明と其登山形式轉向に關する新説は當時の登山界に對しては恰も平靜なる蒼穹に轟ける雷霆の如くに其を激動せしめしなり。而して著者に依りて苟くも一の曖昧を假借するの偷安を許さず只管純乎たる遊技的態度に於て成されたる登山の本義の徹底的究明は、以て又近代の所謂遊技的登山の熱烈なる高唱と成り、英本國は固より大陸諸邦の登山界をして一時に其視聽を該見解に向けて喚發せしむることは爲りしなり。而して著者のアルプス俗化の時潮を慨し、登山の遊技視に對して加へられし誹謗難詰を駁し、不徹

底なる正統派の登山見解を排撃して、其間高く己れの思想見解を述ぶる可く其の筆を行る、辛辣にして諷刺に充ち、熱氣横溢氣慨縱横、崢嶸として時流の外に卓絶したるところ、著者が炎々烈々たる氣魄の人たるを窺ふに十分なり。而して著者は此一著を英國登山界に投じ以て一蹶永年憧憬せる彼のヒマラーヤの大山嶽に向ひて年來の素志を遂ぐ可く一八九五年六月、相信する堅き長年の登山僚友たる Geoffrey Hastings, J. Norman Collie の二友と共に勇躍して赴き彼の大ナシガ・バーバットの一側より登頂を企つる二回、共に其目的を達せず、依りて次ぎに他の山側より同嶽登頂の目的を達す可く、同行の二友をして谿谷を迂回するの迂路を採らしめ、己れは二名のグルカを伴ひて未知の氷河を越えて同嶽を横断せんとして赴きし儘永久に其消息を吾人に絶ちしなり。聞説、此著の成りしは洵に著者が其英本土出帆前僅に一週間前のこと爲りしと。

(五) Freshfield, D. W. —The Exploration of the Caucasus. Two volumes in Imperial 8 vo. with the contributions by H. W. Holder, J. G. Cook, Hermann Woolley, Maurice de D'ochy and

Illustrations by Vittorio Sella. London, Edward Arnold 1896. Second Edition, 1902.

本著は著者フレッシュフィールドの數多き著作中最大の著作にして洵に彼れが生涯の巨著と稱す可きものなり。同著は彼れが一八六八年に上梓せる *Travels in the Central Caucasus and Bashan* 以後更に又一八八六年及び一八八九年に高加索を訪れし其前後三夏に亘る彼自身の同山脈に關しての開路的登山記録、著積せし知識經驗に加へて同じく高加索登山史上到底逸失し得ざる開路的登山者たる彼のコッキン、ホルダー、ヘルマン・ウーレイ、モリス・ドゥ・デシイの寄稿に關する登山記及びヴットリオ・セルラ、ウイリアム・エフ・ドシキン、ウーレイ、ホルダーの撮影せる寫眞とを以て補足せられて其量に於て其内容に於て共に一八九六年迄に於る高加索山脈に關しての、否其以後に於ても決してメルツバッヒャー、ドゥ・デシイの著書に對しても遜色無き貴重にして完璧なる劃期的文獻と成り居るなり而して其インピリアル・オクタヴオ版上下二卷通計五百七十三頁の大著の開卷初頭は彼の一八八八年に於る高加索登山史上最大の登山悲劇の主人公たる彼れが

友、時の英國山岳會名譽書記ウイリアム・フレデリック・ドンキンの故靈に公獻せられたる彼れが一篇の弔詩を以て始められ居るなり。而して其卷を閉づる最終の頁は彼のピュタゴラス學派の哲人アポロニウスに就ての寓意に言を藉りて彼れが登山に關して結束的見解を以て爲され在るなり。其内容裝訂挿畫の結構完美の點より觀て當に名著は高架索登山文献中の大著たるに止まらず汎く登山文献の關與する限りに於ての不朽の名著たる爲る可し。

(六) Merzbacher, Gottfried—Aus den Hochregionen des Kaukasus. Wanderungen, Erlebnisse, Beobachtungen. gr.8 vo. 2 Bände. mit 144 Abbildungen nach Photographien gezeichnet von E. F. Compton, Ernst platz und M. Z. Diemer, und zwei Karten. Leipzig, Duncker und Humblot. 1901.

著者 Prof. Dr. Gottfried Merzbacher (1849—1927) は七十年代に於てドロミーテン、ザルツブルゲル・カルクアルベン及びカイザーゲビルゲに幾多の初登頂新登頂の記録を残せる程活躍せる高名なる登山者の一人

たり。就中カイザーゲビルゲの名峯「Fotenhorn」の初

登頂最も有名なり。此著は著者が一八九一年彼の高名

たる大登山者ルドウィッヒ・ブルチェッラーと共にテ

イロールの案内者ハンス・ケーラー及びヨハン・ウンタ

ーウエーガーを伴ひて先づ高架索中央山脈に探險を試

みて、ドングズルン北西頂(一四、六〇三呎)及びギマラ

イ・コーク(一五、六七二呎)の初登頂を爲し、同年晩秋

に到りて、ブルチェッラーと別れて高架索より直ちに

中央亞細亞、天山(Tian-Schan)山脈に探險を試み、

翌年の一八九二年八月再び其歸途高架索探險を再び企

劃し、新たに案内者としてヨハン・ウインディッシュ及

びハインリッヒ・モーザーをチフリリスに呼び寄せ、東高

架索山脈に赴きて其最高頂 Tebulos-mta (4,504m.)、

Komito-tawi (4,272m.)、Donos-mta (4,135m.)に初

登頂し、其時迄登山者として何人も訪ふ事無かりし同

山脈の事情各種に關して探索せし全二ヶ年間に亘る大

探險旅行中高架索にのみ關する部分に就て其登山記他

諸般の研究を叙述せしものにして、其はメデイウム・オ

クタヴォ版上下二卷總頁一千九百廿頁に亘る大著に盛

られ、高架索登山文献中の三大著としてフレッシェムフ

イールンの The Exploration of the Caucasus (一八九六年)及びドウ・デシイの Caucasus Reisen und Forschungen (一九〇五—七年)と共に數へらるゝものなり。其内容は單なる登山記に非ずして高架索山脈に關しての文化開發史登山史、地質構造論、氷河學的觀察、人種學的研究に特に多大の頁を割き、其全般に亘りて叙事精細詳密引用豊富にして自己の記錄觀察以外凡そ高架索山岳に關しての總てを傳へて餘す所なしとの感あり。著者又本著の上梓迄に約九年の年月を費せりと、洵に稀有の力作として尊敬に値す可きものと云ふ可し。(植字の都合上外國語の綴りの猥りなる分割を諒恕ありたり。校正者識)

○池ノ谷の印象

中 野 正 英

劍岳西面を構成する早月尾根や池ノ谷に就ては冠、長谷川兩氏が詳細に書いて居られるので、今夏ほんの數日の生活に終つた池ノ谷行に就て、取り立てゝ書き並べる必要は無いけれども、今年度此の方面の報告と言ふような意味で、或通信と言ふ様な氣持で私の印象を述べて、簡單に記して見度い。

私の日程は七月二十四日から始まるが、第一日は金澤出發、劍行の隊を千垣迄送つて引き返し、上市下車伊折宿。第二日、伊折發、雨天の爲めバンバ島取入口宿。第三日、取入口より雷岩、小窓西尾根乗越、池ノ谷露營地。第四日、露營地より池ノ谷右股溯行、早月の肩に達し、頂上近くで夕立に會つて引き返す。第五日露營地より三ノ窓、二股。後數日は劍澤面に遊ぶ。

こんな風で私の旅は平凡に終止する。私が劍を知つてから一度は訪れて見たい希望を抱いて居たが、池ノ谷の印象は私に失望を與へなかつた。荒寥たる岩の世界や靜寂な氣分に浸り得たことは嬉しかつた。

午前中バンバ島に着いて、雷岩か池ノ谷の露營地迄歩を進め得たが、雨が降り出したので發電所取入口で一日を過す事にした。皆歸釣に出かけたが私は小屋番の伍島と爐を圍んで此の附近の山の話に耽つた。彼の話によると今年度は早月尾根や池ノ谷を志した隊が澤山あつて、此の方面の當り年であつた。「貴郎は五番目か六番目位です」と言ふ。五月高橋氏の早月尾根を一番乗りとして、相當賑つたらしく私等が今年度の殿軍であつたらうと思はれる。長谷川氏が連れられた丸田

池ノ谷本谷左岸岩壁の一部

中野正英



小笠原尾根乗越より池ノ谷本谷の雪渓

中野正英



が小窓尾根側から大瀑迄降つたと云ふやうな事も聞いた。スキーで一度来て見度いと言へば、此處へ来る人は誰でもそう言ひますねと言つて居た。

彼から聞かされた此の附近に就て二三記すと、發電所と取入口との中間、細藏山より直下するのが細藏谷^{ホツゾウ}と言つて、之に竝列する地圖上東芦見谷は單に芦見谷と呼んで居る。此の谷は奥迄炭焼が遣入つて居て、道もついでゐるが可成り悪い谷で雪積季には熊が多いと言ふことだ。ブナクラ谷と竝行して下流に落ち合ふ谷幅の廣い森林に埋められた谷はダシノ谷(出し?)と言ふさうで、此の附近からブナクラの落口に至る間から仰いだ劍の容姿は實に豪壯だ。ドロミテンの山々を想像させられる。さし當りモンテペルモかモンテクリスタルロとでも言ひ度い處だ。

ブナクラの出合やキワタワラの出合附近は炭燒道が立派で、架橋もして在つて、池ノ谷落口の下手で谷が曲折する附近で小さい徒渉を一二回やる位だ。徒渉地附近はタカノスワリの名稱を持つ處だが單にスワリで通つて居るらしい。

小窓西尾根乗越は雷岩の正對岸、山側の皷に等しい

涸澤から始まる。此の乗越で私等は夕立に見舞はれて、ドブに落ちた土龍宜しくの體だつた。

尾根の藪に山刀の跡が見えた。記憶す可きは三角點で地點は小窓西尾根が狭い尾根幅を増大する圖上一九四〇米附近だと思はれる。此の三角點に達すれば尾根傳ひは九分通り終つたので、山側を暫くへつると乗越の頂點に達する。此の頂點に立つた時一瞬間だつたが、雲霧を破つて西日に榮えた劍全山容の現出にはすつかり嬉しがつた。

池ノ谷の雪溪は一つは頂上附近より一つは三ノ窓より流下し、一本に合流して露營地前でもちよつと中斷し、再び川幅一杯になつて、三四丁下流の谷の曲折と共に姿を沒して居るが、雪溪の頭は二分し三分し、劍西面のワンドに喰ひ込んで居る様は劍澤面の雪溪では見られない。露營地から四十分で雪溪の分岐點に達する。此の邊が池ノ谷の最も好い處で、頂上の左肩より派出されて居る岩稜は兩側に膨大な雪溪を抱いて蟠居する様は此の谷の持つ壯大なものの一つだらう。以下此の岩稜を假りに池ノ谷尾根と呼び右の雪溪は頂上近くより流下するので本谷とする。

幅の廣い木谷を登つて行くに従つて、池ノ谷尾根は益々高まつて行くが、左岸の岩壁は多少低く雪溪が二分する頃左岸は岩の勢力を失つて、傾斜した草地が現れて来る。下の分岐點から此處迄約二時間半だ。左の

雪溪はワンドに喰ひ込み、シュバルテを持つて居るので右の細い雪溪を昇り詰めると尾根の上へ到達する。

霧の來襲が激しかつたため私は早月の上部だと誤解したが、早月の肩で池ノ谷側へ派出される北側尾根であつて、早月上旬の最大な支尾根と言つて好からう。此の兩尾根間に雪の多い可成り大きい谷が竝行してゐるが只私は池ノ谷との合致點を認識出来なかつたのを残念に思ふ。ハヒマツがしがみ着いて居る尾根上を傳つて行くと早月主派との合致點に出る、此處は急な山脊の一角であつて暫く登ると、兩尾根出合の最高點に出る。ハヒマツ圈は終つて岩稜となり劍特有の岩骨が立ち竝んで頂上に續いて居る。

私等は豪雨に會つてアグイレギヤの一枝を記念として、意氣地なく退去して了つた。

兩尾根出合の最高點を私は早月ノ肩と云ひ度い處だ此處に立つと尾根の兩側の特徴が目立つ。立山川側は

急峻で足場も脆く、池ノ谷側は傾斜した草地が多く、所々雪堤が出来て居て餘裕が在る。

池ノ谷の露營地を根據として頂上往復は愉快で樂な一日の仕事だらう。

池ノ谷の上部から眺めた劍西面は荒寥たるものだ、岩層の舞踏がある許りだし、長大な雪溪が有るとはいへ彼等は餘りに深く廊下の底に沈んで居る。池ノ谷の上半部を主宰する池ノ谷尾根も急峻に落下する一條の岩稜にしか過ぎぬ。只尾根らしいのは小窓西尾根位のものだ。

木谷にしろ三ノ窓に向ふ雪溪にしろ墜石が多くひどく汚れて居る、露營地附近は雪面一杯に千切れた白檜の葉端が敷き詰めて居る。雪積季の雪崩や崩壞が想像される。特に下の分岐點附近には氷河上に見る堆石モリスの様に岩片の條線が奇麗に描かれて居るのも面白い。木谷に比して三ノ窓の雪溪(左股)は廊下の雪溪そんな感じがして、劍澤面の四雪溪の純白な雪に比して薄暗く陰慘だ。

とにかく忘れられた谷、人一人に會はない寂寥の住む谷の感じが私には嬉しかつた。

細雨降る中を私等は降つて來た。びつしより濡れ乍ら。しょんぼり人待ち顔にテントがつつ立つて居る。ひどく垂るんだ布地の襜から銀色の雨滴が轉がり落ちる。

頬を赤くした人夫が火を起してゐる。やがて紺青を溶かした焚火の煙が低く流れ始める。

淋しい谷間の夕だつた。友は黙然として口から濃い煙を吐いて居る。テントの襜から藪蚊がぼつたり／＼落ちる。

灰色に暮れて行く西の空にアイベントロートが淡くにじみ出て居る。何かしら幽遠な世界に彷徨してゐる様な氣がする。

好晴の春の日、越中平野の上空に白馬山塊や僧ヶ岳から毛勝、猫又、立山山群、薬師、上ノ岳に至る大岳が全身を白衣に包んで下界の春を瞰下して居る頃、獨り山肌を殆んど露出して、飛瀑の様な大窓、池ノ谷の残雪を着けた劔岳西面こそ北國に住む人々や旅する人々に取つて麗しい魅惑だ。親しい姿だ。

「春は好いですよ、是非來て下さい」別れる時の伍島

君の言葉が耳の底に残つて居る。(昭和四年秋)

○實川と楡ヶ峯

佐山英駿

はしがき

昭和二年五月の終り、残雪を利用して新潟縣實川部落より實川前川に沿ひ、楡ヶ峯(牛首山)・大日岳・飯豊本山に出で、三國岳・地藏山を経て一の戸口を山都へ下つた旅の記事である。初めの計畫は實川前川を飽く迄溯り、大日岳か飯豊本山へとりつく積りであつたが、其土地へ行つてからの都合で湯ヶ島から大日岳圖幅(五萬分ノ一)鑛泉記號の北の七五九の數字の入つた尾根即ちオンベ松ノ尾根を登り、楡ヶ峯へと到らざるを得なかつた。

當時知り得た所の地名は別に之を發表することゝし、煩雜を避ける爲め記事に直接必要のない譯の名其の他の地名の記載を省いた。

同行 山本新吾、久野久、佐山英駿(二高生)
期日 昭和二年五月二十日―五月三十一日

一、實川村入り

昨年は北から入つた飯豊へ今年は南から入らうと云ふ計畫を仲間の間で相談し合つたのは、新學期が始まつてからの事であつた。準備には一ヶ月餘の時日しかない。前から行かうと約束してあつた仲間も何かと差支へが出来て、いざ行くとなつて本當の準備をした時には、山本君と久野君と私との三人になつて了つた。

五月二十六日午前二時、山への喜びに包まれて上りの列車に張り切つたルックサックを背にゆすり上げ乍ら三人は乗り込んだ。夜の短い此頃は郡山で乗換へる時には既に明るくなつてゐた。好天氣を喜びつゝも寝不足の目には輝く五月の陽光がたまらなくまぶしかつた。喜多方に着く頃には相當に眼が疲れてゐたが、やがて右手の窓から仰ぎ見る山なみが白く輝いて見え出したので忽ち疲れも忘れて了ふ。此のあたりの叙景は沼井先輩の「山岳」の記事に殆んど盡されてゐる。

午前十時三十分日出谷驛に着く。仕度をして十一時に出發する。木が割に多いことに氣のつく當麻の村を過ぎ、鐵道線路に沿うた道に戻ることに十分で、實川の鐵橋を渡る。こゝは阿賀野川と實川との合流點である。實川嶋の部落の入口で晝食をとつた。實川の河原

に下りたりなどして暫く肩の疲れを癒す。實川も此邊では河原がある程なだらかなつてゐる。川幅はさほど廣くもない。見た所二十間あるかなしであつた。

午後十二時二十分出發。小學校の側を通つて川沿ひの道を行く。もう此の邊では兩岸崖をなし、水は河一杯に流れてゐる。二十五分にして小荒橋のたもとに出る。此の橋の上を通るトロの線路は實川村まで敷かれてゐた。これは日出谷驛から實川村迄敷かれてあるものらしい。間もなく八つ目澤を過ぎる。此處には發電所があつた。この附近より殘雪の豊富な尾根が谷の奥に見えた。その方向(北二十度東)から考へると大日の尾根あたりであらう。始めて飯豊山を見てその雄大な山容に心を跳らしたと友の手記にはある。休み休みであつたが一時間半程で實川橋を渡つて實川の右岸に出る。橋は裏川との合流點よりほんの少し上に架つてゐる。此處から裏川の方に二ヶ所の土崩れの様なのが覚えてゐた。此の合流點に水電の取入口があつて瀧をなしてゐる。赤倉の發電所の傍を通るともう實川の部落は近かつた。今迄の川沿ひの道は上の平地へと川を離れて行く、桐の木や畑らしい所などがあつたりして、間

もなく村に入った。一先づ小學校に落ちつく。三時四十分である。先生が留守なので待つことにした。小學校と云つても教室一に先生一人の小さな分教場である。待つ間にさう廣くもない村の中を廻つて見る。數へるところが出来程の家が田圃を間にして寄り合つてゐる。いかにも靜かな最奥の村といふ感じがする。暫くして

先生が歸つて來られた。若い先生である。上つて荷物をかたづけしてから山の話などを聞いてゐる中に前に照會して置いた區長さん(猪俣忠太郎氏)の所から迎へが來て今晚は其處に泊ることにした。主人は今日津川の方へ出られたとかで留守だつた。でも出かける時にいひつけられたからといふので充分な御世話を受けた。晚飯後に土地の案内の人を呼んで貰ふ。猪俣留次郎さんと云ふ七十二になるお爺さんであつた。實川の様子を聴き、又人夫を雇つて貰ふやうに頼む。

湯ヶ島温泉迄は相當の道があつて、村の人は朝の四時頃に出て日歸りにする。これは單に湯ノ花を採りに行くに過ぎないので、實川村の人が飯豊山に登るには彌平四郎からの道を行く由である。湯ヶ島から上流は道がなく、又澤を溯ることは難しいが、尾根を行くな

ら歩けぬこともないとの事であつた。尾根は積雪期(冬の終り頃ならん)に熊取りに行くので其の跡を迎れば歩けぬこともない。澤は現在では水量が多い爲全然湖行は不能である。秋の彼岸頃ともなれば水量は減ずるので、どうにか澤を溯ることも出来やうが、どの程度迄それが可能であるかは知ることが出来なかつた。

裏川道は立派に烏帽子迄ついて居り、近頃村人がぜんまい採りに行くためにつけたとのことであつた。註一。私達が前川を溯つて大日岳にとりつかうといふ計畫に就て相談する。我々の荷を見て夫には重すぎると云ふ。これだけの荷を背負つて前川に行くことは難しいとのことであつた。註二。併し此處迄來たのであるから是非とも行きたいと頼む、それでお爺さんは荷をかつけぬから案内だけ務め、外に二人の人夫を連れて行くことに相談が決した。人夫賃は食糧先方持ちにて三圓五十錢。

註一 裏川道が立派についてゐるとのことは、其後七月に行つた人達からの話によるとハツキリした道はついてゐないとのことであつた。積雪期に於けるシ、取りの道のことかも知れない。

註二 この前川を行くと云ふことに就ても私達とお爺さんの考へとの間には相違があつたらしい。お爺さんが前川を行くと云ふのは、前川を見乍ら行く即ち澤の様子を見るのが目的であるが故に、成る可く岸沿ひに行き、時に澤に下りて其様子を見ればよいものと考へたらしい。私達は澤の中を出來るだけ流れから離れずに行くことを意味してゐた。此の點に於て岸の藪ぐぐりには荷の嵩張ることを恐れたのである。お爺さんには全然水の中を涉るなど、云ふことは考へ及ばぬことらしかつた。

二、村より湯ヶ島に至る

五月二十七日。今日から眞の山旅が始まる。この最後の部落を離れるともう暫くは人に遭ふこともあるまい。

朝早く立つ積りであつたが人夫が中々來ないので區長さんの家を出たのは午前八時二十分であつた。同行は昨日のお爺さんとその息子の四十位の猪俣運藏さん又同年位の鈴木政一さんと云ふ人。この二人が荷物を擔いでくれることになる。併しお爺さんだつて別に荷物が少ないわけでもなかつた。

天氣は少し曇り氣味だつたが歩いてゐる中に日が照

り出して來た。生垣の間の村道を通りぬけるとすぐ廣くもない實川の部落を出はづれて了ふ。澤に沿うた崖岸の上の道は水電事業の爲めに大變に歩き易い。地形圖の道は前川の左岸についてゐるが今では利用されてゐないらしい。現在の道は部落から右岸を行く様になつてゐる。全然今迄の道とは違つて新に崖の中腹を切り開いてつけたものである。澤からは二三十米以上も高い平らな道がさう廣くはない乍らも澤の曲折に沿うて續いてゐる。河の水量は多い。九時半材木置場に休む。下の澤には止場の瀧がある。これは上から流して來る材木を堰堤様のもので堰き止めて引揚げる所である。今はどの止メ場にも材木が懸つてゐないといふてよい。あたりの兩岸は高い崖をなし、狭い岩の間を水は奔放して流れてゐる。此處の右岸を大岩と云ふ。岩が大きく露出してゐるための名であらうと思ふ。道から下は丈の低い藪をなし、所々がれた跡などもある。そんな處からは下の川が覗きこめるが急傾斜をなして、せいか底の方に流れの一部を見得るに過ぎない。向岸も同様の急傾斜で可なり上迄岩の崖をなしてゐる。道から上は兩岸とも大抵喬木の林である。兩岸が迫つ

てゐるので空を見るには餘程の仰角を要した。止場の瀧では水電工事鮮人工夫がこの上から落ちて流されて了つた等の話を聞かされた。十時十分水電取入口に着く、一寸した家があり清水も引いてあつて、休むには恰好の所であつたが、未だ晝には間があるので少時立ち寄つただけであつた。取入口の小屋の位置は水晶峯より東南に落ちるアライタ澤が前川に合流する所の下手である。此處では道も低くなつて直ぐ澤の側についてゐる。澤は緩やかになり、大きな岩の露出も見えてゐる。花崗岩の白い河床を水が清く流れてゐるのは飲んでみたい程の清らかさだつた。川幅は十米程であるが、兩側の山が暫らく左右に退いてゐるので、何となくゆつくりとした感じを與へてゐる。

此處迄の道はトロの線路跡で、よく踏みつけられてゐたが、この小屋を過ぎるともう道は悪くなつて、前川から稍離れた切り開きの細い道になる。所々に兎のわな等が張つてあつた。水電小屋に来る人達の仕業かも知れぬ。二十分程して初手落シ瀧を過ぎる。但し瀧は見えない、此名はここから瀧が始まるとの意であつて、前川はこの瀧の下流で瀧の連続をなしてゐること

を表はしたものであるといふ。更に十五分でツボヤス

澤に出た。此の澤はいくらか水量が多い。ここで十一時も過ぎたので晝食をとることにした。人夫達の話によると此處を越えると休む場所がなくなるとの事なので、腰を落ち着けてゆつくりすることにした。十二時出發する。中ノ島上ノ島を過ぎ上ノ島澤を越えたと前川に架つてゐる橋がある。橋を渡る道は夏越平を通じて國境の尾根に登り鏡山の方へ行くのだといふ。二人の魚釣りが私達の姿に驚いて急いで姿をかくした。多分營林署のお役人と思つたのだらうと人夫達が笑ふ。此橋に出る迄の道は澤沿ひの崖の間について居て可なり荒れたものだつた。この橋で前川右岸の道らしい道は切れて了ふ。午後十二時半仕方なく上ノ島澤をやゝ溯る。澤の右手の藪をからむと幽に踏み跡がついてゐる。荷の重いせいか藪のある上りはつらい。それも僅かだ岩を傳つて一寸した尾根に出で、其の後は尾根筋を進む。それもしばしで尾根をそれて前川側の斜面を笹や枝につかまり乍ら横へつりをして行く。所々に笹が刈られたり木が切られたりして新しい切口を示してゐる。古かつたり新しかつたりする鈍目に沿うて傾斜

面を暫くは横すべりする歩みを續けた。この鈍目道は前川から百米程も上を平行に歩いて來てゐるものらしくかつた。一寸した小澤のくぼ地に焚火の新しい跡があつたりしたが、これはさつきの魚釣りのした事だらうと云つてゐた。魚釣りは彌平四郎の方から入つて來て一晩も二晩も山の中に泊つて釣りをして行く。實川の部落の方からは餘りこつちの方に來ないが彌平四郎の方からはよく入つて來る。所々にある泊り場の跡も皆彌平四郎の方の連中にして行つたものだとのことである。

暫くは闊葉樹林の中を密な笹藪を分けて行つたが、一時三十分一度前川の岸に下りる。ここは割合に川が開けてゐるが、直ぐ上流は狭まつて犬越戸イノコエと云ふ兩岸に岩が立つた廊下をなして居る。ここから再び右岸に登つて藪にもぐり込む。また前の様な藪の傾斜地を横に搦んで行く。二時ハコノ澤の上を通過する。そこから二十分ですつかりした踏み跡に合した。三時ワサビ澤(一〇〇米の記號の所から落ちる澤)を越える。ワサビ澤に出る前木の間がぐれに飯豊の連嶺が雪を戴いて、青い前山の屋根がせばまり形作る前川のうねりの

奥に崇高な姿を見せてくれた。これから平を行き、三時十二分トチ澤(笠掛山とある山の字の下から落ちる澤)を渡る。此の邊は前川から二十米ほどしか離れてゐないらしい。闊葉樹の喬木林の中に入つて了つてゐるので、周りの展望は可能でない。此處に出る前、傾斜地の高みから前川の左岸の澤ぎはにふきでふいた様な小屋が二つ程見えてゐた。どこから來たものであるかは分らぬが、矢張り魚釣の仕業であるとのことだつた。これで見ると先刻の道を通つて彌平四郎の方から入つて來たものであらうが、向側即ち左岸もどうにか歩けるものと思はれる。それがほんの一寸した鈍目を傳ふにしても。

トチ澤を越えてからは平ら續きで、林の樹も大きくなり、笹藪は次第に丈高い草に變つて來る。四時杉の小屋場へ着く。此處迄の平らをセンノウノナガシマと云ふ。

杉の小屋場は藪も殆んど無く、大きな闊葉樹の下が開けてゐる、側には小さな流れもあり、自然に泊り場の様に出來てる所であつた。今までの藪歩きに相當疲れてゐたし、豫定の湯ヶ島迄は未だかなりあるとのこ

とに此處を今日の泊り場とする。

天幕を張る。木を切る。火を焚く。人夫がよく働くので仕事ははかどり、日の暮れぬ中に夕飯を終へて了つた。人夫達は暖かいから天幕の中に寝ないと云ふので、私達三人がゆつくりした思ひで天幕の中で足を伸ばして休んだ。

五月二十八日。午前四時起床、汗の實は直ぐ傍で採つたわらびに似た草だ。昨日途中で獨活を採つて來なかつたことが悔まれる。八時十分に野營地を出で、十五分にしてオウデ澤を渡つてオウデの尾根に出る。古い鈍目を目あてに笹をかきわける。けれども藪こぎと云ふ程のこともなく、かすかなすき間を選んで行けば足纏にはならない。清水の出でゐる側の小屋跡を過ぎて九時十五分にヨシワラ澤を越えるともう湯ヶ島は近かつた。澤側の藪をよぢると間もなく平に出て、急に木もなくなり限界が開ける。足の下は谷地の様にじめじめしてゐる草がぼう／＼と生えてゐる原である。此處が湯ヶ島温泉(實は鑛泉)である。九時二十二分。

所要時間 二十七日午前八時二十分猪俣忠太郎氏宅發―村

木置場(九時二十八分)―水電取入口(一〇時八分―二十八分)

雜 錄 ○實川と櫛ヶ峯

―初手落瀧(五〇分)―ツボヤス澤(一二時五分―一二時)
 ―上ノ島澤を渡る(午後一二時三七分)―尾根に出る(四
 八分)―犬越戸(一時三五分)―ハコノ澤(二時)―ワサビ
 澤(三時)―トチ澤(三時一二分)―杉ノ小屋場(四時)。
 二十八日午前八時一〇分野營地發―オウデ澤(二十八分)―
 清水傍の小屋跡(四五分)―ヨシワラ澤(九時一五分)―湯
 ヶ島鑛泉(二二分)。

三、湯ヶ島より櫛ヶ峯へ

此處は平の中央に當つて、ごろ／＼の赤い色をした水たまりがあり、其處から前川への傾斜に向け、湯花であらう褐色の泥の様なもの地上に平たくかたまりついて岩の様になつてゐる。水だまりの直ぐ傍に小さな小屋がかけてあつた。掘立小屋式のもので夏場だけ用ひ得るものとしか見られなかつた。實川や彌平四郎から來る者は此處へ泊つて湯花を溜めて持つて歸るのださうである。此處は近くに水がないので泊り場としては餘りよくない。飲み水は前に通つたヨシワラ澤を利用するか又は下つて前川より汲むより仕方がないであらう。前川へ出るにはかなり下らなくてはならぬ。

草地の平が東につきた所を急に下る斜面に藪を縫つて道がつけられてある。此の平の端から澤はよく覗けない。餘程下を流れてゐるものらしく、木々の間から光る流れを見得たに過ぎなかつた。時間をとられさうなので澤迄は下りて見なかつた。この道を下りて直に左岸に渡り地圖上の道を彌平四郎に出られる。但し橋がないから徒渉せざるを得ない。今のやうに水量の多い時では徒渉は難しいと人夫達はいつた。此處から尙川沿ひに行かうとするならば、此の邊で左岸に渡らねばならぬ、右岸は崖續きで傾斜が急な爲め歩けないさうである。左岸には今迄通つて來た様な藪を切り開いた道がついてゐる。この道は上に行くゝ澤から離れて、林や藪の間を行くのであるから、たまに澤を覗きこむだけで、澤沿ひに行くとは云ふものゝ殆んど澤と關係のないものである。註一。左岸に渡るにはもう少し上に行つた所(アシ澤との合流點の手前ならんか)に架橋に都合の良い場所があるから其處で木を切り倒して渡るのだといふ。

以上の話を聞いて今後の行程に就て相談する。今迄の様な藪や深林の間を行くのでは私達の目的たる溯行

の本旨に副はない。水量の豊富な間は澤の溯行が不可能とすれば何らか他の方法をとらなければならぬ。よし又押し切つて川沿ひに藪を分け行くにしても、牛首にしろ飯豊本山にしろ十分に二日乃至三日を要する行程である。時間に餘裕のある身ではなし又天候の事も考へると一日も早く飯豊本山迄達したかつた。それに空は青く霽れて前山は新緑に包まれ、其の奥に屹然たる櫛ヶ峯が雪に輝く姿を表はしてゐたので、此姿が無意識に私達の心を其の方へ惹き寄せてゐたらしい。で一同相談が纏り、アシ澤の東側の尾根を登りつめて櫛ヶ峯に出で、峯傳ひに大日岳より飯豊本山へ達する行程をとることになつた。

一時間近くの休みの後、十時十五分出立する。小屋の平から少し鈍目について下つた。十分も歩くとアシ澤に出る。此の澤は今迄の枝澤の中で一番大きいものゝ様に思はれた。下流は急流をなして前川に流れ込み上流は直ぐ一寸した瀧をなしてゐた。瀧の上流へ偵察に行つた山本君の言によると、直ぐ上には雪のたまりがあつて樂に登れさうだと云ふ。併し人夫達は澤を行くのを好まず、ずん／＼急な藪を漕いでアシ澤北側の

尾根に登つて了つた。私達も不本意乍ら尾根を行くことにする。アシ澤が本流に落ち込むあたりは見ると限り皆崖続きであり、白い崖の間を流れて行く水の青色は其の深さを思はせるものがあつた。

此尾根はオンベ松ノ尾根と云ひ、尾根の上は熊取の道が可なりしつかりふめてゐた。註二。傾斜は急で尾根も幅狭く喘ぎ登つた。時々右手に前川の本流が見える。水量は非常に多いが、併しどちらか一方の岸には多少の岩床や小さい礫を露出して瞥見した所では溯行不可能とあきらめるには惜しい様である。だが流の上部の澤べりは相當に急で、若し澤沿ひをやめて藪をへつる時はつらいことが豫想される。瀧が見えて前川本流は木の蔭に隠れて了ふ。それから間もなく十一時十五分に少し平らな所に出て休む。こゝは八〇〇米位の高さの所らしく、此處に出る迄の所は尾根が急で狭かつた。そこから尙ほ尾根を歩き続ける。木が大きいせいとか藪がそれ程尾根沿ひには邪魔にならない。十一時五十分晝食をとる。左手に木の間から櫛ヶ峯の姿が目近く現はれる。水と遠く離れて了つたので喉が渴いて苦しい。尾根の兩側は急で且つ木も密生してゐて一寸でも下る

氣は起らない。ナデの音がアシ澤の上の方から聞えて来る。今迄歩いてゐて別にこの音を聞かなかつたのだから十二時を過ぎた頃から落ち始めるものらしい。この後斷續的ではあつたが常に聞えてゐた。四十分程休んで出發する。間もなく喬木帯を出はづれて灌木の藪になつた。これからそろ／＼道は悪くなりだした。鈍目だけは判るにしても狭い尾根に密生してゐる藪を押し開けながら行くのは苦しいものだ。午後一時五分尾根がやゝ廣くなつて來た所で休む、傾斜は相變らず急だ。今は全く藪の中に入りきつて周圍が見えない。間もなく初めて雪の塊があつたが私達の乾いた喉を露す事は出来なかつた。一時五十分にはデトトリノコツボヤス澤の源頭の近くに來た。この附近も廣い尾根に生え茂る灌莽の急斜面を眺望もなしにひたすら登つたのであつた。雪が消えた許りで漸く頭を擡げた灌木は葉も萌えてゐなかつた。尾根の日當りの所にはカタクリやイハカガミの群落が美しく花をつけてあたりの冬景色に春らしいやさしさを與へてゐた。二時八分ひよっこり尾根の一角に出た。こゝはデトトリノコツボヤス澤の源頭にあたり、且櫛ヶ峯方面はアシ澤を隔てゝ正

面に見えた。こゝでナデ跡を見た。漸く雪どけの水で喉をうるほす。これからは道は全くなく、極端に云へば齒の様な狭く急な尾根を、密生した灌木を力一杯左右に押し分けて通らねばならなかつた。三時藪の開け所に出た。尾根の端がアシ澤側に一寸出てゐる所で休む。この邊は尾根の幅が稍々廣い。アシ澤の斜面は急に低下し、斜面も亦澤も一面に雪に被はれてゐた。直ぐ目の前に現れてゐる櫛ヶ峯の峯續きは、雪を帯びた岩山の偉大さを以て壓する様に立ち並んでゐる。日はよく照り、大尾根の雪庇から盛にナデが落ちて、どうといふ音を響かせてゐた。初めアシ澤を溯らうとして果さなかつた残り惜しさもこれで十分あきらめることが出来た。ここから間もなく藪は切れて雪が豊富になつたので、三時二十分金カンジキを着けて登る。諸所藪があるにはあつたが、大部分は狭い雪の尾根で、今迄藪を掻き分けて苦んで來た者には一向カンジキのざく／＼云ふ音を耳にしながら進んで行くのが愉快であつた。四時過ぎ未だ尾根もさほど狭くならない頃、アシ澤側の雪庇をへつる際はす足を滑らして、次々に三人とも十米程落ちて、思はぬ所で綱を使はされて了つた。

尾根は次第に細く傾斜は急になる。日の陰が薄くなつてカンジキの齒ごたへが少くなる。櫛ヶ峯大尾根の手前半町位は幅一尺にも足りない雪稜で、兩側ははるか下迄雪の急斜面が続いてゐた。最後の櫛ヶ峯へのとりつきには、こちら側に大きな雪庇がかぶさり出てゐてそれを越すことが出来るかどうか非常に心配をした。若し雪庇を越すことが出来なければ、左手の急斜面(即ちアシ澤の源頭)の雪に登り、最後に岩を攀ぢて尾根上に出る外はない。併しこれはかなりの危険さを思はせた。が、いゝ按梅にこの雪庇には大きな割目が入つてゐて其の間を簡単に登ることが出来た。この場所は一八六六米の三角點と其北の突起との鞍部で註三。上は幅三間位の雪堤が續き、その西側(八澤側)は完全に偃松を露出し、東側は急な雪庇が傾斜の急な前川上流の數多の支流の雪溪に連つてゐる。南の方は廣い雪の尾根が続いてゐた。時は既に六時十五分で、あたりは日の光も餘程薄れてゐた。其夜は偃松を切り開いた狭い場所にて天幕も張らず焚き火の側でごろ寝をした。ともすれば横になつた體を下に持つて行かれさうな傾斜である。ぱつと燃えては又間もなく下火になつて行く偃

松の焚き火と山頂での喜びの昂奮に眠られぬ夜を過した。

註一 後に聞いた所によると、七五九米の數字の對岸の尾根を眞直に鏡山へ登る道以外には、いくら上方を行くにしても澤に沿うた道はないとのであるが、若し其道のことでないならばこれは魚釣りの歩く道程度のもので、切り開きと云ふのもほんの鈍目を傳ふ踏み跡に過ぎないものであるのかも知れない。

註二 この熊取道は彌平四郎の部落の方から来るもので、實川の部落からはこゝへ入らないさうだ。で冬期實川村方面から湯ヶ島へ来るのは足場が悪いため不可能（それ程でないとしても好ましくないもの）と考へられてゐるのではなからうか。

註三 地圖にはオンベ松ノ尾根の續きが直接一八六六米の三角點の北の突起に達してゐる様であるが、我々はこの尾根の雪稜を辿つた結果一八六六米の三角點と其の北の突起との鞍部に出て了つた。

所要時間 二十八日午前十時十五分湯ヶ島發—アシ澤（二分—三五分）オンベ松ノ尾根を登る—八〇〇米の等高線の邊にて休憩（十一時十五分）—糞食のため休憩（十一時五分—十二時三〇分）—トリノコツボヤス澤源頭（午後二

時八分—楠ヶ峯一八六六米北方の鞍部着（六時十五分）。

四、楠ヶ峯山稜を辿りて

五月二十九日。今日も晴天。朝霧の間から太陽が登つて来る、八澤は未だ眠つてゐるのに前川の各支流はもう明け切つて、其の雪の膚を日に輝かしてゐる。火の側を離れて雪庇の上に立つ時夜明けのきりつとした寒さが身を包む。朝になつてこの前川側の雪堤を見ると峯續きに沿うてさう深くはないが割れ目が入つてゐた。まだ雪はかちかちに硬い。飯はこの雪を溶して炊くのでよくたけない。朝の分だけを漸く炊いて午前七時二十分に出發する。

下の八澤の中の様子は見られないが正面の大日小日の南東斜面は實に急に切り立つてゐる。尾根には黒々と偃松らしいものが露出してゐるが、大部分は雪で一丈登れそうにも見えない。

氷の様にかたい雪を踏んで出かける。成る可く雪の上を而も割目の危険の少ない西によつた部分歩く。楠ヶ峯最高點に近づくに連れて尾根は狭くなり、所々に岩さへ出始めた。狭くなつたり藪が出てゐたりして

尾根の上を行かれなくなつた時は、主として前川側の雪をへつた。一八六六米の北の一八四〇米の頂は大して著しく突起してゐない。次にかなり急な隆起を東に擲んで越え、もう一つ岩の出た隆起の東をへつて越えたと直ぐ次が最高點だ。頂上は南北に延びた狭い

岩の隆起で、二三人が漸く腰を下ろし得る廣さしかない。フトこの狭い頂の苔のついた岩と岩との間にあき鑑を見出す。中の紙に昨年來た仲間のものよせ書きがしてあつた。私達は三人それを手に取り合つて懐しく思つた。人夫達は其邊の石の間に生えてゐる偃松の苗を取るのに夢中であつた。西側は青々した偃松が餘程下迄出てゐるが、東側は雪の斜面が急に落ちて前川の中を覗き込む事さへ出来ない。丁度出發してから一時間程でこの最高點に着いた。二十分程休んで狭い雪の尾根を北に下り、もう一の峯を越えて大日との最低鞍部に達した。こゝから大日に登る取り付きが急で尾根状をなさず、寧ろ圓みを帯びた素晴らしく大きな斜面を成してゐる、右側は雪で左側は岩と滑りそうな草つきとである。

前川の源頭は殆んど雪に被はれてゐた。御西や本山

への取付きは甚しく急で、其急斜面に所々に雪が剥けて岩を露出してゐる、岩は稍突出して掩ひかぶさるやうな様をしてゐる。取り付くの可なりの困難さを思はせられる。急斜面から上は次第に緩やかな廣い雪の斜面に續いてゐるのが見えてゐた。

人夫達は左の草つきを簡單に登つて了ふ。私達は右の雪の急斜面を登る。足の下は次第に急に前川の側に落ちてゐて氣味が悪い。之を登り切ると稍平らな廣い尾根に出て、待つてゐる人夫達と一緒になる。此處からは今迄に比べて緩やかな廣い尾根の雪と藪を交互に登つて大日の頂上に出た。十時五十分。

西には小大日の高みが緩かな鞍部を隔てて雪に被はれた廣い尾根を續けてゐる。尾根筋をせれると兩側は偃松の深さうなやぶである、加治川は餘り雪がつまつてゐない。澤の側迄殆ど藪があらはれてゐた。晝近いのでカタパンで腹を充たして一時間足らず頂上に過して出發する。低い藪の間に細く通つてゐる踏み跡を下ると暫くで急な雪の斜面に出る、軟い雪にうづまり乍ら滑べり下る。この急斜面を下りきるとなだらかな廣い尾根になる。雪の上を歩いたり笹や偃松の藪をこい

で皆勝手に歩いて行く。運藏さんと政一さんは平を駆けくらなどして元氣がいゝ。私達は晝食をとらないのでそれ所ではない。一寸した藪を漕ぐのが厄介な位だ。御西の三角點を過ぎたのが午後一時。なだらかな廣い尾根を道にこだらはらずに歩いて行く。草地の凹みには水が溜つてゐて乾き切つた喉をうるほしてくれる。大きな雪田を横切つて本山三角點の東の鞍部に出る。がらがら石の間の道を傳つて飯豊本山の頂上を踏む。時に二時四十四分。直ぐ下つて小屋へと急ぐ。飯豊山神社四ノ王子小屋に着いたのは三時五分であつた。櫛ヶ峰からの空腹をここで満して三日振りの肩の重荷をおろした。

五月三十日。午前六時半に人夫達は下山した。彌平四郎に下つて村に歸ると云ふ。愈々私達三人だけとなつた。暢氣に支度して七時四十分小屋を出て御西へ向ふ。今日は山形側の方を歩いて、梅花皮澤の様子を見て來る積りである。天氣は引續き好い。こんな日をぶらりと過して了ふのは惜しい位だ。御西の廣い雪田が強く日を照り返す。三角點北側の檜山澤源頭で雪縞の寫生をする。檜山澤は上から下迄一面に雪に埋れて

ゐる。國境の尾根を辿つて十一時五十分梅花皮澤ノ頭二〇一七米の高みより一つ手前の峰に着き、これから東に走る尾根に出て梅花皮澤を見下す。見渡す限り雪に被はれた急な斜面が扇狀に開いてゐる。急斜面も崖といふ程ではないので、前川の取り付きより幾分おだやかである様に思はれた。

高みの南側の草地で晝飯を済まして午後一時半引返す。四時半に小屋へ歸つた。

所要時間 二十九日午前七時二〇分露營地櫛ヶ峯鞍部發—櫛ヶ峯最高點(八時十五分—九時三五分)—大日岳との鞍部(十時二分)—大日岳頂上(十時五二分—十一時四五分)—西嶽三角點(午後一時)—飯豊本山東側鞍部(二時十四分)—本山頂上(四四分)—飯豊山神社着(三時五分)。

三十日午前七時四十分小屋發—西嶽三角點北側(九時二〇分)—二〇一七米三角點南方の隆起着(十一時五二分)—午後一時三〇分—西嶽北側の鞍部(三時)—小屋着(四時三〇分)。

五、山を下る

五月三十一日。朝起きて見ると天氣は悪い。曇つて

ゐる上に風が強い。小屋の屋根の上を高鳴りして風が吹き過ぎてゐる。外に出て見ると冷い風が深い霧を吹きまくつてゐた。此の様子ではと一時懸念したが、最早道について下りさへすればよいのだからと午前七時五十分出發する。小屋を離れると風は思つたより強い。荷を背負つてゐる體が吹き飛ばされさうだ。三人手をつないで顔を下に向けながら道跡らしい所を一步一步下る。小石が顔に吹きつけられて痛いので前を向いてゐられない。久野君が帽子を吹き飛ばされる。急いで追駈けた時は既に遅く、帽子は偃松の海の中遙に飛んで行つて了つた。草履塚を過ぎ種蒔山を越えるあたりは既に風の吹き募る圏内を離れてゐた。十時三國岳に着く。そこから下は霽れてゐるが上は未だ霧に包まれてゐた。彌平四郎道と分れて岩の上を鎖に縋つたり鐵梯子を攀ぢたりして下つて行く。それらに興味を唆られて意外に早く地藏岳に着くことを得た。此處で晝食をとる。地藏岳の上には小屋が掛けられてゼンマイを澤山に干してあつた。休んでゐる中に二三の人が歸つて来る。採つたゼンマイは此處で干してそれが溜ると里に下るのださうだ。十二時出發。これから長坂の下

りになる。ともすれば後にひかれ勝ちな荷に汗を流して見晴しのきかぬ單調な道を下つて行く。午後一時半漸く下りを終へた。大白布澤で汗を拭いてさつぱりした氣持になる。前途は平坦であるが長いのでさう緩りとして居られぬ。二十分程でここを立つ。大白布澤には橋がなかつたので止むなく徒渉した。二時半川入村に入る。一ノ戸村の飯豊山神社や小學校を通り過ぎたのは四時一寸前で、村の廣い道を勢をつけて通りぬけ廻戸の部落から少し行つた道の傍に腰を下して、カタパンと乾鱈で晩飯に代へた(五時二十分)。これで食糧も盡きたので今は一時も早く山都の驛に着くことのみを専念しつゝ、疲れた足が機械的に歩みを續ける。停車場に着いたのは八時二十五分であつた。

所要時間 三十一日午前七時五十分四ノ王子小屋發—草履

塚(八時三五分)—種蒔山(九時二分)—三國岳(十時三分)

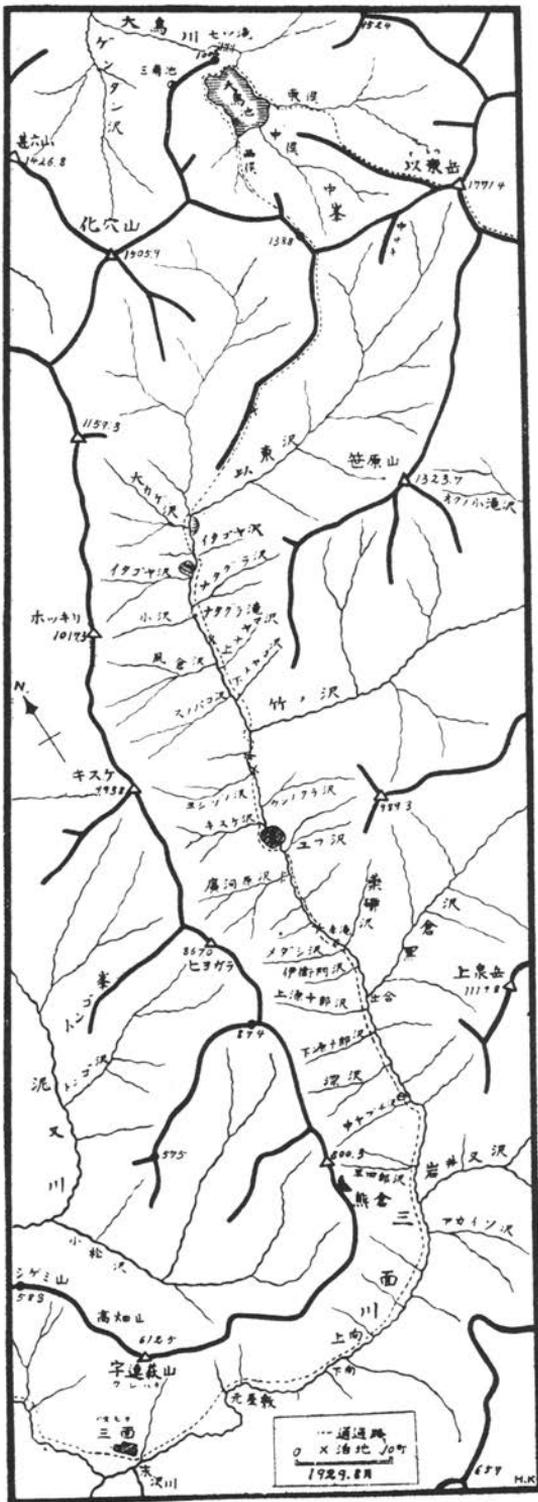
—十時三〇分)—地藏岳血ノ池(十一時十分—十二時)—

大白布澤(午後一時三〇分—五〇分)—川入村(二時三三

分)—飯豊山神社(三時四五分)—藤澤村(六時五〇分)—山

都驛着(八時二五分)。

三面川上流概念圖



○三面川遊行記

大 島 正 隆

昭和四年七月六日越後國村上驛下車、三面村に向ひ、同村より高橋源藏を伴ひて三面川を廻り、同月十三日大島池畔に達したる迄の小旅行記である。

一行は二高生松田敏夫、高橋啓一郎、大島正隆の三名。

参照地圖 陸地測量部發行五萬分一朝日岳、大島池。

同二十萬分一帝國圖 村上

小雨に煙る七月六日の正午少し過ぎた頃我々三名は長い汽車の旅から解放されて、村上の驛頭へ吐き出された。

その興味ある史實や桃源境を想はせるやうな傳説等を通じて、長い間幻想としてのみ私の心の中に生きて居た三面の部落へ現實に足を踏み入れることになつたのはそれから二日目の夜であつた。

闇の中に際立つて黒いそこゝの森かけから、一齊に起る犬の吠え聲、あゝもう部落は近い。長かつた今日の行程、不當に重かつた背の荷物、それらの苦しさ

ももう濟んだのだ。一日の豫定をなし終へた喜びはそれを消し去つて充分餘りある程大きい。高橋源藏氏方へ落着く。村上營林署から、三面一の案内として紹介された人だ。時計は十時を過ぎてもう十一時に近い。空には星一つない重苦しくたれこめた夜であつた。

○

地圖には三面川の右岸に沿ひ、遙か北の竹ノ澤近くまで點線路が記入してある。この徑は二十年來少しも手入されないで、岩井又澤以北では殆んど利用できない。年毎に破壊を繰り返す雪崩の威力、思ひのまゝに簇生する草木の盛な生活力の前に、小さな人間の營みは跡方もなく消へ失せて仕舞ふ。澤の中はといふと、水量は相當にあるし、兩岸はずつと低いながら岩壁續きで河原は殆んど數へる位數少い。そして所々に凄い箱や、釜が出てくるので、溯行といふことは仲々容易ではなかつた。然し支流の岩井又、竹ノ澤等は、地圖でも想像できる通り本流よりはなほ一層激しい澤であつて、三面の人達にも聞いて見たが、今まで入つた人は誰もなし、又誰にも入れないだらうと言つてゐた。しかしこれらの人を寄せつけぬ様な暗い峽谷も

忍耐強い山行の同志達の周到な計劃の手によつて、何時かは必ず光の中へと導き出されるであらう。實際これらの澤のどれかを辿つて朝日の尾根へ取りつくルートは、我々を誘ふ一種の魅力を持つ興味深いものである。

○
八日だ。準備の都合上今日は一日滞在と決つたのですつかり暢氣になつていつまでも寝袋に愛着を感じていゝ氣になつて寝そべる。晝食兼用の朝飯を済して後漸く準備に取り懸る。人夫の方は源藏さんが承知してくれましたので申し分ない。

午後は吊橋の上に立つて清流に浮ぶ鱒に眺め入りたり、裏のさゝやかな峠に登つたりして、この静かなものさびた山村のそこゝを心の向くまゝにさまざま歩いた。

○
九日。いよゝ山に入る日だ。空は輝かしく晴れ渡つて私達を祝福してくれる。

山のあなたの空遠く「幸」住むと人のいふ。……私達の前途への期待は、この「幸」を求むる心だ。それ

は私達の踏み出す一步々々に若々しい五月の風の様な軽やかさを與へてくれる。しかし現實に直面した三面川の險難と、それに關連した前途への不安は、同時に重苦しいまでに掩ひかぶさつて來て針の様に心を緊張させる。緊張と期待の交錯だ。この交錯の前に私は胸を躍らせながら立つ。私の若々しい血が全身をめぐりつゝ燃焼してゐるのを私は感じる。それは力であり元氣である。險難に打ち克たんとする力強い意志だ。

澤がS字形に彎曲する邊まで行くともう田畑はなくなつて、徑は心地よい蕨の原の中に没入する。胸あたりまである一面の蕨の中を押し分けながら氣持のよい歩みを續けてゆく。あちこちの山あひ谷あひからも出てくる山鳩や郭公の聲も、何となくなつかしさ呼び起すやうだ。初夏の陽光に汗ばんでほつた頬を風がスーツと撫で去つてゆく。その度にあたりの蕨は一樣にうなだれ又起き上つて美しいリズムを見せてくれるのだつた。やがてこの原も終りとなり岩井又澤へ下る踏み跡が岐れて行くあたりまで來ると、今までの様な平は全く影を消して、四邊の様子は俄然として變つてくる。兩岸は進むにつれてせまつて來る。谷のV字

形が段々鋭さを増す。脚下四十米ばかりの所を碧水が兩岸の岩を噛みながら渦巻いてゆく。すごい水流だ。

もう最初から澤づたひに行かうなどといふ大それた考へは奇麗に何處かへ飛び去つて一行は黙々として右岸の急斜面の横腹をへつってゆく。午前十一時四十分九一五米と七三四・九米との間から落ちる赤イソ澤の對岸へ來た。出發してから丁度三時間目である。踏み跡は次第にうすれ、まばらであつた雜木の藪が邪魔になり始める。岩井又澤落口附近では、藪は可成猛烈だ。足を滑らせた高橋君が危く雜木に捉つて下まで落ちるを免れたりして、へづりは相當緊張する。午後十二時五十五分小さな平に出で、その中の溝の様な小澤づたひに本流へ下りたつ。平四郎澤はこゝから廿間とはなれてはゐない。源藏さんの話によると、すぐさきに大きな箱があるんださうだ。高橋君と二人で一應偵察して見たが、まだ水量が多くて徒渉できない。澤は當分の間斷念せざるを得ない。平四郎の落口へ北から延びてきてゐる馬鹿に急な細い尾根を五十米程登る。私達はこゝで綱を使った。本當に刀の刃の様にせまい尾根すぢだ。一段登りきるとそこはやゝ廣い臺地で、それ

を傳つて大體等高線にそつて進む。再び道跡がわかる様になつたので足も自然に早くなる。三時廿分シシ取小屋へ着いた。こゝは三面の人達の冬の狩獵の足溜りださうな。積雪を踏んで遠く以東岳の方まで出ることもあるとか聞いた。小屋の少し手前で蝮を見つけたので早速ビツケルを揮つて引導を渡してやつた。皮をはいで見ると腹からまだ溶けきらぬ鼠の死骸が現れた。それにも拘はらずこの日の夕食前に三人の胃袋で完全に吸収されて仕舞つたのだから恐ろしい。

細長く續いてゐた河段丘がなくなり、傾斜は次第に急になる。路跡が加速度的にうすくなつて、そろそろへづりが苦しくなり出した頃深澤の上に出た。深澤は小澤ながら深く箱狀にえぐれてゐるので、これを横切るため此處でも綱を使つて上下した。深澤通過三時五十五分。

徑はますます荒れてきた。もう途切れ途切れに古ぼけたかすかなナタ目を見出せるだけだ。そのナタもやがて一層まばらになり、上源十郎澤を過ぎ黒倉澤を對岸に見る頃になるともう全く消え失せてしまつた。

やぶは細い柴に所々陣竹を混へたものだつた。滑落

を防ぐため一步々を枝にぶら下り乍ら進めてゆく。文字通り横行しながらの藪漕ぎの苦しさ！我々の武器は各人の體力と全員の精神的結合とそれのみだ。

藪との闘争！私は一時間の間完全に藪を押し分ける器械になりきつてゐた。苦しかつたといふことの外は何も想ひ出せない。「五時三十七分伊衛門澤」。ノートを見ても亂れた筆つきで書きつけられたこの短い文句があるだけだ。

六時十三分メダン澤を越えた。赤瀧の轟音は脚下から湧き起る。二十米程やぶを下り岩の上に出て瀧を眺める。小さい瀧ではあるが水量が多いので中々壯觀だ。上流は折れ曲つてゐるのではつきりわからない。瀧の下流は大小の淵續きになつてゐる。五つ六つの残雪の大きな塊が澤を埋めてゐる。綿の様に疲れきつた身を岩上に息めながら、しばしの間これ等の景觀に飽くことなく眺め入つた。

あれ程までに晴れ渡つた天候も何時しか變つて、今の谷底から仰ぐ細長い空は見渡すかぎり雲で掩はれてゐる。もうこの谷間にはたそがれの先觸れが訪れて來た。これで今日の行程は終りだ。促される様に私等

は立上り、泊場を探しつゝ又横がらみを續けた。七時まで歩いたが傾斜が急で適當な場所がない。七時廿二分小澤傳ひに本流の岸邊に降り、岸壁の間に小さいくぼみを見付け、天幕を被つて寝ることにする。

メダン澤から南約十分行程の處に猫の額程の段があつて、そこに木の皮で葺いた小さい獵師小屋がある。恐らくこの邊での唯一の泊場ではないかと思ふ。私等は行程を欲張つて、廣河原の磧を目指したのであつたが、疲労した身體は思ふに任せず、遂に前記の場所一夜を明すのやむなきに至つたのである。

○

十日。蕭々と落ちて來る雨が川面に無數の小さい波紋を投げかけてゐる。寢袋の濡り工合から考へると降り出してからまだ間もない雨なのだらう。しばらく晴れ間を待つて出發する。昨日の苦しさが身に沁みたと、澤の様子がやゝ穩かになつてきた様なので、今日はやぶを敬遠して右岸の岩場の水際を傳はる。澤は小規模の廊下狀をなして居り、水流は澗狀となつて、このさしせまつた兩岸の裾を洗つては居るが、こまかい凸凹の多いしつかりした岩質なので、割合樂に進むこ



(上) 三面川竹ノ澤の落口
(下) 長者ヶ原より地紙連峯を望む

松田正隆
武田豊太郎

とができる。但し深すぎるので徒渉は不可能だ。二箇所ばかり悪場があつて綱で確保し合つたが、そのほかは朝の元氣にまかせてすん／＼はかどつてゆく。出發後約一時間、瀧となつて落ちこんで来る廣河原澤を左手に見るあたりまでくると、本流は急に幅廣くなつて流れは浅くなり、小さな礫も見られるやうになる。ユウ澤の出會まで澤漕ぎをやつて上つた。岩魚を度々見受ける。源藏さんが目の下一尺餘もあるものを七本も釣上げてくれたので、三人共子供の様に喜ぶ。

右岸の水深が増し、壁がひどくなつたので、しばらく左岸を行つたが、オーバーハングにぶつかつたので再び右岸に渉る。淺瀬づたひに斜めに徒渉したが股までの深さだ。川幅は又五六間に狭まつて急湍や灘が交互に現はれて来る。明るかつた澤中に段々と暗い氣分が漂ひ出す。水際づたひももう難しい、と思ふ間もなぐうす暗い上流から大きな屹立した廊下の入口が現はれて来た。

右岸の約四十米の赤土の押し出しをから身で足場を切つて上り綱をおろしたの丁度午後三時四十七分であつた。急傾斜の崩土、くすれ易い足場に末梢神

經の一本々々が緊張する。再三再四冷汗を流した。こゝより外は全く手のつけられぬ壁ばかりでやむを得なかつたとはいへ、随分酷い登りだつた。上は相變らず藪である。私達は藪傳ひに箱の上方を横切つて行つた。藪は昨日と同じ種類のもので凄いとまではゆかないが相當猛威をふるつて私達を悩す。ことに藪漕きの中で最も悩まされるへづりときてゐるので疲れること夥しい。四時四十分キスケ澤を越えた。雪崩の押出した軟土の上を五六回渡る。藪の中だと枝にさへしつかりぶら下つてゐれば墜ちる心配はないのだが、手掛りになる草一本ない軟土ときては斷然始末の悪い代物だ。牛ノクラの對岸あたりの藪の中で蝮を一匹處分した。その蝮の腹中には子が二匹薄い半透明な膜に包まれて入つてゐた。此邊には澤山ゐるらしいといふので一同血眼で足許を睨んで歩く。六時三十五分ヨシズノ澤を下つて水際に出た。もう箱はなくなつてゐて左岸には細い礫さへできてゐる。左岸に涉り泊り場を物色する。雨氣味で増水の虞があるので礫を避け、同じ岸の小壁上の大きな丸岩の下の方うろへもぐり込む。泊り場は窮屈だが豪勢な焚火をめぐつて蝮の味噌焼岩魚料理の

數々と、榮養價たつぶりの猷立が展開されたので一同完全に満足する。

夜中に強い雨が来たので、外側に寝てゐた二人の受難者は、それこそ寢耳に水のたとへをそのまま深夜に時ならぬ活劇を演じた。

○

十一日。雨を避けて正午過ぎまで滞在して後出かける。斷然澤を漕ぎ通す決心なので、始めから勇敢にバシヤ〜やる。兩岸は相變らずだが幅が廣くなつたので、磧傳ひや膝までの徒渉が大部分だ。けれども雪が近くなつたので水は刺す様に冷い。竹ノ澤近くで右岸のちよつとした壁の上をまわる外は、ずっと澤通しで竹ノ澤まで行くことが出来た。竹ノ澤は藥研の様な壁の間から流れてくる本流に見紛ふ程水量の多い澤だ。

私達はこの俣の所で本流を左岸に涉り廿米程登つてまばらな灌木帯を持つた歩き易い段丘へ出た。源藏さん（註）に聞くと、この俣から上の本流は小瀧と釜の連続で、悪場だらけなのださうだ。歩きながら上から時々ぞいて見たが實際彼の言の通りだ。

下ナヤマ澤近くまで續いた段丘のおかげでへづりは

非常にはか取り、午後五時上ナヤマ澤を越えた。出會から正に一時間である。又斜面が急になつて來たので例の如く灌木に捉りながら歩く。私達は大體澤から十米平均の高さをへづりつゞけた。木の間から時々澤の様子が入る。雪橋のアーチの下を水の流れて行く様子なども見られる。六時五十分上ナヤマ澤から數へて最初の小澤を横切り、七時第二の小澤へ出るまで注意して歩いて見たが泊り場が見付からない。最初の小澤まで戻り、土や石を積み重ねてならした上へ天幕を張つた。露營地近くで見參した大蝮が今日も又焚火で焙られた。

終日空を掩つた雲がとぎれだしたのか時々星の瞬きがかすかに見えては又消へる。明日の天氣に淡い期待をかけて天幕にもぐり込んだ。

○

十二日。いよ〜今日は尾根すぢへ取りつくのだと思ふとちつとして居られない。平常にも似もやらす午（註）前四時半といふにもう天幕から這ひ出す。期待を裏切つて今日も同じ様な空模様で時々小雨が見舞つてくる。

左岸の灌木の中を澤を下に見乍ら漕ぎわけてゆく。午前八時雪に埋れたナタグラ澤口に立つた。こゝから眺めた下流は小さい淵々が階段状に連つて居て、せまく急に落こんだ兩岸の脚を鋭くえぐつて流れ下つてゐる。

板小屋澤近くで又もや蝮に引導を渡す。じつと身構へして待ちかまへてゐるのだからやりきれない。今日までは幸にして食ふ方の役にばかりまわつてゐたんだが、いつ食はれるめぐりあはせにならぬとも限らぬ。とにかく迂闊に足を踏み出せない。暫く藪を行く中に丁度先登をやつてゐた源藏さんが大聲をあげる。追付いて見るとあばれるやつを棒で押へながら危く踏みかけたと胸を撫でおろしてゐる。前のものがまだ乾かぬ中にピッケルの刃は又新しい蝮の血を吸ふ。極度にまで緊張して目が痛くなる程足許を見つめて歩く。長く深く切れこんだ大カゲ澤が右岸から奔り下つて来た。もう以東澤に近い。木流はずつと規模が小さくなつて岩床の上を二間位の幅で流れてゐる。谷幅一杯に詰つた残雪が途切れ／＼に続く。可憐に咲き亂れたショウウジョウバカマやカタクリが目に入つて来た。左岸は灌

木が全くなくなつて尾根から澤までの大きな逆層の岩壁となつたので、雪を渡つて右岸に行く。午後十二時三十五分、以東澤を眼前に見ながら食事を攝つた。二時まで休んで後私達は残雪を渡つて左岸に出で、以東からの尾根(中峯尾根)のはしへと取付いた。雜木を押しわけて登高の一步を踏み出す。来る日も来る日も壁と藪とで私達を苦しめた三面の峽谷も、いよ／＼はなれる日が来たのだと思ふとき惜別の情は湧然として湧き起る。私達は深い深い感慨を以つて遠ざかりゆく川面を幾度も幾度も藪尾根の上からふりかへるのだつた。

尾根はやせてゐるがうすい藪なのでどん／＼登つてゆく。雲は段々高くなつてきたが化穴山の頂はまだとちこめられてゐて見えぬ。化穴澤は落合まで全部雪に埋つて白く山肌に浮き出てゐる。尾根はひた登りに登る。午後五時半、尾根の左側に小窪を見つけルツクツクを下した。標高は九百米前後、あたりには針葉樹が多い。

豫想通り水なしの露營だ。夕食は堅パンで代用した。

○

十三日。一片の雲もない。朝日の連峯は朝焼けの紅に燃え、化穴山も今日はその全容を露してゐる。

午前六時出發。一〇六〇米、丁度尾根が眞東に折れ曲るあたりから偃松が出て來たので歩きにくいこと甚しい。のどが焼けつく様に渴ぐが水筒には一滴の水もない。八時三〇分一一〇〇米の小鞍部で残雪にありつくまで一同よにも悲壯な表情をして唾液をのみこんでゐた。偃松はなくなつたが根曲り竹と灌木のすき間もない密生で、これから先の尾根は猛烈に凄い。勇を揮つて飛びこんだが忽ち動けなくなつてしまふ。遮二無二突進しては一方の血路を開く。飛び石の様に間を置いて現はれてくる残雪の待ち遠しさ！ 幾つもある小隆起を頂上のつもりで登つてはがっかりする。午後三時十分とう／＼最後の登りに來た。廿分後連日の苦闘は遂に報ひられて私達は一三三八米の中峯頂上を踏むことを得た。私達ははち切れさうな大満悦を感じ乍ら黙つて四邊の山々に對して居た。五時西俣の雪溪を綱で互ひに身を結び合つて下り出す。下り口は急だが下るに従つて樂になる。静寂そのものゝ様な大鳥池は一步近づいてくる。雪は池畔まで續いてゐた。六時水

際に出で標を脱ぎ綱をほどく。北岸の小屋まで行つて見たが大鳥部落の岩魚釣りの人達で一杯だ。七時五十分眞闇な中で東俣の磧へ天幕を張つた。明日は源藏さんとも別れねばならぬ。彼の釣つてくれた岩魚と高橋君が苦心して集めた筍とで心ばかりの惜別の宴を張つた。「三面川を登つたのは私達が始めてです」と言つて嬉しさうに笑つたあの童顔を私達は忘れることができない。

○

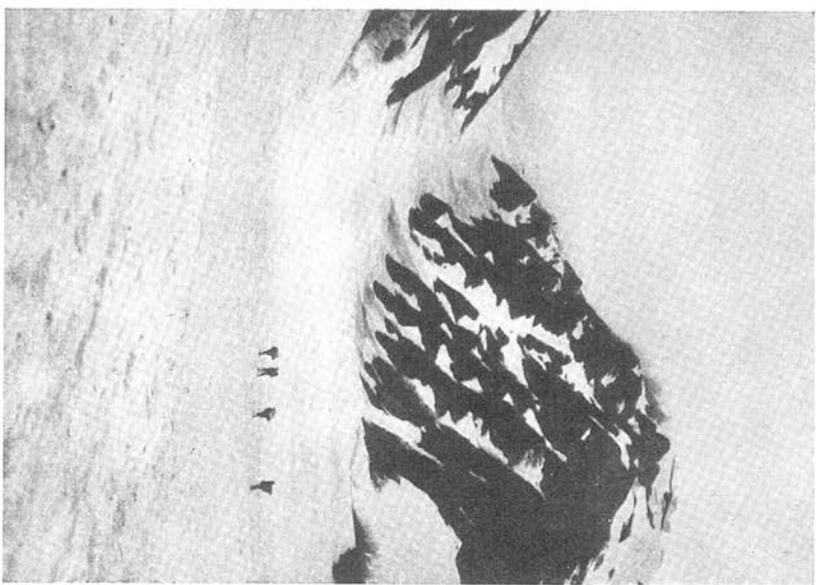
翌日私達は以東岳から縦走路を辿り龍門山の下で野營した。次の日、出發してから丁度十一日目の午後、汗と垢で眞黒になつたからだを朝日鑛泉の湯槽に横たへた。

朝日の縦走路については、既に數多くの記録が發表されてゐる今日、改めて記述の必要はない。豊富な高山植物の美しさ、萬里の長城の様に蜿々として續く一間幅のすさまじい縦走路に膽をつぶしたことが、これが朝日から受け取つた二つの大きな印象だ。



三面川大カゲ澤落口

松田正隆



石コロミ澤の雪溪

佐々保雄

○藤七温泉と八幡平

佐々保雄

昭和二年七月中旬、岩手縣大更村より、松尾鑛山を經、北ノ股澤を溯りて舂岳ヒメツコに登り藤七温泉跡に下り、八幡平に出でたる小旅行記

一行 大童信二、阿部眞琴、佐山英駿、佐藤捨三

佐々保雄

参照 地形圖（陸測五萬分の一八幡平、同二十萬分の一盛岡、秋田）

一

八幡平ヤマトと其名を平と云ふも實にこれ一六一三・六米の高度を有しかの岩手山西北に坐す一山岳の謂なり。

而してその山頂部の廣闊なる日本山岳志に「頂上方六里」とあるは多少支那式誇張を免れずとするも確に平の名にふさはしく、展開せる一大高原、身一度その上にあれば茫漠たる林叢の野に放置されたるに非ざるかを疑ふことなしとせず。又山麓の里人「天然の公園」と稱するも當今流行の宣傳と言はんよりは、むしろ當

を得たるの形容たるべきは一度訪れたるものの否まざる所なるべし。池沼の巧妙なる配置、風雪にその姿態を得たる老矮松樹の雅致、柔き雜草の褥席マ、その間に彩る寒地植物の麗色、皆之、この平闊なる山頂を飾りて樂園となすものにして、訪る者の感得すべき和と安の源泉たり。

近來山岳旅行の隆盛と共に、この奥深く知られざりし高原も漸く訪ぬる者多く、里人又宣傳を廣うしてその遊を誘ふに至りぬ。この山通常登路二あり、何れも秋田側をその發足點となす。則ち熊澤の蒸湯より略羽後陸中の國境にそひて至るものの一、他は熊之湯より北方長沼を經て東に三段の臺地を登り圖上の八幡平の八の字の北にて襲部カを起點として折ヶ島澤を登り來る林道と合し秋田岩手縣界の切開によりて至るもの二。この兩者は共に最も容易安樂に頂上に達し得るものにて只その發足點に至るに不便の憾みあるのみ。殊に東部岩手縣側より之を訪ねんには迂回の感深し。筆者等、昭和二年夏幸ひに岩手縣側より北ノ股を溯りて、比較的安易に且他道よりも興多く八幡平に達するの機會を得たれば、左記にその簡單なる旅日記を記し

て大方の参考に供せんとす。

二

七月十一日 終日快晴—松尾鑛山まで

盛岡の先、好麻驛にて花輪線に移る。下車せる大更よりは馬車軌道に便乗を許されしかば、車上身を横たへて岩手山の姿を飽す眺むるうち屋敷臺に着。晝食を鑛山事務所にて済ましたる後、重き一週間の荷物をケーブルに托し身は軽く徒歩にて松尾鑛山に向ふ。鑛山は硫黄を採掘し、産額本邦第二、鑛床は硫黄鑛層にして容量無盡と言はる。煤煙天をこがせるはその隆盛を物語りて威勢よしと雖も、附近の荒廢うたゝ胸をうつものあり。途中大沼の勝を訪ね水鳥多きに興ず。夜は鑛山合宿所に宿泊を許され所長の款待を受く。好意感謝に堪えず。

三

七月十二日(晴・後曇) 二岐まで

九時、所員に見送られ事務所發。大長根を越えてその西縁直下の黒水川畔に下り圖上の小徑に合す。途中

徑路輻輳し居ればとて事務所より付せられたる案内とこゝにて別る。大長根上は風爽やかなる草原、鈴蘭の葉一面に繁り居れり。開花の美思ふべし。草をはむ放馬三々五々。茶白山、大黒森の黒き緩やかなる冬のスキー行樂を想はしむ。因に毎冬十二月より四月までこの附近の積雪おほよそ一丈に及ぶといふ。粉雪の日多しと聞けり。この草原にてしばし遊びたるため道に合したるまで一時間半を要したり。西に歩道を歩むこと三十分にして白澤をわたる。このあたり喬木林の中を歩む。積年の落葉下にしきつもれど道明かなり。間もなく營林署員の測量中なるに會ふ。附近の樹種調査中なりと。夜沼川に至りたるは十二時近くになりしより晝食を認む。この川は夜沼より下れるものにして附近にて魚類の棲めるはこの水系のみなりとは昨夜聞きし所。沼に至らんに鑛山裏より山道あり。鑛山の人釣を樂むべく唯一の行樂地。この川沿ひも道なけれど通過容易なるらし。川こゝにては幅三間、水量豊富なれども石を跳びて渉るを得たり。道之を越えれば俄かに叢かぶりて一時絶えたるかの如く見えたるれど直ちに捜し出すを得たり。これよりは小徑やうやくかすかなり。

二十年前に一度切り開きたるのみと云へば無理もなかるべし。須臾にして右側に無名の小沼地を見る。葦しげり赤水溜りて氣味悪し。落峯は左手に林の間より黒く見ゆ。これより丈高き竹やぶ兩側に深し。展望なく草いきれはげしき叢中を行くこと一時間にして大揚沼附近に至る。北の方山退き谷ひらけて、はるかに始めて八幡平を望む。青くへりをとれるは葉しげき五葉松か。緑に草原の如きはふかき笹やぶなるか。その間に残雪二三點。大揚沼附近は一帶の谷地にして一面に葦しげり沼地特有の臭ひ甚し。沼は今既に水草に埋づもれたるに非ざるか。谷地の間に所々柴をしけるをわたりて北に廻る。このあたり水澤多くして一の澤は知らざるに通り居れり。踏あとを便りて鑛山跡着は一時半。こゝはこの奥の温泉附近にて露天掘鑛したるを製鍊せし所なり。休山より既に三十年に近ければもとより既に何の設備もなし、古き家屋の残片よせあつめてつくりたるらしき二坪半程の小屋わづかに宿泊するに便なり。清水はすぐ傍にわけり。附近は雜草生ひしげれる五、六百坪の平。腰を降して休める間に兎の躍り出でしも時の一興なりき。若し遅くも晝に屋敷臺を發足せ

ばこゝに日没前に到着するは容易なるべし。側に獨立せる喬木あり。目標とするに足るか。その先、黒澤をわたりてよりは路いよ／＼草しげりて明かならず。又河岸をからみゆくため所々土崩ありて道を不明ならしむ。河水ははるか下なればすべりても危険なけれど雨の日など通過苦しからん。一、二ヶ所草つき、多くは淺き藪をかきわけてゆく。この不快は澤奥に諸檜山（トウヒ）の大きくかまへたるに慰めらる。その山腹より東北へ流れる澤爽快なり。二條合流し右なるは瀧早瀬をなせり。途中道を失ふも搜すに困難ならず。屈曲少く當然つながらるべき延長點に續けるが故なり。正南に一尾根下り來り河岐るゝかと見るまに道は右にまがりてダラ／＼と下り右岐の河原に立つ。合流點より二丁程上なり。今まではとにかく踏みあとらしきものあれどこゝよりは愈々不鮮明になる。處々左岸にそれらしきもの斷續せるも、こゝより澤はせまりたれば適當なる野營地なくばと思ひはかりてこゝにて宿らんことに決す。時に三時なり。左岸水際より十間餘の上に草短き小段丘をトして天幕を張る。たき木は豊富と言ふべし。水は本流のもの用ふる能はず。強き滋味ありて生ぬるければ

なり。この臺地の端に落つる小澤の水少し澁けれど詮方なしと用ふ。河岸は岩磐露出し崩石又多し。段丘直下には河水の左右に二群の湧湯あり。水中より、又岩間よりふき出でて熱し。附近はねら／＼せる苔しげりわき上る湯氣何とはなしに不氣味なり。この日天候半晴半曇、夜半に至りて月の輪かゝれり。

四

七月十三日（曇後雨） 杵岳と藤七温泉

朝より何となく水氣多き模様なり。來れるついでなれば杵岳に登り國境をつたひて八幡平に至らんと目論みて八時半テントをたゝむ。下の合流點まで右岸の藪をつたひて左岐に入る。崩石の大塊累々とせる間を傳ひてよづること暫し。澤急なり。水冷く酸味もなし。

三十分程にして簾を懸けたる如き美しき小瀧あり。幅一丈餘高二丈餘、右をたやすく絡らむを得たり。二岐に達したれば（二十分後）右の尾根に上りて見通しをついたり。樹々の間より釜を伏せたるが如き杵岳を望む。この尾根はわづかゆけば藪絶ゆべしと推測されたるを以てそのまゝ澤へは下らずに眞西に尾根を辿る。藪は

果してわづかにして、間もなく濕原に出づるを得たり。やゝぬかりて足をうるほす。先刻の澤頭はこゝにて雪溪となれるより之をたよりて登りゆけば、澤つきてまろき窪みは廣き谷地を開き所々所謂御田の狀を呈す。（十時）水苔など多し。モロピの配置又妙を極めたり。はての木梢は折からの霧にさだかならず。この上手のしめれる草つきをのぼりて間もなく幅廣き残雪にうつる。斜面急なれば一步一步雪面のくぼみに足をかけふみしめてゆく。之は西風にて山背にたまれる雪堤の残りなるべし。上下二丁もあらんか、山稜にそひて南北に長し。上りゆるくなれば雪田つきて國境尾根にふみ入る。時に十一時。そこは小枝錯綜せる灌木と五葉松の領域なり。笹藪は所々にあり。さして深からず。胸まで達するは稀なり。西より吹きつくる霧にて方向定かならず。やゝ寒さを感じず。瞬間の晴間に杵のドームの方向を知る。北西の二丁のあなたにあり。十分間ほど藪をこぎて塔下に達す。荷をおきて五葉松をよづれば須臾にして山頂に達す。時に十一時十分。五六坪の平にして三等三角點標石は匍伏したる石南花にかこまれたり。西方湯田又より吹き上ぐる霧つめたく雲のゆ

きかひ愈々しげし。時折の晴間に辛うじて眺望を許さる。西下深く切りこめる大深ノ澤、且つはるか南に丸く黒き大深岳を望み得たる時、昨年に加藤、小山氏等の行を偲び健闘を歎じたり。西のかなたに廣き濕原見えたるは何れに當れるか？ 後生掛らしき噴煙もほのかに見ゆ。

八幡平は姿を見せず。それに連なる山背は幅廣く深々とやぶに包まれたり。はひ松、石南花に足を疲らすを恐れ、所々に擴がれる帯狀の野地とあをき笹やぶを見通し目標をえらべり。寒さに堪えられず二十分にして頂を辭し、荷をおきたる所にて晝食。それよりは略國境にそひ北下す。尾根廣ければ多少の見通しきかざるときは迷ふ恐れあり。國境切開は所々點在せる五葉松のなた目に名残を止めたり。笹やぶは深く時に肩まで達す。霧にて身體濡れたり。谷地、笹やぶ、谷地上よりの目標通り辿りて、比較的容易に藤七温泉の凹地を覗きこむ鞍部につく。時に十二時半なり。このあたり一面の濕地にて草つきはずる事甚し。荷をおきて温泉跡附近に下り一わたり見て引き返せば豪雨俄かに至りて全身またゞく間に濡れそぼち甚しく寒氣を感

ず。この身にて深きやぶをこぎ八幡平への路をとらんは危険なれば澤に下りて温泉附近に宿ることに決す。霧の間よりすべり／＼一面黃褐色にたゞれたる土崩、荒涼たる澤頭を下り行く。雨のため粘りてぬかること甚し。これを終りて澤ゆるやかになれば、左岸に一ヶ所、右岸に三ヶ所噴湯せる所ありて、雨にけぶる湯氣物凄く身は泥地獄に陥ちゆくが如し。澤水雨に忽ち濁り水なまぬるく、河底又ぬら／＼なれば徒渉に不安なれどもさして危険もなし。やがて下るに踏あとも比較的残り途中より右岸に木のレールの破片あり、鑛山時代の遺物なるべし。左手より小澤入り來り合ふ地點はやゞ廣き平にて一帯の上をおほへる苔は毛氈の上を歩むの感を起さしむ。一ヶ所石塊をかこみて湯槽の如く組みたるは、そこへ湯を引きて浴せるものか。藤七なるものゝ發見に係り人々湯治に來れると云ふはこれなるべし。その最盛期はこゝに硫黄を採取せる頃と聞けり。前述左手よりの小澤を渡りたる丘の上に僅かの草地を見出し、雨と争ひて幕營の用意を爲す。天幕に入りて濡れたる衣類を着かへ漸く落付きて互に顔見合せたるは何時なりしか知らず。夜は風を増し暴風雨とな

りぬ。

五

七月十四日(暴風雨) 滞在

終日、天地のファンファーレンを聞く。昨夕以來炊事を爲すこと能はざるより用意のカタバシ、麥焦粉、片栗などをコッヘルを利用して食す。飲水は丘を越えて東の小澤にとりに行く。遂に二十四時間の豪雨つき、天幕もり、床下また浸水。惨めなり。

七月十五日(雨後晴) 滞在

午前、雨足は細まりたれど風變らず。晝より風北にまはり雨小降りになる。三時遂にやみぬ。夕方までにれ物をほし終り、久し振りの心持して暖き夕飯をとりぬ。夜、東の尾根かけより出でたる満月！ 幕營のどかさひたりぬ。

六

七月十六日(曇) 八幡平を越ゆ

余等の泊りたる地點は地圖上、崖記號の最東端附近にあたる。これより河を下れば左岸土崩れの間に踏跡

斷續せり。之は先夜泊れる地點までこの状態ならん。

その様子は經驗なければ記すを得ずと云へども、澤の兩岸逼り急峻なるより土崩れは多かるべし。只距離短

きを以て水量又さして多からざれば溯行困難には非ず

と信ず。天幕衣類の乾燥、其他後仕末にて手間どり出

發は十時過ぎとなれり。この日も雲のゆきかひしげ

れど「これ以上止まるは」と敢へて出發したるなり、

野營地より直ちに東に丘を越え、澤に下る。圖上北ノ

股最上の二岐より北に入れる水線の入りたる澤なり。

澤はゆるく藪地を蛇行し、枝葉蔽ひかぶさりて行を拒

む、一時間餘溯れば小澤二分し余等は左をとる。澤や

うやく急にして苔むせる岩の重疊せる間をゆく。顧み

れば茶低きかなたに茶臼と覺しきもの見ゆ。澤はいつ

しか水減じやがて闊葉樹生ふる谷地にうつり谷頭の凹

地に入りぬ。正面には残雪あかきまでに汚れたるがか

ゝれり。之を登れば直ちに澤頭に出づるを得たり。出

發してより二時間。余等は之をその登行の時間よりし

て既に八幡平の一端に達したりと誤認し既に一時を過

ぎたりと急ぎ北に下りぬ。あたりは濃霧はなはだしく

見通し全くきかさりしなり。三十分餘藪を分けたれど

聞き及びし廣闊なる草原は見えず、且その斜面急にして針閣混淆の密林なり。又先刻登り得たる所は八幡平の一端にしては餘りにせまし。降路あやまれりと直ちに引かへす。一時間を要して元に戻る。時に霧やうすらぎたる間に、東方にあたりて一旦この尾根低下せるかなたに一段高き藪尾根あるを認め、漸く現在の位置を知る。之を後顧すれば余等の達したるは國境山稜千五百米の附近にして北下せしは實に湯田又の水源に降りつゝありしなり。笹やぶにうづくまりて「先づ腹を」と食事をとる。身體あたゝまりて荷をかつぎしは二時半なり。これより一旦下りそれよりひた登りに高きを求めて北上す。尾根せまくやぶ深く通過に時間を要すれども困難と言ふ程に非ず。石南花、くま笹、黒モジ等の矮木深叢、上るに従ひて姫子松、樅、ツガの類ひも余等を拒みぬ。三時十五分、尾根にはかに擴がり、平となる一端に立つを得たり。下は濕原、布置せる黒き針葉樹霧にまかれて寒げなり、これぞ、八幡平なりと勇み喜びて、短き小笹、矮草の間を北に進めば右手開け岐わかれ下りて沼のほとりに導く。遠端は定かならねど周邊上崖をまはし略圓形に近く見ゆ。即ち

雜 錄 ○藤七温泉と八幡平

ガマ沼なり(三時四十分)。このあたり下生え牧草クシの如く、樹木の枝ぶり風にためられて仙骨を有す。その配置又所を得たり。こののどかなる平和境は空晴れたる日にと約して三角點も求めず下る。國見の柱より一路高原を西北に進み藤助森をまはり田代沼をすぎ田代坂なる急坂を下れば硫黄の臭氣と共にめさず蒸湯は眼下にあり。温泉に至り、ぬれそぼちたるみじめの姿を驚く浴客の前にさらしたるは五時二十分なりき。

七

當温泉は鹿角郡谷内の阿部氏の經營する所、東山帝寶永元年開くと云ふ。硫黄泉にて湯槽三、混浴なり。宿泊は全部自炊制度にして事務所に支給品を供ふ。小屋には最上小屋その他の國の名つき、各々その國より來る浴客を入れるを常とす。掘立小屋にして内部に隔壁なし。(床のあるは營林區署官舎と事務所のみ) 珍しきは各小屋共、地下より温氣蒸かげ上るを以て、蓆一枚の上に浴客ごろ寝することなり。蒸かけ湯の名ある所以なり。又一名熊澤の湯(熊の湯)と云ふは温泉傳説に往々ある手負ひの熊此處に傷を醫したるを獵人の發見せ

るより起ると言へり。萬病に效くなる含ラヂウム温泉の難味よりは山中のいで湯に残る野趣を愛せざるを得ず。尙此地に祀られたるは金勢神社にして、種々奇異なる風習残れるを見聞したれどこゝには之を省く。この故に當湯は一名金精湯とも言はる。其夜は下よりふけるむし暑さのため安眠出來ず。

八

次の日よりは天氣をえらびて再び八幡平に遊ばんものと、その間、後生掛け、澄川附近に遊び、菰の森、長沼附近を訪ねて林道開鑿の状を見學などして、時を待ちたれど遂にその機を得ず。三泊の後再遊を期しこの地を去る。内二人は襦部より脊稜山脈の峠を越えて東に、残る三人は次の日北方坂比平へと。

附 記

(一)八幡平のスキー登山としては秋田營林區の菅原氏昨冬(昭和二年一月)行ひし山聞けり。滑降地としては素晴らしきものならん。冬期は熊ノ湯は小屋たゞみ留守番居らざる山。尙松尾方面よりは熊を追ひて茶

臼より平方面まで山駈けるとなり。五月中旬までは堅雪山を蔽へる山。雪崩は谷に沿ひて起るを注意しヒラオシ(全層雪崩)及ヒラをつく、又ワシ(ワラシ——表層雪崩)の語あり。雪は粉雪(こゆき)、濕雪(ぬれゆき)、サネ雪(春の粒雪)ネプト雪(大片の雪、暖い時降る)の區別をなす。(熊ノ湯にて)

(二)八幡平は八幡太郎義家に因縁ある由。金の斧の頂上に埋れる傳説等を聞けり。又八幡平上にかつて八幡太郎の従者の生活せる跡あり、山を下りて屋敷臺附近に移れりとも云ふ、こゝに上屋敷、下屋敷の別あり。畑附近には墓所あり等々聞かされたり。(松尾にて)

(三)余等の行は不幸にして悪天候に悩まされたれど若し晴天なりせばより充分樂しきものなるべし。若し盛岡を早朝たてば、二日目には頂上に立つを得る程近き徑路なるをこの路の特徴とし、途中變化に富めり。八幡平は云ふに及ばず、熊ノ湯も一訪の價値ある所と信ず。因にこの附近の地理に詳しきは

秋田縣鹿角郡宮川村長谷川小學校長 大槻惠藏氏
秋田營林區署 菅原鳥治氏

蒸湯温泉主 阿部藤助氏

等なり。

○富士山の標高に就て

陸地測量部

主題に關しては新聞紙の屢々報導せる處なるも、何れも正鵠を缺くものあるを以て、茲に大正十五年測量當時の状況を記述して參考に供せんとす。

一、浸蝕作用と山頂 富士山は熔岩瘤及碎屑物の累層より成る、山容は整然として雲表に聳え、其の最大傾斜線は對數曲線を成すと謂ふも、山層は幼年期に屬するが故、風雨氷雪の破壊力に依る經年變化又尠からず。大正十五年震災復舊測量當時、山麓の諸點に於ては毫も變化を認めざりしも、山腹の小富士及不淨ヶ岳三角點の如き山形を成せる者は、其頂の碎骨は著しく喪失し、標石を露出するに至らしむ、其量は四十年間に大なるものは約〇・六、〇米に及べる者もあり。然して山頂の岩石地に在りては、基準となるべき標識物なきを以て、常に岩石の崩落せる證據に依り浸蝕作用を認むるも、其量を知る事はざりしを遺憾とす。

二、從來の富士山頂標高 從來富士山の標高としては陸地測量部發行地圖に標記されたる獨立標高三七七八米を以てせり。然して其決定法は、明治十八年三等經緯儀に依り、山麓の諸點より圖示の如く直規法に依る間接水準測量を以て、先づ舊富士山四等三角點の標高を算出し、次で明治二十年測圖の際、之れを基準として平板測圖道線法に依り山頂の標高を決定せり。故に此獨立標高には高度十五度乃至十七度に應ずる屈折係數の當否、及平板測圖に伴ふ誤差を含有し、又其決定されたる單位は米に止まり、隨て次項に示す新設三角點の標高とは大いに其精度を異にす。

三、新設富士山三角點の標高 古來山頂劔ヶ峰には其標高を標示すべき三角點の無かりしは、蓋し名山として誠に遺憾なりしも、偶關東大地震あり、之れが復舊測量の機に際し初めて設置を見るに至れり。標高決定に關しては、可成近距離の諸點より誘求するを精度上有利とせしも、山腹の諸點よりは山の肩に遮られ完全なる視通を得られず、故に圖示の如く富士山を仲介として山麓の諸點に關聯せしめ、三等經緯儀を以て直規及反規法に依る嚴密間接水準測量に依り、

雜 錄 ○富士山の標高に就て

富士山三角點標高として三七七六・二九米を得たり。然して標石上面を最高頂と同一水準面にあらしめ、其標高をして直に山頂の標高を表現せしむるを理想とせしむ、三角點敷地の關係上全く一致せしむる事能はず。

富士山最高頂は本三角點の北方約十米を隔つる絶壁頂にして、其比高は〇・一五米なり。

次に新舊標高の決定關係を圖示すれば左の如し。

四、麓及山腹の三角點新舊標高の比較 新舊標高決定の基準として用ひたる諸點の標高を比較するに、左表の如し。

點 名	新標高	舊標高	比較差	備 考
印野村猿	一〇九・二六	一〇九・二六	減〇・三	
高九尾	一三七・〇六	一三七・二	減〇・一四	新標高は直接水準測量にて決定
龍ヶ馬場	一三九・四八	一三九・四八	減〇・〇五	同
小富士	一九五・六三	一九五・七二	減〇・一〇	
不淨ヶ岳	二三六・三	二三六・〇	増〇・三	

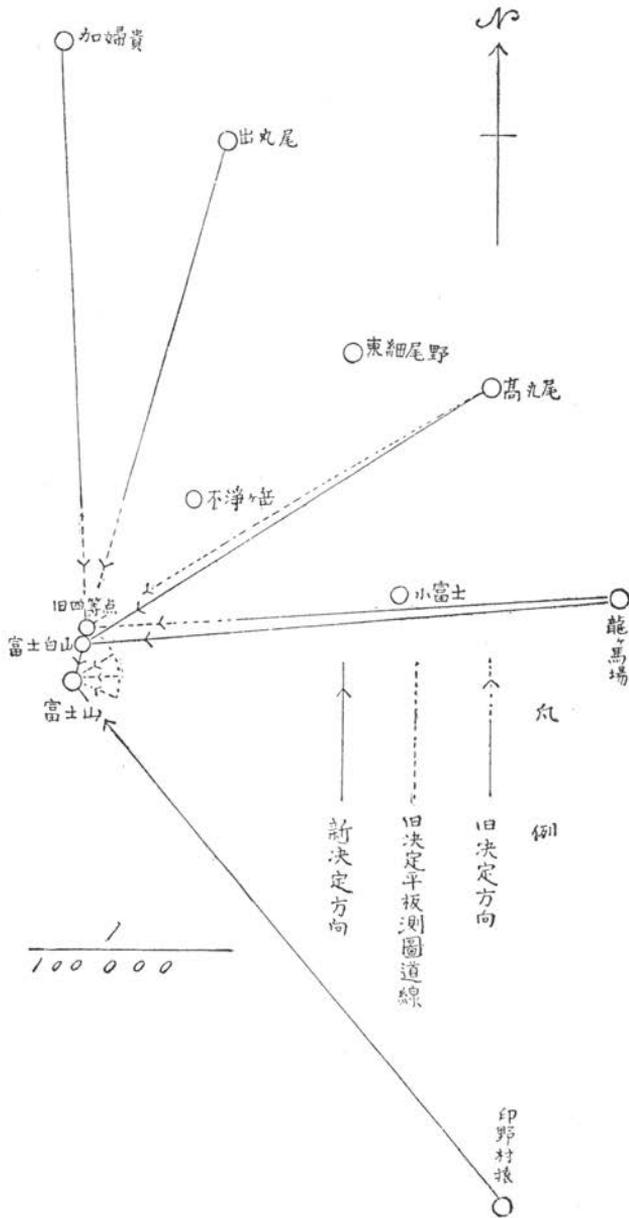
五、舊標高と新標高 新設三角點の標高と舊獨立標高とは、其標示點を異にする事前述の如し。故に新設三角點の標高に前記〇・一五米を加用して、新山頂の標高とし、之を舊標高に比較せば、新標高は一・五六米低

一 處

下せるが如き状態を示す。此數量を考察するに、山麓及山腹の諸點の比較差は前表に示すが如く、測定許容誤差の範圍にありて、其低下を確認するを得ず之れより推考せば、山頂に於ても大なる低下なかるべし。翻て測定法より考ふるに、舊標高は簡易法に據り、且平板測圖の結果を併用して、其決定單位を米に止む、之れに加ふるに四十年間の崩落變化も亦不問視する能はず、故に此等を綜合すれば、此差違は許容程度の者に屬し、恐らく富士山の沈降を證する者に非ざるべし。

六、測量登山の概況 山麓に於ける三角點の捜査作業も一段落を告げたる大正十五年六月十七日、登山には尙早たるも劍ヶ峰實地踏査の必要に迫られ、須走口三合目(標高二三〇〇米)小屋を出發し、皚々たる殘雪文餘の中を頂上指して登攀す。此日天氣晴朗にして風は風ぎ、山頂は目睫にあれ共八合目よりは所謂胸突八丁急峻にして、殘雪は愈々堅くなりしを以て用意せる圓匙に依り足掛けを作りつゝ、五時間半にして北側頂上に達す。此日携帯せる氣壓計は三〇〇〇米にして其機能を失ひ、空氣の稀薄の度を増すに伴ひ一步に一端し殘雪深く埋れる石室の屋上に於て一息す。之れより

雜
錄
○富士山の標高に就て



外輪山を西に數丁、四等三角點の捜査を終り劍ヶ峰に向ふ、峰の斜面は雪頗る堅かりしも、携行せる嵩口に依り難なく山頂を極むるを得たり。然して山嶺の雪は風の爲め概ね拭はれ、山麓に僅かの霧を認めたるのみにて、豫定の調査を終る事を得、歸路は外輪山を東に廻り、大宮口頂上淺間神社に至る。同所は凹地にして残雪尙深く、鳥居の頂を認むるのみにして、此處より噴火口の内側懸崖を望めば、直徑尺餘の氷柱無數に垂れ壯絶を極め、寒氣凜烈たるを物語る。此時より天は次第に暗らく暫くにして濃霧と突風に襲はれ、氷片と礫を浴びつゝ、北口頂上に至り、板切れに坐し、一氣に千餘米を迂り、宿營地に歸著し得たるは痛快なりき。

觀測作業は、山頂に於ける天候の靜穩なる七月下旬より八月上旬を撰み、七月二十一日山頂に到着せり。

時恰も登山の盛期に際し山頂の石室(旅館)は雜沓を極め居りしを以て、淺間神社の東方高地なる賽の河原に至り堅牢なる空倉庫の一隅に幕營せり。天幕内の岩石は頗る暖かく、時々蒸氣を吐き出し、恰も暖房装置を施せしが如く、棲宿には好都合なりしも、氣壓は凡五〇〇耗にして沸騰點低く、飯は常に半煮にして初めは

苦痛を感じたり。山頂に於ける薪炭は山麓の部落より運搬するも、補充困難なるが故中腹の枯木を採取せしめんと、外輪山の外側を下らしめしに、間もなく抛棄されたる金剛杖を拾ひ集め大束となし負ひ來たり、是より薪の補充は容易となれり。斯くして山頂に棲宿する事十餘日白雲は常に山麓を圍らし、時には強風に送られ山頂を襲ひ、渦卷く密雲は岩頭に碎け、露々として凄然鬼氣迫るが如き光景を呈する事ありしも、八月一日作業を漸く終り、荷物の一部は板を利用し、檜に擬し、御殿場口より下れり。

○實川村雜記

山の旅では登ることそれ自身の興味の外に麓の村などでいろいろな交渉が案外その行を面白い味のあるものにしてくれることがある。殊に村の古老から圍爐裏を圍みながら聞く昔語りは、ものごとくに感じやすくなつてゐる私達をして遠いはるかな昔にまで空想の翅を伸させるものである。私等は昨春はからずも秘められた奥深き實川村に旅の數日を過し、傳説の村として

知られたそのあたりのことについてくさくさ聞く處があつたのである。以下述る處は別稿「早春の烏帽子行」の附記たるべきもの、而して其の眞偽については又他に問ふ人もあるであらう。筆者は只聞きしありのまゝに傳へやうと言ふのである。

尙ほこの項は實川村小學校の渡邊勝氏に依る所が多い。氏は篤學な郷土研究家でその調査の一部は何れ近く他のその方面の雜誌にのることであらうことを記しておく。

長者屋敷のこと　今の實川村は約八百年も前から存在してゐると傳へられてゐるが、それより以前既にこの谷奥に一つの部落があつたとの傳説はほんとうに興味深いことである。それは村から裏川にまはつて一里程奥の小野ヶ原にあつて長者屋敷と呼ばれてゐるもので「そこ」と云はれる處には今もなほ泉水らしきものも残つてゐるとのことであつた。又大正十五年發電所の堰堤工事の際にも甍が掘り出されたり、村の者がそこに水田を起したときにも土器や其他の遺物がたくさん出たことから察しても確かに嘗ては人の住家があつたらしい。そして今の實川村が開ける頃にはもうそこ

には家もなくなつたゞ物語りとして知られるに過ぎなかつたのであるから、それはきつとこの谷奥での最古の部落であらう。

その部落の頭は朝日岳(大日岳の古稱)の麓の住人なるより朝日長者と呼ばれ、元正天皇の御代、鎌足公の曾孫有宇中將藤原實詮が流謫されてこの長者の許に暫らく寄寓してゐたと傳へられてゐる。そこに残した子供が長じて有名な歌仙猿丸大夫になつたとのことで、

小野ヶ原ふりさけ見ればそゝぎ山

あらし激しき筆塚の松

と言ふ歌が今に残つて之を證してゐるのだと聞いた。これなどは少々怪しい話であらうが、村人猪俣某氏宅の巨勢金岡の筆と稱せられる「日光山縁起」の解題には猿丸大夫の話が詳しく出てゐると言ふ。尙そゝぎ山も筆塚山も今の小野ヶ原の對岸にある山名であつて、大夫が瀝山下の沼で筆をそゝぎ、筆塚山の松にそれを奉納したのだと語られてゐる。

實川村起原のこと　村は源氏の子孫の隠れた處だとは前から聞いてゐた。そして本州山地に於て所謂落武者の部落と傳へらるゝものゝ多くが平家の落武者に端

を發してゐるのに、實川村が源氏より血をひいてゐると言はれるのは珍らしい例外とも言へやう。村で聞いた所では次のやうである。村を始めてひらいたのは源義經の臣、猪俣近平六則綱なる源氏一門の者で、凡そ八百年前建久年間頼朝の頃にこの地に流れついたのでと言ふ。(近平六は須磨の關屋の戦ひでは越中前司盛俊を打ち取つた剛の者なることは源平盛衰記にも見られる由)

それは、主君義經が兄頼朝との不和から落人となつて奥羽に逃げ一族郎黨もために散りくになつた時のことである。近平六は一時義經と別れしものゝやはり主君慕はしく後を追ふて東北の地にまではるばるやつて來たのであつたが、主君の落命を知つてつくづく世の無情を感じ、且つは頼朝方の迫害を恐れて——各地流浪のはて——遂にこの山中に隠れ入つたと言ふのである。その徑路はもちろん不明瞭ではあるが長者屋敷のむかしからあつた唯一の通路一ノ峠を越えて來たに違ひないと言はれる。そのころは勿論實川沿ひの道などはなく(それは明治になつて拓けたものである)阿賀川流域の豊實の方から荒澤に沿ふて登り、今の萬治澤

と大タメ澤との間の尾根上、則ち今は消えて跡かたもない一ノ峠から村に入つたらしい。地圖の萬治峠は其後萬治二年に村の者が拓いた由である。

近平六には男子三人あり。それく分家して岐れたのが次第に殖へて今の二十數軒の猪俣姓を稱するものになつたとのこと。即ち今の村では後年移住した二軒の五十嵐姓の外は皆猪俣を姓としてゐるのである。

初代猪俣近平六が何故選りに選つてこんな所に這入りこんで來たのか、又そのころのこのあたりはどうであつたか。それを知りたいものだと思つたがついにそれは判らぬことらしかつた。

笠掛山のこと 櫛ヶ峯山稜下の笠掛山は嘗ては雨乞山と言はれてゐたものだそうである。その山中には沼があつて、旱魃で水がなくて困るごとに村の古老はそこに引つて雨乞ひをするからであつた。それが笠掛山と言はれるやうになつたのには一場の悲しい物語りが傳へられてゐるのであるが詳しい経緯はしばらく措きそれをかいつまんで言ふとかうである。或る旱魃の年その雨乞沼で村の犠牲になつて年若い僧が池の主龍神に身を捧げたのであつたが、彼を慕つてゐた村の乙女

はその後を追ふて沼に入水して死んで了つた。行方不明の乙女を探しに行つた村人がそこに近よつて行くと池の畔の笹の小枝にはその娘の笠が淋しく掛けてあつたと言ふのである。それ以來その村の花を偲ぶためにその沼は笠掛沼と呼ばれ、従つてその上に聳ゆる山は笠掛山と言はれるやうになつたと言ふ。

雪や其他のこと 村は冬になると他村との往來も絶え勝ちな程雪に壓迫されるせい、なか／＼雪に關する言葉が多く、又その觀察も相當細いのは面白いことであつた。今それを話してみるとかうである。

「村には大抵十月末には初雪が訪れるが之を「ニワ雪」が來たと稱する。十一月末にはそれが「ツム」でやがて外の村との往來も絶え勝ちな冬が來る。その頃に降る雪は大抵「ハシヤギ雪」(乾雪)であるが時に暖いと「ボサ雪」(濕雪)も降る。しかしそうした「シメリ雪」(濕雪)は冬の始めか春に近づいたところに多い。時々「シラネ」(濕つた大きな雪片のもの。わた雪)が冬の始めに降つて村人を驚かせることもある。川も「シマ」(河岸の平地)と一樣に埋る頃には「クシミネ」(瘦せたる山稜)には長い嘴のやうな「フツカキ」(又フツカケとも

言ふ。雪庇の意)が張り出して「ツネ」傳ひ(尾根傳ひ)は危くなる。そうなると「ミネ」(山)の「カツツ」(絶頂)でも「キツネオトシ」(山稜上のキレット)でも一面に堅い「フキ」(風に吹きつけられた雪のガリ／＼。海老のシツポを重ねたるやうな、カリフラワーに似たるもの、筆者一般通用語を知らず)がついて「ツル」(冬の輪かんぢき)では歩き難い。急な所や「ヒラ」(岩場)から「アイ」(表層雪崩、乾雪のものを意味することが多い)の落ちるのもこんな寒い頃である。

村の冬の行事である「シン狩り」(羚羊狩り)はそうした寒さのおさまつてからで「雪べら」(長さ三尺程、一端のヘラになつた木片。ピツケルの代用をもなしてゐる)一挺で存分山を馳けまはるのは村人にとつて一番楽しいことなのである。(獵の様子は筆者既に「早春の烏帽子岳」に記せるを以て略す)「ダング」(雪まくり)が足許から轉がつて落ちるのも面白いし「シミュキ」(凍雪、主として陽熱によつて生ぜる表凍殼雪)の上をサクク／＼走るのも爽快なことであらう。

そう言ふ時彼等の一番恐れるのは「ナデ」(アイをも時に含めて全ての雪崩を汎稱するが、特に舊雪全層雪

崩を呼ぶことが多い)で、その「モメ」る(雪崩の落下することを言ふ。山中底雪崩多き頃は地肌の露出激しく、ために山色白と黒とに雜然としてあたかも鹹苦茶にもみたるが如き感あり。ために言ふ)恐れのある所には容易に近づかない。

ナデの一番甚しいのはもう春近い三月の末で、その頃は積つてゐる雪も大抵融けては凍り融けては凍りした「ザラ雪」(粒狀雪)になつて日に日に減つてゆく。軒下の「カナコホリ」(氷柱)もそうなるともう落ちて見られないが思ひ出したやうに又雪の降るときも稀にある。それからまた春の降雪は「ワカバ雪」と呼ばれる。そんな雪の降つた朝は山の高いソネには「スガ」(樹氷)が吹きついて花の咲いたやうに美しく眺められることが多い。

昂近くに雪の見られなくなるのは四月の末で、もうその頃はしきりにその谷間を揺るがしたナデの音も遠のいて、時折うなるやうなそれが間遠に谷奥から聞えてくるに過ぎないのである。昂がすつかり鋤返へされる頃には雪は「ナデ場」(常習的雪崩落下路)の下の「ナデダマリ」(雪崩堆積場)にしか見られなくなる。そんな

雪は皆汚れた「アラ雪」(粒の結合して大きくなつた大粒雪)になつてゐる。然し御山では年中雪は絶えることはない。皆「コホリ雪」(夏季残雪に見らるゝが如き粒氷雪)一粒氷と區別するために雪をつけておく)になつて高い澤頭に「ユキト」(雪溪)をかけて残つてゐる。その表面は皆「カノコ雪」(ウロコ雪)後述)になつてゐて急な所では破れて深い「フリキリ」(裂罅)を刻んで仲々危い。

こうして、夏も過ぎて茸狩りする秋深い頃までも雪は消えずに残つてゐて、遂には越年するものもなかなか多いのである。

こゝに特に面白いのは前記「カノコ雪」で、これは例の夏季に於て残雪表面に見られる「鱗狀斑紋」とか「龜甲狀斑紋」と呼ばれる、皿のやうなくぼを指して言ふのである。これについての方言を聞いたのはこれが始めてで非常に面白く思はれてならなかつた。(他地方にも之の現象を稱する言葉があるかないかは是非知りたいものと思ふ。)この「カノコ雪」の成生に就いては、多くの人は之を風の息でと考へ(例へば河野齡藏氏著高山研究に於けるが如き)或人はそれを見えざる龜裂

への浸水に歸する（六鹿一彦氏筆山とスキー二十七號誌上）が、それらでは説明出來ぬ事情が餘りに多すぎるのではないかと思はれる。筆者愚考する處ではそれは恐らく積雪と層の融解によつて、その表面に所謂薄層對流の現象が起るに因るのであるまいかと信ずる。

則ち日照や氣温によつて雪表面の温度は上昇して融解し順次下層に進む。表面に生じたる融水は更に暖りて零度以上に昇温する。然るに零度乃至四度の間は温度の昇るに従ひ水はその密度を増す故に、やがて上層の水は沈流し下層零度の水が表面に出づるに至りこゝに薄層に於ける對流が生ずることになる。この對流は積雪中に於ける微細なる塵埃を伴ひての流動ならんと思はれる。而して薄層に於ける對流は一定方向の水流なき場合には、その層間に多角形に配列せる細胞狀渦巻を形成し、中心にて上昇、各邊に沿うて沈下（又時に條件によりてこの逆にも對流す）すると言ふ「寺田博士の現象」がある。而してその時に於ける含有浮游體は下行流の場所に沃積するから、積雪融水中の塵埃は各對流渦の縁邊、則ち多角形の各邊に集積するに至る。冷氣至り對流止みたる後は其形其儘に凍りて保存

されるに至る。このプロセスが幾度となく續けて繰り返へされて夏季雪溪に見るやうな皿狀の凹みが生ずるのではあるまいかと思ふのである。これによりて急な斜面ではその傾斜の方に長く、又風のあたらぬ所や裂縫バグ中にも生ずることが始めて説明出來るのではあるまいか。又一對流系の完全な形は圓形であらうが、圓の集合體の境界は多角形的になると言ふ原理から、龜甲狀をなす説明も出來ること前述の通りである。（その半徑などを制約する條件其他については長くなるから述べぬことにする。）筆者も元は何か龜裂の如きものにも支配されるのではないかと機會ある毎に殘雪を觀たのであつたが遂にかゝるものは見出し得なかつた。而して先年、氣象臺の藤原博士が乗鞍岳に於ける構造ストロクトイ土の形成の機作について説明されたもの（地理學評論第四卷）を讀むに至つて始めて釋然とするものあり。これは例のウロコ雪（と筆者等の呼びならしたるもの）の成因にもその考が應用出來るのではあるまいかと思ひ大方の御批評を仰がためこゝに之を述べて見た次第である。

何はともあれこの「カノコ雪」其他の如き雪の特殊

現象に關する方言はそれのなくならぬうちに是非採集しておきたいもので、外に春期融水の流れる積雪表面の溝や、冬の波状雪(シユカブラ)などの方言なども是非知りたいと思つてゐる。

「牛ヶ首」其他のこと 牛首山とは其北、大日岳との鞍部、俣稱「牛ヶ首」より由來してゐる。そこは村人の狩場である。西方烏帽子方面からは丁度大日を頭にした牛の首の部分に當るやうな形に見へる「ソネ」のたるみなのである。牛首山なる名はその牛ヶ首の上に立つと言ふ處から來た近年の呼稱で村では「クシミネ」又は「櫛ヶ峯」と言つた方が通るらしい。

尙その「牛ヶ首」に切れ上つてゐる「矢澤」は實は「八澤」で、裏川方面の東岸から入る大澤のうち八番目のものだからだと言ふ。則「トチ袋澤」「未木澤」「黒松澤」「ナゴ澤」「トウガイ澤」「水無澤」「オコナイ澤」そして「八澤」である。(この順序を歌に詠んだものがあつたが之は聞きもらした)澤には天狗橋、及び天狗鼻の奇勝があると云ふことだ。

尙、その上に聳える大日岳は前述の如く古稱「旭岳」でそれは村の方から見て早朝先づ旭光が當る所からそ

う呼ばれ始め、轉じて大日となつたとも言ふし、又大日如來を祀つたからだとも言ふ。

裏川溪流の一つである「金華穴澤」とは「キンカ」則ち響の澤の謂で小瀧奔湍連続して耳を響する程の所であると言ふ。大日ヶ瀧と言ふ高さ十五六間幅一間位のものがその一番大きなもの、由である。

笠掛山南方の水晶峯はその露岩に石英の結晶粒の大きながあるより由來すること。又筆者等の登攀した烏帽子岳は何處でもそうであるやうに全くその形状から來たものである。

外にも色々と、裏川源流地や、前川奥の澤の狀況も聞かされたが、何れも筆者の實見では無いから之を避けて以上名稱の由來位に話しを止め、一先づ筆を擱くことにしたい。(昭和四年一月 佐々保雄)

雜 報

○山の慘事

○劍澤に於ける窪田、田部氏一行遭難の眞相

窪田・田部・松平・土屋の四氏及び案内者二名の一行の劍澤に於ける遭難は永久に忘る能はざる一大事件であつて、吾々はそれだけに事の眞相を極め世の誤解を除く必要と、將來の研究に待つべき種々なる大きな問題を與へられた事を、痛感するのである。

窪田他吉郎氏は明治三十四年八月生、東京府立四中を経て四高に進み、次いで東京帝大工學部應用化學科に入學、昭和二年三月卒業し、更に大學院學生として應川化學教室にて寫眞化學の研究中であつた。已に四高時代より冬期登山にと志した先覺者の一人であつて、大正十二年三月、針ノ木越えの壯舉を始めてスキーにて試み、吾が國スキー登山史上に一大エポックを劃したのであつた。冬の立山連峰の權威者として認められ、冬季の立山登山は今度が第四回目であつた。

田部正太郎氏は明治三十七年七月生、窪田氏と同じく四中、

及び四高の出身で、昭和四年三月東京帝大工學部土木工學科を終へ、内務省都市計畫課に勤務中であつた。同氏も登山家として夙に一家を爲し、窪田氏に劣らぬ經驗力量を有し、窪田氏のもつともいふパートナーであつた。同氏は純情に溢れた然かも底力のある山男であつて、萬人の敬慕と信頼の的であつた。

松平日出男氏は明治三十八年一月生、窪田氏と同期に應用化學科を卒業し、理化學研究所に勤務中であつた。

土屋秀直氏は明治四十二年一月生、慶應義塾大學豫科に在學中であつた。同氏は松平氏とは親戚關係で窪田、田部兩氏とは直接に交遊はなかつた。

佐伯福松、佐伯兵治の兩名は若嘶に於ける屈指の良山案内人で、積雪期の登山には深い經驗と優秀なる技術とを有して居た。

以下記す所は一行の屍體發掘に親しく立會はれた、窪田、田部兩氏の親友、稻積豊二、中島信悟の二氏が、東京帝大スキー山岳部の遭難真相報告會の席上、交々に語られた談話の筆記の概要であつて、一行の消息に最も通曉せる R、C、C 會員加藤文太郎氏が内務省技師榎木氏に親しく語られた處を綜合したものである。

一行は昭和四年十二月二十八日午後七時二十分上野驛出發。

翌二十九日には富山を経て午前十時若嘶に到着、佐伯福松、佐伯兵治の兩名を伴ひ、藤橋に至つて一泊し、翌三十日は早朝藤橋出發弘法茶屋に達して宿泊した。同日一行より少しく遅れて

加藤文太郎氏が同じく弘法茶屋に向つた。同氏は一行のシユブールを辿つて登つたが積雪量は例年に比し著るしく少く、略々夏道に従つて進み、途中屢々スキーを脱がねばならぬ場所もあつたさうだ。同氏は午後六時弘法茶屋着(氣温攝氏零下二度)。小屋附近の積雪約三尺に過ぎなかつた。二三時間ばかり前に先着せる一行は小屋の中に天幕を張つて其の中に居たさうだ。三十一日は雪で、後には霧がかゝり加藤氏も一行と共に晝頃まで小屋の附近でスキーを造つたさうだ。翌昭和五年一月一日は早朝から霧で、休養。

二日は加藤氏も一行と共に出發、夏道通りに進み鏡石で一行と別れた。

一行は地獄谷を経て劍澤小屋に至り新小屋の方に泊つた。

翌三日は快晴、加藤氏は午前八時室堂を出發、靄は霧に包まれ、風が少し吹いて居た。氏が靄小屋に着いた時には一行は小屋に居たさうだ。同氏はそれから前靄まで登つたが、一行は途中まで隨つて來て呉れ、寫眞を撮つたり等して居たさうだ。同氏は歸途、更に小屋に立寄り、一行と共に茶を飲んだりして暫らく休んだ後、室堂に向ひ、午後八時に歸着。劍澤小屋附近は當時雪が少く、地盤が露出し、風の爲もあるならん、小屋の下の方が見えて居たさうだ。雪面はウィンドクラストで煎餅の様に硬かつたとの事だ。

四日は室堂は早朝零下七度、曇天であつた。加藤氏が弘法茶

屋を経て桑谷附近まで降りて來た頃から、雪が降り初め、段々ひどくなり、翌朝まで降り續き、藤橋でも五寸積つたさうだ。室堂附近の積雪量も例年の十一月頃の程度で非常に少く、是が例年並みになるには一度に五尺も降り積つた筈である。加藤氏は言つて居られる。

三日に加藤氏が劍澤小屋で別れてから以後の一行の動靜は全然不明である。天候氣温表の最後の記入が三日午後八時であつて以後はブランクになつて居るので、遭難は三日夜半以後と推察されて居たが、三日から四日の午後までは降雪無く、従つて多量の新雪が降つた五日早曉と考へられるが適確な根據なく、目下は只遭難は四日夜半以後と確言し得るのみである。

十日になつても尙一行の消息は不明なので、第一回の搜索隊が編成され、佐伯榮作、志願喜一、佐伯善孝の三名が芦峯を出發して洵小屋に至り十一日まで滞在した。

十二日には弘法茶屋に至り、十三日には室堂に達したが此處にも一行の姿を認め得なかつたので、更に劍澤小屋に向ひ、二手に分れ、喜一は鶴ヶ御前側の谷を経て、榮作は谷の中央に走る小さな尾根に沿つて小屋に向つた。喜一は上から小屋が見えないので不審に思ひながら降つて來て見ると、小屋が殆ど壊滅して居るので、此れは風でやられたと思ひ込んだ。一方、榮作は途中で雪崩のデブリを認めて疑念を抱きつゝ來て見ると、斯る状態であつたので始めて雪崩でやられた事實が判明した。そ

して小屋の北寄りにはシールをつけたスキーが三本、雪崩の方向と覺しきものに略々並行してあり、靴が片方、(その紐の状態から推察して、兩方結んで置いたのがちぎれたらしい)、それから兵治のメンバの袋が空の儘であつたのを發見した。一行の遭難は確實となつたが屍體の存在も全く不明で如何とする事が出来ず、直ちに引返へした。

十四日午前九時頃には下山し此の旨が當局に報知せられた。

同日此の報知を受けた東大スキー山岳部では田部氏の親友で現に同部委員たる中島信悟氏に直ちに富山に行つて貰ふ事になつた。

十五日中島氏は富山より芦峯に至つたが、搜索隊の編成準備は已でに完結し、第一隊は立山方面の事情に明るく、且つスキーの出来る高岡署の近江刑事を指導者とし、特に中島氏が之に加り、練達の工夫三十四名を選び計三十六名より成り、發掘用の斧、ヨキ、シヨベル、細引、運搬用のスキー數臺を準備した。搜索隊は十六日午前七時四十分、芦峯を出發、午後三時五十分には弘法茶屋に達して一泊した。

小屋の中には學習院の天幕が階下に張つてあり、其の中には一行の遺留品があつた。

十七日、搜索隊は霧深く一時出發を見合はせて居たが霧が晴れる徴候が見えたので、九時出發し一時二十五分には室堂に着た。

一方仙臺より來れる稻積豊二氏は、午前五時四十分、芦峯を出發、四時二十五分には室堂に着き一行に合した。

同日連絡班たる第二隊平藏外十二名は芦峯を發し弘法茶屋に到着した。

十八、十九、兩日は吹雪の爲搜索隊は室堂に滞在した。

二十日は快晴で十五名のスキー隊たる第一隊は月明を利用して早くも五時十分には室堂を出發、次いで裸隊である第二隊十一名は五時三十分出發、五時四十分には近江刑事、稻積、中島兩氏及び喜一の四名が出發した。

スキー隊は七時十分現場到着、少し遅れて裸隊も到着した。

先づ現場附近の寫眞を撮影し、一方小屋跡の傍に於ては焚火をなし、近江刑事は指揮者となり、稻積、中島兩氏は刻々寫眞の撮影をなしつゝ立會ひ、直ちに小屋跡の中央に東北より西南に掛けて一列に並んで工夫は發掘作業を開始した。

小屋跡は大體、別圖に示すが如き状態で、雪崩の爲に殆ど全く潰滅し、小屋の東北面の板壁は其の一部を残し、東南面の板壁は新舊小屋共に半倒れの状態で殆ど雪に埋もれ、屋根、西北面、北西面の板壁等は悉く雪崩の爲に奪ひ去られて跡方も止めて居ない。新小屋の入口の東寄りに數臺のスキーが、半倒れの状態で發見せられた。

七時四十分になつて積雪面より約七尺の下に當つて寢袋に入つた足部を發見した。

そして天幕に掩はれた儘、東南を枕とし、六名相接し、安眠の状態で、東北より數へて兵治、福松、窪田、田部、松平、土屋の諸氏順に寢袋に入り、リュックサツクを枕として發見せられた。

八時十分には屍體を全部運び出し、九時より三人分づゝ二回に亘つて三田平まで運搬した。

遺留品は近江、稻積、中島三氏立會ひの上持ち歸るものと、現場に残すべきものとを區分し、天候が悪化し始めたので、早々に歸る準備をした。

屍體運搬の方法としてはスキー三本に横木を渡し、屍體を毛布にて包みたる儘、ゆはへ付け、人夫が之れを索いた。

全部の屍體が別山乗越に到着したのは午後一時で、室堂に歸着したのは午後三時四十分であつた。

此の日は風強く、寒氣頗みに著るしく、モルゲンロートに映へる颯の頂きハツ峰の峰々を背景として、大自然の嚴肅なるたゞずまひの中の悲痛なる光景は實に想像するだに耐へ得ない。

十一時頃には別山乗越附近は霧に掩はれ午後に至つては天候は全く險惡となつた。

雪崩は鶴ヶ御前三角點と別山乗越寄りの隆起との中間の窪より起つて、約四〇〇米落下して劍澤本澤に至り、その勢は餘つて對岸約二十米位の小隆起に乗り上げ、一部は此の隆起を越し一部は此の隆起に沿ひて、何れも略々直角に北に轉じ、此の附

近の本澤にデブリ(當日、遠方より目測にて、約二十米四方、半米角位のブロックが他の積雪面より約三分の一米位高くなつて居る程度で新雪に掩はれて居た)を残し、小屋附近では約五十間位の幅を以つて突進したものの様であるが、この附近に於てデブリと見るべきものは判然としない。小屋を其の背後より襲つた此の雪崩は屋根、板壁、柱等を凌つて平藏谷落合附近まで達した様であるが、其の先端は何處まで達して居るかは分らない。

雪崩の發生した地點は二十日には既に其の跡方も見られなかつた。

雪崩の發生の日時は前に記した様なわけで五日早曉と見るべきであらうがまだ種々の材料に依らねばはつきりとは分らない。

尙、兵治の時計が硝子にひびが入り、五時二十三分を示して停止して居るが、此の硝子のひびは針の動くのには一向差支へがなく、ゼンマイがすつかり弛んで居る状態であつて、螺を巻くと直ちに動き出したのであるから、此れは當てにはならぬ。

福松の時計は三時何分、松平氏の腕時計は十二時五分、を示して居るが何れもゼンマイが悉く弛みきつて居るので當てにはならぬ。

尙、小屋の東南面及び東北面を掩へる石垣は全然壞されて居なかつた。

二十一日、一行は五時四十分、屍體と共に室堂を出發、午後四時二十分芦崎着、富山にて茶毘に付し、遺骨は二十四日午前七時歸京、二十九日、四家合同にて青山齋場にて告別式を行つた。

× × × × ×

震災の時には、誰もその震災のために死んだ人々を非難しなかつた。然かもあの震災と同じ位、否寧ろそれよりも適確に天災といふ言葉のあてはまる今度の事件に對して、たゞそれが世人の知らない冬の高山に起つたといふだけで世間は喧かましく騒ぎ立て冬山は危険だと即断するのであり、更にまだ悪い事には、今度の事件が本當の意味の天災であつて一行の行動には何等の手落がなかつた事を詳細にどうでも合點が行く様に聞かされると、山に行くのがあぶない、そんな所で犬死しても何にもならぬと暴言を吐く人間が居る事だ。此等に對して一々眞面目に辯解した所で仕方がないが、さりとて黙つて居れば無理にでも山に行く奴は悪いと定めて仕舞ふのだから全くどうしてよいのか分らない。幾多の不注意に依る不合理的な行動に基く遭難、吾々登山者の見地から見て毫も不合理的と認むべき點のない天災的な遭難、世人はどんなものでもみな混同して一様に考へるのだから全く始末が悪い。尤も幾多の不注意に基く他の遭難事件にしても、それは要するに結果から見てのみ判断し非難を加へて居るに過ぎない。神でゞも無い限り、他人の失策をさう一概に責める事は出来るわけのものでは無い。種々の失策を不知

雜 報 ○山の慘事

不識の間に繰返へしてゐながら幸ひにも大過なくして濟んだといふやうな人々がどうして得々として他人を責める事が出来る。殊に遺族の身となつて見れば自分の愛した者の上に加へられる非難の數々をどうしてその儘に受け入れる事が出来る。ましてや何等の不合理的の認められざる場合、全く見當違ひの非難の加へられるのをよく忍ぶ事が出来るであらうか？

小屋の位置の選定が宜ろしきを得なかつたとの説をなす人もあるが、要するに結果論で、かくいふ人々が果してこれまで小屋の位置が悪いと口を極めて叫んで居たであらうか？ 自分達が疎聞の故か、かゝる叫びはこれまで全く聞かれなかつた所だ。當時の知識をもつては何人もその位置に就いて怪しまなかつたのだ、これをもつて富山縣當局を責めるのは酷である。

今度の事件は一般社會に一大衝動を興へ、従つて中には積雪期の登山に對して杞憂を抱く人々もあるときが、吾々は輕々しく、冬季登山危険なりと言ふ議論に與することは出来ない。

斯る尊き犠牲があつたればこそ、冬期登山は更に異常なる發達を見るに至るべきである。我々の今まで気がつかなくなつた重大な問題、或ひは気がつきながらも等閑に付され勝ちであつた問題、或ひは更に進んで未知の問題に對する考慮、斯くして我々はより安全に、より深き眼を開いて冬の山へと志す事が出来るであらう。未だその黎明期にある吾が國に於ける積雪期の登山史を彩るこの一大事件はやがて將來、幾多の未來の登攀者を

日時	午前三時	午前五時	午前七時	正 午	午後六時	午後八時
1			-18°C 吹 雪	-10°C 曇	時 -17°C 曇	-1 晴*
2	-17 晴	-10 晴			吹 雪	
3	吹 雪					-11°C 晴
4						
5						
6						
7						
8						

遭難前の天候気温表(田部氏が角砂糖の箱に記入し置きたるもの)
* 不明

雜 報 ○山の惨事

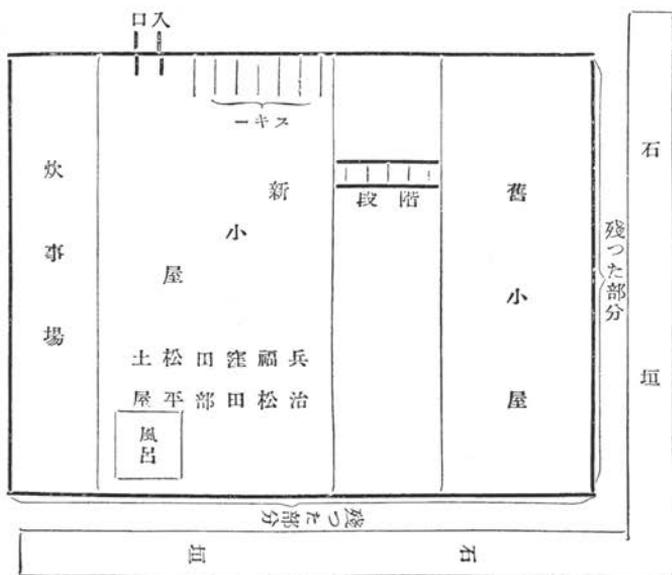
一 穴

して深き恩恵を享有せしむる基を築きあげ
るに違ひない。かくしてこそ、六人の英靈
も以て瞑すべきであらう。(渡邊 漸)

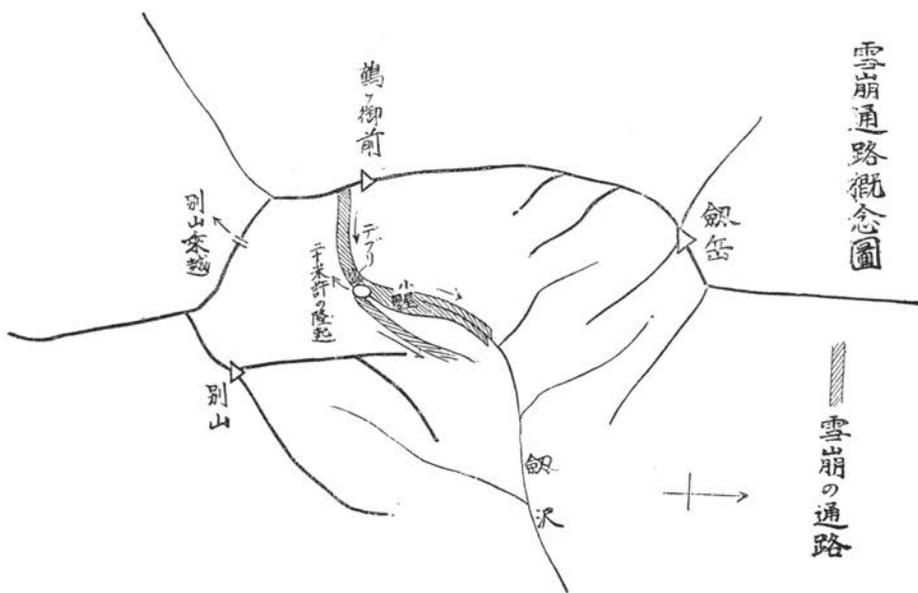
雜報 ○山の慘事



↑ 雪崩ノ方向



剱澤小屋見取り圖



雪崩通路概念圖

雪崩の通路

○北岳遭難に關する記録

野村實君遭難の事情を一行のリーダーであつた國分貫一君の手記として發表せられたもの並に慶應山岳部に於て國分君の報告せられた時に筆者のつた覺書によつて略記する。

昭和三年正月、野呂川兩俣小屋を根據地として、野村國分其他二名は北岳に登つた。故に此の度は登路を更え廣河原小屋側より登山しやうと試みた。廣河原に入るには柳澤よりするの最も近い。昭和四年十二月月上旬準備として國分野村は柳澤に赴き人夫其他の事を打合せた。柳澤より二日で廣河原に達する豫定であつた。一行はリーダー國分貫一、野村實、濱口定之助、齋藤貞一、吉野元陽の五人。

昭和四年十二月三十日(午前中雨後晴)日野春驛——柳澤——一の澤附近小屋。

十二月三十一日(朝小雨後晴)一の澤小屋——赤蘆澤出合の岩小屋。

昭和五年一月一日(晴)赤蘆岩小屋——奥赤蘆澤と赤蘆澤との出合、露營(一日行程一里弱)。

一月二日(晴)奥赤蘆の出合——ヲナシ峠(積雪五尺、新雪腰を没す)——佐一の小屋(廣河原)。

一月三日(晴、曇)佐一の小屋——廣河原の小屋(豫定より甚しく日数を費したのは、澤の状態の悪いと人夫の活動の緩慢

たのによる)。

一月四日(曇)廣河小屋(積雪小屋の周圍二尺)——横卷(登るに従ひ雪深く、横卷にかゝつてから特に甚しく、時に首に達した。大樺池小屋に行く事を斷念して下る)——廣河原小屋。

一月五日(晴)廣河原小屋——大樺池小屋。前日の踏み跡をたどつて早く登る事を得、午前十一時半、大樺池に達す。森林中は粉雪の積る事五六尺、小屋附近は約五尺。但し小屋の中には雪が入つて居ない。國分のスキーが折れたため野村リーダーとなり、雪の状態を見に一行はクサスベリを登つた。クサスベリの下部は風の影響を受けない粉雪、斜面の狭まる邊りの右側に當り尾根の側面に雪面に絶裂の入つて居るのを見た。斜面の上部右側に顯著な針葉樹の枯木の立つ邊りから上の方に登るに及んで、即ち斜面が小太郎尾根の側斜面となる邊りから雪面はウインド・クルステとなり、澤の上とおぼしい所はそのクルステが厚くなつて居た。クルステの下部は幾分濕氣を帯びた雪があつた。一行は小太郎尾根の下七八十米突の所から引かへした。

例の枯木の邊りからは、スキーの滑降に非常によかつた。天候は四人の出發の時(午后一時)良好、一行の歸途につく頃より霧がかゝり出した。風は北西。野村は雪崩の危険はないと考へた

一月六日(晴後曇)大樺池小屋——クサスベリ——北岳の手前——大樺池小屋——廣河原小屋。

五時起床此の頃は大量連日降雪なく、日没頃より風起り、日

出後天候恢復すると云ふ状態であつた、午前六時氣温マイナス十五度、風少なし。七時小屋を出發し前日通りクサスベリを登る。夜中降雪ありしたため新雪二寸、前日のスキー痕を見ず。前日見た龜裂下約十米突の所に又新しい龜裂を見る。その他雪の状態前日と變りなし。上部(雪崩の起つた邊りより)ウインドクルステ固く、スキーの角づけに困難を生じたため、尾根直下でスキーを脱ぎシタクグアイゼンにかへ小太郎尾根にスキーを置き(九時十五分)尾根を北岳に向つて進む。此の頃から西北風漸く強く、仙丈、北岳も姿をかくしてしまつた。その爲北岳頂上へ約三十分で達せらると云ふ地點から引返し(九時四十分)スキーを肩にし、強風に雪の飛ぶ中を登路に従つて眞すぐに下り出した。順位、野村、吉野、濱口、齋藤、國分。間隔約十米突。然るに尾根から約五十米突程下つた時突然吉野と濱口との間の雪面に半圓形鋸齒狀の龜裂を生じ板狀雪崩を起した。(十時頃)雪崩は初めは速力弱く、その上にさらはれた野村吉野二人の姿も明瞭に認め得た。併し斜面が急になり眼界を没する邊りから速力も著しく速くなつた如く、勿論二人の姿も斜面の下に呑みこまれてしまつた。雪崩は濛々と雪煙をたてた。薄氣味の悪い一種の響きが谷底に吸ひ込まれて、又元の如く靜まりかへつた時殘された三人は再び小太郎尾根に引返し、草スベリ右側の尾根に従つて下つた。下り乍ら二人を呼ぶ。下方から吉野の應へる聲が聞える。下つて見ると吉野は尾根より約三百米ばかり

雜報 ○山の慘事

り下、即ち草スベリの斜面の中程の所に雪崩の右側の樫の木に擱つて居た。吉野は雪崩の中に卷かれつゝ段々雪崩の右側に押し出され——それと同時に速力も鈍つて來た。たま／＼眼の前に來た樫の木につかまつたのである。野村は、併し、姿を見せないのみならず呼んでも應へがない。枯木の邊りから雪崩の跡を検べ乍ら大樫池に下る。登る時に見た龜裂は、その下部の雪面が全部雪崩にさそはれて落ちてしまつて居た。池の上には丈餘のデブリが盛上り、池の水を割つたと見え、デブリの山が眞中で口を開けて割れて居た。野村の所持品も發見しない。其處で小屋に歸つて更めて搜索にかゝる。小屋では人夫がすぐ前が吹いた位にしか思はなかつたと云ふ事であつた。國分は雪崩のデブリは池の上でとまつて居るけれ共、雪煙が更に下部にかぶさつて居るのを見て、デブリより下部を探し、僅に下ると樫の疎林のある梢に、高さ約六尺の所に野村の上着の引かゝつて居るのを發見した。

そこでなほも下へと探して見た。すると約二十米突先に雪の上何か墜落したあとの如きものを見、なほそこに小量の血痕を見た。血痕は其處から北方にトラヴァースして居た。此の邊り積雪深く、腰を没する程であるのに、此のトラヴァースした跡は、余り雪にもぐつて居ないので、一時は不思議に思つたけれ共、遺行した爲にさうであると云ふ事に氣づいたので、その

あとをつけた。さうして大樺澤に出た所で野村を發見した。左下肢挫折、但し意識は全く明瞭。時は正午頃。それより國分、齋藤、濱口、他人夫一人協力して廣河原の小屋に負傷者を運んだ(午后四時)。野村は足先並に手先に凍傷を起して居た。不充分乍らありとあらゆる材料を以て傷の手當をして安靜をはかる。上着を失つて居た上、長時間に亘つて雪中にあつた後のためか野村は瀕りに寒さを訴へた。夜今後の處置を相談する。野村は打電先等について指圖する程元氣であつた。

一月七日(晴)人夫一名及齋藤は柳澤に急を告げに出た。芦安から野呂川を溯つて、救援人夫を連れ来る爲である。國分、吉野は始終野村を介抱した。他の者は大樺池小屋へ荷物をとりに行つた。野村は前日に引かへ暑さを訴へたが元氣は衰へて居ない。雪崩の起つた時の有様、雪崩にまき込まれてからの状態等についても語つた。

その談話によると最初雪崩の起つた時は地震にやられた様に身體がぐらついた。雪崩と知り、第一にスキーで滑り逃れやうとしたがスキーをはいて居ない事に氣づいた。でスキーをほうり出し、次にルツクサツクをとらうとした時もう雪崩にさらはれてしまつた。初めは苦しみ甚しくとても助からないと覺悟したけれ共、次の瞬間に表面に抛り出されたので氣をとり直して何とかしやうと努力し出した。その内又雪崩に吞まれ、又外に出され、こう云ふ事を繰返して行つた。野村は上着のとれた時も

記憶して居た。身體のとまつた時口の中は雪で一杯であつた。雪を出し、見廻した時、大樺の小屋より下に持つて來られた事に氣づき、そこで下の廣河原の小屋におりやうとして努力したのである。

野村は夜湯を訴へる事甚しく、安眠をしなかつた。

一月八日(吹雪)状態大差なく、精神は確かであつたが、身體の方は衰弱を見せて來た上に胃の痛みを訴へた。夜柳澤の人夫が歸つて來た。寒氣甚し。

一月九日(晴)野村熱高く食欲なく、依然胃痛を訴ふ。衰弱加はる。夜芦安より漆山並に人夫五名來る。

一月十日(晴)廣河原小屋——カジ小屋澤。八時五十分小屋出發、野呂川を下る。背負子に負はるゝため野村は身心共に甚しく疲勞した如く見え豫定の如く行程をとる事能はず。カジ小屋澤の出合の小屋に泊つた。午后六時野村合名の岡崎氏及び醫師來る野村は非常に喜んだ。

一月十一日(晴)カジ小屋澤——深澤出合。早朝出發、鮎差から擔架にして夜又神峠をこえやうと云ふのが豫定であつたが、前日の如く背負子で擔ぐ時腦貧血を起したゝめ、不敢取カンフルを注射し、九時急造の擔架にのせて出發した。併し澤の状態悪く擔架での通行不可能となつたゝめ又負ぶる事になつた。十一時三十分深澤の出合着。晝食後引起さうとしたら野村は又貧血を起し、一時喪心状態に陥つた。應急の注射で持直した如く

見えたが、呼吸頓に困難を加へ、前進全く不可能となつた。醫者は此の時既に問題は時の問題であると云つた。野村はまだ安靜にして力を養ひ出發しやうと考へて居て、人に會ふ事を欲しなかつた。併し衰弱は徐々に進み、遂に四時五十二分永眠した。

夜雪降る。急造の破れ小屋に遺骸を安置し一同通夜。

一月十二日(晴)深澤——芦安——蕪崎。此の日、野村の生前心待ちにして居た鮎差に出、夜叉神峠を越えて里に出た。

以上は——前に斷つた通り——國分君の『手記』に自分の覺書を綜合して書いたものである。大體の記述に誤りなきを信じては居るがなほ記述上の重點の置き方等に誤りなしとは斷言出来ない。寛容を願ふ次第である。一行によつて齎された報告は詳細を極めたものであつた。それは負傷者に對して一行のつた處置と心盡と共に登山者としての平素からの訓練を物語るものであると私は考へた。全ての友達はかけがへのないものである。併し山の友達、山の生活を分ち合つた仲間を失ふと云ふ事は、或る意味では、その友達と共に暮した過去を葬り去つてしまふ事ではないであらうか。山の憶出はその時そこに一所に暮した人と語る時のみ本當に生きて歸つて來るのだから。筆者は此の遭難の記事を書くとき云ふ義務を負された者として、自分に豊富な材料を與へられた事を一行に對して感謝すると同時に、

それ等の人々に野村君の不幸の與へた癒す可かざる痛手に對し

て哀しみの心を送る。

『大樺池よりする登路は、池より上部に全く大なる樹木なく加ふるに夏季草地なれば雪崩の危険大であらねばならぬ』之は國分野村兩君の筆になる『積雪期に於ける南アルプス登山』、『登高行』第七號(一九二九年)の一節である。事變の報を耳にした時私達の第一に聯想したのは自ら此の一節であつた。草スベリを Lawinenzug 雪崩常習斜面と見たのは今度の事よりしても正に當つて居る。たゞ此度の雪崩は草スベリが小太郎尾根の側斜面になつてしまつてから先の尾根に近い所に起つた板狀雪崩が草スベリに於いて二次的の上層雪崩を惹き起したのであるから、地表が草地であるとかないとか云ふ事は直接に關係がなかつたのである。

新雪が相當にあるとか氣温が高ければ人は直ちに雪崩を聯想する。併し雪崩は氣温と關係のない、又新雪からするものでもない板狀雪崩であつた。板狀雪崩は尾根又は鞍部近くの風下にたまつた雪が風のためにクルステとなり、而も太陽の光線の爲に影響せられて下層雪面と融着する事のない場合に出来るものであると云はれて居る。大樺小屋から上を見た時雪崩の出たあたりが風が雪をまいて居たと云ふ様な事は丁度その時の偶然であつたかも知れないが、冬期最も多い西風に對して風下にあたる其邊りは確に板狀雪崩の潜在地點である。曾つてルートゲルス

は『總ての雪崩の中最も危険の潜める最も豫知し難き、測り知る事の出来ない結果を來すもの』として此の板狀雪崩をあげた。

前日は豫め偵察を行ひ、その日も充分天候雪質に注意を拂ひ乍ら登り、一度は斜面を事もなく登りきつた上でのその歸りがけに、此の魔物にさらはれたと云ふ事は、全く不運と云へば之程の不運はない。後から思ひ返せばこそ色々な考へも浮ぶ様なものゝ之はたま／＼その場に居なかつた者の岡目八目であるが、初から冬の山に足を入れない程の慎重家の机上の空論に過ぎない。たゞ併し、我々が之まで板狀雪崩について現實に注意を喚起せられる場合が比較的少かつたと云ふ事は事實である。野村君の場合、それが我々に對する警告としては餘りにも拂はれたる犠牲が大にすぎるものではあるが、何れにしても我々に此の方面への一層の注意を向けしむる機會とはなるであらう。

何うして此の『最も豫知し難き』雪崩を豫知しうるか、物の本にはビツケルで探りを入れるより仕方がないと書いてある。併し、探りを入れた所で果してそのクルステが本當に雪崩れる可きものであるか或は又それ程に危険を潜めたものではないのかを何うして判断すべきか。それともクルステの下に幾分なりとも質を異にした雪層のある場合は全然かゝる雪斜面を避けなければならぬのか。何故一行の登りがけに雪崩が出ずに下りがけに出たのであるか。雪面が半圓狀に鋸齒狀に割れたと云ふ事——之は直線的なスキ一のシブールとは異つた線でなければ

ならない——は如何なる意味のものであるか。(一行の記憶によれば雪崩の起つた點と登りかけに歩いて居ない、即ち、半圓の下部を斜にかけ、キツクタインの後その上部を斜にかけて居るのである) 凹狀雪面の上のウインドクルステはその收縮率を下層雪と異にする所よりしてその下層雪との間に空間を作る場合があると云ふ事と此の半圓狀のキザ／＼の線とは何か關係がありうるであらうか。クルステの上を歩く時には一般にスキーに力を入れて角づけをせざるを得ないと云ふ事が一般に板狀雪崩の發生と關係がありはしないか何うかと云ふ様に殆んど無限の問題がある。

野村君の遭難を簡單に報告した此の記録が全般的に冬の山に就いての研究——冬の山の小屋の設備等をも含めて——を幾分なりとも促すと同時に、此の方面に對する我國に於ける「*mountaineering*」の一步前進のために資する所あれば幸ひである。

(松方三郎)

○岩宮遭難實記

常に共に樂んだスキーの無二の友であつた従兄を失つた悲しみ又其の最後迄側に居りながら、恐らく其の當時最善と思つて爲した事が何の役にも立たず、却つて禍の種と成つたかも知れない自分の取つた行動に對する後悔の念に責められて、一時は兄弟親方にも其の話しを聞かれる事は僕には非常に堪へ難い事

であつた。然し従兄と一番密接な關係に在り、又僕の見たと、三の新聞に記載された誤報に對しても、遭難の真相を御報導する事は僕の義務かも知れない。

今度のスキートの豫定は發補に三、四日滞在し熊の湯へ出てそれから草津へぬける積りであつた。そして發補滞在中に天氣を見て岩菅山に登る豫定で有つた。そして僕等が發補に着いたのは舊臘廿四日(昭和四年十二月)であつた。

翌廿五日は十時頃迄發坊をして午後から琵琶池迄行つて旭山で練習をした。其の晩宿屋へ歸つてから明日天氣が良かったら岩菅山に登らうと言ふ相談が一決した。早速帳場へ登路や行程を聞きに行つたが生憎く主人が居なかつたので、番頭さんに詳しく行程を聞いて就寢したのが十時頃だつた。

廿六日、前日の雪もやんですばらしい天氣だつた。餘り天氣が良いので景色を見晴し乍ら尾根傳ひに頂上へ登る事にした。途中寺小屋山の尾根に出る邊り迄宿屋の人に一緒に行つて貰はふと思つたが生憎く今日客が來るとの事で、詳しく路を聞いて出掛けたのが八時半であつた。

前日の降雪の爲にラツセルは可成り苦しかつた。夏の路は雪にかくれて少しも分らなかつたので互にラツセルを代り合つて林の間を縫つて登つた。寺小屋山の鞍部に出たのが正午であつた。其處で晝食に握り飯を各自一個づゝ食べ、後の一個を豫備にしまつて置いた。それより寺小屋山の頂上を巻いて屋根に出

で、尾根傳ひで岩菅山手前約一里の地點へ來た。其處の見晴しは非常なものだつた。淺間山の煙の彼方に富士山の見えたのも嬉しかつた。時計を見ると二時だつた。此の分では頂上迄行つてはとも明るい中には歸れない事は分つて居た。そこで暫く休んで考へた。目の前に目指す山頂を控えて引返す氣には到底なれなかつた。まして天氣はすごい程晴れ渡つて居たのだ。兎も角、三時迄に行ける處迄行く事にして、残りの握り飯で元氣を附けて登り始めた。

三時は來た。然し山の肩迄來て居る僕等には此處で切上げる事は出来なかつた。結局山頂へ着いたのが午後四時であつた。さすが頂上は風が有つて可成りな寒さであつた、秩父宮記念碑の前で僕等の記念撮影をして居る間に手袋はカチカチに凍つて指が痛くなつて來た。早速、アザラシも取らず肩迄降りる事にした、肩の林の間でしばらく休んだ。萩原は此處で一人残した半分の握り飯をうまそうに食べて居た。

頂上を極めた喜びに元氣が出て僕等は元來た道をどん／＼降つた。尾根を終つて寺小屋山を巻く邊り迄引返した時丁度日が暮れた。早速ランターンを附けて又降つた。蠟燭は三本有つたので宿屋迄は充分保つと思つて居た。然し其の頃から従兄は勞れ氣味で轉倒する事が度々だつた。非常な不注意な事には、晝食の爲め握り飯以外に僕等は何も食料品を持つてゐなかつた。そこで従兄のリユックサツクを僕と萩原が代る／＼背負ひ、他

の一人がランターンを持つて先きに立ち、従兄を間に挟んでゆつくり進んだ。

寺小屋山を登き終つて大部降つた平坦な所に來たのが七時半頃で、此の時二本目の蠟燭が消えた。従兄の疲労は益々甚だしく、立つては轉び〱して居た。三本目の蠟燭をつけて休み〱約十四、五町も降つた時に最後の蠟燭も遂に消えた。それからマツチを擦つて少し降つたが餘り従兄の疲労が劇しいので僕が従兄と一緒に残り、萩原は救援を頼みに宿屋へ向つた。其處からは宿屋迄十町も無かつた。其處で休んでる間も従兄は眠くてしやうが無いと言つて居た。僕も従兄も勿論雪の上で眠る事の危険は良く知つて居た。不幸にして僕のマツチは先程萩原に渡してしまひ又生憎く従兄も持つてゐなかつたので焚火をする事も出来なかつた。一時間位其處で休憩したが救援の來る様子も無く、萩原が途中どうかしたのではないかと話し路をたどつてソロ〱歩く事にした。丁度星も皆隠れて眞暗闇ではあつたが晝間登つたスキ一の跡の白い雪の高低を直感的に認める事が出来た。従兄も最初の二三町は轉びながらもどうやら歩いたが、終には一足歩いては轉び、轉んでは其處で十分位休んだ。其の間中も絶へず話しかけたり、はげましたりしないとすぐ眠つてしまふ。疲労したものを襲ふ睡魔が自分に死の危険をも忘れさせる程辛辣なものであるといふ事は僕は其の時始めて知つた。腕を肩に掛けて一緒に滑つたが段々に重味加つて來ると

二、三間も行かぬ中に一緒に轉んでしまふ。そしてうつかりすると行ききの路を見失つてしまふ。

何はともあれ、行きに行つた路さへたどつて行けば、たとへ何時間かゝらうと遂には宿屋へ着けると僕は思つて居た。

然しそうして居る中に従兄は謔言を言ひ出した、此には少々驚かされた。此處で氣でも失はれたらどうしたら良いか僕にはとても分らなかつた、こんな事になるとは思はなかつた僕等は勿論最初から氣付け薬などを持つて行く筈が無かつた。

救援の遅いのも僕には一つの氣懸りだつた、萩原と分れてからもう二、三時間は經つて居る。遅くももう來なければならぬ時刻である、分れる時に約束した通り元來た路を着實に踏んで居る僕等が救援の者と行き違ふような事は斷じて無かつた。そうすればどうしても萩原は途中で迷つて居るに違ひない。兎に角宿屋はもう二、三町の先きに在る。其處迄はどうしても行き度い、従兄はもう自分で立つ事は出来ないらしかつた。抱へる様にして少し行つたがそれは到底不可能だつた、従兄の身體は石佛の様に重かつた。

やがて僕の最も恐れた事が來た、従兄は呼んでもゆすつても其れに應じなくなつた、たゞ時々異様に呻つては手足を動かした。

仕方なくリユツクサツクを下に敷いて其の上に寝かし、身體をもんだり、足をさすつたりして手當をした。又度々大聲で救

援を呼んでは見たが其れに對して何の應答も無かつた。

僕は最初從兄の失神を空腹から來た目まひではないかと思つた。然しいつ迄経つても意識を回復しないので非常に心配になつて來た。萩原が路を迷つたのは確實になつた。然し元氣で居てくれればよいが捜しあぐんだ揚句途中で雪の中に倒れて居るのでは無いか。若しそらだとすると宿屋へ知らせて捜させなければならぬ。

尙二時間救援の來た時の喜びを想像して其處に待つて居た。其れは僕には非常に長い間だつた。色んな事が頭の中に次々と浮んで來る。手はたゞ機械的に從兄の身體の上を動く。

呼吸はして居るが依然として從兄の意識は恢復せず、又頼みに待つ救援も來ない。加之、身體の重みは前にも増して來る、背負つて行く事はとても出來ない。止むを得ず僕は太急ぎで宿屋へ知らせに行く事にした。上着をぬいで從兄の大學の制服の上に着せると一目散に宿屋へ走つた。宿屋迄は十分もかゝらなかつた。

案の定萩原は着いてゐなかつた。直ちに急を知らせて宿屋の人に萩原の搜索を頼み、僕は番頭一人を連れて從兄の處へ引き返した。

それから焚火をし水を飲ませて約一時間位手當をして居たが意識は依然として回復せず、スキーの上に寝かせて宿屋へ連れて行く事にした。僕が宿屋へ最初に告げに行つたのは二時半頃

だつたが、其の後應援を頼みに行つたりして從兄を宿屋へ連れて來たのは夜が明けてからであつた。丁度同時に萩原も番頭に連れられて無事に宿屋へ歸つて來た。

萩原は宿屋へ向ふ途中、マツチがしめつてしまつて點火せず遂に方向を間違ひ、加ふるに片方のスキーを滑らして見失つた爲、大いに困り藪の中を下へ〜と降つてしまつた。

又僕等の聲が宿屋迄達しなかつたのは、宿屋の前の流れの音のせいもあらうが、又宿屋では、多分頂上の小屋へ僕等が泊つたと思つて寢てしまつて居たので、僕が宿屋の戸を開ける迄氣づかなかつたのであつた。

從兄を宿屋へ連れて來て、始めは火を遠けて摩擦をした。その時直ちに醫師を迎へに行つたら或は助かつたかも知れなかつた、然し疲勞し切つた僕等にはそこ迄頭をはたらかす事は出來なかつた。摩擦の經過は非常に良かつた。宿屋の人も大いに骨を折つてくれて晝頃迄かはるゝ摩擦を續けた。呼吸も脈も殆ど順當になつて來た。幸ひ其の晩は暖かだつた爲か僕も萩原も亦從兄も凍傷はして居なかつた。然しどうしても意識を回復しなかつたので午後萩原が醫師を迎へに湯田中へ降つた。其の後從兄の容態は急變したので午後六時半僕は電報を打ちに湯田中へ降りた。翌朝、城下醫師が登られた時はもう全く絶望だつた。

(太田壽記)

○錢函峠附近に於ける北大生の遭難

北大豫科二年坪田進太郎君他三名は Y・M・C・A. の會員で昭和四年十二月三十一日午前八時札幌驛を出發、ヘルペチャヒユツテにて正月を迎ふべく、輕川驛から南方三里にある同ヒユツテに赴いたが、坪田君はヒユツテの僅か手前で小樽内川に轉落して衣類を濡し、焚火を爲して衣類を乾し等して意外の時間を費やし、一行がヒユツテに到着したのは午後八時半頃であつた。元日は小屋に滞在、二日は午前八時半ヒユツテを出發して歸途に就いた。天氣晴朗で錢函峠に着いたのが十二時半、晝食後西方に在るタンネの林にてスキーを樂み、暮色漸く迫る四時に錢函驛へと急いだが坪田君の疲労著しく加はり、ビンディングは緩く不完全で一間に一轉倒、三尺にまた轉倒、自力では最早起きられず、外れるビンディングもたえず三名に直ほしてもらい一町のスロープに一時間を要する程であつた。やがて全く日は暮れ寒氣次第に加はり、氷結せる握飯を三名は辛うじて食べたが、坪田君は食べる氣力は全然失ひ、皆に強ひられたが遂に食はず、一行は澤に沿つて下り始めたが、寒氣と飢餓は愈々加はり、午前一時頃には坪田君は意識も定かならず最早歩行困難となつた。一行は尙も坪田君を相けて丘に登り街の灯を認めその方向と所在を知らんとしたるも灯を認め得ず、尙も進行を續けたが三日午前四時、坪田君は遂に絶命するに至つ

た。三人は取敢へず坪田君の屍體をそこに残して五町も行つた所、幸ひにも「百萬坪」の水切場に到達し、應援を求めて引返へし屍體をかついで百萬坪の人家に辿り着き急を告げて村民の力を借り坪田君を介抱せるも遂に蘇生せず、他の三人は手當を受けて元氣稍々恢復し、一名は同日午後一時札幌に歸つて急を告げたので關係者は直ちに現場に急行し、屍體を護つて歸札すると共に、他の三名は大學病院に收容手當を受けたが、一名は未だ入院中である。

他の二名は退院靜養中なるが未だ興奮の爲に充分語る事が出来ず、その遭難の真相も不明であるが大體の話を綜合して見ると坪田君の死因とも思はれるものは、同君がスキー合宿後未だ十分なる靜養をなして居らず、多少身體の疲労を感じて居た事、同君は自分の靴を修繕中で友人のを借用して意の如く滑走歩行する事が出来なかつた事、當日は風強く、焚火が燃えつかず十分なる暖を取り得なかつた事、食欲全く缺除し、極度に空腹を感じ睡眠を催すに至つた事、尙平素から心臓が健全な方でなかつた事等にあるらしい。一行の下山に取れるコースは夏期に於ける下山道の方に近く大部道より東方に偏して居たらしい。

以上は「北海道帝國大學新聞」昭和五年一月二十日の紙上に報導されしものゝ大要を摘記したものである。何分新聞記事の事として誤謬も可成ある様であつて真相を穿つて居るとは言へないが、詳細なる真相の發表は後日に待つ事として、取敢

へ干揚げた。

○各學校山岳部消息

立教大學山岳部

五 龍 岳

一行 逸見眞雄、堀田彌一、小原勝郎

一人夫 竹澤長衛(戸臺)、横川藤一(四谷)

十二月十三日(晴)大町―四谷、十四日(晴)四谷―八方中繼小屋、十五日(晴)小屋―唐松小屋往復(米、炭運搬)、十六日(晴)

中繼小屋―唐松小屋―唐松岳及び不歸附近偵察、十七日(曇

後雪)小屋―大黒岳―五龍岳―小屋

赤石岳・悪澤岳

一行 水越誠一、森上金光(人夫)

十二月十四日(晴)大河原―小澁湯―廣河原小屋、十五日(晴)

赤石岳往復、十六日(晴)休養、十七日(晴後曇)悪澤岳往復、

十九日(曇)聖行の爲副川の雪の状態偵察に百間洞まで行く。

大澤岳其他積雪少き爲絡めず目下の状態では野營せざれば見

込なし。

鹿島槍ヶ岳

一行 逸見眞雄、堀田彌一、人夫 志應喜一(芦昫)

十二月二十九日(雪)大町―鹿島、三十日(曇)大冷澤北俣西俣
の出合に天幕を張つて戻る。三十一日(雪)鹿島―野營地、昭

和五年一月一日、吹雪後曇、風強し、滞在、二日(晴後吹雪)野營地―大冷澤に登る―向つて右手の瘦尾根に取り付き國境尾根近くまで登りたるも吹雪劇しく雪深く引返す、(午後二時)深雪乳に達せり。(昭和五年一月報告)

○山岳圖書紹介

屋上登攀者 藤木九三氏著

會員藤木氏の近著、研究・隨筆・感想・詩・等收むる所は多様であるが、全體を一つの創作集と見るのが當つて居る。やゝ研究が、つた物に在つても隨想が自由に混へられて居るから。流派とかレコードとかのわづらひから幸にして自由な登山者の世界では如何なる形式の山登りもそれが他人の迷惑にならない限り許容せられなければならない。何人も如何に山を觀じ、如何に山に登るかの自由を有し、又如何にそれを著述の上に發表するかの自由を有する。人々は發表せられたものが客觀的のものであるればその正否を論ずる事も出来るが、主觀的の色彩の濃厚なるものにあつては各自の好みに従ひ、傾向に應じて個人的の所見を披瀝しうるに過ぎない。「屋上登攀者」を一の創作集と見る自分は、従つて、暫く限られたる範圍内に於てのみ口をさしはさみうるに過ぎないのであつて、その問題になりうる事は恐らく本の核心からは遠い、技業の事柄と限られなければならないのである。

第一に感じた事は所々に誤譯がその儘に引用せられて居る事であるが、かゝる事が本全體の重みを問はしめる動機ともなりうる事を思へば遺憾な手落であると思ふ。ドウ・ソーシユールの時代が普通の歴史上の區分を無視して中世とせられて居る事、「フインシテラールホルンのスキー登山」等と云ふスキー・ジョーヴィニストのラン氏でも好き相な言葉が使はれて居る事も惜しい。又三田にはピツケル祭と云ふものがないと云ふ事。次に之は私の感じであるが普通の賣物のブリマのシユタイグアイゼンをシエンクのピツケルと列べたり、リーシユを故人の如く物語つて在る事も、一は今は亡き名工のために一は益々健在なるエンガデインの名人のために氣の毒の感なき能はない。單獨登山又はガイドレス・クライミング等についての所論に屢々海外での議論がそのまま我國の場合に引用せられてゐる事も、議論の根柢を不安ならしめて居る。アルプスでも玄人と素人との能力の差は岩にかけた場合は水にかけた場合程に甚しくはない。一人か仲間連れであるかの問題も氷河がシバルテを開けて待つてゐる所と氷河のない所とは甚だ色彩を異にする。アルプスに見出し得ない危険と困難とが我國の山々——特に冬の山々——に存在して居ると云ふ事は充分承認して居るにも拘らず、私は登山の技術的、又は形式的の問題を論ずる場合アルプスと日本の山々との間に横はる間隙を無視する事は許されなと思ふ。私は漠然ではあるが、ガイドレス・クライミングと云ふ問題は

日本では遠くの昔に卒業してしまつた問題であり、單獨登山等と云ふ事も吾國では、大部分は個人的嗜好乃至人生觀又は登山哲學の範圍内での問題たりうるに止ると考へる。特に後者の如きは餘り賑々しく論じない方が單獨登山者自身にとつてもうるさくなくてよいであらうし、また變なドンキホーテを造り出さない所以でもありはすまいかと思つて居る。最後に、或る篇の冒頭に「亡きO氏の永遠の靈に向ひベルグ・ハイルを三唱しよう」と云ふ所があるが、私には何うも此の用語がその場合に相應しくない様に思はれて仕方がない。死んで行く勇士が萬歳を三唱したといふ話は聞いた事があるが、死んだ人の靈に之を三唱したと云ふ事はきかない。問題が用語の事に落ちて來たから、序でに、自分の無智を表明する次第であるが、山行と云ふ言葉はいつ如何なる意味をもつて使ひ出されたものであるか。私は此の字を著者の序文の中に見出し、又同じ字をこの著者以外の人の書物にも見たので此の疑問を出し、大方の指教を仰ぐ次第であるが、私には何うも此の字は曾つて本の標題として用ひられた「山行」と云ふ支那傳來の言葉とこんがらかり易いし、そして之が衝突した場合自然古くから馴れた意味の方が親しく感ぜられるのである。

讀者の見らるゝ通り、以上は本の内容の核心、著者の主觀とは甚だ縁遠い枝葉の事柄に關しての自分の感想である。自分がかゝる枝葉の事柄がたま／＼累を主屋に及ばす恐れがあるが故

に之を遺憾に思つたのに過ぎないのであつて、著者の登山哲學に對してかれこれ云ふの潜越を敢てしたのではない。自分等よりは遙かに年長者である藤木氏が今なほ若者の様な若さと感激とを以て山に親しまれ筆をとつてゐられるのを見る時、一層自分如きはさういふ潜越を慎まなければならぬ。終りに著者の健在を祈つて此の一文を終る。

四六倍版、一五一頁、定價三圓八十錢、發行所大阪黒百合社

Climbs and Ski Runs: Mountaineering and Skiing in

the Alps, Great Britain and Corsica.

By F. S. Smythe, William Blackwood & Sons Ltd

London, 1923 (Crown, 8vo, XX+107 pp.) 21s.

遙に海を越えて此の書を寄せられた著者に感謝する。イギリスに於ける青年登山家中の屈指の人であり、特に近年にモン・ブロンを中心とした幾つかの登攀の故にその名を廣く知られた此の人の著述は、かなり各方面から歓迎せられた事であらうと考へる。若い人であるからであらうか、或は又著者自身の性格からであらうか、此本から受ける感じはシヌスターの本であるとか、フィンチ、或は又、ヤングなどの本から受ける感じとはかなり異つたものである。一種の溢い持味、言ふにいはれない豊かなユーモア或は又練られ切つた筆のさえ、それ等の物を我々はこれ等の物を讀むに際して屢々見出すのであるが、スマイスの場合、何よりも先づ若さが感ぜられるといふ事は否まれな

い。併し之は自分の個人的印象であるとか、又は之等のものに親しんだ年代から作用されての感じであるかも知れない。配列は大體登攀年代順であり、幼時の懷出に始まり近年のモン・ブロンを果敢なる登攀記録に終つてゐる。最後の『一登山者のアイロソフィー』なる一章は山への思索の深く進んでしまつた一部の日本の登山者達には或は餘り興味がないかも知れない。併し、色々の種類を異にし地方を異にした之等の登攀の記録は全く興味深くよまれる。自分一個としては『イギリスの山々』(第三章)『シレットホルン』(第七章)『Clogwyn dur Ardul 西側壁』(第九章)『雪崩』(第十一章)等を殊の外興味多く讀んだ。『イギリスの山々』では著者はフィンチのチャレンジに答へてゐる様に見える。『シレットホルン』は自分がたま／＼一人の初心者として同じ頃、同じ所をうろついてゐたし、同じ日にベル、スマイス二人に先だつてラウテラール山稜をわたつたりした事からして特別に面白くよんだ。シレットホルンからアンデルソンをかけてグレットクシタインに下つての翌朝、尾根をやかましくうつ電の音に眼をさまして見たら朝の嵐、つれのプラヴァンドは同じ様な朝の嵐で父親をなくしてゐるので眼の色をかへて望遠鏡をのぞき乍らウエツターホルンへ行つた人々の事を氣づかつて居た。今から考へれば丁度その時スマイスたちはその嵐にシレットホルンの西山稜でつかまり、例の猛烈な雷にやられてゐたのである。此の章は又、雷又は急激なる暴風雨の侵來について

の注目に價する記述を含んでゐる。同じ意味で『雪崩』の章も注意せらるべきである。之等二章の内容は何れも『アルパイン・ジャーナル』に出た事のあるものではあるが、之が再び此の本に轉載せられた事は喜ばしい。特に雪崩の章下に積雪の少い冬に板状雪崩の遭難多きを指摘せるカーネル・シトラットの記述がそのまゝのせられた事は此の方面——殊更に今冬の日本での色々の悲しき経験よりして——に注意を拂ひつゝある人々にとつて非常に歓迎せらるゝと思ふ。寫眞は徹頭徹尾美しいものである。氣分がイギリスの山だとか或は又瑞西の山々の氣分が全くよく出てゐる。遙に著者の健闘を祈りつゝこの短評を終る。

(以上二項松方三郎)

R、C、C、報告 二二 一九二九年、大阪市、R、C、C、本部發行、貳圓七拾錢

重要記事

雪華圖説

殘雪期の加賀連峯

因幡東南の山々

小谷附近

笈ヶ岳に登る

冬、春、單獨行

三月の前穂高

高妻、乙妻、白馬

春の劍澤入り
スキー登山に對する一考察
藤 木 九 三

『雪華圖説』といふ書名を見ただけで私は古雅な寫本を想像せずにはゐられない。北越雪譜』のことは話にもきいてゐたが、これは始めてである。加納氏の文を讀んで見ると『雪華圖説』の内容は中々科學的なものらしい。今日から約百年も前に當時の西歐に於けるのに比してさして遜色のない研究が我國に於て發表されてゐたといふことは甚だ興味あることである。文中轉載された『雪の效用』のくだりなど實に面白い。

加賀や因幡の山に關する紀行は珍らしいものである。東京に住む者が秩父、上州、野州などの手近い山へ出掛けるやうに關西にもまた割合に心やすくルユツクサクをかつぎ出すにいとところがあるやうだ。『三月の前穂高』、劍澤入り、かうした記録がだん／＼と發表されてやがて積雪期に於ける信飛越或は甲斐國境の高連山脈の状態に關する資料が豊富となり、設備交通の完備と相俟てそれ等の高山大岳をより廣い範圍の登山者に親しましめることゝなるのであらう。その意味に於て積雪期の登山に就ては單なる紀行よりも寧ろ記録に重きをおくものゝ發表を希望したいと思ふ。『冬、春、單獨行』はたくさんの案内人夫を引具してゆく人達に讀ませたいものだ。勿論誰でもかういつた登山が出来るとは思はない。またかゝる登山を多くの人に勧め得るものでもない。たゞ私は短い限られた時間に、多くの危険を

加納 一郎
丸岡 榮 一
水野 祥太郎
新井 久之助
丸岡 榮 一
加藤 文太郎
伊 藤 愿
南 勇 吉

冒して、また幾多の苦難を忍んでまで積雪期の高山に單獨登攀する筆者の心境を尊いものだと思ふ。「スキー登山に對する一考察」はサブタイトルにあるやうにシヨート・スキーの利用と効果についての研究である。吾國のやうに冬季悪天候と馬鹿雪とに悩まされるころでは、シヨート・スキーを以てする晩春の登山がもつと盛んになるだらうと思はれる。所謂日本アルプスはもとよりであるが、身動きもならない藪をもち、しかも冬季は夥しい降雪量に惠まれる上信上越の山々を四月から五月にかけてシヨート・スキーで心ゆくまで彷徨ひ歩いたならばきつと面白いに違ひあるまいと思ふ。

R・C・C・報告は誕生以來まだ第三號である。創刊號は何でもごく片々たるものだつたといふことであるが本號は實に尅大なものだ。恐ろしく生長の早いのに驚く。地理的關係及び全紙面を通じて窺はれるR・C・C・獨特の氣分といふやうなものが生み出した結果であらうと思ふ。

三高山岳部報告 第六號 昭和四年一月發行
重要記事

劍岳の東面

高橋 健 治

錫岳各ピークの名稱と信州側登路とに就て

今 西 錦 司
本 野 享 一

木曾殿越

雜錄

雜 報

○山岳圖書紹介

(春の南駒。遠山川兔洞を下る。四月の五龍岳。其他)

劍岳の東面はこの山を熱愛する筆者が春夏秋冬數回の山行によつて探り得たところを詳述したものである。私の劍とまで言はれるだけあつて随分こまかいところまで登つてある。挿入の寫眞に登路を點線に入れてあるのなどを見ると日本の山登りも大分やゝこしくなつて來たものだと思ふ。然しそれも岩登りの練習のためだとすれば別に氣にするにも當るまい。木曾殿越と名をきいた丈けでなんとなく懐古的な感じに馳られる。木曾駒に登つたことのあるものは、誰しもあのかぶかと茂り合ふ森林の美と、深く山肌に喰入つてゐる數多い谷々と、それらの上に聳立する岩嶺の連續とに魅力を感じるであらう。この紀行を讀むと未知の溪谷より山稜へ、山稜より未知の溪谷へといふ興味多い山旅の氣分がよく描かれてゐる。雜錄の内にも亦參考となるものが少くない。

山岳征服 三木高嶺氏著、昭和四年、大阪黒百合社發行、菊判、三一四頁、貳圓七拾錢

全世界に存在する大山脈の登攀史を過去のアルパイン・ブックスより抄譯したもので、巻尾の參考書目によれば可成廣汎なる範圍に涉つて山岳書を漁つてあるやうだ。自序にあるやうに山岳書を繙くことは山好きにとつて實際の登山に劣らない愉しみである。エヴレスト登山隊の報告が發表されるたびに私達はどうんなに若い血を湧き立たせたことであらう。最後の場面を

雜 報 ○ 山岳圖書紹介

讀んだときなど充奮して眠れなかつた位だ。山岳書を讀んで感奮することは容易であるが讀んだものから克明なノートをとつておくことは中々むづかしい。その意味に於て私は著者の熱意と努力とに敬意を拂ふものである。本書を通讀するものは、近代登山の勃興より今日まで僅かに百数十年の間に行はれたる人類の大山岳に對する惡戰苦闘の跡のいかに多きかを知り得るであらう。

全篇を十六章に分つ。第一章、人間の登り得る最高點。第二章、アルプス。第三章、マツターホルンの征服。第四章、カウカサスとアララツト山。第五章、アンデス山脈。第六章、カネーデイアン・ロツキヤと合衆國の山。第七章、アラスカの山。第八章、新西蘭アルプス及亞弗利加の山。第九章、諾威の山及シベリア山系。第十章、大ヒマラヤ。自第十一章至第十五章、エヴェレスト遠征。歐洲アルプスとエヴェレストに最も力を注いでゐる。挿入の圖版は原書と對比してやゝ鮮明を缺くと思はれるものもないが複寫である以上已むを得ない、とにかく讀むに樂な日本語を以てかゝる書物の上梓されたことを喜ぶたい。

Canadian Alpine Journal. Vol XVII. 1929.

重要記事

Mr. Waddington. by W. A. Don Munlay.

Trips of the Athabasca & Columbia. by J. M. Thori-

ngton.

Scrambles Around Maligne Lake. by M. M. Strumina.

Hogors pass at the Summit of the Solitaires. by A. O. Wheeler.

Ascents of Mrs. Redoubt & Casemate. by J. E. Johnson.

右に掲げたるものはみなカナデアン・ロツキヤの山々に關するものである。森林の旋、溪谷の旋の後、氷河を溯つて岩稜に取付いてゆく加奈太の登山は溪谷深林に恵まれた我國の登山家の心を強く誘惑せずにはおかない。

氷と雪 加納一郎氏著、昭和四年、東京、梓書房發行。四六版、三一八頁。

氷と雪といふ書名は深雪地に育つたもの住むものともより、夏山各山に想を寄せ、ウインタースポーツの快味に酔ふものにとつては無關心でゐられないものである。我山岳界に於ける積雪期登山の隆盛、運動界に於るウインタースポーツの流行は近年日覺しいものがある。然し乍ら氷と雪とに關して纏つた研究の發表せられたのをきかぬ。筆のごとく氷上を馳るスケーターの多くは何故あの透明な油氷にだん／＼と光琳様様のやうな斑紋が入つてゆくかを知らず、氷斧を打揮つて嚴冬の氷峯に攀づる登山者は山麓の深林を飾る樹氷霧氷の區別を知らないのではあるまいか。もちろんかゝることを知らずとも湖上を疾驅し、或は雪煙をあげて直滑降の醍醐味を味ふことは出来るけれども

氷雪に關する科學的現象の一端を、も識り得るならば、山に登るもの、冬季競技にたづさはるもの、楽しみは更らに幾倍かを増すであらう。

本書の内容は、一、氷雪思慕。二、水と氷の理學的性質。三、氷の藝術。四、降る雪積る雪。五、雪華の研究。六、積雪の性質とその形態。七、雪崩。八、氷河と氷山。九、氷期及び人と寒冷、の九章に分つ。豊富な引例は流麗な筆致によつて活かされ、科學的知識の養養のないものもつい思はず讀まされて了ふ。登山或は競技には關係ないことでも、なるほどこんな事もあるのかと啓發される事が少くない。山奥の温泉で吹雪に閉込められた日など、窓硝子のジャツク・フロストを透して來るはかない光をたよりに炬燵の上でこんな本を繙いたならばさらに興味は深いであらう。清楚な裝釘は本書の内容に相應しいものである。

又タツク 第一號

札幌第二中學山岳旅行部。昭和四年一月發行、壹圓四十錢。

重要記事

札幌附近の山岳に就て

中等學校山岳部の部報としては、たとへ先輩の力を籍りてあるとは言へ中々立派なものである。前記の『札幌附近の山岳に就て』は札幌に住む人達にとつては別に目新しいものではないが、東京あたりから冬季札幌附近の雪を楽しみに出掛けやうとする人達にはよい手引となるやうなものだ。添付してあ

る概念圖も陸測圖と對照して用ゐれば便利であらう。其他北海道の山岳に關するものが多い。夏季の北アルプスに關する紀行が三四篇ある。之は恐らく先輩の筆になるものらしいが寧ろなくもがなである。北海道といふ登山によい背景を持つてゐれば月並な日本アルプス紀行を載せるには及ぶまいと思ふ。

中蒲原郡山岳誌

笠原鐵太郎著。昭和四年七月。著者出版。

非賣品。四六版、百二十四頁。

新潟縣在住の會員笠原氏が中蒲原郡の山岳に就て郡誌に基き歴史的考證を試み、附するに之等の山岳の登山記を以てせるものである。書中の山名は耳遠いものばかりであるが新潟地方の會員の小旅行にはよき手引とならう。

霧の旅。第三十二號、昭和五年一月發行。

重要記事

四月の武尊山

吹原不二雄

大正十一年の秋に花咲から前武尊まで往復したことがあるがその時の記憶によると奥武尊までの尾根は藪がひどいやうに思はれた。いまこの紀行を見ると四月月上旬だと積雪のため可成樂に歩けるやうである。孤立してゐて日光尾瀬あたりの旅からいふと少し寄りみちになるので登る人は案外少いやうだが武尊山といふ山はどつしりしたい山だ。文中にある武尊牧場もよさうな所だ。こんなところに隠れたい、牧場があつたのかと私は抄らず遊志を動かされたのである。

山岳資料。第七輯。昭和四年十月發行。關東山岳會。

重要記事

茅ヶ岳及金ヶ岳

國 澤 武

どちらも千七百数十米に過ぎない山であるが、中央線の車窓からかなり著しく見える。八ヶ岳、白峯山脈などの展望、殊にその山頂からは八ヶ岳の裾野が素晴らしいだらうと思はれる。ちよつと氣のつかない山だが案外面白さうだ。

The Mountaineer. Vol. XXII No. 1, Dec., 1923

米國特有の高層建築物と山岳との比較美論のやうなものが載つてゐる。ちよつと面白い議論である。時計臺でロープ・テクニクク練習が行はれる世の中だから高い建築物に山岳に似た感じを持たせるのもよからう。本號はスベシヤル・スキーマンバーと銘打つてあるが、發行地のシヤトルあたりはスキーイングが行はれ始めてから日尙ほ淺いとみえて「スキーを購入する人々は……」などいふ程度の記事がある位で大して参考にはならない。

記録。一九二七——二八。第一高等學校旅行部。

各學校山岳部年報の部報だけのやうなものである。行程、時間の記録に簡単な感想を添えてある。年報にするとなると原稿の蒐集にも骨が折れやうし、なくもがなの紀行文まで収録するといふこともあらう。しかし記録だけならば毎年刊行してゆくのもきはめて樂であらう。二ヶ年間ずいぶん廣い範圍の記録を

收めてある。

二月の八ヶ岳。三月の組父岳。四月の仙丈及白峯。四月の鹽見岳。磐梯山スキー行。尾瀬ヶ原を中心とするスキー登山、など渺らず参考になるものだ。

ベルグ・ハイル 第五號、一九二九年、第四高等學校旅行部發行。

行。

重要記事

三月の白山とその附近

北野 三郎

釧の池ノ谷

津野 清也

雪の清水三國の山々

藤田 喜衛

笈岳と境川

犬養 孝治

焼、火打、晝闇山

小 松 榮

北陸、信越の山岳に關する特色ある記事を滿載してゐる、前掲のものゝ外本欄雜錄にも中々珍らしい紀行が多い。どれを讀んでも遊心を動かされる面白相な所が多いが僅かの閑暇を利用して東京から出掛けてゆくには少し遠過ぎる。地方々々の山岳雜誌を見ると狭い日本にもずいぶん山はあるものだと思へさせられる。

寫眞はコロタイプの色色やゝ凝りすぎたかの感があるが、白山別山、白山、柳谷、燒山、毛勝猫又など山の氣分は出てゐるやうに思ふ。

山へ入る日 石川欣一著、一九二九年十月、東京中央公論社

八十錢

隨筆集である。山に關するもの二十餘篇、其他十八篇を收む學生時代に盛んに登山をしてそれから暫らく山に別れてゐた著者が最近また山谷への思慕を蘇らせて昔の思出話だの近頃の感想などを輕妙な才筆で書き下ろしたものである。他愛がないといふ人もあらうが時にはこゝろいふ所の凝らない讀物もよからう。

スキー登山 船田三郎氏著。一九二九年十一月、東京、目黒書店發行。四六版、一五八頁、壹圓參拾錢。

著者は私のふるくからの知人である。そしてまた久しく前から稽雪期の登山に力を注いでゐる人である。今數年間の貴い體驗と熱心な研究とに依てこゝに本書の成れるを見、喜びに堪えない次第である。本書は廣く英獨佛の關係文獻を涉獵しそれに著者の意見を加へたものである。その内容は

スキー登山。スキー登山家。スキー登山前の準備並びに考究。スキー登山地圖の記號並びにその觀察。冬季山岳の氣象。スキー登山の技術。綱を用ひての技術。スキー登山家に與ふ。の各項に冬雪崩に關する研究文獻と、登山參考書索引と登山用語解とを添えてある。百數十頁の内に、尙發達の途上にあり且つ複雑な多くの問題を含む稽雪期登山に關する全般を盛つてある以上完璧とは言ひ得ないかも知れない。しかし詳述すれば前掲の一項目に就ても優に數十頁を要するやうな問題が多い。それを簡潔に纏めたところに苦心があると思ふ。スキー登山の益隆盛

ならんとしたまた一方に於て雪崩遺難漸く多からんとするとき本書の如き手頃の手引書の刊行されたるを喜びたい。

(以上藤島敏男)

○會員通信

唐松岳スキー登山

昭和四年四月

小池 文雄

△參月卅一日北安四谷白馬館着、大町梁場まで自働車梁場以北は雪道の爲棧を利用す。所々雪切れあり馬難溢す。争はれぬは春の氣、大地の底より力強く湧躍す、午後三時前記に到着、豫ねて問合はせて置きたれば館の人も萬事呑込み居て呉れて都合よし、明四月一日は村會議員の選舉にて人夫無しとの事止むなく出發は二日に延す。

四月一日曇天、朝より明日の天氣が氣掛りになる、雲は對岸の千米標高邊りまで山を隠す。明日の行程の一助と、他面身體の馴化のため、荷物の半分を八方尾根まで運ばんとし午前九時細雨の霰れ間を見て出發、細野の神社裏よりスキーを履く。雪は粗粒のザラメ氣温高きため極度に濕潤す。

一二〇〇米邊より全く濃霧の層に入る。スキーは左まで沈まざ。一七〇〇米標高邊より濃霧の上層に出ず。雪は一變して乾燥せる「クラスト」になる。

午後二時一九〇〇米の等高閉圈線の個所に到着。八方池の手前約四百米。雪中に置いて差支へなきピツケル。アルコールタンク。コツヘル。罐詰類。罐入の砂糖。等のものを目標の岩蔭に置き、海豹の皮を外し、二時十五分滑降の途に就く。三時細野四時白馬館着。

四月二日早朝暗雲低くたれ込めたり。午前六時人夫横川庄次郎と共に出發、七時細野の神社裏よりスキーを付く、気温は前日より下りしたため雪はカンカンになる。正午前日荷置きし所に到着。晝飯をしたたむ。之より荷重は倍になる、冬期登山の際等に果物の罐詰の汁等の流動物は疲労快復に適切と思はる。此の際も嗜好上バイナツプル罐を携帯しました。八方中繼の小屋は全々使用に堪えず。雪吹込めり。二四〇〇米邊より凍結せる雪稜となり、スキーを脱ぐ。夏道は全々通らず尾根許りを歩く。午後三時八方小屋に到着。今日春早き柳の芽煙る人里より氷雪の主稜まで一氣に二六六〇米の上まで來りしたため殊に疲労す、特に八方池より後の行程に於て疲労を増したり。

此の八方小屋(唐松小屋)は冬籠りのために作りしため設備完全、二重張りにて雪吹き込まず。

尾根は風のため雪少し。氷雪を巻く凍風の猛威の境にありては小屋の有難さつくづく身にしみて感ぜらる。屋外は風の音のみ飄々と寂し。赤き爐邊の火を見つめて盡きぬ夜物語りに氷稜の夜は更け行く。

桃色ばんだ夕陽の空に浮いた劍岳の威容こそは又と見られぬ景觀と思はれた。全山の岩膚に付いたエナメル様の氷膚、鋭峻なギザギザがあらゆる人の眼を力強く射る事であらう。

四月三日今日は神武天皇祭の作晨、五龍へ行かんとて午前七時小屋を出づ。前日よりの観測にて、問題は只時間と五龍の手前三百米の間の岩と氷であると見た。用意のものは必要の飲物と防寒具出来るだけ輕装して出發したが、小屋の南の小さなピーク昇降にもいつになく疲労と足の重きを感じる、天氣は變りさうにないが、風は猛烈に強く寒い。今日は宜く静養する日であつたか? 八方より四五百米南方の越中側をデラバースする個所に於て一寸したギャツプに出遭はし、不用意の事にはロープを失念して居たので、又小人数の事とて(余と人夫と二人のみ)あまり氣乗りせぬので、今日は一日附近を散策する事にし、引かへず、思へば實に遺憾な事だつたが仕方がない。八時半小屋に歸還、九時唐松岳頂上、不歸に面した方の様子を探らんとて唐松より第三のピーク上まで來て、ココアを沸かし春の陽を浴びて山を心ゆくまで眺める、不歸を通過する事は天候と時間に恵まれさへすれば敢て不可能では無いが、矢張、ロツクとアイステクニツクに熟練した氣心の合つた三四名のパーティーを持つに越した事は無いと思ふ。午後一時小屋着、雪眼鏡をひひたのであるけれども春の陽の熾烈なため日中は外では殆んど正視が出来ない程に眼を痛めてしまった。小屋内の暗黒と炭火の煙と

外へ出た時の熾烈な紫外線が殊に眼の爲めに悪いらしい。

四月四日午前六時下山の途に就く二四〇〇米よりスキーを履く。昨夜の降雪のためパンパンした餅状のクラストのため縦横困難、八方池の上方でスキーも脱ぐ個所あり、二〇〇〇米より下方は良コンデションでスキーは素的に飛ぶ、二三日来低温のため雪はガリガリに凍る、二〇〇〇——一五〇〇米まではサイドスリッピングとボーゲンの連続で、どんどん下りてしまふ一五〇〇米より下は表面融解せるクラストなので、前よりは一層よく飛ぶ程や湿つた雪が適當にステムして呉れるので余程の急斜でもボーゲンに丁度よい。七時半細野通過午前八時半四谷歸着、同日歸宅

案内は冬期と雖も岩と氷に自信ある者の方がよい様な気がします、たとへスキーは出来なくても登りの行動には大して不自由を感じません、頂上に於ける働きは單に、スキーを能くするだけでは出来ません、過渡期にある案内者等の内一方に良きものはスキーが出来ぬとか又他方に良くも氷の技術に欠くる所ありで仲々兩者兼備の案内は少ない様です、特に吾々オールドボーイとなつて校門を出た者には、仲々種々の事情でパーティを成して行かれぬ休假期利用者には、行を共にするに足る良案内を必要とします、私等が一緒に行つた案内は若くて大いに話相手として頼もしくありました。

鳳凰山白根三山

昭和四年八月

吉田 竹志

△拜啓、去る八月十日友人二名と飯田町驛發、十一日朝五時三十分重崎着、白鳳會常任幹事の柳木氏に人夫其他の事を頼み、清水屋旅館にて朝飯同氏と清水屋の盡力で準備整ひ、午前六時四十五分案内人夫一行六人自動車にて祖母石村電力小屋前迄、同七時五分に着し、それより軌道に沿ひ約二里にして小武川を横切り、左岸にて晝食後を少しく前進コア澤を涉り、十一時五十分鳥居峠下の三ツ角へ、清水澤を経て復た小武川の土橋を渡り、午後十二時五十分青木新湯着、庭前に立てば、東方遙に金峰其他の山々が雲間に高さを競ふが如く見へました。一時十分出發ドントコ澤の坂道を登る事二時間にして南精進瀧の向ひ岩上に立つ。見上れば花崗岩の險壁をたぎり落ること約十五丈、水清く岩白く、中々立派な大きい景色でした。再び道に戻り、坂は益々急に五時五十分最終の清水にて水筒を満し十分許りにして左方の溪間の斷崖に懸れる五色の瀧を見る、其狀恰も白絹を垂れたるが如く高さは二十丈許。榊と白檜の針葉樹林に囲まれた夕暮の瀧は何となく物淋しい感じがしました。登高を續けて六時五十分北御室小屋へ到着。拾二日五時五十分小屋を後に白檜の林中を潜り抜け、花崗岩砂の急斜面を攀ぢ七時十分賽の積に達して地藏岩を仰げば太き筆先を立てしが如く、近く東方には薬師觀音の二岳北に東胸ヶ岳、左に朝與岳其左方に仙丈岳

等を見る七時五十分風山約二七〇米へ登つて遠く望めば北アルプスは白馬より乗鞍嶽まで眼に入り、東方は左に八ヶ岳右に金峰國師の連峰は雲表に聳へ、西南に北岳間岳農鳥の三山あり、富士の高根は不相變雲間に高く姿を現し雄崇なる眺でした八時四十分小さな地藏佛の澤山祀られて有る前を左横に絡むで十時高嶺の三等三角點を極め尾根を上下して白鳳峠より左へ降り晝食十一時十五分出發し針葉喬木林の長い降り續けて午後四時野呂川を徒渉、同二十分廣河原小屋に到着宿泊。十三日午前六時發、大樽澤の水聲を後にして鬱蒼たる森林の間を辿り、大樽小屋（二三〇七米）に達したのが十時。三十分許り休憩の後丈高き雜草を掻き分け右手の尾根を目差して登る。長い登りを續けて漸く屋根上に出たのが午後二時。其頃から雷が鳴り出し忽ちばらばらと雨が降り出すと共に急に寒くなつたので各自に岩や偃松の陰に竦むで居た。私は目の前に咲いてゐるチシマキキヤウ、タテヤマリンダウ、ダイモンジサウ、ヨツバシホガマ等の美しい優しい姿に見惚れて居る中に空は晴れたので登路を續け三時三十分北岳三等三角點（三一九二米）上に立ちました。四方を見渡せば北に近く東駒山脈の連山、之を超えて八ヶ岳の群峰、東北に奥千丈、國師金峰等の秩父山塊を望み、南は間ノ岳農鳥岳より少し離れて赤石山脈、東南に富士の秀峰、西に中央アルプスの山々を眺め、中央アルプスの後方には左に御嶽右に乗鞍岳を見、其他の北アルプスの諸岳は、遠く夢の様に雲の

上に浮び出て居ました。四時二十分山頂に惜しき別れを告げ道なき傾斜を偃松其他の灌木に苦められ乍ら滑下り北岳小屋（約二千五百米）に着けるは六時十分でありました。十三日午前六時三十分發、天狗樺の中を潜りつゝ鞍部を指して攀ち上り更に屋根を南に傳ひました。足下の左右には黃花石楠、長之助草、イワキキヤウ、ミヤマキンバイ、キンボウゲ、ヨツバシホガマハクサンイチゲ、タカネヒゴタイ其他の可憐なる草花が目につきました。間ノ岳三等三角點（三一八九米）に達したのが十一時十分。一休みしてゐる中に空模様が怪しくなつて來たので同三十分山頂を下ると少し左側の斜面に未だ澤山に残雪が有りました。午後十二時半、間ノ岳小屋にて晝飯を済し、二時十分小屋を後にして農鳥岳二等三角點（三〇二六米）へ三時二十五分に着いたのですが、復驟雨が來たので大急ぎに下山、砂とザク石交りの大門澤の急傾斜の空谷を滑下り、大門澤小屋へ六時十分に着きました。十四日午前六時十分出立廣河内澤の右岸沿ひに下り一里位にして右へ深林の道に入り約一里にして早川の釣橋（大野屋橋）を對岸に渡り傳説の村奈良田を通り西山温泉の古湯に着いたのは午後十二時四十五分でした。直に湯に入りて垢や汗を洗ひ流し久し振にて人心地がしました。十五日の夜半より降りだしたる雨は風を交へ中々止みそうもないので決心して午前七時十分出發強風雨の中を館の茶屋へ辿り着いたのが十時少憩して持參の握飯に空腹を満し、名産の館に舌鼓を打ち十時

五十分出立、今は暴風雨と變じたるを物ともせず全身濡れ鼠の如くに爲つて十一時五十分出頂の茶屋、素通りして先を急ぎ、大降雨に恰も急流の如き細徑を馳せ下り、青柳へ午後三時半着直に自動車にて甲府驛へ達したのが四時三十分、此處にて人夫三人に別れ。午後九時九分新宿齋歸京致しました。

(八月十七日付)

京ノ澤溯行、國師岳

昭和四年八月

山田 多市

△京の澤の溯行を無事に終り昨八月三十一日午前五時新宿驛に歸着致候

豫定通り二十八日には二俣に、二十九日には京の澤小屋に各々一泊致し翌三十日京の澤に添うて本谷に別れ國師の水場まで廻行、國師ヶ岳三角點に到達、直ちに奥千丈の尾根傳ひを柳平に下降、其の日の中に諏訪村を経て鹽山迄飛脚致し候。

二俣より京の澤までは山岳二十二年二號に黒田氏の詳細なる記録有之、數箇所、それも極く深とすれ／＼に斜面を、へづれば大體に澤通しを樂に通過し得る程に候へ共可也危險な箇所も次ぎ次ぎに現はれ淵や瀧の連續は溪の深さと相俟つて一々目を驚かす許かりに御座候京の澤小屋より上流は、まだ誰れも通過した話を聞かず案内の廣瀬正太郎も、廻行の可否を疑ひ居り候ひしが事實は案外平凡なるを免かれず一ヶ所障子と稱する一枚岩によつて兩壁の間數尺に相迫まれる箇所あり一寸取りつく場

所を探すに骨を折り候へ共右側の岩の裂けめを傳ひ通過致したる他は、澤通し岩塊の据り不安定にして、足もとに注意を要する以外にさしたる困難も無く國師ヶ岳と奥千丈間の窪みへ大嶽山奥の院たる天狗岩よりの切開けが會する、所謂國師の水場へ到達致し候、徹頭徹尾石ころ傳ひなるも、午前七時四十分以小屋を發ち、休み時間を含ませて十一時五十分には國師の頂上に到着致し候。案内樂に通過したる爲一寸拍子抜けの體に候へ共澤を抜け出してから直ぐ國師、奥千丈からの眺めは、いつも乍ら素晴しき大觀にて、此の喜びの、うすれぬ中にと、まだ歩き廻りたき衝動を抑へて直ちに下山に着き申候。

尙餘談ながら諏訪村より金峰泉を経て柳平まで開かれてあつた木材のトロ路が只今は更に琴川添ひに劍ヶ峯の東側邊りまで延長せられ候爲奥千丈國師への登山者は大ひに其れを利用し得るのみならず他の登山路より幾分時間を節約し得ることゝ存じ候又金峰山へ直接登るにも窪平より金峰泉を経て其の日の中に金峰山直下お宮の小屋迄樂な行程故、黒平を経て遶するよりは時間の經濟にも相成るべくと存じ候。(九月一日付)

三 國 山

昭和四年十一月

長谷川 長次郎

△拜啓。小生去る十一月二十二日友人二名と共に上野を出發高崎に下車し翌二十三日午前五時四十七分高崎發にて後閑驛に下車仕候。高崎出發頃には快晴にて赤城の雄大な裾野を望見しつ

進行候も沼田驛邊にて天候俄然變化して粉雪を降らし申候。後閑より湯宿迄は乗合自動車にてそれより一更猛烈になつた吹雪の中を正午法師温泉に到着仕候積雪約一尺五寸程にて當地方にては初雪と申居候。直ちに三國峠へ向ふ筈に候も明日に延ばし浴客少なくのみびりと湯氣分に浸り候。二十四日快晴午前七時四十分峠へ向ひ候。積雪意外に多く九時三十五分三國峠へ到着仕候眺望よくそれより約一時間にて三國山頂に至り殊更の展望を恣にし下山仕候。歸途猿ヶ京より仰ぎし吾妻耶連山の雄姿には少なからず心をひかれ申候。

御坂山塊

昭和四年十一月 高畑棟材

△拜早。新嘗祭の連休を利用致し御坂山塊をほつき歩いて来ました。

十一月二十三日快晴。午前二時半石和驛に下車し笛吹川の支流なる金川を渡つてから鎌倉街道に従ひ聖武天皇の天平三年十二月時の國守田邊史廣足が神馬を献じた事や聖德太子の驪駒等に依つて名高い黒駒村に聚落してゐる長田、若宮、新宿などいふ古驛を過ぎ上宿で右に岐れてゐる神座山檜峯神社への賽路を見送ると間も無く夜は仄々と明初め十郎で十郎橋といふ木橋を渡り軽い坂をだら／＼と登切つてから振返つて見ると白雪を装ふた八ヶ岳白峰北岳等が曉雲を破つて美はしい山容を現し奥秩父から大菩薩へかけての連脈も亦明瞭に指摘する事が出来まし

た。

午前六時石和驛から約三里半の新田部落に來た時路傍の天野古壽といふお百姓さんの家に立寄つて朝飯を認め同七時に辭去して唐澤橋を渡り荒涼とした山坂をとぼ／＼と辿つて行くと間も無く御坂峠の北麓に位する藤野木に達しました(七時四十五分)石和驛から四里強約五時間程です。村の中程に在る火見柱の傍を左へ切れてゐるのが藤野木八町峠への道(道標に曰く——左八丁嶺ヲ經テ三ツ嶺ニ至ル約二里半苜置澤ヲ經テ笹子嶺ニ至ル二里強云々)。御坂峠へは一里半の片登りであつて之は金川の支流小川に沿うて美はしい樹林の中をうねり分岐點の道標の處から數町登ると小川橋が現れ之を右岸に渡越して行くと惣て恰も箱根舊道の如く石疊の様な道となりましたが全く何の苦もない善い道です。

御坂峠の頂上著が十時。富士・河口湖・三ツ峠・奥秩父方面・八ヶ岳・北の檜穂高附近・白峰三山等の眺望を恣にしてから十時半に峠を離れ元祿三年十一月吉日とした例の天満大自在天神石像の傍から立派な山嶺道路に従つて黒岳に到り更にミツケ・ミツケ峠(大石峠新道)・三ヶ尻(節三郎岳)不逢山を経て大石峠舊道に達し(午後四時)峠を河口湖側へ下り土民測量の都合上大石村の流石といふ農家に一夜の宿を借りました。

大石峠舊道は今でこそ頗る寂しい峠路となつて了ひましたが昔は甲斐と駿河の交通要路に當り古書に據ると之は甲府の東方

に位する板垣から國王(クダマ)・高橋を経て笛吹川を渡り小石和・八代・竹居・奈良原等の諸村を過ぎて鳥坂嶺(鳥坂峠) △一一〇(六・五米)を踰え上蘆川から大石峠(舊道)を越えて大石村に到り更に本集(本栖の事)を通つて駿河の井出から大宮へ行く道であつて日本武尊の御子稚武彦王が封ぜられて此の道筋に當る竹居に居給ふたので若津路と呼ばれ河内路・中道地圖に當る竹往還と出てゐる。一に右左口路と云ひ彼の東鑑(吾妻鏡)に「十四癸巳(治承四年十月)午冠武田安田の人々神野並に春田路を経て鉢田に到る……」とある春田路といふのも此の中道(右左口路)のことらしいとの説があります」と共に甲斐國內でも洵に古い官道であります。

十一月二十四日晴後曇後大吹雪。午前九時に流石方を辞去し再び大石峠の頂上迄戻つてから北節刀・中節刀・十二ヶ岳・鬼ヶ岳(四節刀)等で散々ノビてゐる内に天候漸く險惡となり(午后二時頃)夕刻遂に十二ヶ岳附近で惱烈な大吹雪に襲はれて少からず行惱み私に取つては全く初めての行程である十二ヶ岳・笹ヶ峰(地圖に毛無山とあるもの)間の險路を心細い小田原提灯の光を頼りとして注意深く進み同夜七時頃漸く長濱村の旅舎三浦屋に飛込む事が出来ました。因みに笹ヶ峰は村越さんの會員通信にもある通り之が通稱であつて地圖に従ひ『毛無山はどの山ですか』と里人に尋ねた處十人が十人『お知らん』と云ひました。

翌二十五日は段和山(行くのを取止め(雨溢きため)モーターボートを雇つて鶴ノ島・敷島ノ松島に遊び河口村に大樽・周圍二丈三尺・昭和三年二月内務大臣指定・天然記念物河口ノ大樽文部省)を探れてから船津に到り乗合自動車に依つて大月驛に出て即夜歸京致しました。

吾妻耶山、谷川岳、阿能川岳

昭和四年十二月

長谷川 長次郎

△十二月七日午後四時二十分上野を出發午後九時四十二分上越南線上牧驛下車、利根温泉に投宿仕候。

翌八日吾妻耶山に向ふべく昨夜案内人を依頼し置きたるも見當らず餘儀なく高橋理貞と云ふ強力を雇ひ午前八時出發和名中を経て九時四十五分大峯沼——大峯山の南麓にある無名の沼——に到着仕候。沼は周圍半里餘積雪の上に彩る落葉松林に圍まれて静寂に有之候。

春はさぞかしと思はれ心に再遊を期しつゝ大峯吾妻耶の鞍部の東に出づ、そこには石の華表有之眺望よく赤城武尊谷川方面の山々を遠望し膝迄雪に埋りつゝ十一時吾妻耶山頂に着し巾俵山頂には東を向いて高さ七尺位の石祠三個安置され居り候思はしからざる空からは遂に粉雪を落とす候も直ちにやむ。一時十五分出發山頂より西に約十米突ばかり下りたる處に吾妻耶林道通じ居りそれによりて高さ八丈位(佛の座せし形)の佛岩を過ぎ阿能川村より富士新田へ越へる峠に出で阿能川村へ下り湯原に

て強力をかへし小生一人午後五時谷川温泉谷川館へ投宿仕候。

九日晴天田村虎松を連れて谷川岳に向ひ候。昨日慶應の人が谷川岳南方の一五二五の獨標邊迄行かれた爲そこ迄は雪踏し跡を樂に達し候もそより雪量多く柔かき爲意外に時間を費し山頂間近ではクラスト堅く金標を穿ち申候天神峠では風烈しく寒氣きびしく候も次第になぎて暖かき事春の如く相成り眺望も絶佳、北の槍迄遠望し得る程に有之候。一時十五分出發四時半歸宿仕候。温泉は只今閑散にて小生一人にて御座候。

十日午前七時四十分田村と阿能川岳に向ひ候。谷川を右岸へ渡り直ちに桃ノ木澤より一〇七三・三の△を有する尾根の北よりに出づ。積雪と雜木に惱まされつゝ進み候も天神峠の上に笠雲かゝり阿能川岳もすつかり雲に包まれ候へば正午小倉澤を下る事に致し候。澤は中途瀧をかけ谷急の爲兩岸より押出せし雪殊の外深く胸迄埋まれる事數回にして一方ならず困却仕候かくて谷川の右岸へ出で二時半谷川館へ着し即日歸京致候。

(十二月三十日附)

新高山・楠梓仙溪

昭和四年十二月

沼井鐵太郎

△今年も何かと用事つゞきで漸く二三日宛宛秩父級の山位にしか行けませんでしたが十二月中旬になつて公用を帯びて阿里山方面に出かけ序で新高山に登る事が出来ました。そして東京に居た時からあこがれてゐた楠梓仙溪ナマヒシを下りする事が出来たの

です。

十二月七日夜行にて臺北發同行者私の共同者なる、東京商工出身の若月謙君、八日朝嘉義着、滯在泊、九日阿里山鐵道にて阿里沼ノ平に到り泊、十日阿里山よりタータカ駐在所に到り、小生一人及び巡查一名警丁二名と共に更に新高下駐在所(海拔大約一萬一千尺)に到り泊、十一日新高主山(一三〇三五尺)に登頂、引返してタータカ阿里山間より(兒玉東方鞍部)南に下つて楠梓仙溪支流ボホーニ溪に到り製腦會社の詰所(海拔約五千五百尺)に泊、此日臺北より同行の若月君は嘉義郡警務主任佐伯警部の一行と共に鹿林山より直接ボホーニ溪に下り斷崖を通過して(新コース)詰所に到り小生等と會す、十二日滯在、用務の爲腦察を廻る、十三日タッパン社矢野巡查(タッパン社出身)蕃人三名、製腦會社員日野氏等と同行六名にて詰所を未明に發足し合流點に下り、楠梓仙溪を下る、徒涉五六十回、水温攝氏十度以上、水深は一二期股間に達するも水涸れの時季とて先づ容易なり、難所三四ヶ所あり、タッパン蕃人の補助により漸く越ゆ、

一箇所黒部川の十字峽手前の悪場の如き感あり、午後四時半頃高雄州最奥のテプテガイ駐在所着泊、矢野巡查等は先へ歸る。

此の行程約七里半と稱するも道なく徹頭徹尾溪間のみなり、十四日テプテガイを發シタガマワシ(製腦會社詰所あり)、マガツン駐在所、紅花子、小林を経て甲仙に到り泊、行程十里又は十二里と稱す、十五日、甲仙より三千尺未滿の峠を越え老溪派出

所に出で、下行して六龜に到り泊、行程七里半、十六日所謂サクサク道路に入り、見附、バリサン各駐在所（バリサンは海拔大約四千五百尺）をへてバリサン溪に向つて下り中腹より以下に在る厩寮に泊、十七日往路を戻りて六龜に出で、乗合自動車にて旗山に到り、それより臺灣製糖の輕鐵に乗りて九曲堂驛に到り、之より官營鐵道に乗換えて高雄經由北上し、十八日夜中臺中に着、用事の爲下車同夜臺北に歸る。

阿里山・新高山にて快晴にて至極春氣に歩き見ゆる限りの山を望みて遙かに大平先生、高頭幹事の御不幸なる旅行を偲びました。登山道路は改修されても早さしたる危険は感ぜず、西山の險（めまひ坂と改稱）も易々たり、又新たに新高八景の立札もあります。即ち一、東山の新高夕映（阿里山の東山なり）、二、石山の花晶、三、鹿林山の雲海、四、一服谷の榭岩、五、めまい坂の遠望、六、西山の靈原、七、白木林の奇觀、八、主峯の日の出、此は先頃臺南州嘉義郡にて多數の投票より撰出せるものださうですが、當局ではなほ永久に残るよい名を希望して居ります故其内に又變る事でせう、尻押坂などいふ惡名がなくなつたのは結構で、此點郡當局も考へて居るやうです、新高下駐在所は今冬は蕃情危険なしとして冬の間丈タータカに引上げて居りました。此の駐在所は元の休泊所の少し上にあります。臺中州側の新高駐在所では依然として警備して居り、又アマチュアは勿論公用の場合にも中々登山さしてもらへないので、ター

タカ駐在所は元の鹿林山休泊所の東の窪の附近に出來て居ります。

新高山塊から流れる二大溪流、楠梓仙溪と老濃溪とは目下蕃情關係で通過してもらへないものです、私たちはどうなりナマセンだけを通してもらひましたが、老濃溪は當分の間とてもだめです、ナマセン溪下行は想像に反し歩き易く、又その右岸は大てい蕃人の狩獵の爲に焼き拂はれてゐまして草生地つゞきです左岸は之に反して殆ど原生林つゞきであるのも奇異でした。溪には崩落箇所多く、荒々しい臺灣の溪谷の特徴をよく示して居ました、然しどこことなく魅力のある美しい溪谷です、下るにつれて河成段丘が發達して居るのを見受けました、水もナマセン溪はずつと下流まで清澄で美しいのに老濃溪は濁つて居ます關山の麓あたりからすでに濁つてゐるときとします。

ナマセン溪は高雄州下のテブテガイあたりまで阿里山蕃のタツパン社の勢力範圍で、其爲に比較的安全だつたのです。テブテガイの少し先のマガツン社もタツパン社と同じツォウ族になつて居ますが言語は相互とも全く通じないので、臺灣山岳住民を言語學的に見ると全く面白いものだと思います。

バリサン製腦地への途見附及びバリサンで見た山の眺めもよいものでした。サクサク道路も一ど通つて見たいものです、此邊も北側は蕃情關係で素人の一寸入れない所になつて居ります。今度の旅行は毎日快晴で展望の美、山色の美、溪流の美、森

の美草原の美そして特に紅葉美と山の獸や魚の味覺の美に恵まれました。残雪は新高山の岩かげにわづかあるのみで、新高下でも水は凍らず、暖い旅でした、いづれ本文に御報告する機会があると信じます。なほ近々に新高山をゆつくりやるつもりですから、其際又御便りいたします。(十二月二十一日付臺北にて)

因に本誌二十四年一號

一三八頁 東合觀山、北合觀山は東合歡山、北合歡山。

一三九頁 上段四行、狩巢は狩巢。

一四〇頁 上段六行、花定道路は花定道路。

同 同十五行、カヤモミンはカリヤモミンの誤りです。

海澤川、大嶽山

昭和四年十二月

山田多市

△前略去る六日立川初發電車に乗じ武洲海澤川を觀に参りました、御嶽驛前から氷川行乗合自働車を(途中棚澤白丸間徒歩)海澤橋畔まで利用し、直ちに澤に這入りしました、谷添ひの棧道など珍らしく兩岸に迫り合ふ岩壁の思つたより見事なるにも一驚を喫しました、三ツ釜、ネジレの瀧、大瀧、不動ノ瀧等、日歸り程度此のあたりにして、全く勿體ない位な美觀を展開させて呉れます、足もとに押し並ぶまぐろ齋しの味覺——山葵に誘惑された譯ではありませんが白瀧澤に這入り込んだり等して稍々

時間を費しましたが、大嶽山北面の急斜面に取りつき可成辛い藪へつりの後三角點西方、露岩せる箇所に出ました、二等三角點へは午後四時を少し過ぎてみました。御嶽神社を経て降る途中、中ノ茶屋で夕食を認めるに三十分を費しても尙七時三十分には御嶽驛に着くことが出来ました。手近なところであるに不拘美事な瀧の連續せる譯で、然も大瀧や其上に落合ふ、不動ノ瀧等を觀る爲には可成な努力を要するなど、行き甲斐のあつたことを喜びました。(十二月九日付)

新高山各峯(主山・北山・南山等の岩登り)

昭和五年一月

沼井鐵太郎

△先日新高主山に敬意を表してから益々新高探勝——日本最高の岩の殿堂への憧憬が強くなり、幸ひ臺南州嘉義郡當局の理解あるはからひによつて、臺中州では振られた正月の登山を果す事が出来ました。日程は、

昭和四年十二月二十九日夜行にて臺北發、一行は木田文治、平澤逸一郎、齋藤三男、青木孝二諸氏及小生の臺灣山岳會々員五名。三十日嘉義、阿里山を経てタリタカ駐在所へ強行、泊。

三十一日新高下駐在所に到り泊、之より正月六日朝迄滞在し昭和五年一月一日は普通登山路より主山に登頂新年を祝し山幸を祈つて臺中州側を下り富士標高より尾根にのぼり之を傳つて北山に達し、歸途は山腹のらくなコースを下りて長命水に出で富士標高に上り其の少しく上より壑を過りて臺中州側舊登山口

イスなるギャリーに入り右壁を登攀して主山の東々南なる鞍部に
 出で山腹岩場を搦みて臺南州側登山路（尾根上）に出でて歸
 る。一月二日は主山登山路の主稜に達する所より南折し南山に
 到り、クライミングの練習をなしつゝ頂に到る、露途西方低き
 鞍部に下り南玉山（？）の一部に岩登りを試みて歸る。一月三日
 は主山登山路の大部分を利用し山腹をへつりて東山稜線に出で
 アンザイレン二組に分ち岩登りをなしつゝ主として西稜を登り
 下山は時間少き爲網なしにて下り、主山への稜線を上りて元日
 登りたるギャリー東方の尖岩頂に到り西側へ百呎アブザイレン
 して下る、それより主山へ比較的容易な（然し登歩に非る）スク
 ラムブリングをなして登頂、訣別をなして臺中州側道路を一の
 肩迄下り沙里仙溪頭を一寸へつりてよりガレを直下して臺南州
 側道路成功坂途中に下りて歸る。一月四日午前七時新高下駐在
 所發、タータカ駐在所を経て午後七時頃阿里山沼ノ平着、阿里
 山ホテルに宿泊。五日汽車不通の爲滞在、僅かに後藤岩の一部
 に登りしのみ。六日午前九時半阿里山沼ノ平驛發、午後四時頃
 嘉義驛着、同夜の夜行列車にて立ち七日早朝臺北に歸着。

一體臺灣の蕃地では正月の入蕃は警察官の正月を邪魔すると
 いふので餘り喜ばれないのですが、此のシーズンには特に臺中州
 側の新高登山を臺灣山岳會臺中支部で計畫中同州理蕃課長の名
 で「正月は遠慮してもらいたい」といふステートメントが發表さ
 れて一般的にはおじやんになったのです。私達臺北の者は始め

から研究的な山行を企劃したのですが、實行に當つては入り易
 い臺南州側を選び粗も純粹なクライミングパーティーだけに
 つてしまつたのです（尤も私ともう一人は多少の採集をやりま
 したが）。臺南州では新高登山の歌を作つて蕃人に歌はしたり、
 新たに阿里山登山口の新高八景を募集したりして大に宣傳して
 ゐる事は既にお知らせした事と記憶して居ります。

連日快晴が何より成功の一因でした。一回の登山で然かもア
 マチュアとして（そしてクライミングパーティーとして）新高山
 各峰を皆登つたのは私達が恐らく最初であります。尙冬の東山
 南山登山は最初であり恐らく北山登山もさうであると思はれま
 す。（尤も嚴密な意味の冬山即ち積雪期の山ではありません）南
 山へはアマチュアとして最初であり、又南玉山（？）は蕃人以外
 に行つた記録がないといはれて居ります。右の記録的な事つま
 らぬ事ですが念の爲一寸申上げてをきます。

新高山は三日間共毎日多少風が吹いて居りまして、特に三日
 には主山南山間の山稜で強風が吹きました、氣温は日中最高攝
 氏八度位最低零下三四度、平均（十）三度位でしたらう。夜は新
 高下駐在所（海拔約一萬一千尺）で八時頃既に零度になり曉方は
 零下五度位になりました。それでも例年より少しく暖かい方だ
 さうです。温度でいふと大した事はありませんが、晝間の寒さ
 は私が渡臺以來最も寒く感じたものでした。冬山の感じが強い
 事がありました。空氣は乾燥し切つて居り、之と日光の直射の

爲に意外に顔が焼け又服れ唇がパリ／＼に乾き、誰しも風邪をひき咽喉を痛めました。内地の冬山より辛い様です。臺灣の一萬尺峰に始めて登つた青木、齋藤兩君は一行中最も頑健な體でしたが、一回宛頸痛をやられました。青木君は特に昨春慶大出の所謂山干の猛者、日本アルプスの雪や岩の方がへこたれさうな人ですが、やつぱりやられたのです。どうも臺灣の一萬尺級は内地の夫れよりクライマースに苦痛の様です、此は屢々經驗された事實です。

残雪は先達での新高行よりも豊富にありました。ギャリイを登る時などは大分凍つた雪を踏みました。雪の外に夏ならば水が滴る瀧場などはすつかり氷つて居りました。霜は正月三日の朝に一度降つた丈です。此の快晴が曇つてはれたなら必ず霧氷があるさうですが、今年は遂にその美觀に接しませんでした。

主山・東山及びその間には實によい岩場があります。私達はほんのわづか試み且つアウトラインを見ただけです。東山へ主山からのルートはリツツバばかり行くと東山の最下部が一寸立岩になります、之を左又は右にさけて行けば全くクロープなしでも登れます。最下部の立岩は一寸クロープがある面白い岩場です。今度の行では岩がよく乾いて居り又凍結の爲の破壊も僅少で非常に登攀しよいのでした。いつでもかうではありますまいが、從來東山は餘りに凄い岩山に言はれ過ぎてゐたとも思はれません。やはり新高東山よりも大瀧尖山の方が物凄いに思ひま

した。東山の北側こそ期待したのですが、之も多少期待が裏切られ、寫眞で見る程絶望でない事が分かりました。主山の北側の絶壁は却つて寫眞以上に立派でありました。私達の見た範圍で岩場の相當の大きさといふ感じを持つたのは主山東側に列ぶ二三のギャリイ（私達の登つたものを含む）の内にありました。尙又、南山方面は又岩質も變つて面白い所があります。

南山といへば、この山からアリマンシケン、ラホアレ兄弟等をいたゞく、タマホ社の棲息地がよくうかがはれました。關山のすばらしい、ピラミッドの下にあつて、狩獵の爲や開墾の爲に盛に山を焼いて居りました。よい蕃路（未歸順蕃）が走つて居るのを見ました。又、東山に登つた日、先にフリーで行つた替丁や蕃人の話によりますと、彼等の一隊が雲峰（山名）の東側を超えて行つたのを目撃したさうです。最近アリマンシケンは再三臺東廳ブルブル方面に下りて来て平地に移轉したい意嚮を警察官に語つたさうですが、彼等のをひのラホアレ兄弟が頑として聞かないらしいのです。この話はすれば長くなりますし、雜誌に發表しては一寸さしはりもあるのでひかえますが、要するに關山を中心とする一帯の未歸順蕃も道路に追ひつめられて袋の鼠となつて来てゐるのです。さういふ時たま／＼臺中州側若しくは稀れに臺南州側に出て來ると一寸危険がある……と當局はいつて居ります。

新高各山峰からの展望其他の景色は實にすばらしいものであ

らゆる見得る限りの山々が望まれました。これが阿里山に歸るともうくもつてしまつたには、幸運兒だと喜びました。今頃は降雪中かもしれません。話が違ひますが、南玉山といふのは私の考へでは南山と同一物でないかと思はれるのです。蕃地々形

圖の記名はどうもをかしい、そして南山の領域を主山からの主稜のぶつかる所の西方鞍部迄とし、その西方のデグザグを南玉山と假りにするとしても、玉山といふのは新高山の舊名でありそれから考へて南玉山と南山は同一物に非るやの疑ひを抱いたわけです。南山は他の東山、北山、西山などと同じく領臺後測量隊によつて命名されたのですが、南玉山については命名の時代が明でありませず（少くとも私には）、調査してから改めて發表しやうと思ひます。但、特に南玉山とした事が分つた所で此の命名は正しくないと思ふ、なぜなら玉山に對して南の山は今の南山一帯であり、地形圖の南玉山はこの方向に少しく外れてゐる、又支那人の命名だとすれば大まかに命名した事が想像される（タツパンの蕃人は總て各峰ともバットンクランといふ）さういふ事になりはしないかと愚考いたします。

言ひ忘れましたがタータカからの往復三十一日から四日迄五日間はタータカ駐在所の巡查岡村氏、警丁石橋氏をはじめ蕃人警丁三名、タツパン社蕃人二名（内一名はナマセン溪下りに連れし者）の世話になりました、山へは岡村巡查だけをクライミングパーティーの組に加へ、石橋氏は大部分新高下に殘つて我

々一行の爲の炊事に従事し、毎日警丁一名蕃人一名宛が荷を持つて我々とは別行動に（但大體は一緒に）行つてくれました。マネージメントの如何でどうにでもなります。之が臺灣山岳のエキスベディションまがひの面白さでもあるのです。

尙今回要した費用は約五十圓近くです、此内には阿里山の旅館に二泊及び嘉義にて半泊の費用も含まれて居ります故、もつと奥に山本位にしたら四十圓餘で上るわけです。臺灣の登山が警察の厄介になつてなはさう高價でない事がお分かりでせう。

本年五月は會員マレーウォルトン氏他三名の方々が見えるといふので楽しみにして居ります、ウォルトン氏の大計畫果して行けるや否や、一にかゝつて蕃情關係にあります（蕃人は時として狩獵争ひある爲）。

なほ初夏には武田久吉大先輩が見えらるゝ由、益々多幸なりとせねばなりません、生物も風色もにぎやかな臺灣へ武田さんが來られたら凡人の數倍の時間が必要な事と愚考いたします。ぜひゆつくり御出で願ひたいものです。

今冬、我々の他に臺灣の登山界は、大橋捨三郎氏が大平先生に負けず老齡の身を以て鹿場大山に行かれし外は、臺灣山岳會臺中支部の催しの一隊が霧社、立鷹、能高方面に出かけた位のもので至つてさびしいものです。

之から當分は臺北附近又は臺中附近の低い山々をこつくとやるつもりです。（一月十日付）

會 報

○第二十四回大會記事

從來本會にては毎年一回夏の登山期に先立つて會員大會を開催し、諸般の會務報告をなすと共に山に關する講演を公開して大に一般の登山熱を煽り、登山趣味の普及と登山氣風の養成とに力を盡し來つたのであつたが、時を経るに従つて會員大會もいつしか山の講演會たるの觀を呈するに至り、大震災後は全く單なる講演會と化してしまつた。それも悪くはない、然し名實共に相副ふ會員のみの大會を開くことの必要を感じて來たので、茲に昭和五年二月を期して之を開催することに決したのである。

昭和五年二月二十三日赤坂三會堂に於いて開會、定刻より三十分遅れ、午後一時三十分、司會者藤島幹事開會の辭を述べ、木暮幹事を座長に推し、左記の如く報告及び會員の意見發表があつた。

一、座長挨拶

一、會計報告(鳥山幹事)

一、圖書室に關する報告(藤島幹事)

一、本會より發せる照會狀に對し、會員の回答せる

内容の報告(榎幹事)

一、本會規則中幹事評議員に關する條項改正の件

(松方幹事)

一、會員の意見發表

西岡、岸田、藤木、吉田、黒田、山田の諸氏(順序不同)。

豫定時間を延長し午後三時二十分閉會した。

尙ほ大會に列席されたる會員は左の八十名である。

新井春吉、別宮貞俊、藤木九三、藤島敏男、古谷孝一、ケー・ユー・シー・グロス、後藤英三、後藤幹次、本多友

司、飯塚篤之助、今西錦司、石黒清藏、磯貝藤太郎、

伊島恒次郎、岩永信雄、岩崎京二郎、書上喜太郎、神

谷恭、神田定雄、冠松次郎、加納一郎、川崎吉藏、木

村久太郎、木村鑛吉、岸田日出男、木暮理太郎、小島

久太、小松喜一、近藤茂吉、交野武一、黒田正夫、榎

有恒、松井幹雄、松方義三郎、松宮三郎、松本善二、

宮地貞穎、宮井幾三、名古屋常治、中川喜久雄、中原繁之助、西岡俊雄、野島親幸、野口末延、額田敏、大賀智、大澤照貞、小澤利一郎、佐々木延峯、島八十一郎、鈴木治孝、鈴木勇、高野鷹藏、高頭仁兵衛、武田久吉、田中菅雄、飛川維之、鳥山悌成、深井康邦、津田周二、角田吉夫、上原清太郎、浦松佐美太郎、渡邊漸、小林龍雄、山田多市、山田力、山口清秀、山村孝三、山崎武士、山崎輝彦、山崎和一、矢島幸助、吉田喜久雄、吉田竹志、吉澤一郎、吉澤庄作、四谷龍胤。

○第四十五回小集會記事

大會終了後引續いて藤島幹事司會の下に小集會を開き左の講演があつた。

一、冬の標高連峯。(雪崩の危険とコース決定の問題に就て) 藤田信道氏

積雪期に於ける登山の對象としての穂高連峯は極めて複雑なる問題を提供するものであると斷じ、轉じて冬雪崩の分類、起因等に就て詳細なる解説を試み、續いて一九二九年末より一九三〇年初に互り氏が早稻田大學山岳部員と共に或は岳川谷より前穂高に、或は涸

澤谷より奥穂高、前穂高に向つてなされたる登攀に就きその準備隊員編成に關する苦心談、悪天候と闘ひつゝ行はれたる登高の貴き經驗談を約一時間半に亘つて講演された。期待してゐた幻燈は原板の不出來から遂に之を見るを得ず大いに遺憾であつたが、講演の内容は之を補つて餘りあり、來會者を益するところ大なるものがあつた。

一

○本會圖書室への寄附金

故古河潤吉氏記念事業をなすを目的とし伯爵陸奥廣吉氏の提供せられたる資金を以て大正六年設立せられたる「雨潤會」より本會圖書室圖書購入費として金貳百圓を寄附せられた。雨潤會並に此回の舉に盡力せられたる本會々員志立鐵次郎、木村鑛吉兩氏に本會は深き謝意を表するものである。右寄附金を以て購入すべき圖書に就いては目下選擇中であるが會員諸氏の御希望をも伺へれば幸ひである。

○會務報告

昭和五年一月二十八日午後六時より本會圖書室に於いて幹事會開催、左記事項につき協議せり。

- 一、會員より回答ありたる會に對する希望の整理及び大會議題に關する件。

- 一、二十五周年記念事業に關する件。

- 一、圖書室の完備及び維持に關する件。

會 報 ○本會圖書室への寄附金○會務報告

- 一、入會申込者の詮衡。

- 一、山岳第二十五年第一號の原稿撰定。

出席幹事 別宮、藤島、岩永、冠、木暮、松方、楨、鳥山
渡邊各幹事

武田評議員

昭和五年二月六日午後六時より本會圖書室に於いて幹事會開催左記事項につき協議せり。

- 一、會員大會に關する件。

- 一、本會規則改正に關する件。

出席幹事 別宮、藤島、岩永、冠、木暮、松方、楨、鳥山
渡邊、各幹事

小島、武田兩評議員

昭和五年二月十三日午後六時より赤坂區三會堂に於いて評議員會を開催し、左記事項につき協議せり。

- 一、法人組織に關する件。

- 一、評議員、幹事選任に關する本會規則改正の件。

出席幹事 別宮、藤島、岩永、冠、木暮、楨、松方、高頭
鳥山、渡邊各幹事

小島、近藤、三枝、田部、武田(委任)、高野(委任)各評議員

昭和五年二月二十三日午前九時三十分より赤坂三會

會 報 ○交換及寄贈圖書

堂に於いて幹事會開催左記事項につき協議せり。

一、入會申込者詮衡。

一、昭和四年度會計報告。

一、大會に關する打合せ。

一、山岳「バックナムバー」賣出しに關する件。

出席幹事 別宮、藤島、岩永、冠、木暮、松方、楨、田中

高頭、島山、渡邊各幹部

武田評議員(委任)

尙同日小集會集會終了後同所に於いて午前に引續き幹事會を開催し山岳便覽編纂に關する件を協議せり。

追記。昭和四年九月二十九日、同年十月十二日及十一月十四日の各幹事會に出席したる渡邊幹事を書き洩らしたのは甚だ申譯ない次第である。山岳第二十四年第二號一七八頁及同第三號一六三頁所載の會務報告中出席幹事の部を補正して頂きたい。

○交換及寄贈圖書

ベルグハイル 第五號 第四高等學校旅行部
霧 藻 第二號 霧 藻 會
山 嶽 第四年第五號 大 和 山 岳 會

氷 と 雪	加納 一 郎氏
R・C・C報告	第三號
山岳征服	三 木 高 岑氏
登 高 記	吉 澤 一 郎氏
日本中部地方山岳の區分と各山岳實地踏査所要時間一覽	秋 山 敏氏 佐藤 井 岐 雄氏
臺灣山岳彙報	第二年二、三、五號 臺灣 山 岳 會
山とスキ	第九十六、七、八號 山とスキ一の會
ツーリスト	第十七年十二號、第十八年一、二、三號
山岳會誌	第二輯 水路部 山岳會
旅	第七卷一、二、三號 日本 旅行 會
步 跡	第四年一、二、三號 テ ク リ 會
會 報	第七年一、二、三號 關 東 山 岳 會
山 嶺	第九年一、二號 東 京 野 步 路 會
アルカウ趣味	第十七年一、二、三、四號 日 本 アルカウ 會
旅	第十年一、二、三號 東 京 アルカウ 會
ペデスツリヤン	第百十五―百十八號 神 戶 徒 步 會
旅 行	第五年一、二、三號 東 京 旅 行 クラ ブ
山水巡禮	第七年一、二號 リ ュ ッ ク サ ッ ク 俱 樂 部

會報 第五年十一月號 昭和十一年十一月

霧の旅 第三十一號 霧の旅 會

The Prairie Club Bulletin, No. 190—193.

Natural History, Vol. XXIX No. 6, Vol. XXX No. 1.

Alpine Journal, Vol. XII No. 239.

The Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. 18

No. 103.

Die Alpen les Alpes, V—No. 11, 12, VI—No. 1, 2.

The Geographical Journal, Vol. LXXIV No. 5, 6.

Vol. LXXV No. 1, 2.

The Mountaineer, Vol. XXII No. 1 (Special Ski

Number)

Pyrenaica, vol. No. 14, 15.

Bulletin (Appalachian Mountain Club)

Vol. XXIII No. 2, 3, 4, 5, 6, 7.

The Mountaineer, Vol. XXI No. 13, Vol. XXII No.

2, 3.

Mededeelingen (Der Nederlandsche Alpen

vereniging) 1929.

Bulletin du Club Alpin Belge, Tome VI No. 17.

24. Jahresbericht. (Akademischer Alpenclub, Bern)

La Montagne, 3 Serie. No. 5, 6.

Rivista del Club Alpino Italiano, Vol. XLVIII

Num9—10.

Revue Alpine, Vol. 30 No. 3.

Sierra Club Bulletin, Vol. XIV no. 6.

Trail and Timberline, No. 133—135.

Zeitschrift des Deutschen und Osterreichischen

Alpen-vereins. 1929.

Buttlei Excursionista de Catlungya, Any XL Num

415, 416.

○既刊書の寄贈

本會圖書室へ左の通り寄贈を受けた。こゝに記して
謝意を表する次第である。

書名	著者	寄贈者
山に入る日	石川欣一	中央公論社
登山	太田行藏	健文社
高山植物	山川黙	三省堂
日本アルプス	愛場秋文	寶文館

會 報 ○本會圖書室維持會員

キャンピングの 鐵 道 省 實業之日本社
仕方

キャンピング 増田健三 目黒書店

スキーイング 笹川速雄 同上

登 山 田中 薫 同上

スキー登山 船田三郎 同上

アールベルグ流 スキーカイド 黒田正夫 同上

氷 と 雪 加納一郎 會員小松喜一氏

山岳征服 三木高岑 同上

アールベルグス キー術 高橋次郎 同上

○本會圖書室維持會員

圖書室維持會員として快諾せられし會員の氏名は第二十四年二號に掲げた、猶其後の申込氏名は左の通りである。

東京 山田 多市氏(一口) 富山 石黒 清藏氏(一口)

東京 田澤 昌介氏(一口) 東京 本多 友司氏(一口)

神戸 岡村 仙太郎氏(一口) 兵庫 今村 幸男氏(一口)

東京 細川 賀茂氏(一口) 神戸 毛馬 新次郎氏(一口)

小樽 岡本 三男氏(一口) 東京 神谷 恭氏(一口)

東京 大谷 光明氏(一口) 東京 大橋 進一氏(一口)

京都 田中喜左衛門氏(一口) 東京 山内 二郎氏(一口)

東京 小松 喜一氏(一口) 滋賀 井花伊左衛門氏(一口)

石川 藤岡 健藏氏(一口) 東京 片桐盛之助氏(一口)

東京 山田 力氏(一口) 東京 酒井 忠一氏(一口)

東京 林 悌 助氏(一口) 東京 高木 伊八氏(三口)

東京 松宮 三郎氏(二口) 東京 高橋良之助氏(一口)

東京 若林 祐次郎氏(一口)

即ち二十五名二十八口である、これに既に申込書を寄せられし

東京 藤島 敏男氏(二口) 東京 冠 松次郎氏(二口)

東京 小島 久太氏(一口) 東京 岡田 喜一氏(一口)

東京 武田 久吉氏(一口) 東京 田部 重治氏(二口)

東京 山口 成一氏(一口) 東京 岡野徳之助氏(一口)

東京 松井 幹雄氏(一口) 東京 角田 吉夫氏(二口)

東京 松本 善二氏(一口) 東京 別宮 貞俊氏(一口)

東京 楢 有 恒氏(一口) 東京 松方 三郎氏(一口)

東京 田中 菅雄氏(一口) 横濱 岩永 信雄氏(一口)

東京 佐々 保雄氏(一口) 東京 木村 鏡吉氏()

東京 木暮 理太郎氏(二口) 東京 鳥山 悌成氏(二口)

東京 渡 邊 漸氏(一口) 京都 今西 錦司氏(一口)

京都 高橋 健治氏(一口) 東京 近藤 茂吉氏(二口)
 二十四名、三十一口を加算すると現在維持會員四十
 九名、五十九口である。

圖書室は創設日猶淺きことゝて内容設備不十分であ
 るが、新刊書の充實、圖書の整理に就ては常に努力を
 拂つてゐる。在京會員は勿論、地方會員にして御上京
 の節は是非御來室御利用を願ふ。

幹事の當番日割は左の通りである。

- | | |
|-----------|-----------|
| 五月三日(土)冠 | 五—七 (水)木暮 |
| 五—一〇(土)横 | 五—一四(水)松方 |
| 五—一七(土)鳥山 | 五—二一(水)渡邊 |
| 五—二四(土)別宮 | 五—二八(水)藤島 |
| 五—三一(土)岩永 | 六—五 (水)冠 |
| 六—七 (土)木暮 | 六—一—(水)横 |
| 六—一四(土)松方 | 六—一八(水)鳥山 |
| 六—二一(土)渡邊 | 六—二五(水)別宮 |
| 六—二八(土)藤島 | |

○投稿規定

- 一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと。
- 一、用紙は半紙半枚大、天地左右をあげ、毎紙片面の

會 報 ○投稿規定

みに字體明瞭に認め各行二十字詰とし、毎紙同一行
 數のこと。(原稿用紙は事務所へ申込次第直に送りま
 す)。

一、。、「」()等は各一字畫宛とし、行を更むる時
 は一字下げのこと。

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして當字をな
 す時はその旨を括弧内に明記せられたきこと。

一、スケッチは複製の際誤記脱漏等の虞あるを以て豫
 豫め本誌面に適せる大きさに調製して下されば幸甚です
 (但し其儘直に寫真版に附し得るものは大さ隨意)

一、原稿は左記宛御送附を願ひます。

東京市牛込區河田町十一 「山岳」編輯所

尙ほ編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと。

校正者 本文 木暮理太郎
 寫眞 藤島敏男
 岩永 信雄

昭和五年四月二十八日印刷
昭和五年四月三十日發行

【定價金貳圓】

新潟縣三島郡深才村深澤

編輯兼發行者

高頭仁兵衛

東京市芝區高輪南町三十番地

發行者

日本山岳會

振替口座東京四八二九番

東京市麴町區飯田町二丁目六十七番地

印刷者

益枝寅三郎

東京市麴町區飯田町二丁目六十七番地

印刷所

文雅堂印刷所

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂

山岳第二十四年總目錄 (昭和四年)

本 欄

小又川より劍澤へ……………	岩 永 信 雄	一	一頁	通し頁 1
劍 澤 入 り……………	別 宮 貞 俊	一	三六	36
春の後立山(附録)……………	冠 松 次 郎	一	六五	65
黒部源流地の日……………	冠 松 次 郎	二	1	161
黒 部 川……………	渡 邊 漸	二	一〇	173
岩苔小谷溯行記……………	角 田 吉 夫	二	九一	254
紅葉と新雪の黒部流域(附録)……………	冠 松 次 郎	二	一〇一	264
吾 妻 群 山……………	田 部 正 太 郎	三	1	343
初夏の豊後の山旅……………	竹 内 亮	三	三四	376
神流川雜蘖……………	高 畑 棟 材	三	五三	395
双六谷を中心として……………	冠 松 次 郎	三	六九	411

雜 錄

劍 澤	冠	松次郎	1	1011	102
仙 人 山	冠	松次郎	1	109	109
劍岳を見るには何處からがよいか	冠	松次郎	1	114	114
黒部川上流地方奥山廻り舊記録	吉澤	庄作	1	118	118
毛 勝 岳	冠	松次郎	1	143	306
五月の早月尾根と八峰	高橋	健治	1	150	313
黒部川の發電所	S、B、	生	1	160	323
ラテイモア氏夫妻招待會	松方	三郎	1	98	410
西毛無山(大方山)	黒田	正夫	1	111	414
立場川と川俣川	吉田	喜久治	1	106	418
三國嶺下の櫻郷	大平	晟	1	110	422
平戸嶋の山々	竹内	亮	1	111	425
新潟の親しき山々	藤島	玄	1	116	428
早春大武川を遡る記	黒田	正夫	1	110	462
「なかのりさん」に就て	閑古	鳥	1	1111	465

雜 報

胸ヶ岳大爆發	127
山梨縣登山小屋	127
東北帝大山岳部藏王山小屋建設	127
秩父連峰小屋新設	127
淺間山爆發	128
モンブロン Brouillard arête	128
奥國山岳會	128
モンブロン西側の冬期初登攀	128
メヨンヒ	129
アイガー冬期登山	129
ヒマーラヤン・クラブ	129
フィツサー探險隊	130
アコンカグアに於ける遭難	130
「マッターホーン」映畫	130
ウエッターホーン北壁	130
モン・ブロン S Aiguille de péleret	130
フアーラー氏逝去	130
山 小 屋	130
青梅鐵道延長	329
南アルプス登山路	329
フィルヒナー氏中央亞細亞探檢	468
ラインズ氏のカシミア鳥學探檢隊	468
トゥリンクラー氏中央亞細亞探檢隊	469
伊太利カラコラム探檢隊	469

各學校山岳部消息

青山學院山岳部	131
一高旅行部	131
水戸高校旅行部	132
彦根高商山岳部	132
静岡高校旅行部	329
東京高校山岳部	331
六高山岳部	332
五高山岳部	334
商大山岳部	470
大正大學山岳スキー部	470
東京醫專山岳部	471
高師附屬中學校山岳部	472
富山高校山岳部	472
專修大學山岳部	476
山形高校山岳部	477
(附)藏王山スキーヒュッテ	479
島田山岳會	480
立教大學山岳部	484
富山縣電氣局	488
關西學院山岳部	489
大阪醫大山岳部	490
越後山岳會設立	492
山岳圖書紹介	

立山群峯	133
劍岳	133
やま	134
山想	134
ベルグ・ハイル	134
立教大學山岳部部報	135
登高行	136
リニックサツク	136
大菩薩連嶺	137
Himalayan Journal	493
A'pine Journal	495
會員通信	
東合歡山、北合歡山、畢祿山、ロオン溪、タツキリ溪、	
タロコ峽	沼井鐵太郎 138
乘鞍岳(スキー登山)、笹ヶ峯、熊ノ湯、横手山、笠ヶ岳、	
澁峠(スキー登山)	田中 菅雄 141
富良野岳、十勝岳(スキー登山)	岩永 信雄 143
鹿嶽山、磐梯西面(スキー登山)	別宮 貞俊 143
大源太山(スキー登山)	角田 吉夫 144
箕輪山(スキー登山)、横向、野池温泉	別宮 貞俊 144
杖植峠、桐城山、カブラガ野、オドケ山	神谷 恭 145
仙ノ倉山、三國山(スキー登山)	角田 吉夫 146
將監峠、龍噴山、雲取山、白岩山	山田 多市 146
愛鷹山(越前岳、呼子岳、鋸岳、位牌岳、袴岳、	
愛鷹山)	高畑 棟材 147

矢ヶ崎山、日暮山、神津牧場、熊倉峯、荒船山、	
物見山	芋川 稔 150
八溝山	吉田 竹志 151
兩神山、二子山	高畑 棟材 155
大川(日原川)大雲取谷、雲取山	長谷川長次郎 156
霧島山	武田 久吉 158
白馬岳、祖母谷	竹下 英一 158
白峯三山、鹽見岳	大熊 保夫 159
湯俣、黒部源流、奥ノタル澤	角田 吉夫 159
チャチャスプリ、大雪山	岡田 喜一 159
鹽見岳(鹿鹽より)、中俣谷、小西俣谷、惡澤岳、	
遠山川	角田 吉夫 159
大目岳、飯豊山(センダク澤より)ノコギリメ、	
寶珠山尾根	藤島源太郎 159
那須岳、大峠、甲子峠	武田 久吉 159
後立山山脈中地形圖の誤りに就きて	小池 文雄 159
仙丈岳平右衛門谷	川崎 吉藏 159
黒部川下滝下	別宮 貞俊 159
烏帽子岳、鴛羽岳、双六谷、上高地	冠 松次郎 159
大會、小集會記事	
ヴエッターホルン紀行	浦松佐美太郎(二十三・大) 159
千島國後島のナチャャスプリ	岡田 喜一(四十三・小) 159
双六谷流域について	冠 松次郎(四十三・小) 155
積雪期の朝日岳より祝瓶山	岩永 信雄(四十四・小) 153
黒部川樺平より平の小屋	別宮 貞俊(四十四・小) 153

會 報

附録「春の後立山」に就て……………158
 本會圖書室設置案……………159
 本會集會室兼圖書室に就て……………339
 會員の計報……………340
 新入會員紹介……………340
 退會者……………340
 會務報告……………340
 本會圖書室設置賛助員氏名……………342
 會務報告……………505
 交換及寄贈圖書目……………506

圖 版

劍 岳……………
 大日平と大日岳○大日岳……………4
 小窓雪溪より爺岳及び鹿島槍ヶ岳を望む○劍のハツ峯……………12
 劍澤廊下とハツ峯○劍澤廊下入口とハツ峯……………30
 劍澤の小瀑……………32
 劍澤と牛首山……………32
 仙人三角點より爺岳及び鹿島槍ヶ岳を望む○北仙人山……………40
 仙人池より劍のハツ峯を望む……………41
 ガラ谷附近の割れ谷○ガキ谷合流點附近の黒部本流……………52
 小スバリ澤落口附近の黒部本流○劍澤落口より棒小屋澤を望む……………56

對頁
 第一號卷頭

十字峽下手の清流……………64
 峽見ヶ丘より上流神潭を望む……………63
 劍澤落口下流の深淀○劍澤大瀑を圍む大岩壁……………76
 劍澤の大瀑……………80
 劍澤の大瀑を圍む大岩壁……………88
 劍の大瀑の側壁○劍の大瀑下の河原と大岩壁……………92
 御山澤と立山本峯……………100
 針ノ木スバリ兩峯間の鞍部より立山連峯を望む○劍澤廊下入口より劍のハツ峯を望む……………104
 タンボ澤○赤澤岳猫ノ耳より望める針ノ木岳とスバリ岳……………112
 樹 氷……………
 第二號卷頭
 祖父谷落口附近より見たる黒部五郎岳……………167
 金作谷○アカギ澤落口附近の黒部川……………171
 新越澤落口下の奔瀉……………187
 クロピンカ○クロピンカ下の惡場……………189
 口元タル澤上手の廊下○數河谷と金作谷との間の絶險(其二)……………233
 數河谷と金作谷との間への入口の清淀(其一)○數河谷と金作谷との間の絶險(其三)……………207
 數河谷と金作谷との間の絶險(其五)……………211
 數河谷と金作谷との間の立壁(其四)○數河谷と金作谷との間の徒涉(其六)……………215
 數河谷と金作谷との間(其八)……………219
 數河谷と金作谷との間(其九)……………223
 數河谷と金作谷との間(其十)○立石附近の岩壁と瀆……………225
 數河谷と金作谷との間(其七)○有峰……………243
 岩者小谷第一の瀧○湯俣谷……………255

岩苔小谷より藥師岳を望む○岩苔小谷より雲の平を望む……………219
 冷澤上の尾根より劍岳方面を望む……………217
 鳴澤附近よりオホタテガビン・内蔵之助平・劍岳を望む○東
 信歩道より劍澤の大瀑布を望む……………215
 新越二俣野營地より黒部別山を望む○御山谷小屋場より新
 雪に輝ける立山全峯を望む……………219
 東信歩道より丸山を隔て、新雪に輝ける立山東面を望む……………223
 東信歩道よりハンノキ平下流の本流○ハンノキ平手前の岩
 壁と清流……………227
 赤澤岳猫の耳の岩峯……………291
 落葉松と立山本峯○小スバリ澤上手の廣河原より赤澤岳を
 望む……………219
 源治郎尾根第一峯より第二峯及び劍岳頂上を望む○五月の
 早月尾根……………315
 源治郎尾根より望める劍のハツ峯……………319
 大日岳より劍岳を望む○五月の劍のハツ峯……………323
 家形山○中吾妻附近より望める西大嶺と西吾妻……………316
 東大嶺○家形山……………350
 人形石と新高湯との間に於けるオホシラビツとコメツガの
 森林……………354
 沼尻温泉附近より西大嶺と西吾妻とを望む……………318
 谷地平小屋を隔て、東吾妻を望む○五色沼……………363
 大倉瀧……………370
 杖立川の上流……………378
 ミヤマキリシマの群落……………382
 池ノ臺の尾根より福万山を望む○池ノ臺の池と雨乞岳及び

城ヶ岳……………386
 池ノ臺の池と由布岳……………390
 北方より望める鶴見岳○万年山南方の高原……………394
 ゴグラ谷の廊下○松ヶ谷上手の釣橋より下流……………418
 コグラ谷の上流○コグラの大瀑……………430
 双六谷打込小屋より見たる中俣岳(黒部五郎岳)……………431
 段和山より遠望したる大方山(西毛無山)○精進パノライト
 リ見たる大方連山の北面……………446
 大武川より見たる八ヶ岳○戸臺より見たる仙丈岳……………462
 黒部川上廊下……………二號卷尾
 附 録
 山岳第二十二年總目錄……………一號卷尾
 山岳第二十二年總目錄……………一號卷尾
 會員名簿……………二號附録

りた然瞭て始相眞の岳山灣臺及界物植灣臺て繙を書本

賜 天 忽
版 三 忽

○諸大家激賞 ○賣行飛ぶ如く忽三版

伊藤武夫著 早田文藏閣・理學博士 牧野富太郎閣・理學博士 工藤祐舜閣
▲寫眞版拾五個 ▲彩色圖版參拾個 ▲凸版圖版貳百個 ▲石版圖貳個

臺灣高山植物圖說

內容要目

高山植物全種の解説・臺灣高山表・臺灣植物垂直的分布圖・臺灣高山植物帶論
臺灣高山の氣象表・採集及標本製作法・登山案内・臺灣植物景觀・最新臺灣植
物分科一覽表(英・獨對照)・臺灣植物區系

全一冊極美本 特價三・五〇 送料〇・一八

購入規定

ハ學ハシイ
又官捺ヨロ
金換押デ
前引印
ハ人金(公)金
個代校後

流石に登山流行の全盛時代だけあつて發刊以來賣行飛ぶが如く半歳ならずして忽三版を重ねたり●臺灣高山植物に關する一切の記事載せて漏らさず珍らしき臺灣の高山植物及臺灣山岳の眞相は居ながらして手に取る如く判る

振替口座名古屋番〇八三一

臺灣植物圖說發行所

三重縣宇治市古町

賜高松宮殿下御買上榮



暖く 柔く 軽く かさばらぬ

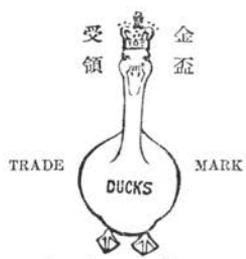
登山用 旅行用 羽毛入スリーピングバック

重量 全重量三ポンド半
(内羽毛重量一ポンド四分の三)

生地 サテン又はライニング・クロース

丈 (曲尺)六尺四寸
幅上部二尺三寸下部一尺八寸

價格
A 參拾五圓
B 參拾六圓五拾錢
C 參拾七圓五拾錢



ハネブント

京橋區銀座西五丁目
壹番地角
田屋商店

電話銀座三一五番

營業品目

- 羽根入掛布團
- 毛布
- 羽根入枕
- 羽根入敷布團
- クツシヨン
- バジャマ
- ベツトスプレッド
- 其他羽根入製品、御寢具用品、ネクタイ、ワイシャツ等

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXV

1930

No. 1